

# ULTRASEVEN AX ～太正 櫻と赤き血潮の戦士～

???second

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

太正櫻に浪漫の嵐が吹き荒れる時、ウルトラの星は輝く。

※暁とのマルチ投稿作品で、オリトラものです。

気まぐれで書き始めた作品なので、完結する保障はしかねます。

また、今作品はまだ完全な設定が成立しきっていないので、時折設定の変更、およびそれに伴う改変もございます。ご了承くださいorz

# 目次

## 第1部 熱き血潮に

### 第壹話 少年，帝都に目覚める

1—1 目覚め 1

1—2 彼の名は 15

1—3 大帝国劇場のジン 27

1—4 変身 44

1—5 赤き血潮の巨人 74

第貳話 救世主、光臨 2—1

違和感 80

2—2 運命の出会い 97

2—3 自分の意味を知りたくて

125

2—4 前に進むために

2—5 救世主

第参話 新隊長、大神一郎

1 敵の名は黒之巢会 194

3—2 大神、帝都へ 221

3—3 ジンと大神 232

3—4 出撃！花の華撃団 259

3—5 共闘！ジン&花組 286

3—6 勝利をこの手に 310

第肆話 火食鳥—クワツサリ—

4—1 桐島カンナ 332

4—2 マリアのロケット 351

4—3 非道なる刹那 370

3

183

153

4 — 8	4 — 7	4 — 6	4 — 5	4 — 4
春に吹雪く雪風	逆転劇	ゲーム	真冬の夜の悲劇	隊長失格
492	465	446	418	397

## 第1部 熱き血潮に

## 第壹話 少年，帝都に目覚める / 1—1 目覚め

一人の少年が、真つ暗な闇の世界にいた。

光が何一つ差し込んでこないくらい闇の中にただ一人…。

いや、少年の目の前に、違う人間の姿が映る。

一人は男性、もう一人は少年に近しい年齢に見える少女。二人は最初、少年を見ていた。暖かな微笑を浮かべたまま、ただ静かに見つめていた。

——誰…？

少年には、目の前の二人が一体誰なのかわからなかった。

しばらく見詰め合っていたのだが、しばらくして男性と少女は二人揃って少年を向けた。

——待って！

少年は手を伸ばしたものの、その手は決して届くことはなかった。男性と少女は少年に背を向け歩き出す。二人は暗闇で見えていないのか、足が水面下に沈み始めていた。

少年もまた足が濡れることを厭わず、水面に足を踏み入れて二人を追いかける。だ

が、どんなに歩いても、どんなに時間をかけても追いつくことができなかった。

気がつけば下半身が水面に浸り、二人の姿は完全に闇の中へ消えていた。

——待ってくれ!!

返事はなく、少年の叫びは虚しくこだますただけだった。変わりに帰ってきたのは、二人が消えた方角から押し寄せてきた、大津波だった。

!!?

津波は、まるで壁のような高さを誇っていた。

少年は避ける間も与えられず、その大津波に頭から飲み込まれていつてしまった。

波の勢いというものは人間に抗えるものでは決してなく、たちまち水の中へと呑み込まれてしまった少年。

静かだった。水の冷たさと、重力を感じない不思議な感覚、そして自分がだんだんと深淵に沈んでいく感覚だけが感じ取れた。

深く、深く沈むに連れて水がだんだんと冷たくなっていく。

このまま、自分は闇の底へと沈み、消えていくだけなのか…

視界も揺らぎ、少年の意識が薄らいでいく。

しかし、そのときだった。

水にただ沈んでいく少年の視界に、一点の光が見えた。  
太陽でも昇ってきたのだろうか…？

冷たい水の中であることを忘れるほどの暖かな光だった。

ああ……暖かい

その暖かな光は、やがて少年の姿を完全に覆い隠すほど包み込んだ

「!!」

少年は起き上がった。そこは、確かに水の中だった。でも、さっきの景色とはまるで違う。

どこか近未来的な部屋に安置されていた、水で浸されたカプセルだった。

さつきまで、眠っていたのだろうか？

しかし、自分が水の中に浸されていると気づいた少年は、おぼれる！と体の防衛本能が過剰反応し、カプセルのガラスを殴り始めた。

出してくれ!!

ガンガン！とガラスを殴りつける。しかしそのガラスは人の力では碎ける程度の強度ではなく、どんなに殴ってもびくともしなかった。

…が、いつしかガラスにひびが入り始めていた。

よし！

少年は一気に力を振り絞り、最後にパンチ一発をぶつ放してガラスを殴りつける。

ガラスは、ガシャン!!と音をたてて碎け散った。

「ぶはあ!!はあ…!!はあ…!!」

た、助かった…。

少年は大きく呼吸を乱しながらもカプセルから外に出た。

すると、騒ぎを聞きつけたのか、部屋の扉が開かれ、見覚えのない人物が入り込んできた。

「な、何の騒ぎですの!?!」

「何々?何の音!?!」

入り込んできたのは…二人の少女だった。

一人は気品さ溢れる、そして若くも艶やかさを持つ女性。もう一人は外見から見てもだ10代に差し掛かったばかりの少女だった。

「…」

少年は入り口の方を見やって、部屋に入り込んできた二人を見る。

この子達は…？誰？

それにしても…何か様子がおかしい。少年の姿を見て、顔が一気に赤らめ出している。

「い、いやあああああああ!!」

「きゃああ!!変な人がいるううう!!」

二人は少年の姿を見て酷く赤面し、一目散に逃げ出した。

なんなんだ。変な人とは。

僕だつて好きでこんなところにいるわけではないのに。行き成り目が覚めたら水の詰まったカプセルの中だなんて落ち着けるわけがない。

つと、少年はここであることに気づく。今の自分は身包み1枚なかつた。つまり…真つ裸だった。恐らく服を濡らさないためにこんな姿にされていたのだろう。通りであんな反応をされたわけだ。

しかし、このままでいるわけにも行かない。何か拭くもの……。出ないと風邪を引く。タオルを探そうと周囲を散策し、ようやくタオルを見つけ、体を拭き終えたところで腰に巻いた。

(それにしても、ここは一体どこだ?)

見た事もない部屋だ。どうして自分はここにいるんだろうか。いや、んなことはどうでもいいか。さっさと帰って……

……?

少年の頭に疑問が走る。

帰るって、どこに?そもそも僕はどこに住んでいたんだ?

僕は……いったい……?

あの戦いからもう大分経つちまつた。

かつて英雄ともてはやされた自分。だが、実態は決して褒められたもんじゃねえ。寧ろ無力感にさいなまれのおうのと生き続けてきた情けない男よ。

戦友も守れず、死なせ、傷つけた。そして何より…。

俺には妻も子供もいなかった。けど、こんな俺でも戦友とも家族とも呼べる奴がいた。

一人は、あの戦いを友に生きたあやめ君、そしてもう一人…あいつがいた。

いや、過去形にするのはおかしいか。一応生きてはいるんだ。血は繋がってはいなかったがよ。

けど…あいつはあの戦いで…俺たちのために…。

今じゃ、いつ目が覚めるかもわからねえ眠り姫状態だ。男のクセによ…。

俺はもうあの悲劇を繰り返さないためにも、共に生き残ったあの娘とともに新たな部隊を立ち上げた。『奴ら』が蘇るかもしれないし、それに変わる邪悪な連中が世界を覆う

かも知れねえ。そんなの耐えられねえからな。

彼女：あやめ君も承諾し、自ら副指令に推薦してくれた。そこからはいつか訪れる戦いに供えての準備を続けてきた。

しかし、やっぱ俺は時々考えちまう。

俺は日露戦争で英雄とたたえられてはいたが、今じゃこうして支配人室に用意された椅子に腰をかけて、魔の力を払える若い娘たちを戦場に送ることだけだ。

老いには勝てない、その言葉がここ数年俺にはきつく感じ取れた。

その度に考える。俺も、あの時みたいに戦えたら：

遠い彼方の星からやってきた『せがれ』みたいな力があれば、とな。

けど、俺はしばらくぶりの幸福感を覚えることになった。

長くは：持たなかったけどな。

『支配人室』と立て札の駆けられた一室に、二人の少女が入り込んできた。その部屋には

金髪のショートボブのクールな外見をしている女性、そしてもう一人、初老に差し掛かり始めたような風貌の男性がいた。

「米田支配人!!」

「米田のおじちゃん!!」

「お、おおう!?!なんだなんだ?!」

なだれ込むように入ってきた二人に、男性は目を丸くした。

「…すみれ、アイリス!行き成りノックもしないで。ここが支配人室だとわかってるの!?!」

金髪の女性、マリア・タチバナが突然の来訪者に対して目を細める。

「おい、どうしたんだ?そんなにあわててよ」

一方でノックもせずに入ってきた二人に、落ち着きを取り戻した態度で、この部屋の主『米田一基』が尋ねる。

「へへへ…変人が…裸の男が…!!」

「米田のおじちゃん!なんとかして!!」

まるで恐ろしいものを見てきたように、すみれとアイリスと呼ばれた少女たちは懇願する。

「裸の男だあ?そんなのどこで見たんだ?」

「そ、それが…行き成りガラスが割れたような音が聞こえて、気になって音をたどって地下に降りたんですの」

「地下…!?!」

地下に知らない男がいる。そんなの彼らにとつてありえない話だった。少なくとも入り口はこの建物の玄関しかないのだから。

「二人とも、あそこは米田支配人の命令で立ち入りを禁じている場所出ることを忘れたの?」

マリアの言葉からすると、すみれたちが訪れた場所と言うのは、彼女たちも立ち入りを禁じられている場所のようだ。

「いきなり割れた音が聞こえたら気になるじゃありませんの!もし侵入者が入ってきたとしたら、この『帝国華撃団』のトップシークレットが露呈されたことになりすわ!」  
禁止事項を破ったことについては反省こそしているが、自分たちにも知る権限があることを主張するすみれ。

「それは確かに…」

マリアも組織の機密に関わるとのすみれの主張を聞いて、一理あると考え込む。

「おいすみれ。その男は地下にいるんだったな?」

米田が席から腰を上げてすみれに尋ねる。

「え、ええ…そうですわ」

「…わかった。俺が見てくる」

「支配人!？」

突然の米田の、自ら出向くという選択にマリアをはじめとした全員が驚いて目を見開いた。

「待ってください支配人!ちよ…!」

マリアの制止を振り切り、米田は支配人室からそそくさに立ち去って行ってしまった、

「米田のおじちゃん、どうしちゃったの?」

米田にしてはあまりにもオープンなアグレッシブさだった。アイリスは驚いたまま去り行く米田の背中を見ていることしかできなかった。

「とにかくついていきましよう。もし侵入者だったら、米田支配人が危険だわ」

「そうですわね。舞台の件で散々文句を言わせたくなるほどの人ですが、ほうっておくわけにも行きませんわ」

すみれは若干普段の、今回の件には全く無関係の話を付け加えつつ、米田の後を追うことに賛同する。

全力で米田を追い、地下へ向かい、すみれたちはさきほど少年が現れた部屋までたど

り着いた。

すでに米田と少年は、真正面から向かい合っていた。

「米田支配人、危険ですわ！」

女性たちは自分の姿を見て警戒をしている。だが一方で米田はというと、少年の姿を見て固まっていた。

「支配人？」

「米田のおじちゃん…？」

マリアとアイリスが米田の反応に戸惑いを覚えていた。なぜ目の前の男に一切の警戒心を抱いていないのか不思議であった。

「おお……」

それどころか、少年の姿を見て、涙を流し始めていた。まるで、数年ぶりに再会した我が子の立派な姿でも見ているような、それほどの感激っぷりだった。

「ようやく目覚めやがったか!! ったくこの馬鹿が…心配かけやがって!!」

自分の今の顔の有様などまったく気に求めていない。彼は少年の元に歩み寄ると、すごい男泣き顔を晒している。

「……っ？」

しかし、少年はきよとんとしている。突っ立ったまま、ただ目の前で感涙し続けてい

る男に。

「お、おい……どうした？どこか、まだ具合の悪いところでもあるのか？」

「あの、支配人。それよりも……この方は……その、どなたなのですか？」

マリアが米田に尋ねる。とはいえ、少年が一枚も服らしいものを着込んでいないので、目を背けることに必死だった。現に頬にわずかな赤みが差している。

「おう、すまねえな。あんまりにも嬉しくてよ、つい年甲斐もなく……へへ。こいつはな……」

米田は涙をふき取ると、改めてマリアをはじめとした3人の女性たちに、その少年のことを話そうとする。

しかし、次の瞬間……少年の放った言葉によって、その部屋の時間だけが、止まった。まるで、その場だけ空間から切り離されたかのように……。

「教えてくれ……僕は、誰だ？」

第壹話  
少年，  
帝都に  
目覚める

## 1—2 彼の名は

帝劇の地下で、謎の少年の目覚めを見届けた後の米田たちは…。

「それで！一体誰なんですか、この殿方は！」

支配人室にて、すみれの怒鳴り声が響く。今ここには、米田とすみれ・マリア・アイリス、そして最後に例の少年がいた。

「あくすみれ、そう騒ぐな。せっかくの花型女優の顔にしわがよるぞ」

米田があまりの剣幕で詰め寄ってくるすみれに、適当なことを言って話を流そうとするが、すみれはその程度で怯むどころか、寧ろ腹の立つことをいわれて余計にいきり立ってしまう。

「誤魔化さないでくださいまし！」

「すみれ、落ち着きなさい。米田支配人のお話を聞きましょう」

どうも、偶然にも少年の裸を見せられたのが恥ずかしかったのか、それとも変なものを見せるなど腹を立てているのか：いや、恐らく両方だろう。とにかくそのせいで興奮気味のすみれは治まる様子がない。マリアが背後から彼女の両肩を掴んで押し黙るように言うと、今度は自分が米田に質問する。



少年の名前は、『米田ジン』。米田はジンの実の両親とは昔ながらの友人であったのだが、海外への渡航中に起きたとある海難事故で亡くなったジンの実の両親に代わり、自分が養子として引き取って育てたのだという。

元々米田は、花組の知るところでは現時点でも独身で、一度も結婚したことがない。かつては軍人だったらしいが、現在は前線を退いていて、結婚をしないままこの帝劇の支配人の仕事をしている。なのにいきなり、養子とはいえ子供がいるだなんて、周囲を驚かせて当然といえよう。

「あんまりにも酷い事故ですよ。そんなときそいつもこん睡状態に陥ったんだ」

「それで、あのカプセルの中で回復のときを待たせていたのですね」

マリアが少し納得したように言った。

「でしたら、そうだったらそうだとあらかじめ仰ってくださいってもよかったですのではないのですか？」

隠し事をされたことが癪だったのか、すみれが不服そうに言った。

「隠してて悪かったな。ちゃんと話すつもりだったが、きつかけがなかなかつかめなくてよ」

「このことは、カンナたちも知っていますのですか？」

「いや、あいつらにも知らせていねえ。知ってるのはここにいる全員と、『あやめ』君だ

けだ」

マリアからの問いに米田は首を横に振る。他にも何人か、彼女たちの仲間当たる人物がいるようだ。

「あやめさんもご存知だったのですか!？」

一方で、自分が『ジン』と名を呼ばれた少年は、困惑した様子だった。

「『ジン』……?それが僕の、名前……?」

ジン……自分の名前らしき言葉を教えてもらったまではよかったのだが、それが自分の名前だという事さえも、少年は実感が沸いて来なかった。

「ジン、無理に思い出そうとすんな。頭に響いちゃうぞ」

「支配人、もしかして彼は……」

マリアがジンを見ながら、一つの確信を抱く。さつき彼を始めてみたときもそうだったが、間違いないだろう。

「ああ……だろうな」

米田も、気を落とした様子で頷いた。あの米田をここまで落ち込ませる、それほどシヨックだったことが伺える。

「支配人、この殿方どうなされたというのです?」

すみれはジンの様子に困惑した様子を見せた。

「…見えない」

アイリスがジンを見て、答えを口にした。

「見えない？ アイリス、わかりやすく言つて頂戴」

「このおにいちゃんから…なんにも見えないの。何もかもが、すつぽり抜けている」

「やはり…」

マリアは納得したように呟いた。

「すみれ、彼には…記憶がないのよ」

「記憶がない…記憶喪失、ということですか？」

「ええ。アイリスもそう言ったのなら、間違いないわ」

記憶喪失、言葉で聞いたことくらいはあつても、実際にこうして発症した人間を見ることになると思わなかつたことだろう。

「でも、記憶がないのなら、この帝劇におくよりも、病院に入院させておくべきだと思うのですが」

「いや、俺はこいつをこの帝劇に置いておきてえ。俺は義理とはいえ、こいつの親父であることを決めたんだ。息子の面倒を見るのは、親として当然のことだ。お前らをこうしてこの帝劇においているようにな」

マリアからの勧めを断り、自分の固い決意を明かした米田の目に、ためらいも迷いも

なかった。

だが、すみれが反対意見を出してきた。

「支配人、私たちは帝国歌劇団、つまりお客様に舞台を見てもらうための存在ですわ！ マリアさんの仰るとおり、病院で診てもらわなければならない？」

すみれの言うとおりの。いくら我が子が記憶喪失とはいえ、ここは医療機関ではなく劇場だ。専門医のいる病院で診てもらった方が、邪魔にならないし彼の回復だって早いはずだ。

しかし、米田は首を横にふり、決してこいつをここから引き離すつもりがないことを視線のみでアピールした。

「……ここでも動くつもりはないということですね」

米田をここまで意固地にさせるこの少年。すみれとしても気になりはするものの、だからといって甘えさせるのもいかなものだろうか。

「すみれ、いじわるいわないで助けてあげようよ。このおにいちゃん、本当に何も覚えていないんだよ？」

アイリスもすみれと一緒に助けてやろうと促してきて、少しため息を漏らしながらもすみれは降参した。

「…わかりましたわ。とりあえず帝劇に置くことには私も了承いたしましたしょう」

「すまねえなみんな。でも、今のこいつはまつさらな子供のようなもんだ。仲良くしてやってくれ」

「……」

すみれは再びジンの顔を見る。

まあ、これといって顔立ちがよいというか……不細工顔というわけでもなく、かといってハンサムといえるほどの顔ではない。普通だ。しかし記憶がないという症状からか、今の彼はまるで何も知らない無垢な子供のようにも見える。見た目は自分よりも少し年上くらいに見えるのに、演技には出来過ぎているものだ。

「えつと……あの、僕は……」

黙って話を聞いていたジンが、ここで口を開いてきた。

「そう固まんなよ。今聞いたとおりだがジン、お前は今日からこの帝劇で預かることになった」

「……いいんですか？ご迷惑じゃないんですか？」

少し弱々しい口調でジンが問う。確かに自分には、自ら引き取ってくれるという米田以外に身寄りがない。彼らに頼る以外に選択肢がないのだ。それでも、迷惑をかけることはよしとできない。

「迷惑なもんかよ。記憶を失う前のお前さんには、俺も世話になってたからな。今度は

俺が助けてやりたいんだ」

米田はジンに、親戚のおじさんのような朗らかな笑みで言った。

「…わかりました。どの道どこにいけばいいのかなんてわからないし、ここに留まらせていただきます。お世話になります。えっと…」

そういえば名前をまだ聞いていなかったことにジンは気づいた。

「俺は米田一基。この大帝国劇場の支配人で、戸籍はお前の親父だ。本当の父親のつもりで接してかまわねえぜ」

「あ、いや…いきなりそういういわれても…」

米田が自分のことを父と思うように、というものの、記憶を失っていて周りの要素をどう受け止めるべきか戸惑いを覚えたままのジンにとって、すぐに米田を父と呼ぶことはためらいがあった。

「まあ確かにすぐに親父と呼べといわれても、呼べるとは思えねえ。そこは時間をかけてなんとかするつきやねえな。」

「そうだ、せっかくだからここにかすみ君たちも呼んできてくれ。ジンに自己紹介してやりてえからな」

「了解しました。私が呼びに行きましょう」

マリアが、ここにはいないメンバーも呼びに一旦支配人室を後にする。

そしてほどなくして、ジンからみて少し年齢が上に見える女性二人とそばかすが特徴的な少女一人がマリアに連れてこられた。

見ず知らずの少年が支配人室にいるという状況に椿たちも困惑したが、妻子のいないはずの米田の口から、彼が養子であるなどの事情を告げられ、より一層驚愕したものである。

「高村椿です。帝劇の売店で売り子さんをやらせてもらってます」

「あたしは榊原由里。来賓用カウンタールにいるわ。よろしくね」

「私は藤井かすみ、事務室にて勤務しております。困ったことがあったら、いつでも来てくださいね」

「マリア・タチバナよ。帝国歌劇団・花組のリーダーを勤めさせてもらってるわ」

「同じく、帝国歌劇団のアイリスです。この子は、熊のジャンポール。よろしくね、ジン」

「はじめまして、私はこの大帝國劇場のトップスター、神崎すみれですわ。以後、お見知りおきを」

一気に自己紹介され、ジンは少し混乱した。なんとか頭の中で整理し、顔と名前を覚えていこうと躍起になる。

「えっと…椿、ちゃんに…由里さん…かすみさん…アイリスちゃん…マリアさん…あと

……『つ』みれ、さん？」

まだボーっとしてよく記憶しきれなかったのか、思わずジンはすみれの名前の一文字目を間違えて発音してしまう。

「す・み・れ！神崎すみれですわ！まったく、人の名前も覚えられないなんて、レディに對して失礼じゃありません事？」

名前を間違えられ、彼女：神崎すみれは憤慨した。しかし一方で、周囲の女性陣は米田も含め、笑いをこらえきれずに噴出してしまふ。もちろん、すみれは「何を笑ってらっしゃるの！」と、より膨れっ面を晒したのは言うまでもない。

(…軍部の奴らにも、付け狙われねえようにしねえとな)

その一方で、米田は心の中であることを心に誓っていたのは誰も知らない…。

…オンキリキリバサラウンバツタ

オンキリキリバサラウンバツタ

オンキリキリバサラウンバツタ

オンキリキリバサラウンバツタ

「オンキリキリバサラウンバツタ…」

暗がりの闇の中、一人の男がいた。

ほんの数本のろうそくの炎で照らされ、長い銀髪をなびかせながら、青い装束をまと

うその男は、目の前の岩肌の地面に刻み込まれた大きな紋章の前で怪しげな呪文を唱え続けていた。

紋章の向こう側には、怪しい雰囲気を出している石碑が立っている。

その石には、漢字で何か文字が書かれているようだが、暗くてよく見えなかった。

彼が呪文を唱え続けていると、紋章に光が宿り始める。光が強まるごとに、石碑にヒビが入っていく。

やがて、石碑はダイナマイトでも仕掛けられていたように爆発を起こした。

粉々になった石碑の立っていた場所から、人影が見えた。青い装束の男はその人影に注目する。

現れたのは、ぼろぼろの服を着、年老いた姿をしていたが、奇怪かつ強大な邪気を放つ老人だった。

男は、ニヤリと口を曲げて不敵な笑みを浮かべた。

そして彼の背後に、一人二人：いや、何人もの、人の形を成していない影が集まっていた。まるで、その男に付き従うかのように。

この世界に：数年近くもの長きに渡る戦いの時代が訪れようとしていた。

## 1—3 大帝国劇場のジン

大帝国劇場の地下に眠っていた少年が目を覚まして数日後…。

太正12年（1923年）、3月20日。

そろそろ桜が開花し、春爛漫の季節が始まった頃だった。

「ふう…」

その夜ジンは、大帝国劇場：通称、帝劇にいた。動きやすそうな黄色いジャケットと青のズボンを着て、帝劇の玄関ホールを掃除していた。

「ジンさん、今日も精が出ますね」

「椿ちゃんか…やあ」

ちやうど掃除中の少年のもとに、そばかすと茶色のショートカットの髪、そして売子の子の衣装が特徴の少女がやってきた。

「どうですか？帝劇に住み込みで働くようになってから」

「まあ、特に何事もないよ。平和そのものさ」

「そっか…よかったー。気に入っていただけみたいで」

覚えている。この少女の名前は…確か高村椿と言っていた。この帝劇の売り子さん

である。まだ15歳という若い年齢の頑張り屋さんで、帝劇を訪れた人たちに、花組に所属する女優たちのプロマイドや扇子といったグッズを売るのが仕事だ。

「でも、最初に紹介された時は驚きましたよ。米田支配人に息子さんがいたなんて。由里さんなんて大スクープだわ！ って驚いてたほどだし」

「ああ、あの人噂話とか好きそうだからな…」

由里は主に自分と椿のいる玄関ホールとは別に用意された、来賓者用の玄関ホールカウンターで仕事をしてきている。噂話が好きで、ファッションにも気を使う明るくミーハーな女性で、外見年齢も彼と近い。とはいえ、彼の場合は外見年齢での話で、実年齢は本人もわかっていない。

「そうそう、今日のすみれさんたちの演劇いかがでした？」

「ああ、すごかったよ。感動させられたな」

ここが劇団、ということもあり、ジンも目覚めてからこの日までの間に花組メンバーたちの演劇を見たことがあった。

普段は高飛車で上から目線の言葉を放つすみれ、天使のような明るさで場を和ませるアイリス、花組のリーダーにして自他ともに厳しくまとめるマリア。そんなバラバラの性格の3人が展開する演劇は見事なものだった。

ちなみに、ジンが見た歌劇団の演劇は『椿姫の夕』。すみれが演じる貴族の女性マルグ

リットと、そんな彼女を愛する男性アルマンを演じるマリアを主演としたものだ。しかし、マルグリットは病に犯された身であり、余命はもうわずか。せめて最後にアルマンの顔を見たい、その願いに応えるかのごとく、アルマンが駆けつける。だが、彼の腕の中で、マルグリットは愛する男性の腕の中にいる幸せを噛み締めながら息を引き取るという、悲しい物語だ。

「意外だったよ。マリアさんはなんでもこなせそうなイメージがあつたけど、すみれさんは自信たつぷりだっただけあつてすごい演技力だった」

少し遠い目で頭上を見上げ、ここしばらく自分のみにできた出来事の一旦を思い出す。

『ほら、ジンさん！それでも男ですか。だらしない』

『ま、まだ買うんですか…？』

『あたりまえでしょう？まだ後10店舗の予定なのですから』

『じ…10…?!』

数日前、ジンはすみれに銀座への買い物に付き合わされたことがあつた。すみれは記憶がないジンに荷物運びを容赦なく任せただ。米田の話だと、すみれは元々とある企業のお嬢様らしく、大人っぽさを混じらせた外見のわりに、立ち振る舞いも性格もまさにわがままお嬢様そのものだった。おかげで、自分は大荷物を運ばされて、さらし者状

態だ。すみれはというと、地元でも有名な女優というだけあって、歩いている人達から注目されていた。…自分は一切荷物を持たず、持っている物といえば日傘一本。まあ…大荷物を運ぶお嬢様なんて絵にならないが…

(あの時は疲れたな…おかげで次の日は筋肉痛だよ)

加減を知って欲しいものだ。やめよう、考えると疲れてきた。アイリスの話でも振ってみよう。

「アイリスも、まだあんなに幼いのに…確か、年配の人達から特に人気なんだよね」

「はい。あ、でもジンさん…あまりあの子を子供扱いしないであげてくださいね。結構気にしますから」

「はは…いっぺん身に染みたよ」

一方でアイリスは、わずか10歳。まだまだ幼い少女だ。本名は『イリス・シャトーブリアン』といい、彼女もフランスの名家出身だ。ただ、精神的にもまだ子供なだけあつてか、逆に「アイリス、子供じやないもん！」と言い返してくるほど子ども扱いされることを嫌っている。一度そのことを指摘したジンは、アイリスを膨れっ面にさせて1日ほど稽古に支障をきたさせてしまい、さらにすみれまでも稽古の邪魔をされたと、ジンを一時目の方気にしたことさえあつた。

しかし、いざ演劇となると彼女たちはまさに『変身』していたともいえた。

すみれに、人を感動させるような演技力があつたことにも驚かされたものだ。自称でも帝劇トップスターを名乗るだけはある。アイリスも幼いながら、観客を十二分に引き込むほどの強い魅力を、マリアもリーダーにして唯一の男性役を引き受けるほどの凛とした佇まいと演技力で、自分を含めた客の視線を釘づけにしたものだ。

「けど…あくあ。私も見たかつたな…特にマリアさん、今日もきつとすばらしい演技だつたんだろうな…」

「そつか、椿ちゃんも売り子さんだから」

「はい、売店から離れられないんです…」

ジンはまだこの帝劇での見習い雑用係で、今は留まっている。暇さえあれば劇を見ることができるが、一方で椿は公演中の時間も、常にこの売店に留まっていなければならなかった。

特に彼女は、花組の中でも特にマリアの演技に熱い視線を向けていた。同じ女性から見ても、マリアのそこいらの男性よりも美しく凛とした姿に引き込まれる同性ファンも多いとのことだ。

(そういえば、まだマリアさんのこと知らないままだな…)

しかし、ジンはまだ帝劇で働き始めてまだ間もないが、マリアのことはまだほとんど知らないままだった。外見からしてなんでもこなせそうな女性だが…まだわからない

ことがおおい。ジンが、自分が何者なのか分からないことと同じように。

「映像に保存できたらいいんだけどね。映写機とかもあれば、いつでも見られるんだけど…」

「そうですねえ…ぜひそうしたいんですけど、映写機って貴重だから勝手に使うことなんてできないですよね」

「まあ、いつかきつと見られるよ。待った分だけ、きつと数年先もすっかり記憶に刻まれ続けるだろうから」

「マリアの演劇を見ることができずに少し残念そうな椿に、ジンは軽く慰みの言葉を向けた。

「あ、でも紅蘭さんなら作ってくれそうですね。その映像記録の機械」

椿の口から聞かない名前を耳にし、ジンは首を傾げた。

「コウラン？誰なの、その人。もしかして、その人も花組の人かい？」

「ええ、正確には花やしき支部に所属している人で、本名は李紅蘭（リ・コウラン）さんっていうんです。中国の方で大阪育ちの人なんです。普段から個人的に発明品を作っていて、すごいものを作るんですよ。この帝劇の部隊も、紅蘭さんが携わっていることが多いんです」

「へえ、すごいじゃないか」

帝劇にはスポットライトとか移動床などの舞台装置が配備されている。どれも複雑に見えて、ほんの一時の間の演劇でも短期間で作ったり組み立てなければならぬことが多い。それほどのももの製作に何度も携わっているというのはすごいものだろう。

「あ…でも、時々発明品が爆発しちゃって、みんなを困らせちゃう人でもあるんですけどね」

「え？」

あはは、と苦笑いを浮かべる椿の口から爆発、という物騒にも聞こえる単語を耳にして、ジンは目を丸くした。

「あ、でもあの人も演技力もすごいんですよ。コントもお得意ですし、たくさんの人達があの人のギャグで笑ってくれるんです」

「お笑いが得意な発明家女優…」

ジンは腕を組んで、その利紅蘭という女性がどんな人なのかイメージしてみろ。一応プロマイドは売られているから顔は見ているのだが…。

(……変人なのか？もしかして…)

奇妙なイメージを抱かせる人間としか想像つかなかった。まあ、どこぞの悪組織のように、平和に暮らしていた人間を改造して怪人にしてしまう、なんてことはしないだろうが。

「それにしても、夜とはいえ公演がない時間帯は結構静かなんだね、ここは。たくさんの人が働いているはずだろ？ 由里さんから聞いたんだけど」

ジンは今のところ顔を見たことがあるのは花組と、椿・かすみ・由里：裏方作業を行っている親方たちがいる。黒子を勤めている人たちや演奏を務める『奏組』とは一切顔を合わせられなかった。まるで最初からそこにいなかったかのような、まるで神隠しだ。「普段の奏組の人たちは専用の寮にお住まいで、黒子担当の人たちについては私たちがあまり……」

「まるでどこかの秘密部隊だね」

ジンが、同じ組織内なのに、お互いの組が違うだけで奇妙な距離感を感じる環境を聞いて苦笑する。

(…間違いじゃないですけど)

「ん？ 椿ちゃん、今何か言った？」

「い、いえいえ！ なんでもありません。じゃあ私、もう遅いのでそろそろ帰らないと。明日に響いちやいますから。」

「じゃあジンさん。また明日」

「あ、うん。また明日ね」

帰り支度のため、椿はジンのもとから去っていき、ジンはそれを手を振りながら見届

けていった。

「秘密、か……」

ふと、ジンは自分が言った言葉を振り返る。

秘密といえば、自分はどののだろうか。米田は自分のことを昔から知っていたような口ぶりであった。

とりあえず暇な時間を自分のことを聞いてみた。といつても、米田は帝劇の支配人という立場にあつて思った以上に多忙だ。話をする時間を長く取れない。

目覚めたときは、米田の知り合いの息子で、海難事故にあつたところを保護した……と言つていた。

海難事故……か。そういえば……夢を見たな。

自分が、水の底に沈んでいくイメージの夢を。

(……)

でも、水に沈んでいく光景を夢の中で見たが、本当に身に覚えがある感覚が一切なかった。記憶がないから、それもある。けど……なんだかそれだけじゃないような気がする。

「あ、ジン。何してるの？」

ふと、声をかけられ、ジンは後ろを振り返った。

小柄な金髪の、まるでフランス人形のような少女。アイリスだとすぐに分かった。

「アイリスか。見ての通りお掃除だよ。今日もお客さん多かったから。アイリスは？」

「舞台のお稽古だよ」

「すごいよな、アイリスって。こんな時間まで稽古してたんだ」

「ふふん。アイリス、女優さんだから」

だから一生懸命サボらずにお稽古をしなくちゃ、と少し得意げにアイリスは付け加えた。

「あれ、いつも持っているあの熊の人形は？」

アイリスは常に、『ジャンポール』というテディベアを持っている。けど、今は珍しい事にそれを手持ちに持っていない。

「うん、ジャンポール、どこかに置いてっちゃって…今探しているところなの。早く見つけてあげないと、寂しがっちゃうから」

どうやら無自覚のうちどこかにおいてそのままにしてしまい、どこにおいたか忘れてしまったようだ。

「よし、僕も一緒に探すよ」

「ほんと!? ジンってやさしー!」

自分も一緒に探すと言ってくれたジンに、アイリスは目を輝かせた。

「はは、これくらいお安い御用だよ。じゃ、ジャンポールを迎えに行こうか」  
「うん！」

初対面の形があまりよろしいものではなかったもので、当初はぎこちなかったものの、話していると結構話のわかる子だった。それに天真爛漫な明るい彼女を見ると、自然と笑みをこぼせた。

さて、ジャンポールを早速探しに向かった二人は帝劇のあちこちにある部屋を探し回った。食堂テーブルの下、医務室、舞台裏、二階のサロンと色々探し回ったものの、ジャンポールはどこにも見当たらない。

「おかしいな。こんなに探しても見つからないなんて」

もう20分は探し回ってみた。人形だから目立つと思ったが、思いの他二人はジャンポールの搜索に手間取っていた。

「どこ行つたのかな…ジャンポール」

不安を口にするアイリス。あれがないとアイリスは安心して眠る事ができないのだ。  
「どうかなさいました?」

二人が困っているのを見かねて、緑色の髪の毛、あやめとは違った大人の雰囲気を持つ女性が歩いてきた。事務室で働く風組の最後のメンバー、藤井かすみである。普段は事務室で伝票整理などの仕事を任されている。

「ああ、かすみさん。実は」

「ジャンポール、どこかに置いてっちゃったの…」

「まあ、そうなの。だめじゃないアイリス。お友達を置いて行っちゃ」

かすみは年上女性らしく温厚だが真面目な一面もある。なるべくずぼらなことは避けるようにしていて、今回のアイリスのジャンポール紛失も、しつかり彼女が見ていなかったからであることを指摘した。

「かすみさん、とにかく一緒に探してくれないかな？このままじゃアイリス、眠れそうにないみたいだし」

「そうですね。私も今日の仕事はないですし、一緒に探して回りますね」

「ありがとう、かすみお姉ちゃん…」

かすみも加えていざ搜索再開をしたのだが、それでもなかなか見つからない状況が続く。

「ジャンポール…アイリスの事嫌いになったの？お願いだから出てきてよお…」

舞台裏の大道具部屋、さつきも探した場所なのだが、探せる範囲は全て探しくしている。それでもジャンポールは見つからなかった。泣きそうになるアイリス。何とか力になってやりたいのに、とそれを見たジンが困り果てたときだった。

「ん？」

ふと、ジンはある方角に目を向けた。

「アイリス。あそこ」

「ふえ……？」

アイリスの肩を叩いてジンはジャンポールの見つかった方を指差す。もしかして見つかったのだろうかとアイリスが指を指された方角を見ると、バケツやら壁紙、使われなくなった衣装も積んである。

「……お、あつたーんしよつと……ほら」

ジンは積み上げられた服の下に、ぬいぐるみの手が出ているのを見つけ、近づいて手探りで探す。崩れ落ちた服の山の下に、確かにジャンポールが見つかった。すぐに引っぱり上げ、ジンはアイリスに手渡した。

「ジャンポール！よかつた、一人にしちやつてごめんね？」

それを見た途端にアイリスは飛びつくように抱きついた。

でも直後に、ジンに向けて大声を出した事を詫びると、彼は首を横に振って気に留めていないことを示した。

「ジャンポールが見つかってよかつたじゃん。」

たぶんアイリスが舞台の稽古中、誰も気づいてない間に積み上がった服が倒れちゃつたから隠れてたんだ」

「うん、ありがとうジン♪」

アイリスはジャンポールの頭を愛おしそうに撫でながら頷いた。

「支配人…」

その頃、支配人室。そこではそのマリアが米田と話をしていた。

「マリアか、どうしたんだ？」

「あのジンという男…本当に支配人のご子息なのですか？」

記憶がないはずだが、見たところ何事もなく普通に仕事をこなしていた。一般常識までは忘れているわけではないのが何えた。

「アイリスには、人の心を読む力があります。そのアイリスも彼の記憶がないことを行ったことからすれば、彼が本当に記憶を失っていることも信じられます。ですが…」

「へへ、俺が酔った勢いで行った戯言だと思ってるか？」

「いえ、そういうわけではないのですが…どうして支配人は、地下の医療カプセルの中に彼を隠していたのですか？」

そう、気になっていたことはそこ…ジンが帝劇の地下で眠っていたことだった。まるで、同じ帝劇の者である自分たちにさえ明かせない秘密中の秘密…トツプシークレット扱いとされている秘密兵器のような隠し様だ。

「それはな…」

米田はそこで、言葉を一時途切らせる。どこか思いつめたような表情。こんな顔を米田はあまり見せなかつた。

「支配人？」

「…あ、すまん。ついな…」

まあ、それはともかく、そんなにあいつを疑うなら、アイリスに頼んでみればいい。戸籍もとつきの昔に作つてあるし、俺が嘘をついているかどうかなんてわかるだろ」

「いえ…私こそ詮索しすぎたようです」

アイリスのことを引き合いに出してきた米田。それは彼が自身の言葉に絶対的なものがあることを意味していた。

なぜかアイリス…あの幼い少女を引き合いに出したのか不明だが。

考えてみれば、自分の上司の家族事情について、部下の一人に過ぎない自分があれこれ言うべきじゃないはずだ。それに、自分は米田が立派な人間であることを知っている。それだけの人が、こんな顔を浮かべさせるほどの人なのだとしたら、少なくともこの帝劇に害をなすような存在ではないと考えるべきかもしれない。

「まあ、なんだ。あいつは言つたとおり自分の過去を忘れちまつてる。そんなあいつに力になってやれるのは、この帝都どころか、世界の中でも俺たちだけだ。」

「マリア、無理にとは言わねえが……」

「……可能な限り、同じ帝劇の仲間として接してみます。米田支配人がそこまで大切に思われているのなら、信じます」

「……ありがとな、マリア」

血の繋がった父親のような笑みを見せた米田に、マリアも自然と笑みを返し、支配人室を後にしようとする。

「おつとそうだ。最後に」

米田はマリアに一言声をかけて引き止めると、神妙な表情で告げた。

「あいつには、この『帝劇の秘密』は知らせないでやってくれ」

「え？ですが支配人……」

「こつからさきは、俺の個人的感情も混じってる。軍人としちやあつてはならねえもんだったのはわかる。けどな……」

そのときの彼は、マリアを直接見てはいなかった。まるで懇願するかのように、手杖の向こうで頭を垂れ、

「俺はもう、あいつを……」

米田はそこで言葉を切った。

「司令？」

一体どういう意味だ？なぜ、米田はこんな顔を浮かべるのだ。マリアは困惑した様子で、手杖に目を落とす米田の顔を見る。

…悲しい目だ。その目には、自分も覚えがある。

「…いや、何でもねえ。とにかく、万が一バレたりすることでもない限り、口にするのは避けてくれ」

「わかりました…」

ジンが現れてから、時々米田はあの顔をよく浮かべるようになった気がする。いつもは飲んだ暮れのふりをしているようで、その実は帝劇で最も自他に厳しく律するマリアでさえ関心するほどだ。そんな彼をあのような、悲しそうとしか言えない顔を浮かべさせた若者、ジン。

（『米田ジン』、一体何者なの…？）

## 1—4 変身

...

ジンは街に繰り出していった。とはいっても、右も左もわからない身だから、誰かに付き添う形での外出となった。

所在地は浅草・問屋街。

今彼が着いているのは、風組のメンバーの一人、由里。この日の公園はないこともあり、街のことは特に詳しいとのこと、付いてきてくれた。

「助かったよ。僕だけじゃこの帝都のことわからなかつたし、帝都とのかを知るちようどいい機会だつたから」

「ジンがそばを歩く由里に感謝を述べた。外出は今回が初めてではない。前日も話したが、一度はすみれに荷物もちとして銀座の町に繰り出したこともある。

…めちやくちや重くてたくさんの荷物を持たされて筋肉痛にされたが。

「いいのいいの。私も今日久しぶりの休みで買い物に行きたかつたし。」

「で、どう？ 帝劇のみんな？ 美人がよりどりみどりだし、好みの女の子とかいたでしょ？」

「からかわないでくれよ……これでも結構気まずいんだよ」

確かに美人ぞろいだが、綺麗だからってそうすぐに惚れては軽い男と見られてしまうに違いない。ジンはなるべく色目を使わないように注意を払っていた。

「いいじゃない、今だってこんな美人と一緒になんだし？」

（自分で言っちゃいますか……）

確かに由里も美人の類でスタイルもいいし性格もいい方だ。でも自分で言っちゃうと妙な残念感が出てしまうのがジンの見解だ。

「そうそう、ところで何か思い出した？」

街に向いてから数十分は経っていた。それなりに街の景色を見て回ってきた。そろそろ見覚えがある、の一言くらい出てもいいかもしれないのだが……。

「……ぜんぜん」

自動車、バイク、街灯、列車、商店、街を歩く親子連れをはじめとした人々。

ジンは帝都に点在するものをくまなく見て回ったものの、いまいちどれを見ても、何かを思い出す、といったことはなかった。すみれと銀座を歩いたときもそうだったが、残念な結果だった。……荷物持ちの件も含めて。

「まあ、きつとそのうち元に戻るわよ。思い出せないからってくらい顔してたら幸せが逃げちゃうぞ？」

元気を出すように背中を軽く叩いてくる由里。

「そっか、そうだよな」

由里の言うとおり、深く考えても仕方がない。いつか記憶が戻ると信じて前向きに考えていこう。その方が気楽で楽しい。

「そうだ、何か文芸雑誌買おうか？ 思い出せなくても、帝都のことを知っておいたほうがいいよ。言うでしょ？ 敵を知り、己を知れば百戦危うからずって」

「それ、何か違う気がする…もしかしてわざとかい？」

気が付けば、他愛のない会話をしていた。記憶をなくしているなんて、嘘のように思えるくらいに。

何事もない平和な世。

記憶を失った状態で目を覚ましてから、不安が募っていた。しかし、米田が自分が帝劇に居座る事を許してくれたおかげで、そんな不安はなくなっていた。

しかし、そんなときだった。

街から突然、爆音が鳴り響いた。

「!？」

なんだろう、爆発音の聞こえた方角から、煙が立ち上っている。

驚くジンの耳に、まるで火災でも知らせるかのようサイレンと、街に設置されたス

ピーカーから放送が鳴った。

『蔵前橋方面にて緊急事態発生！付近の市民の方は直ちに避難してください！繰り返します！蔵前橋方面にて…』

その放送に伴い、人々は倉橋前の方角からジンたちのいる方角へなだれ込むように逃げ出した。

その際、彼の耳に会話

「で、出た!! 『降魔』が… 『降魔』がくるぞ!!」

「早く逃げろ！食われちゃうぞ！」

(コウマ…!?)

なんだ、この人たちは何を言っている？

何か、恐ろしいものが出てきたとでも言うのだろうか。

「ちよつとジン君、何ぼさつとしてるの！早く逃げるわよ！」

「え、あ…！」

パシッと頭を叩いてきた由里のおかげで、我に返るジン。

彼女に引つ張られながらも、ジンは避難民たちと共に、流れされかける。

しかし…ジンはなぜかここで立ち止まった。

「ジン君！」

早く一緒に逃げるように促す由里だが、このときのジンには聞こえていなかった。代わりに、あるものが見えていた。

数件もの建物を越えたその先：

悪魔のような翼が生え、体は黒くて硬いうろこに覆われ、目といえるものが見当たらず、鋭く地に植えたよだれまみれの牙をむき出しにする、おぞましい生物だった

(あれが降魔なのか!?)

それだけじゃない。

橋の上、そこで5人ほどの若い男性たちが組んで、何かと戦っている。

そいつと戦っている人たちの、血だらけの姿が見える！

無我夢中だった。ジンは直ちに現場の方角へ駆け出して行った。

「ち、ちよつとジン君！」

一人置いて行かれてしまった由里だが、結局彼女の引き止める声はジンの耳に届かなかった。

ブー!!ブー!!

『緊急事態発生、緊急事態発生！帝国華撃団・花組と風組の隊員は直ちに作戦司令室へ集合してください！』

その頃、大帝国劇場でも、街のサイレンと同時にブザーが鳴り響いた。

ちようどお芝居の稽古に当たっていたマリア・すみれ・アイリスの三人は、目つきを変えらる。

「出動みたいね。二人とも、行くわよ！」

「うん！」

「せっかくのお稽古中だというのに……野暮なものですわね」

約一名、軽く愚痴をこぼしていたが、三人は直ちに帝劇の二階フロアに駆け上る。2階にある自室前の廊下を突き進むと、その先の行き止まりの壁が上に向かってスライドし、壁に埋め込まれた10個ほどのダストシユートの蓋が設置された部屋が顔を出す。彼女たち3人がそのうちの3つに近づくと、一人一つずつ蓋が開かれ、彼女たちはその先に開かれたダストシユートへダイブする。

下に落ちていくうちに、彼女たちの衣服は解け、替わりに彼女たちのカラーに合わせた特殊な服装が纏われる。

そしてその先にある一室。そこには花組メンバーたちの肖像画が描かれていた。その肖像画が上にスライドし、ダストシユートの出口が開かれる。その中の3つから、着替えたマリア・すみれ・アイリスの3人が姿を現した。敬礼した3人の視線の先には……

「帝国華撃団・花組、集合しました」

「うし、3人ともそろっているな」

新緑色の軍服と軍帽を着た、あの米田が待っていた。普段のどこか酔っ払い親父のような姿などどこにもない。

まさに、上の中の上の階級に位置する軍人としての威厳を放っていた。同じく、彼の傍らには水色の特殊服を着た椿とかすみの二人も控えていた。

そこは、まるで特殊チームの……いや、事実ここは本物の作戦司令室だった。奥域まで延びる中央の大デスクの向こう側に設置されたモニターに、街の景色が表示され、かすみと椿が口を開いた。

「降魔の出現位置は浅草、問屋街です。現場には、すでに奏組の隊員が小型の降魔を発見し、駆除に当たっていましたか」

「降魔が戦闘中に突如進化したとのことです……幸い死者はまだ出ていないとのことですよ」

「……というわけだ、準備はいいな」

「私はいつでも出撃できます」

「私もですわ」

米田に状態を問われたマリアとすみれは迷わず頷いた。

しかし、ここで一つアイリスがあることに気が付いた。

「あれ？由里はどうしたの？」

「そういえば、今日はジンさんに仕事を手伝わせるついでに街を案内してくるって出かけて…あ！」

椿はそこまで言ったところで、表情を青く染めた。

「大変です！二人が向かった先も、確か浅草問屋街です！」

「何!？」

ジンたちが街に、それもよりによつて事件現場にいることを知り、米田もまた表情に激しい焦りを露にした。

「マズツたな…マリア、すみれ。すぐに出撃し、現場の連中を救出、敵を殲滅しろ！」

「了解。これより『帝国華撃団・花組』、出撃します」

マリアの敬礼に続き、すみれも敬礼した。

「アイリス、お前さんの『光武』はまだできちゃいねえ。ここでマリアたちの戦いを見学だ」

「えー。アイリスお留守番〜?」

不満そうに声を漏らすアイリスだが、おとなしくデスクの傍に設置された椅子に座つて待機する事にした。

一方でマリアとすみれは、作戦司令室から廊下に出ると、さらに階段を下りて、地下

1階の作戦司令室から地下2階に向かう。

そこは、数階分もの広大な空間の広がった格納庫だった。

帝都の人々を楽しませ、幸せにする演劇を生業とする帝国歌劇団、それは世を忍ぶための仮の姿。

しかしその実態は…

陸海軍のいずれにも属さない、『魔』の存在から人々を守るためだけに編成された、秘密特殊部隊『帝国華撃団』なのである。

浅草、問屋街の橋の上。

現場では、5人ほどの若い青年たちが傷つき倒れていた。

先ほど話にもあった、『帝国華撃団・奏組』の隊員たちである。

ある店の屋根の上から、怪しげな雰囲気を纏う銀髪の男が、荒れていく街と、降魔にまつたく歯が立たない奏組の5人を見下ろしていた。

「ふふふ…無駄だ。貴様ら程度の『靈力』では、その降魔には敵うはずもない」

奏組の隊員たちをまるで虫けらのごとく見下すその目はあまりにも冷たく非情だった。

「くそ……」

銀髪のクールな雰囲気纏う青年が、忌々しげに目の前にいる降魔を睨みつけた。

「グルルル……」

「んの野郎！ヒューゴから離れろ!!」

すると、少しやんちゃさを残したような少年が、手に持っていた武器……いや、楽器を手に取った。それも、楽団を干渉する際は必ず見かけるといえるトランペット。彼は吹き口に口を添え音を鳴らす。

そこから放たれたのは、ただの音ではなかった。

強烈な、不思議な力を纏った音だった。その音が、降魔にぶつかって途端、降魔の体に火花が走った。しかし、それだけだった。降魔は体表に傷こそ負っていた様子だが、致命傷にはまるで至っていない。それと同時に少年はその場で膝を突いた。

「ちくしょう……俺の霊力じゃ、無理だったのか……」

「兄さん!」「源二!」

少年の名を呼びかける他の3人のうち、源二と呼ばれた少年に似た風貌の少年と、眼鏡をかけた青年の二人が助け出そうと飛び出す。

「いけません！無理に飛び出せば！」

最後の、赤い髪の青年が警告を入れたときには遅かった。

降魔の口には、怪しい光がともっていた。二人の接近に気が付く、降魔の口から怪光線が放たれ、奏組たちを吹き飛ばす。

「うわああああ!!！」

吹き飛ばされた5人だが、激しいダメージこそ負っていたが、無事だった。だがもう、すでに限界に達していた。

しかし、降魔は情けを見せない。倒れた隊員の一人、赤い髪の青年の前に降り立つ。

「ルイス！」

赤い髪の青年を呼ぶ声が聞こえる。対して、ルイスと呼ばれたその青年は、自分の眼前に現れた降魔に、反撃する気力さえ起こせなかった。

「く……」

もう終わりか、と思ったときだった。

ルイスは、自分の体が浮いたような感覚を覚えた。いや、誰かが自分をとつさに抱きかかえたのだ。

目を開けると、自分と同じか少し年下に見える、日本人顔の若い青年だった。

その男は、ジンだった。

「大丈夫ですか!？」

ルイスに声をかけるジン。

「え、あ…はい。助かりました…」

「い、一般人がなんで…!？」

「まだ避難が完了していなかったのか？俺としたことが、見落としていたか…」

思わぬ乱入者に、ルイスも含め、奏組の全員が啞然とした。

キツと、ジンはルイスを喰らおうとした降魔を睨みつけた。

来たのはいい。そして一人、殺されかけた人を助け出せたのはいいが、ジンにはわからなかった。

戦場で楽器を扱うその戦闘スタイルには目を疑ったが、それでもこの怪物に痛手を味あわせることはできるだけの力を持っている。

(どうする…どうすればいい…?)

と、そのときだった。

「そ…までよ!!」

凜とした掛け声と共に、突如どこからか、二機の人型機械兵器が姿を現した。

この機体こそ、魔と戦うために開発された帝国華撃団の秘密兵器『光武』である。

「帝国華撃団・花組、参上!!」

(え…今の声、まさか…)

現れた人型兵器を見て、ジンは目を見開いた。今の声には聞き覚えがある。

銃を持つ黒の機体と長刀を持つ紫の機械兵器。

その搭乗者は、前者がマリア、後者がすみれだったのだ。

「ど、どうして彼がここにおりますの!?!」

一方で、この場にどうして、ジンまでいるのか理解できず、すみれも思わず声を荒げた。てつきり避難していたと考えていたのだろう。それに彼と付き添いになっていたはずの由里も見当たらない。

「…すみれ、今は目の前の敵に集中しましょう。」

奏組の皆さん、ここは私たちに任せて、避難を」

「…すみません、後を頼みます」

赤い髪の青年が、マリアの言葉を聞きいれ、仲間たちを連れてこの場を離れてようとするが、足に激痛を覚え、膝を付いた。

「肩を貸します」

「すみません…」

ジンの肩を借りる事で、ルイスも避難した。

奏組たちの避難を見届けたところで、すみれが己の機体の腕に握らせた長刀を振り回

しながら、目の前にいる降魔を睨みつけた。

「この街で好き勝手してくれましたわね。この長刀の錆にして差し上げますわ！」

「すみれ、私が援護するわ。あなたは前を」

「承知しましてよ！」

早速マリア機の銃から、強力な弾丸が発射される。その一発は、先ほどの奏組の比ではなかった。今の一発だけで、降魔はダウンした。

しかし対する降魔も、せっかくの獲物を取り逃がした怒りによってか、マリア機を睨みつけた。血に飢えた咆哮を上げ、襲い来るが、マリア機がとっさに下がる。其れと同時に、彼女と入れ替わるように、すみれ機が長刀を振りかざして出現、頭上からの一太刀の元、降魔の腕を切り落とした。

腕を失った降魔はもだえ苦しみだした。

「ほう……」

二人の戦いを、あの銀髪の怪しげな男も先ほどと同様に屋根の上から見届けていた。

「何かと思えば……となると、こいつを作らせたのは……『奴』か」

くく、と男は笑みを浮かべた。

「思ったよりはやるようだが、たかが一匹倒したところで流れは止まらん。それは貴様

とてわかっているはずだよな? よ…。」

と、何かを言いかけたとき、ちらと男はある場所に視線を向けた。

すると、突然彼の余裕をこいた表情が一変した。

「な、何…!!?」

その視線の先にいたのは、ただ一人の…青年。

奏組の傍らでマリアたちの戦いを見てた…。

ジンだった。

「なぜだ…なぜ奴までここにいる!? まさか、生きていたのか!?!」

彼の姿を見て、なぜか男は酷く恐れおののいた。そんなはずがない、こんなはずがない。そう呟きながら、どういうわけかジンがこの場にいるどころか、この世にいる事さえもありえないと断じていた。

「く…ともかく、今すぐ殺さねば…! いずれ俺の計画に支障が出る…!」

少しでも落ち着こうと、男は忍術の印を結ぶかのように構え、念じた。

「オンキリキリバサラウンバツタ…オンキリキリバサラウンバツタ…オンキリキリバサラウンバツタ…オンキリキリバサラウンバツタ…オンキリキリバサラウンバツタ…オンキリキリバサラウンバツタ…オ

ンキリキリバサラウンバッタ：オンキリキリバサラウンバッタ：

すると、男の足元に奇怪な光の円陣が展開され、怪しげな光を解き放ち始めた。

「いでよ…魔の力を授かりし怪獣…『魔獣』よ!!」

「すい…」

奏組の隊員に肩を貸しながら避難を完了したジンは、すみれとマリアの戦いを見届けていた。あの恐ろしい怪物に、まったく引けをとっていないそれは。感心すべきだろう。だが一方で、銀髪の青年はというと、悔しげに手を握っていた。

「ヒューゴ…」

それを、源二と呼ばれていた少年が辛そうに見ていた。ルイスもそれは同様だった。

「もう大丈夫です。立てます」

ジンに一言言おうと、ルイスは自力で立ってヒューゴに話しかけた。

「ヒューゴ、我々の霊力ではとても無理です。ここは彼女たちに任せましょう」

自分たちのほうが頭数がそろっている。だが、自分たちの力では敵う相手ではなくなっている。それが、ヒューゴに猛烈なもどかしさを与えた。

だが、それはジンも同じだった。奏組の隊員たちの顔を見れば一目瞭然で、その気持

ちが自分にもよくわかる。

(この人達、みんな辛そうにしている。あの降魔に何もできないことが悔しくて仕方がないんだ)

特にヒューゴの顔が険しくなっている。握り締めた手からは血が滲むほどだ。其れを見てみると、ジンまで悔しさがこみ上げてきた。

(この街は、僕を拾ってくれた人たちが守ろうとしている街。それを、守る事さえもできずただ指をくわえてみていることしかできないだなんて…)

自分にも、力があれば、彼らのように傷つく人が現れる事などないはずなのに。

が、そのときだった。

ジンはそのとき、自らの体に激しい悪寒を覚えた。

ドクン…

「じ、地震?!?どうなってんだ?!?ジオ!」

———なんだ…

「俺に聞かないでくれ！」

ドクン…

「こんなときに地震ですって…？」

———心臓の鼓動が…うるさい…

「嫌な予感がするわね…すみれ、警戒は怠らないで」

———何かが、何かが来る…

———近づいている!?

「！下だ!!」

ジンが叫んだ。それと同時に、激しい地鳴りが起こり、付近にさらに大きな地響きを起こす。

「いけません、総員退避！ さあ、あなたも避難を！」

ルイスが奏組全隊員に撤退命令を下し、ジンにも避難を促した。

しかし、すでに遅かった。

降魔の真下の地面が突然突き破れた。同時に降魔は宙へ投げ出される。

「う……ぐあー！」

その衝撃で、ジンは奏組と引き離されてしまった。瓦礫の山に思い切り叩きつけられ、その際に強く胸を打ってしまふ。胸を押さえながら起き上がるジンは頭上を見上げる。

地面から現れたのは、巨大な顔。降魔よりも恐ろしくおぞましい顔をした、怪物だった。

その怪物は宙に打ち上げられた降魔に喰らい付き、ばらばらに食いちぎって飲み込んだ。

「な、なんですの……!? こいつは……」

突然現れた怪物に、すみれは青ざめた。

現れた怪物の体長は、体長が45mほどもある、巨体を誇っていた。

「やれ、『強力魔獣デビルアロン』！奴を光武の操縦者共もろとも討ち滅ぼせ!!」  
怪物を呼び出した男は、自らそう呼んだ怪物に対して非情な命令を下すのだった。

「問屋街にて、さらに強力な妖力を持つ降魔の出現を出現！」

「強力すぎて妖力数値化できません！」

アロンの出現は、帝劇の作戦司令室にも映像やデータという形で伝わった。

「嘘ッ…!?!」

「な、なんてこった…!!」

敵の巨大な姿にアイリスは戦慄と恐怖を覚え身をこわばらせる。あまりに予想外な事態、米田はデスクに拳を叩き付けた。

「マリア機、敵と交戦開始！」

かすみがそういったとき、映像の中では、すでにアロンに向けてマリア機が銃口を向けていた。

立ち上がったジンは、自分を見下ろしている怪物、デビルアロンを見上げた。

「はあ…はあ…!」

血が、ぼたぼたと流れ落ちる。流れ落ちていくたびに、目の前に立ちはだかる脅威に、

猛烈な戦慄を感じる。

おかしい…。

どうして、僕は逃げようとしていないんだ？

ジンは自分の行いについて強い疑問を抱き始めた。由里の行っていた通り、おとなしく安全な場所へ逃げていればよかったはずだ。そうすればこんな危険な目にあうこともなかったはず。でも、なぜか…あの時、刑法による緊急事態発令に伴って避難を開始した際、あの場からここまで距離が開いていた。何十もの建物が壁のように立ち並んでいて、奏組の隊員たちが傷つく姿など絶対に確認できなかったはずだ。

でも…どうしてか、ジンには見えた。それもはつきりと、すぐ近くの景色でも見ているかのように見えていた。

もしかして…僕は前にもこうして、こんな怪物と対峙していたことでもあったのだろうか？

不思議なことに、ジンは今の感覚に懐かしさを覚えていた。

この強大な怪物と、正面から向かい合っている今の状況に。

アロンは男の命令に従い、付近の瓦礫の傍らに落下していたジンを睨みつけた。

「まずい!!」

マリアが、怪物がジんに狙いを定めたことを察知、銃を構え、アロンに向けて発射する。

連射される彼女の弾丸は敵が巨体という事もあつてか、全てアロンに直撃した。

彼女に続いてすみれも長刀を構え、アロンに接近、高く飛び上がった。

「でえええええい!!」

すみれ機は10mを超えるほど飛び上がっていた。頭上から振りかざされた長刀は、まるで孫悟空の如意棒のように伸びているようにも錯覚して見えた。力いっぱい振り下ろすすみれ。長刀の刀身には強い光が灯っていた。

振り下ろされた刃は、ザシユ!と尾をと立てながらアロンの左腕を切りつけた。

「ふ、いかがだったかし……ら……」

深い手ごたえを感じ、先ほどの戦慄を忘れてやったりと笑みを浮かべたすみれ。

確かにダメージは入っていた。

しかし……それだけだった。

「グルオオオオオオ!!」

「ッ!？」

すみれの一撃もらった痛みで、アロンは怒りの雄たけびを上げる。呆気にとられるすみれはその場で固まってしまった。

「すみれ、避けなさい!!」

マリアが直ちにすみれに逃げるよう呼びかけたが、間に合わなかった。アロンの振りかざした腕が、すみれ機を殴り飛ばした。

「すみれ!!」

叫ぶマリア。一方ですみれは悲鳴さえ上げることすら許されなかった。たった一発腕で払い飛ばされただけで、すみれ機は建物を突き破りながら何十メートルも離れた場所まで飛ばされ、ガシャンと音を立て、停止した。同時に煙が、停止したすみれ機から立ち上った。

「すみれ、応答して! すみれ!」

今の一撃は、あまりにやばすぎる。最悪の状況さえも考えてしまえるほどの一撃だった。マリアは直ちに通信を試みるも、応答はない。嫌な予感がマリアの脳裏を過ぎった。

一方のすみれは、光武の中で頭から血を流していた。機体内部にはショックを吸収す

る素材が組み込まれていたおかげか、致命傷には至らなかったようだ。だが、すみれの体にはアロンから受けた攻撃の衝撃はあまりに激痛だった。

「ぐ、う……」

私としたことが、たった一撃の攻撃で……。すみれは悔しげに顔を歪ませたが、そんな暇は与えられなかった。

モニターに、巨大な目がすみれの顔を覗き込むように見ていた。

「き、きやああああああ!!」

今までにないほどの恐怖と覚え、すみれは悲鳴を上げた。

すでにこのとき、アロンはすみれの光武の眼前にまで迫っていたのだ。いつでも、彼女を光武もろとも飲み込んでしまうことができた。

『すみれ!!逃げなさい!!』

『すみれさん、危険です!今すぐ脱出を!』

通信回線越しにマリア、帝劇の作戦司令室のかすみから必死に逃げるよう訴えられるが、アロンへの恐怖心で心を満たされてしまっていて、まるで聞こえなかった。

「すみれ、何してる!光武を捨てて早く逃げろ!」

作戦司令室からは、米田もまたすみれに脱出を呼びかけていたが、応答はなく、彼女

の悲鳴がうるさく響くだけだった。

待機組のアイリスは、まるですみれの恐怖を感じ取っているのか、ぎゅつと自分自身の肩をつかんで震えた。

しかしそのとき、アイリスは感じ取った。

「米田のおじちゃん…」

名前を呼ばれ、米田はアイリスのほうを振り向く。

「どうした、アイリス？」

「何かが、来る…別の何かが」

「別の何か？まさか、敵か!？」

敵の出現を、アイリスが予知したのだろうかと考えた米田だが、アイリスは首を横に振った。

「ううん。違うの…もつと違う…何かが来るの」

それが何なのか、まだ子供で選ぶべき言葉を覚えていなかったから、というわけではない。事実、自分が今感じ取ったものが何なのか、あまりに得体が知れなくて説明できないのだ。

アイリスが感じた『何か』の正体は、その直後に判明する。

ジンは、体を引きずりながらアロンを睨みつけていた。対するアロンは、ジンよりもすみれの方に注意が向けられている。

「すみれ！」

彼女を救おうとマリアが光武に搭載された銃で銃撃し、すみれが逃げられるだけの隙を作り出そうとする。弾丸はアロンの首筋に被弾し、隙そのものを作り出す事ができた。しかしすみれ機は動きを見せない。

（く、やはり…すみれの光武、故障していて動けないのか…！）

自身の光武の中で、マリアはすみれ機をみて苦虫を噛んでいるように顔を歪ませた。こうなったら、自分が劣りになって注意を引き付けるしかない。無駄撃ちすることがないよう、残弾をなるべく把握しつつ引き続き銃撃を続ける。

さすがに何度も攻撃を受け、アロンはマリアに怒りを露にし、口から一発の光弾をマリア機に向けて放ってきた。

間一髪、攻撃を予測したマリアはすぐに回避に入るも、爆風によって彼女の光武は吹き飛ばされた。

「つぐ…」

今のもかなりの損傷が光武に入った。しかもモニターには警告の文字が浮かび、光

武にガタが付き始めたことを物語らせた。

アロンは、すみれのほうを放り出し、今度はマリアの方へ向かっていく。

ジンはその光景を見て、焦りを募らせた。

「やめろ…」

このままでは、すみれやマリアが殺されてしまう。

だめだ、そんな事をしたら…。彼女の芝居を楽しみにしている人たちが、帝劇のみんなが悲しむ事になる。

椿姫役までガチで死んでしまうなんて笑い話にもならないじゃないか。

アロンが、降魔よりもおぞましきを感じさせる鋭い口を開き、マリアに喰らい付こうとした。

「やめろおおおおおおお!!」

マリアたちを救おうと、ジンは駆け出した。

無我夢中だった。自分でも訳がわからなくなるほどの叫び声をあげていた。

そのときだった。

彼の中に眠る、熱き衝動が：

彼をもう一つの姿へと変えていくのを。

ジンの目から渦を巻く金色の光がスパークし、頭上から銀のマスクが彼の顔を覆い始めた。

無我夢中で己の変化に気づかないまま、ジンは構うことなくアロンに拳を振りかざし、殴り飛ばした。

「グガアアアアアアアア!!」

すみれ、マリア、奏組、大帝国劇場の作戦司令室の面々は驚きのまなざしを見た。突如、町を包み込むほどの赤い光が立ち上り、それがアロンを突き飛ばしたのを。

赤い光の柱は、やがて…人の形を成した。

吊り上げられた金色の目、胸元を覆うプロテクター、そしてXともAとも見える白い

ライン、一部の黒い模様を持つ…。

熱く燃えるような、赤い血潮色の…巨人へ。

「な、なにあれ…!?!」

「あれも、降魔なの…?」

椿やかすみは巨人を見て驚きの表情を浮かべたまま固まっていた。直接姿を変えた場面を映していたわけではなかったこともあり、ジンがあの人である事に気づいてはいなかった。

しかし、米田はモニターからその巨人を見て、表情を一変させた。

「んな…なんてこった…」

落胆しているように見える。一種の絶望ともとれる表情だった。

(また、その姿になっちまったのか…!?!)

米田は膝を突いて、崩れ落ちた。

「ジン…」

モニターに映された赤い巨人の正体を、米田は呟いた。

赤い巨人へ姿を変えたジンの姿を、見たものはさらにもう一人いた。アロンを呼び出した、あの銀髪の男である。

「おのれ…やはり生きていたのか…」

赤い巨人を見て、男は忌々しげにその名を呟いた。

『』

『…ツ!!』

## 1—5 赤き血潮の巨人

「グルオオオツ!!」

赤い巨人へ姿を変えたジンを見て、アロンから標的をマリアから彼に変更、突進を仕掛けた。

「アユ!!」

向かってきたアロンの頭を、ジンは正面から両手で掴んだ。頭を掴まれたアロンはもがき、ジンの手を振り払おうとしたものの、ジンの力はすさまじく、アロンがどれほど首を振っても話せなかった。

その間にジンは猛烈な膝蹴りを胴体に叩き込み、続いて首筋を引っつかみ、思い切り背負い投げて地面に投げ倒した。

倒れこんだところでその上にのしかかり、さらに続けてアロンの顔を殴りつける。しかし、アロンは頭突きを食らわせて、自分にのしかかっていたジンを突き飛ばして逃れると、立ち上がったところで足元の地面に足の先を突っ込み、思い切り足を上げる。その際に抉られた地面が一つの土の塊となってジンを襲う。

「アユ!!」

ジンはとつさに額に、チョコキの形にした両手を額に添える。その途端に、彼の額に埋め込まれていた縦長のエメラルドグリーンのランプから、緑色に輝く光線が放たれ、アロンが抉り出した土の塊を粉々に吹き飛ばす。

だが、粉々に吹き飛ばした土の塊の粉塵に紛れたせいか、アロンの姿が消えていた。「降魔が、いない!?!まさか逃げたんですの?」

すみれが声を上げながら、辺りを見渡す。

「いえ、気配はまだ感じるわ」

マリアは視線を鋭くしながら周囲を見渡し、アロンの姿がどこに言ったのかを確認する。だが敵の姿はどこにも見当たらない。地面を掘って姿を隠したのだろうか?

「すみれ、地面も警戒範囲に入れなさい! 地中にもぐった可能性があるわ!」

「わ、わかりましたわ!」

光武が動かないとはいえ、まだ自分はここに立っている。マリア機のそばで、すみれは引き続き警戒に入る。

だが、そのときだった。

「ジュア!!」

ジンは突如、すぐそばの水路に向けて手から一発の光の弾丸を手裏剣のように飛ばした。

「ギャアアアアアア!!」

水に着弾したと同時に弾丸は爆発し、水しぶきが巻き上がる。その音と共に、アロンの悲鳴が轟く。そして水しぶきの中から、姿を消していたアロンが姿を現した。もしや水に溶け込むように隠れていたとでも言うのだろうか。いや、それよりも：

(まさか、あの巨人には奴がどこに隠れていたか見えていたの：!?)

マリアは、ほとんど時間をかけることなく赤い巨人が、姿を隠したアロンの居場所を突き止めたことに驚かされた。

居場所を明かされたアロンを見ると、赤い巨人は片膝をついて頭に付いた突起に両手を添える。すると、何か頭から外れる感触を覚える。それを確かめると、ジンは頭の突起に両手を添えたまま、前に向けて両手を振りかざした。

「ジュア!!」

なんと、彼の頭についていた突起が、ブーメランとなってアロンに一直線に向かつていったではないか。アロンの足元に向かって高速回転しながら近づいていくブーメランはアロンの真下まで飛来し、そのまま急上昇する。

ザシュ!!と切り裂く音が鳴り響く。ブーメランが赤い巨人の方へ戻って行き、眼前に来たところで赤い巨人はそれをガシツと掴み、元通り頭に装着しなおした。

それと同時に、アロンの体は左右二つに綺麗にガバツと割れ、倒れた。

「や、やった…!？」

光武に乗っていたマリアやすみれ、地上から見ていた奏組、作戦司令室の巨大降魔は倒された光景に誰もが目を離せなかった。

やがて、赤い巨人は膝を付いて赤く発光した後、まるで最初からいなかったかのようにその姿を消した。

「消えた…?」

一体あの巨人はなんだったのだ? 突然表れて、あの恐ろしい巨大降魔を打ち倒してしまふとは…。

「…今は、劇場にもどりましょう。すみれ。お互いに怪我が酷いし、光武も修繕が必要だわ」

「…わかりましたわ。これより帰還します」

「ちい、ここまで戦えるほどに力を取り戻していたのか…」

銀髪の男は、アロンが倒されて酷く悔しげに顔を歪ませた。

「ここは一旦引くか…だが! いずれ、貴様を倒し我が野望を成就してくれる…!」

彼は捨て台詞を吐き捨て、忍者の印のように手を合わせると、わずか一瞬の撃ちに、最初から影も形も無かったかのごとく姿を消したのだった。

赤い巨人が消え去ったと同時に、ジンは問屋街の建物壁影に背中を預けていた。

さっきのあれは、一体なんだったのだ？

確か自分は、すみれやマリアの光武がああ降魔とか言う怪物に破壊されかけたとき、絶対に止めなければと思った。そう思ったら、体が急に熱く燃え上がるような感覚にとらわれて…。

気がついたら、意識が飛んで…。

「なんなんだ…僕は…さっきまで何を？」

ジンは、赤い巨人になったときの記憶がなかった。

だが、自分の体に張りめぐる異様な感覚だけは覚えていた。自分の体に、何かが起こったような感覚を。さっきまでの出来事に対してわけがわからず、頭の中がくしゃくしゃになって訳がわからなくなった。

「ジン君、ここにいたのね…もう！女の子を残して一人で出て行っちゃったらだめじゃない！」

すると、ジンを追って由里がようやく駆けつけてきた。

「それにしても、危ないところだったわね、マリアさんたち。でも、あの赤い巨人ってなんだっただの？あの怪物の仲間じゃなかったみたいだったけど…」

しかし、背中を壁に預け、顔が蒼白になっているジンの姿を見て、彼女も異変に気づく。

「ちよつと、大丈夫？どこか痛むの？怪我したの？」

しかし、ジンは答えられなかった。突然の出来事の連続で彼の精神が追いつけなくなり、意識が朦朧として倒れてしまう。

「ジン君!」

由里が自分の名前を呼ぶのを聞いたのを最後に、ジンは意識を手放した。

## 第弐話 救世主、光臨 / 2-1 違和感

地球の衛星、月。

その月面にて、突如空間が歪み始めた。うねうねとうねるような動きは不気味さを体現している。

その歪みは激しさを増し、ガシャン!!とボールが突っ込んで砕け散った窓ガラスのごとく、空間を割ってしまった。

その中から、赤い球体と黒い球体が月面に激突する。黒い球体は、宇宙の闇の中に溶け込んでしまったが、もう一つの…赤い光は、全身が真っ赤の巨人へと姿を変え、『何か』と戦いはじめた。

巨人の周囲に向け、どこからかビームが放射される。巨人はそれを側転なりバック転などで避けていく。

最後のビームを避けたところで、赤い戦士は頭上を見上げる。

今の月面は暗い闇の中…つまり夜に差し掛かっている。寒気に満ち、そして何も見えないほどの闇に覆われている。

何も無いように見えるが、赤い戦士にはわかっていた。

—あの闇の中に、とてつもないほどの大きな闇が、うごめいている。それが、今の自分の敵…。

再び一発の紫色とも黒ともいえる不気味な色をしたビームが赤い戦士を襲った。戦士は直ちに飛び立ってそのビームを避け、空振りに終わったそれは戦士の立っていた地面を抉りとった。モロに食らっていたらただでは済まされなかったに違いない。

赤い戦士は宙に浮いたまま、自身の胸元を覆っているプロテクターに光を帯びさせた後、光を両腕に集めていく。即座にL字型に両腕を組むと、彼の組まれた腕から、光り輝く光線が闇の中にある敵に向かって放たれた。

その光は赤い巨人にとっての懇親の一撃といえるだろう。

だが、光線は闇の中に溶け込むように消え去ってしまった。

「!？」

光線を吸い取られ、赤い巨人はぎよつとするも、その隙と動揺が命取りとなった。闇の中から放たれた黒い光線が、赤い巨人の体を貫いてしまった。

避けることもままならず、巨人の悲鳴が轟いた。

体にとぼしる激痛により、意識が薄れていく。

赤い巨人は、そのまま吸い寄せられるように、青い星。

地球へと落下した…

赤い光は地球の、水の中へ突っ込み、そのまま水底に向かって沈んでいく。

最後に赤い巨人が見たのは…

二つの角を持つ、黒衣を纏う悪魔の姿だった。

第弐話 救世主、光臨

「…………ツ」

ジンは目を覚ました。

いつの間にかベッドに寝かされていたようだ。

窓のない、ベッドの傍らに小さな明かりのついた部屋。

「ここは、一体どこだ？ 医療器具や診察台などがあることから、病室のようだが…」

「よかった！ 目が覚めたのね…」

「体の具合はどうかしら？」

傍らから安堵の声が聞こえる。顔を向けると、そこには由里やマリアたち花組の顔が

そこにあつた。

「…はい」

ジンは体を起こすと、ベッドから起き上がる。

頭が痛い。ガンガンしてくる。何かが頭の中でつかえたようにもどかしい。何か大事なことを忘れているような気がする。

「あの、僕は…いつたい…由里さんと街へ…行って…ッ！うう…」

最初は浅草の間屋街に、由里と一緒に町を回っていたはずだ。この帝都の町を知るため、あわよくば自分の記憶の手がかりを見つけ出すために。だが突如街に化け物が現れ、それに対して男性の少人数の部隊が戦っていて…そうしたら機械の人型兵器が姿を現した。それが降魔を撃退したと思ったら、さらに巨大な降魔が現れて…。

(なんだ…？そこから記憶が欠けてしまっている…)

記憶がまた混乱しているのか？思えば、自分は突拍子もない夢でも見ていたのではないだろうか。途中から記憶が飛んでしまつて何も思い出せなくなつていた。

自分が、赤い巨人の姿となつていたことも。

いや、まだ覚えていることがあつた。

由里と街へ出かけていた際、突如『降魔』と呼ばれる怪物が現れ、それを端正な顔立ちの男の集団が、そして人型の機械が応戦していた。それにあの機械に乗っていたのは…。

(マリアさんとすみれさんだ…どういうことだ？)

夢かと思つた。記憶が混乱したからだと思つていたが、やはりあれは現実だった。

(あの人達はただの女優のはずだ。なぜあんな物騒な機械兵器で化け物と戦つていたんだ？あの男の人達もそうだったが…一体…？)

さつきはそのことについて、結局聞きそびれてしまつていた。あの人達は一体何者な

のだ？ただの劇団じゃないのか？

それに、あの時自分は どうして いた？ 出かけた際に降魔と遭遇して…それから どうした？ 逃げて いたのか？ いや、 だとしたら意識を手放すような事態に遭遇する可能性は低い。

…うう、だめだ。 分からないことが多い。 考えていくとその分だけ頭が どういうわけか 痛くなる。

「大丈夫、ジン？ やつぱりどこか 痛い の？」

アイリスが心配そうにジンの顔を覗き込んできた。

「いや… しいて 言えば、 頭が ちよつと 痛い だけ から 平気 だよ」

首を横に振って、わぎと何事もなかったように笑みを見せた。 アイリスはなにも言わなかった。 ただジンに向けて憂い顔を見せ続けた。

「あの… みんな」

自分には置き置かない。 だから、彼女たちに今日起きたことについて色々聞くべきだ。 何か質問を かけようとした そのとき、ジンの言葉を 遮る ように ガチャツ！ と 部屋の扉が音を立てて開かれた。

「おう、ジン。 もう体は平気なのか？」

「支配人」

入ってきた人物は、米田だった。

「米田さん…はい。なんともないです」

ジンは俯いていた顔を上げ、頷く。それを見たとき、一瞬米田の目が伏目しがちになつてた。何かを憂いているようにも見えた。

「そろそろ飯の時間だろ？行かなくていいのか？」

それを誤魔化すように、米田が先に言つた女性陣たちのもとへ早く行くように促す。

「そうですね。ジン、あなたは？」

「いえ…別に」

特に空腹感が出ていなかったが、直後に、少年の腹からぐうう…と腹の虫が泣いた。

「あらあら。ジンさんのおなかはそうでもなかったみたいですね」

すみれがからかってくる。軽い悪乗りであるのはわかるが、なんかこの人から笑われると少し腹が立つ…そう思いながらもジンは少し気恥ずかしげに膨れながらも堪えた。

「それじゃ、そろそろ行きましようか。ジン、病み上がりだから少し休んでから来なさい」

マリアがジンの方を向いて、気遣いの言葉を送る。

「いえ、大丈夫です。なんともありません」

さつき少し頭が痛くなっただけで、特に重い症状を患っているなどという感覚は一切

なかった。体を起こしたジンは軽く腕を回してなんともないことをアピールした。

「本当に大丈夫？あまり無理はしないでちょうだい」

「あ、いや…本当に大丈夫ですから」

「ああみんな。こいつのことは俺の方で見ておくから先に行つて来いよ」

「わかりました。では」

マリアは皆を引き連れ、食堂へと向かっていった。

みんなが部屋を後にし、米田と自分の二人だけとなった。

ジンは米田をまっすぐ見つめてきた。今度こそ尋ねないといけない。降魔と戦ったあの若い男性の集団や、その後を駆けつけてきたマリアたちの乗る人型の機械兵器のことについて。

「…米田さん」

ジンがそこで言いかけると、米田の表情に変化が訪れた。それも険しいものだ。そしてジンの言葉を遮った。

「ジン、お前…記憶が戻ったのか？」

「…え？」

いきなり記憶が戻ってきたのでは問われたジンは困惑した。

「今日、お前変身したじゃねえか。赤い巨人の姿に」

「赤い巨人……？」

ジンはそれを言われ、困惑と動揺を混じらせた。

「何のことだ……何を言ってる……！」

理解できないと言いつ返すジンの反応に、逆に米田も困惑を示した。

「何をつて、ここに来てとぼけてんのか？あれがお前のもう一つの姿だつて、俺もあやめ君も知っているぞ」

「……………」

米田の予期しない台詞に、さらに頭が混乱し始めた。

僕が……赤い巨人？何を言ってるんだこの人は？一体何を？

頭を抱えていかにも自分が混乱していることを表しているジンを見て、米田はあることを悟った。

ジンは、自分が赤い巨人に変身したことを覚えていないのだ。

（これも、記憶を失った影響なのか？いや……それとも何か別の要因か？）

「赤い巨人つて……なんですか？それに変身つて……」

思えば、今日起きた化け物の事件だつてそうだ。おかしいことだらけだ。若い男性と、女性が搭乗していた人型機械兵器。そして……避難するべきだったのに自分がとつた行動とその果てに記憶が途切れていること。何もかもが日常というにはおかしい。

「教えてください、米田さん。赤い巨人ってどういうことですか？それにあの化け物は……降魔とは一体なんなのですか？」

「……………」

静かに背を向ける米田。答える姿勢を見せようとしない彼にジンはイラつきを覚えた。

「答えてください！街で由里さんと出かけた際、街をあの化け物たちが壊していた！だが、そのとき人型の機械が現れた！しかもあれに乗っていたのは……」

マリアたちじゃないのか。あの凜とした声に間違いがなければ、間違いはない。なぜ、この大帝国劇場で働く女優であるはずの彼女たちが……あんな機械を乗り回してあんな恐ろしい化け物と戦っていたのだ。

「この大帝国劇場って……本当にただの劇場なんですか？思えば、僕が帝劇で眠っていたあの場所だって、違和感がありすぎる……」

このときのジンの脳裏に浮かぶ、自分が目を覚ましたあの場所。そしてその中央に設置された、液体で浸された医療カプセル。どうせ持つならかなり設備の整った病院などの方がふさわしいはずだ。劇団が持つものにしては大仰過ぎる。

「たかが劇場に、あんなできすぎた設備が出来上がっているなんて普通に考えたらおかしすぎます。それに、僕が赤い巨人に変身したって……」

「…」

「答えてください。米田さん…この帝劇の正体はなんですか！なぜ僕はここで眠っていません！」

「僕は…僕は一体誰なんですか!!?!」

ジンから一方的に質問攻めを受け、米田の鋭い視線が突き刺さってきた。その視線から放たれる気迫は、ジンを瞬時に黙らせた。

「…わかった、バレちゃったもんは仕方ねえ。順を追って教えてやる。まずは、この帝劇の秘密についてだ」

米田はジンの正面に振り返り、ジンが知りたがっている真実の一旦を伝えた。

この大帝国劇場は、帝国歌劇団が舞台を行うための場所だが、それが世間から正体を明かされることを避けるための仮の姿で、本来は降魔と戦い人々を守るための組織『帝国華撃団』の本部である。

主に舞台では女優として活躍している花組が、光武に乗って降魔と戦う。椿・由里・かすみたちはそのサポート役を担う『風組』のメンバーとされている。

他にもこの華撃団には、本来はオーケストラを担当する『奏組』、黒子担当の人達は諜報活動を行う『月組』などの別働隊が存在しているとのことだ。

そして降魔とは、帝都に出没する醜悪な姿をした化け物で、人に害をなすことこそが

存在意義のような、まさに悪魔のような生物のことだ。しかも降魔は既存の兵器で簡単にダメージを与えることができず、有効な攻撃手段は霊力を用いた攻撃のみ。だから、この帝国華撃団が秘密裏に結成された。

しかしそれだと腑に落ちない。本来は戦うために設立された部隊がどうして、劇を行っているのか？戦いと舞台に一体どんな接点があるというのか。なぜ劇団として銀座の真ん中に構えなければならないのか。

「やっぱそこを突くよな」

そのことを指摘された米田も、ジンからそれを尋ねられることを予期していた。

「俺たち華撃団がこうして演劇を行って稼いでいるのはな、世間と帝都に仇名する者たち全てに対する目くらましと、光武を操縦するために必要な『霊力』を調整・強化するための重要な見合いなのさ」

「霊力……？」

「花組をはじめとした、この帝劇に所属している戦闘部隊のメンバーたちには、その力が宿っている。それが降魔を打ち破る唯一つの力なのさ。だが、光武を動かせるのは花組クラスの霊力の持ち主、世間じや光武を操縦するのに必要な量の霊力は年若い女にしか発現しねえ上にめつたに見られない。奏組のボウズ共のように、他の部隊の連中の霊力じゃちっこい降魔しか倒すことはできねえ」

それを聞いて、ジンはマリアたちが操縦している光武が駆けつける直前に降魔と交戦していた、若い男性で組まれていた戦闘部隊の姿を思い出す。彼らには光武を操縦できるだけの霊力が備わっていない。光武を動かすことができなかつたから、結局マリアたち以後を任せるしかなかつたのだ。

「霊力を高めるため、正体を世間に隠し通すため、光武をはじめとした対降魔兵器の資金集めのため……だから普段この劇場で舞台をやっている……そういうことですか？」

「おう、その通りだ。理解が早いな、流石だ」

少し誇らしげにジんに笑みを見せてきたが、ジンはちつとも笑おうとしなかつた。この帝国華撃団の正体は既に理解した。だが、まだ分かつていないことがある。そしてそれは、ジンにとって最も重要なことだ。

「で、お前の正体についてなんだが……」

ごくつと、ジンはつばを飲み込む。一番知りたいと思つていた真実を……自分の正体をついに知ることができる。期待に胸の鼓動が早まる。

が、返つてきたのは予想外の返事だつた。

「すまんな、実を言うと俺も詳しいことは知らん。元々お前がどこの人間で、どんな人生を歩んできたのか……俺もわからない」

「なッ……!?!」

知らない、だと…？

ジンは期待を裏切られたような、心の中にある何かを打ち砕かれたような感覚を覚えた。

なんてことだ…その自分が巻き込まれたという事故には、自分以外誰も生き残っていない。つまり…自分を知っている人達は、この世に存在していないということになるのだ。

「強力な霊力を持つと、確かに普通の人間には扱えない異能の力を手にする場合もあるが、お前の場合はその中でもあまりに…こういつちやなんだが、異常性があるんだ。人間と異なる姿の巨人に変身する力つてのは、お前以外に見たことがねえ」

しかも、普通の人々が持っていない『霊力』のせいで、赤い巨人という異常な力を手にしていると来た。

「下手をすれば、お前は軍の連中に狙われる。それも実験動物としてな。それを避けるために、俺はお前さんを保護したんだ」

ジンは恐怖した。自分の力に恐れを抱き、自分の体が震えるのを悟った。

「米田さん…僕は」

「ジン」

米田はジンが今何を考えているのかたやすく想像できた。ジンの肩を掴み、ジンの顔

をまっすぐ見た。

「俺が保障する、お前は『化け物』なんかじゃねえ」

「なんで、そんなことがいえるんですか…だつて僕は…」

普通の人からはあまりに異質な力を持っている。その時点で…

『化け物』じゃないのか？

「その力は確かに恐ろしい力だ。恐れてるのなら無理に使うことはねえし、それを理由に自分の存在まで否定しようとすることはねえ。」

恐ろしいとか、忘れて痛いとか思つてんなら、普通の人間として生きればいい」

「……」

「少なくともこの帝劇にいるみんなはお前の味方だ。お前が悩んでいることがあったら、あいつらに相談していけばいい。無論俺にもな。」

「なんたつて、今の俺はお前の親父でもあるんだ。前にも言ったが、俺のことは本当の父親のつもりで接してきてかまわねえぜ」

米田は背中をバンバン叩いてきて、安心させようとする。

わからないことは深く思い悩むな。米田はそういつているのだろうか。でも…

(…本当に、これでいいのか…?)

帝劇の地下で目を覚ます以前の記憶がない、ジンは自分の存在している意味を見出せ

なくなっていた。

「さて、シケた話はここまでにしようや。

ああ、そうだジン。お前には椿と一緒に頼みてえことがあるんだ」

無言のジンをみると、米田が突然話を変えてきた。

「…頼みたいこと？」

顔を上げ、米田が頼みたいことの内容に耳を傾ける。

「明日、あの子に頼んでおきたいことがあってな。新しい花組のメンバーの出迎えだ」

「新しい花組の、ですか」

「ああ、俺とあやめ君の『戦友』の娘でな。元々は椿だけを迎えによこすつもりだったが

よ。女一人うろつかせるのもあれだ。お前さんが一緒に行つてやれ。

ああ、後…次の日からはモギリをやってくれ」

「も…モギリ？」

さらに帝劇の仕事に関する追加オーダーを出してきた米田。ジンはもはや面食らつた反応しか示せない。

「おう、簡単に言えば切符切りだ。しつかりやれよ」

「……わかりました。失礼します」

まだ立ち直りきれていない様子で、ジンは医務室を後にした。

ジンが去った後、米田は深いため息を漏らして椅子に腰をかけた。

「俺らしくもねえな、いつもならもうちっとうまく誤魔化せたらろうが……」

赤い巨人となったジンの姿を見て、『帝国華撃団』の責任者として保つべき冷静さを欠いてしまった。自分でも、老練となつてなおヘマをやらかしたとしか思えない。

でも、それでもジンに本当のことを忘れたままできてほしかった。

このまま……帝劇で平凡に働いたただの人間として……。自分の養子として……普通に幸せに。

（あいつはもう、十分にやってくれたんだ……『あん時』から、ずっと……これ以上こいつを酷使するのは……）

意味深なことを心の中で語りながら、米田はジンが去っていった医務室の入り口を見た。

## 2—2 運命の出会い

浅草・花やしき遊園地。

ここは帝都やその付近で暮らす人々が訪れ、ひと時の時間を楽しむ夢のような遊園地。だが、この花やしきもまた、世を忍ぶ仮の姿。

その実態は、『帝国華撃団・花やしき支部』。本部とは別に設置された別支部なのだ。

この遊園地の地下には、巨大な格納庫やラボが存在しており、そこである二人の女性が研究室にて話し合っていた。

「巨大な降魔が現れて、マリアはんたちの力でも敵わんかった…ちゆうことですな」

「ええ。そういうことになるわ」

二人の女性のうち、後ろ髪を二つの三つ編みに結った紫の髪に、眼鏡をかけた女性が試験管を片手にため息を漏らした。もう一人の、茶色の髪に米田と同じ模様の軍服を着込んだ女性が腕を組んで頷く。

「うーん、普通の降魔やったらまだよかったですけど、その馬鹿でかい降魔が相手となると…」

光武では戦うことさえも難しい。試験管からビーカーに液体を移す。

すると、ボン!!試験管から小さな爆発が起きて、紫の髪の女性は髪形がめちやくちやに崩れてしまい、顔も汚れてしまった。

「あら、大丈夫?紅蘭」

「あかん…またやってもうたわ」

その紫髪の女性こそが、椿がジンに話していた『李紅蘭』である。ここで技術者としても働いているのだ。紅蘭はすぐに顔の汚れを濡れたタオルで洗う。

「あ、せやあやめはん。さっきの続きなんですけど、光武の調整は今の倍以上に行つてみます。したところでその巨大な降魔と戦える力を光武に与えられるとは思えへんけど、何もせんよりはマシでしょうし」

あやめ、と呼ばれたもう一人女性。

彼女の本名は『藤枝あやめ』。彼女も帝国華撃団の一人で、年若いが『副司令』という地位にある。

「ごめんなさいね。あなたほどの技術師ってほとんどいないのに…」

「ええですつてあやめはん、うちは機械をいじるの大好きなんです。寧ろ願つたり敵つたりですわ」

眼鏡をかけなおしながら、紅蘭はあやめに屈託のない笑みを見せた。

「にしても気になりますな。その巨大な降魔を倒したつちゆう…赤い巨人」

すると、紅蘭は赤い巨人について興味を示してきた。

「一体何もんやろ。いきなり現れて、降魔を倒して颯爽と姿を消すなんて：街で子供たちの間で流行つとる『少年レッド』みたいや。こっちの方でも子供たちの噂になってたほどやし」

少年レッドとは、帝都の子供たちのためにある中年の紙芝居師が朗読する勸善懲惡ものの紙芝居である。いわゆるレッドという少年が活躍するヒーロー活劇だ。その少年も颯爽と現れて、悪党を懲らしめて颯爽と姿を消す。正体不明の赤い正義の味方、ということから例の赤い巨人がそのレッドと重なって見えたのだろうか。

「…」

それを聞いて、あやめの表情に曇りが生じたが、紅蘭はそれに気づかない。あやめは赤い巨人のことを考えていた。

(…彼が目を覚ましたことは、当日米田さんから聞き及んでいた。でも、まさか：『変身』することができたなんて：)

実はあやめも、ジンが赤い巨人に変身する力を持っていたことを知っていたのだ。

(でも、どういうこと？ジン君は、『あれ』がなければ変身できないはず。にもかかわらず、街での戦闘中に変身した：いえ、考えてもわかることじゃないわ。なんにせよ、巨人化したジン君の姿に、政府も軍もかなりの反応を示すことに違いないわ。時期に『花

小路伯爵』からも連絡は来るでしょうね。悪い方向に傾かなければいいんだけど…)

巨大降魔を倒すほどの圧倒的な力を持つ巨人に、軍がどんな動きを見せてくるか。ジンの正体を知っているだけあって、それによって不安がかきたてられる。

すると、その部屋に設置されていた電話がジリリリ…と音を鳴らした。あやめはすぐに受話器を手にとって電話に出た。

「はい、こちら藤枝…あ、米田司令」

通話相手は米田のようだ。

「え…『彼』が、目を覚ました？本当ですか!?!…はい、はい、わかりました」

少しの間の通話の後、あやめは受話器を電話に戻した。

「どないしたんです?」

「米田司令からの命令よ。ここでの作業が終わったら、私と紅蘭にも帝劇へ移転するよ  
うに」

次の日から、浅草の間屋街は復興作業が開始され、ところどころのエリアが立ち入りを禁じられた。あの巨大降魔と、それを倒した赤い巨人のことは、結局なんだったのか、結局誰も分からないままだった。

「……………」

この日、ジンは新たな花組のメンバーとなる『米田の知り合いの娘』を迎えるために、椿と共に上野駅に来ていた。

だが、この日のジンはほとんど会話を吹っかけてこようとしなかった。先日、米田の口から明かされた自分の正体について聞いてから、ずっとこの調子だった。

気まずい…椿は居心地の悪さを痛感した。せめて…何かジンの気が紛れるような話でも…。

「き、今日はいいいお天気ですねえ！」

「…うん」

…終わった。ジンの今のたったの一言で会話は途切れた。心の中で椿は悲鳴を上げたくなった。帝劇の仕事にジンが就き始めた頃は、彼は思った以上に楽しそうに仕事をしていたのに。

「あの、ジンさん。米田支配人がきつと、ジンさんのことを調べてくれると思いますから、元気を出してください」

「…あ…いや、いいんだ…椿ちゃんは気にしなくていい」

記憶を失っていることを気にしているのだと思つてフォローを入れてみるが、ジンはもう聞きたくない様子で、また会話を切ってしまった。全く効果のなかった自分の行動に椿は気落ちしてしまう。

…もうやめよう。椿を見てジンは、ひとまず自分や帝劇の真実について置いておくことにした。

「それより、例の人まだ来てないのか？」

駅は多くの人達で埋め尽くされていた。ごちゃごちゃしていてどこに誰がいるのかわからない。

「み、みたいですね…困ったなあ」

急に今回の仕事の件の話に移って少し戸惑った椿だが、周囲の客を見て迎えの対象の女性の姿がいまいか確認を試みたが、該当する人物は見当たらない。

「そういえば椿ちゃん。迎えに来る『真宮寺さくら』って人の写真を見せてもらえる。もう一度確認しておきたいんだ」

「あ、はい。どうぞ」

椿は、『真宮寺さくら』の写真を見せる。

さくら、と何かと綺麗なイメージを抱かせる花の名前を名づけられたほどの女性。

「改めてみると、まさに大和撫子…って感じだね」

白黒に写されたその写真には、リボンで結われたポニーテールの後ろ髪と、恐らく桜色に染まっていることがイメージできる和服を着た少女が立っている姿があった。とても可憐な少女だった。年齢は外見から予測すると、ジンと同じ年くらいか一つ下くら

いだろうか。あくまで、ジンの年齢が外見通り18だったらの話だ。

「いいなあ…私もこの人みたいに綺麗になれたらなあ…」

椿は、写真に写っている少女に憧れの視線を向けた。これだけ美しい少女だ。舞台上でもきつと輝くに違いない。すると、ジンが不意打ちを食らわせた。

「椿ちゃんはそのままでもかわいいと思うけど？今日の服だっておしゃれだし」

ちなみにこの日の椿は、いつもの売り子さん衣装ではなく、空色のワンピースを着ている。いつもとまた違う雰囲気を漂わせた。それに対して、ジンはモギリ服を着させられている。別に悪い気はしないのだが、モギリが街をうろつくというのは奇妙じゃないだろうかと心配になった。

「っーや、やだ…ジンさんってお上手なんですね」

いきなり容姿を褒められ、椿は照れくさくなつて頬を染めた。そんな椿のリアクションを気に求めず、再びジンは辺りにさくらの姿がないかももう一度見通してみよう。

今回新しく花組のメンバーに迎ええられるさくらは、米田の知り合いの娘だと聞いている。

(彼女が僕の正体を知っている…なんてあるわけないか)

自分の正体について、実は彼女が何か知っているのでは？なんて期待を寄せたが、そんなわけないか、とすぐにその根拠なしの予想を忘れることにした。

だが、ジンはふと思う。

(花組の正体は、降魔と戦う秘密戦闘部隊…だとしたら彼女も…)

戦うために、帝劇入りを果たすことになる。そう思うと、どこか切なさを覚える。戦いが似合いそうに見えないこんな少女が、あんな恐ろしい化け物と戦うことになるなんて…。

それにしても、例のさくらは一向に探してみても、やはり姿が見えなかった。

「もしかして、行き違いになったんじゃないか？」

「そうかもしれないですね。困ったなあ…どこに行っちゃったんでしょう」

二人はすっかり困り果てた。

「…聞き込みをもう少しだけ続けてみよう。それで見つからなかったら、僕が街を見て回って探してみる。椿ちゃんはそのとき一度帝劇に戻って」

「すみません…」

「謝ることじゃないって」

気にしないでくれ、とジンは首を横に振った。

それから二人はもう少し辛抱強く、さくらの姿を探し回った。しかし、それでもなかなか見つからない。一体どこに行ってしまったのか。

「すみません」

最後に二人は、ある二人の若い将校にさくらの姿を見かけてないかを尋ねてみた。その二人の将校は、一人は逆立った黒髪でいかにも生真面目そうな二枚目、もう一人は白いスーツが似合いそうな少し調子のよそうな印象を抱かせる男だ。服装から見ると、軍人のようだ。

「ああ、その子なら……上野公園の方に向かっていくのを見かけたかな。後姿だけを見ただけで、顔までは見てないんだが」

二人目の男が、公園の方角を指差した。この駅からも、何人か公園の方角に向かって歩いているのが確認された。しかし、なぜ公園の方に向かったのか。集合時間よりずっと前にここに来たから、時間つぶしのつもりで向かってしまったのだろうか。

「すまない。俺たちもこれから、上野公園で同期の連中と卒業祝いの花見の予定なんだ」  
「あ、そうなんですか。すいません、お急ぎのところ引き止めちゃって」

「いや、気にしないでくれ。探している人が見つかるといいね」  
一人目の男がジンたちに言うと、彼らも上野公園に足を運ぼうとした、そのときだった。

「おーい！大変だ！『怪蒸気』が出てきやがったぞー！」

突然、駅の方へ一般人の男性が声をあげて駆けつけてきた。その男性の後に続いて、何かにおわれて大慌ての様子で、他の一般人たちもなだれ込むようにこちらに来てい

た。

「怪蒸気だつて!？」

「いやだわ…早くここから離れましょうよ」

「先日のデカい降魔といい…一体どうなっているんだ…?」

それを聞き、現在駅にいる客たちがざわつき始めた。

「上野公園…怪蒸気…?」

上野公園と聞くと、恐らくこの上の駅のすぐ近くの公園であることが予想される。だが、聞きなれない言葉が飛び込んできた。

「すいません、怪蒸気つて…?」

どうも穏やかに聞こえない。一体何のことをさしているのか、怪蒸気存在を知らせてきた男性に尋ねる。

「あんた、知らないのかい? 降魔みたいに、この帝都とその付近に現れて暴れまわる機械のことだよ!」

「…:…ツ!」

つまり、人に害をなす存在ということ。あの時現れた降魔とそう言った意味では同一の存在といえた。

「降魔とならんで、帝都でかなり問題になってるんですよ。もちろん、私たちも問題視し

てて…」

椿がジンに、補足を入れてくる。降魔と同様に帝都の平和を乱す『怪蒸気』。それを帝  
国華撃団が見逃すはずがなかった。

「怪蒸気かあ…先日の降魔といい、『降魔戦争』のときみたいに、あの赤い巨人が出てき  
たらいいんだけどな」

「…え？」

彼の耳に、気を惹くに十分な言葉が飛び込んできた。

（『降魔、戦争』…？それに…）

「トラ！トラ！！」

すると、上野公園の方角からまた声が聞こえてくる。その声に我に帰ったジンと椿が  
そちらを振り向くと、かなり悲痛な叫び声かけたたましく耳に入り込んだ。その叫びの  
主は、一人の中年の女性だった。身なりから見ると、それほど裕福そうな家庭の出では  
なさそうだ。

なだれ込むように上野公園から逃げてきている人達の流れに逆らって、公園のほうへ  
走り出そうとしたところを、すぐ近くの男性が引きとめている。

「おクマさん下がって！あそこには怪蒸気がいるんだぞー！」

「で、でもトラが！うちの息子がまだ！っつ…」

息子…どうやらその女性は自分の息子とはぐれてしまったのだ。しかも、その女性…おクマは突然地面に膝を着いてしまう。

「おい、『大神』！」

まだ近くにいた二人組みの男のうちの一人が、もう一人の男の名を叫んでいた。大神と呼ばれた先ほどの男性将校が女性の下に駆けつける。

「大丈夫ですか!？」

駆けつけてすぐ、大神は女性に容態を尋ねる。見ると、彼女は膝や肩に痛々しい傷が出来上がっていた。

「あ、あんた…軍人さんかい？」

おクマは顔を上げて大神の顔を見ると、必死のまなざしを向けて彼に懇願しだした。

「トラが…うちの息子がまだ公園にいるんだ！早く助けておくれ！」

「何!？」

大神は上野公園の方を向くと、公園のほうから煙が立ち上り始めていた。

『『加山』！この人を見てくれ！』

「お、おおい待ってくれ大神！」

大神は半場無理やり同行していた友人におクマを託すと、上野公園の方角に向かって走り出していた。

一方でジンの心にも焦りが生じていた。もし上野公園に、さくらがいるとしたらまずい。避難させなければ。

「椿ちゃんはここにいて。僕が行ってくる」

「あ、ジンさん！」

彼も椿を駅に残し、自分も上野公園の方へ駆け出した。

怪蒸気出現から少し前の上野公園…。

絶好の花見日和だった。桜の花弁が美しく散り、上野公園を訪れた多くの人々を魅了する。

舞い散る桜を見るたび、人々は自身の幸せと平和を噛み締めていることだろう。

そんな中、一人の少女が公園の階段を駆け上がった。赤いリボンで結われた黒いポニーテールに、桜色の袴姿。

この少女こそが、新しい花組のメンバーとして選ばれた『真宮寺さくら』である。

彼女は上野公園の、帝都を見渡せる場所に来たところで、手荷物を置いて帝都の全貌を眺めながら呼吸を整えた。

「……が、お父様が守った…：帝都」

その壮大なスケールを誇る帝都の街に、彼女は感動を覚えた。さくらは袴の胸元から

一枚の写真を取り出した。そこに映されていたのは、端正な男とさくらそっくりの美しい女性、そして男性に抱きかかえられている、幼い頃の彼女の姿だった。

「お父様、お母様。さくらは遂に来ましたよ。お父様の帝都に……」

写真をしまい、再び帝都の景色を眺めるさくら。こうして眺めているだけで、幸せな気持ちに溢れてくる。街が活気に溢れている証なのだ。

だが、そんな彼女や街の人たちを脅かす影が、何の前触れもなく動き出した。

「がしゅん！」と大きな音が聞こえた。なんだろうと思つたが、誰かが羽目を外してしまつたのだらうと思つて気にしなかつた。が、その次に聞いた悲鳴を聞いて、さくらはすぐに目つきを変えて振り返つた。

「か、怪蒸気だあ!!」

「ツッ」

公園に設置されていた屋台や桜の木々を踏み壊したり殴つて破壊しながら、人間より一回り大きな影が暴れていた。

さくらは悲鳴の聞こえた方角に眼を向ける。屋台や木々を、山吹色の人型機械が数台、暴れまわっていたのだ。

さくらは、手荷物にある一本の細長い袋を手にとると、口で袋を縛っていた紐を解く。すると、袋の中から一本の刀が露となつた。彼女の手に握られたその刀は、太陽の光で

反射する刀身が星のように光り、その鋭さは点を飛ばたく鷹のような美しさがあつた。彼女は怪蒸気に向かって走り出し、叫ぶ。

「待ちなさい！」

暴れまわる怪蒸気たちが、さくらの声に反応して彼女の方へ振り返つた。

「帝都の方々のお花見を邪魔する怪蒸気！この真宮寺さくらがお相手します！」

先ほどの少女らしい一面から一転して、凜々しさを兼ね備えた声で叫びながら構えた。すると、怪蒸気たちは彼女が自分たちに敵意を抱いていることを察し、その手に握られた刀を彼女に向かって振りかざした。

さくらは、自分に怪蒸気の刀が振り下ろされる直前で足に力を入れ、前に跳んだ。

「はあああああああ!!」

振り向きざまに放たれた居あい抜きが怪蒸気に炸裂する。少しの沈黙を経た後、さくらの背後に立つ怪蒸気は上半身と下半身に切り裂かれ、機能を停止した。

しかし、まだ怪蒸気は残っている。

「ひい……ふう……みい……」

全部で三機も残っている。その全てが、さくらを標的として捕らえていた。

しかし、さくらは疑問に思う。

(どうして、こんな場所に怪蒸気が……?)

単に花見を楽しんでいた人達を襲う。たったそれだけの理由で暴れていたのだろうか。そう思うと、俄然この怪蒸気たちに対する怒りがこみ上げる。

疑問を抱く間も与えまいと、怪蒸気の刀がさくらに襲い掛かる。さくらは滑り込むように駆け抜け、怪蒸気の攻撃を回避、振り向いて怪蒸気の一部を真つ二つにしようとした時だった。

怪蒸気の一部に、石がどこからか投げつけられた。突然投げつけられた石にさくらは目を丸くすると、その直後に甲高い少年の声が聞こえてきた。

「よくも母ちゃんに怪我させたな！せつかく…せつかく長屋のみんなと楽しく花見してたつてのに！」

石を投げつけてきたのは、一人の少年だった。アイリスともあまり変わらない、やんちゃな年頃に見える。この少年が、おクマの息子のトラ少年だった。

「だめよ坊や、離れて！」

すぐにトラに逃げるように言ったさくらだが、彼は怪蒸気に向かってさらに石を投げつけていく。無論たかが投石程度で倒れる相手じゃない。少年は、母を傷つけられた怒りを怪蒸気につつけ続けていく。怪蒸気は遂にトラをうつとおしく感じたのか、彼に向けて刀を振り上げてきた。トラも母を傷つけられた怒りを、怪蒸気から放たれる威圧感で消し飛ばされ、怖気ついて腰を抜かしてしまった。

「あ、うああ…」

「たあああああ!!」

さくらはすぐさまトラの前に駆けつけ、刀を盾代わりにかざし、怪蒸気の刀を受け止めた。

ガキン!と耳鳴りのように伝わる金属音が、さくらと怪蒸気の互いの刀がぶつかり合うと同時に鳴り響く。

「は、早く…!!」

さすがに、怪蒸気の力は強かった。さくらでも刀で受け止めるには無理があり、今にも押し返されそうになる。さくらはトラに早く逃げるように言うが、トラは恐怖のあまり立つこともままならず、さくらの声も届いていなかった。

このままではまずい。押し返される。

(お父様…!)

目を閉じ、何とか踏ん張ろうとするが、もう限界だった。

だが、そのときだった。

「そこまでだあああああ!!」

「え…!?!」

若い男たちの声が、さくらの耳に入った。目を開けると、白い軍服の青年とモギリ服

の少年の二人組みが、自分たちのいる方角へ走ってきている姿が目映った。

白い軍服の青年……大神は腰にしまっていた銃を取り出し、さくらとつばぜり合いを展開している怪蒸気に向かって発砲した。

そのとき、さくらは大神の姿に強い何かを感じ取った。さくらの目に映る大神の体から、何かオーラののようなものがほとぼしっているように見えた。

(今のは……まさか、『靈力』!?)

さくらが驚きを見せているのもつかの間、銃弾がさくらの前の怪蒸気の体に突き刺さっていく。大神の銃撃を受けたその怪蒸気は、体中から煙を吹きながら倒れた。

「大丈夫かい!？」

さくらの前に来たところで、大神はさくらに声をかける。

「は、はい!」

「その子連れて先に行くんだ!」

「で、ですが……!」

自分も戦ってこの子や帝都の人たちを守りたい。強くそう思っていたさくらにとつて、子供の安全のためとはいえここで敵に背を向けることはあまり好ましく思えなかった。

迷う間も与えまいと、さらにもう一体の怪蒸気が三人に迫ってきた。そこへようやく

もう一人……ジンが駆けつけてきた。

「この子は、僕が運びます！」

「す、すまない！助かる！」

大神は突如姿を見せたジンに少し驚きを見せたが、すぐに礼を言い返した。

「さ、君。こつちへ！」

ジンはトラを担いで、すぐにその場を離れようとする。しかし、そんな彼らを逃がすまいと、残ったもう一機の怪蒸気がジンの前に立ちふさがった。

「いけない！」

さくらがすぐにかかけつけようとするが、大神と交戦していた怪蒸気が、ちょうど打ち込まれた大神の銃弾を刀身で受け止め、まるでジンの元に行かせまいと、すぐさまさくらの前に立ち塞がってしまう。

「く……！」

大神がさくらを助けるべく、援護射撃を放って怪蒸気を攻撃するが、怪蒸気は刀を振るい、なんと大神の銃弾を次々と切り落としてしまう。

「なんて奴だ……！」

苦虫を噛む大神。一方で、ジンの前に立ちふさがっていた怪蒸気の一部が、ジンに向けて刀を振り下ろした。

「ッー」

ジンはトラを自分の中にしっかり抱きしめながら、怪蒸気の攻撃を避け始めた。上段からの振り下ろし、足を狙った下段攻撃と、なんとか紙一重で避けていく。しかし子供一人を抱えた状態で長く持つわけがなく、一撃を避けるだけでもかなりの集中力を要した。

すると、怪蒸気は足につま先を突っ込むと、そのまま地面を蹴り上げる。その影響でジンたちの頭から大量の砂が落ちてきて、ジンはおろか後ろにいる大神とさくらの視界さえも奪ってしまった。

「う、しまった……」

このままでは、格好の餌食だ！大神やさくらの脳裏に焦りが生まれる。二人の予想通り、砂のせいで視界を遮られてしまったジンや大神たちに向かって、彼らを取り囲む二体の怪蒸気の刀が同時に振り下ろされた。

ジンは、一瞬もはやこれまでかと思った。

このままじゃ……死ぬ……ッ！

だが、そんなことが許されるはずがない。自分はまだ何者なのか、一体なぜ赤い巨人の力を手に入れて目を覚ましたのか……分からないままだ。何もわからない状態で、こんなところで死んで……

「死んで……たまるかあああああ!!」

ジンが大声で叫んだ、そのときだった。

彼の体に一瞬だけ赤い光がとまり、それが辺りの空気に異変をもたらした。

まるで、その場だけ時が止まったような感覚だった。

その猛烈な違和感に、大神とさくらは、いつまでも怪蒸気からの攻撃が来ないことを気にしてうつすらと目を開ける。頭から砂を被っていたものの、目に入ったわけではないので体に異常はなかった。

ただ、目を開けると、思いもよらない光景を目にする。

刀を振り下ろそうとした姿勢のまま、二体の怪蒸気たちの動きが止まっていたのだ。凍りついたともとれ、まるで最初からこの構えのままその場に設置されたモニュメントのように立ったままだ。だが、すぐに変化は訪れた。

二体の怪蒸気たちは刀を落とし、体中から火花を起こして気をつけの姿勢をとると、後ろに倒れこんだ。そして同時に、ボン!!と爆発を起こして木っ端微塵に砕け散ってしまった。

「はあ……はあ……はあ……!」

顔を上げ、トラを無自覚の内に下ろしたジンは、公園の土の上に膝を着いた。

(なんだ今のは……!?)

時間が止まった……？いや、違う。怪蒸気たちの動きが止められたのだ。他ならぬ……自分の体から発せられた『何か』によって。

「き、君！大丈夫か!？」

「お怪我はありませんか!」

後ろから大神とさくらの二人の声が聞こえる。ジンは息が荒いままだったが、振り返ってただ一言「大丈夫です……」と答えた。

「坊やも、怪我はない?」

「う、うん……」

トラ少年も怪我といえるものを負っていないかった。それを見て、さくらはほっとした。

大神は、破壊された怪蒸気の一機の近くで身を掲げ、怪蒸気の残骸を見てみた。

（おかしい……怪蒸気たちはさつき、明らかに俺たちを追い詰めていた。にもかかわらず、突然機能不全を起こして……）

勝手に自爆した。根拠はないが、軍人としての勘なのか明らかにおかしいと思えてならなかった。

怪蒸気の攻撃が収まった影響からか、逃げていた人や野次が、本の少しずつだが公園に集まってきた。

「ジンキーン!!」

すると、それに呼応するように椿がジンの元に駆けつけてきた。他にも、大神の連れである『加山』という男性と、トラの母であるおクマもその中に混じっていた。

「トラ、このお馬鹿! どんだけあたしが心配したと思っただい!」

おクマはトラの前に駆け寄ると、息子を自分の胸の中に抱きしめた。

「ご、ごめんよ母ちゃん…俺、母ちゃんがあいつらに汚させられたと思っただい、我慢できなくて…」

「馬鹿な子だね…父ちゃんに続いてあんたまで死んじゃったら…母ちゃんはもう生きる意味をなくしちゃおうよ…」

息子がかもしかしたら…そんな最悪な光景を見ることがなかった。生きていてくれたことに嬉しく思いながらも、おクマは無謀な行動に出た息子をきつくしかった。母のきつい抱擁に、トラも泣きながら母に謝った。

さくらは身をかがめ、トラに向かって口を開いた。

「もう危ないことしちゃだめよ。お母様は、きつとあなたのことをすごく心配してたのだから」

「…うん」

よろしい、さくらはそう言つて年上の女性らしく微笑み、トラの頭を撫でた。

「はあ…もう、いきなり危ないところに行つたらだめじゃないですか！支配人たちも心配しちゃいますよ！」

「ごめん、椿ちゃん…なんか、体が勝手に動いちゃつて…」

一方で椿も、ジン彼の前に立つと同時に、厳しい視線を浴びせながら彼を咎めた。

「それにしても、君たちはすごいな。怪蒸気に果敢に立ち向かうなんて」

すると、怪蒸気から視線をジンたちに戻した大神が、さくらとジンに向けて労いの言葉を送つてきた。

「いえ、そんな…あたしこそ無我夢中で」

さくらは謙遜した様子で大神に首と両手を振つて見せる。すると、大神の元に、彼の連れである加山という男性が歩み寄つてきた。

「でも、君たちのおかげで、その少年は救われた。本来なら軍人である俺たちが防ぐべきことだったが…礼を言おう。」

しっかし大神。いきなり友である俺を置いて活躍するなんて酷いじゃないか？心配だつてしたんだぞ？」

「す、すまん…」

「まあ、無事だったからいいさ。しかしこの状態じゃ花見をする気にはなれないな…」

加山は、現時点での上野公園の状態を確認する。さくらの木々がいくつか折れてしまい、屋台もめちやめちやだ。彼の言うとおり、これ以上花見はできそうにない。

「仕方ない。大神、俺たちでこの親子を送っていつてやろう」

「そうだな…わかった」

大神は加山からの提案を了承し、トラとおクマの親子を二人の実家へ送り届けることにした。

「そうだ、最後に君たちのことを知りたいんだが、かまわないかい？」

できれば、危ない目にあっている子供を勇敢に救った彼らとはゆっくり話をしてみたかったが、時間が惜しい。大神はせめて名前を聞こうと思つてさくらたちに自己紹介を求めた。

「あたしは、真宮寺さくらといいます。仙台からこちらにやってきました」

「僕は……ジン、といいます」

「さくら君に、ジン……？苗字は？」

「……『米田』です」

記憶がないとはいえ、仮に付けられた苗字はまだ慣れていない様子のジンは、少し間を置いてから、自分の今の姓が米田であることを告げた。

「え、米田って……もしかして……！」

米田と聞いて、さくらはあ！と自分が何のためにここに来たのかを思い出したと同時に、ジンの苗字が…自分を帝都に呼び出したあの人物と同じであることに気づく。

「あの、さくらさん。そのことは後で…」

それ以上は帝劇の秘密に触れることになる。その話は後にしてくれと椿はさくらに耳打ちした。

「あの、あなたの名前は？」

今度は、ジンが大神に尋ねる。

「俺かい？俺は、『大神一郎』。じきに海軍士官学校を、この加山と一緒に卒業する身だ」「うんうん、嬉しいぞ大神。俺も一緒にこの麗しいお嬢さんと勇敢な少年たちに紹介してくれるなんてな。やはり持つべきは親友だなあ…」

自分も紹介してくれたことに、親友に感謝しながら加山も自己紹介した。

「ご紹介に預かった『加山雄一』だ。覚えておいてくれ。そうだ、そちらのお嬢さんは？」  
「え？私ですか？」

いきなり加山から話を振られた椿は目を丸くして驚きをあらわにした。

「そりや、一人だけ仲間はずれつてのも気まずいからな」

「えつと…私は高村椿といいます」

少し恥ずかしげに、椿も自己紹介した。

「椿ちゃんか、いい名前だ。覚えておくよ」

「大神さん、加山さん、そしてジンさん…今日は助けてくれてありがとうございます」  
「ああ、ではまた会おう」

さくらからお礼を言われ、大神も笑顔でうなづく、そして加山と共にトラとおクマの親子を連れて上野公園を去っていった。

「大神さん、か…」

見送りながら、ジンは呟く。

軍人だからかなり頭の固そうな人名のではと思ったが、見るからに人のよさそうな男だった。自らさくらや子供を助けるために飛び出すことから、強い正義感を持ち合わせているに違いない。

もしかしたら、またいつか会うのではないだろうか。そんな予感がした。

それは、近いうちに敵うことになるとは予想もせず…。

しかし、ジンは一方でもう一つ気になることがあった。

それは、突然怪蒸気の動きを止め、果てに爆発させた、自分の力。

（あれも…僕が持っている『赤い巨人』の力なのか…？）

今回はその力のおかげでトラ少年やさくらを、そして大神を助けることができた。

だが、自分の中に眠る強大な力に、迷いと恐怖を抱かずに入られなかった。

## 2—3 自分の意味を知りたくて

「上野公園で怪蒸気の襲撃を受けたって聞いたときはヒヤヒヤしたぞ」

さくらを連れて帝劇に戻ったジンと椿。もちろん、上野公園で起きた事件は帝国華撃団も察していたが、まだ光武の修理が終わっていないことが関係しており、かといつて生身で現場に駆けつけようにも時間を要することや、出撃準備完了前にジンやさくら、そして現場にいた海軍士官学校生である大神によって収束していた。出勤はうやむやとなり、現場には正規の軍の調査隊が赴き、ジンたちは目立たないうちに帝劇に戻ってきた。

今、ジンたちは支配人室に呼び出され、事件当時のいきさつを話した。

「まさか帝都に到着した日に怪蒸気に出くわしちまうとは。まあ、上野公園に現れた奴らは全滅したし、怪我もなくして安心したぜ」

酷く心配した後の、どっときた安心感の影響か、酒の瓶から酒を注ぎ、米田はぐつと飲む。

「それとさくら、よく来てくれたな」

「あの、米田さん！」

しかし、一方でさくらは何か動揺を隠しきれない様子だった。

「ここって、本当に帝国華撃団の本部なのですか!？」

「んあ? そうだが、どうかしたか?」

「だって、ここってどう見ても劇場じゃないですか! どうしてお芝居なんて…あたしは帝都を守るために呼び出されたんじゃない?？」

この口ぶりだと、さくらはここに来るまで、自分が入隊することが決まっていた帝国華撃団の表の姿を知らないままだったようだ。最もだろう、普通は戦うために編成された部隊が、俳優として舞台上に立つなんて考えられない。

「…ジン、お前が説明してやれ」

「ぼ、僕がですか!？」

「お前の記憶力診断も兼ねてだ、さくらに説明してやれ」

「はあ…」

どこか米田が説明をめんどくさがつてジンに役目をなすりつけたようにも思えたが、ジンは言われたとおり、さくらに帝国華撃団についての説明を入れることにした。霊力の向上と安定、光武の整備費稼ぎ、そして世間や敵の目を忍ぶため…説明したところで、さくらはどこか釈然としていない様子ではあるものの、理解を示してくれた。

「さくら、二階のサロンにお前の仲間になる花組の3人を集めてある。挨拶して来い。

椿、案内してやれ」

「は、はい。では、失礼します」

「ではさくらさん、私がお連れしますので着いてきてください」

椿に連れられ、さくらは手荷物を持って、支配人室を後にした。

「おつとジン、お前にはまだ話がある」

彼女らに続く形で自分も部屋を後にしようとしたジンを、米田は引きとめた。

「なんでしようか…?」

「お前、力を使ったか?」

「ッ…」

「その顔だと凶星みてえだな。さくらの話の内容に、奇妙なものがあったからな。もしかしたらつて思っていたが…」

米田には気づかれていたようだ。上野公園で起きた一部始終を報告する際、さくらの口から、怪蒸気が後一步のところでさくらたちを追い詰めようとしたにもかかわらず、突然何の前触れもなく大破してしまった。ジン自身も、あれが自分でも把握し切れていない自分自身の力が関係していることは薄々勘付いていた。

「変身はしていないみたいだが、だからといってお前の体に眠っている力が全て使えないってわけじゃないってことか。だがジン、お前の持つ赤い巨人の力は、花組の連中の

何倍にも勝る。迂闊に出そうとすればどんな障害が起きるかわかったもんじゃねえ。

いいか、その力のことは誰にも言うんじゃねえぞ。例え同じ帝劇にいる仲間でもな」  
 ジンは、自分をじつと見てくる米田の目を見る。この人は、自分のことについては本人でないにもかかわらず、自分よりも知っている。

「それにお前は正規の隊員じゃねえ。ここで働いただの一般職員だ。今回は結果として子供が助かったからよかったものの、半端な覚悟で首を突つ込もうとしたらためえ自身の命がねえし、周りを傷つけることもあるかもしれねえ。

いいか、覚悟もないのに無理に危険なことに首を突つ込もうとするな。わかったな？」

「…わかりました」

あの日をもって、真宮寺さくらは帝国華撃団・花組の新メンバーとして迎え入れられた。

アイリスは新しいメンバーが増えたことを素直に喜んだ。ただ、マリアはともかくすみれはというと、歓迎的な態度を示さなかった。田舎臭いだのなんだのと出会いがしらに変ないちやもんをつけてしまったのだ。流石のさくらも最初はこらえていたが、とことん悪口を言われるとジト目ですみれを睨み返すようになったとのこと。

「あ、え、い、う、え、お、あ、お！」

「四番と八番の音が小さいわ。もつと意識して」

「は、はい！あ、え、い、う…」

まあ、そんな女同士のいさかいは置いておこう。さくらは帝国華撃団花組に参加したことで、普段の活動でもある舞台にも立つことが義務となった。元々純粹に帝都を守ることを使命として、仙台から越してきた彼女としてはかなり戸惑いを覚えることだった。まさか、帝都を守るために来たはずの自分が、女優としてデビューするなど想像もしていなかった。だが、舞台を行う理由も自分からみても理解できた。文句をのど元で抑え込み、彼女は女優としての訓練をマリアの主導で受けるようになった。

ちなみに今受けているのは、基本的な発声練習だ。滑舌が悪く小さい声ではとても舞台に立つことなどもつてのほか。サボることなく、しっかりと受けていた。

「今日の練習はここまでね。お疲れ様」

「は、はい。ありがとうございました」

とりあえずその日の訓練を終わらせ、さくらは元の桜色の和服に着替えて舞台を後にした。

さくらは本来帝都を守るために修行を重ね、この帝都にやってきた。それが、どういふわけか女優行をやることになるとは。確かに舞台を行うことが、魔と戦うための力

『靈力』の調整と強化に繋がるとは聞いたが、釈然としないのがさくらの見解だった。

本当に舞台を行うことが繋がるのだろうか。その迷いと疑問が、訓練にも支障を与えていることもあつたという。

僕は：どうしてこんな力を持っているんだろう。

実の父や母は？ 兄弟は？ 生まれ故郷は？

なぜ何も覚えていないのだろうか。

この力を持っている理由も、そもそも自分が何者なのかも、目覚めてから何日も経過したのにわからないままだ。もしこの力に意味があるとしたら、その力を持って何かを成さなければならぬのではないか？

僕は、本当にここで：こうして何事もなく暮らしててよいのだろうか。

記憶をなくしてしまつたとはいえ、帝劇で当たり前のように過ごした暮らしはとても新鮮に感じられて飽きることがないと思えるほどだった。故に、自分には過去がないことなどに気に求めなかつたが、赤い巨人の：その片鱗として発現した、怪蒸気を破壊した力。それを自覚してからは、一人で居ると、記憶がないことと、自分の持つ異能の力のことを考え込むようになった。

そして、米田の言葉が浮かぶ。

——覚悟もないのに、首を突っ込むな。

——お前の力は強大すぎる。

ジンは確かに光武を乗り回す花組メンバーよりも強大な力を秘めている。だがトラ少年を助けたとき、帝国華撃団・花組がそうであったのように、覚悟を持ってそれを成していたわけじゃない。それでも、目の前で危機に陥った少年を放っておけといわれてできるだろうか。街で現れた、あの巨大降魔が現れた時だって：

(そういうえば、僕はあの時……)

無謀にもあの巨大降魔：デビルアロンと対峙した時、自分は逃げなかった。普通は逃げなければならぬのに、それ以上にあのときの自分は、立ち向かわなければならぬという使命感が強まっていた。まだ巨人の力を自覚していなかったにもかかわらずに、敵うはずがないのに。

まるで、自分の体があのような悪魔と戦うことを求めているようだった。

そんな得体の知れない自分の何から何まで、恐ろしくも思えた。

ジンの部屋は：いや、部屋というよりスペースというべきだろう。帝劇の屋根裏部屋の窓際に畳を敷き、その周囲を余ったカーテンを吊るし、部屋として使っていた。本来ならちゃんとした部屋をもらっているはずだった。事実花組が使っている部屋は、いず

れまたこの帝劇に来る予定となつてゐるメンバーも含めても余りが2部屋ほどある。だからジンはそれらの部屋を使わず、屋根裏部屋を自室として希望したのだ。

もう一つ理由がある。

(星…)

夜空に光る星を、眺めていたいという強い希望があつたからだ。

窓から見える星が、悩みを打ち消してくれていた。

だが、ひとたび目を離すとまた苦悩が蘇る。

(僕は…何のためにこの力を持つてゐる？ 一体何をすればいいんだ…?)

誰か教えてくれ…僕は一体誰なんだ…!?

悩んでも答えは返つてこない。米田も、自分がどこの人間でなにをしているのか？ それを語ることはなかった。それにしても、どうして米田はこんな自分を保護したのだ。こんなに強大すぎる人間を自分の手元に置いて、養子として扱うなど、一体何を考へていたのだろうか。

(いや…さてよ、確か…)

自分が目を覚ましたあの日、自分の処遇を決める際、あの時点で帝劇に留まつていた面子の中でジンの存在は米田以外誰も知られていなかった。だがあの時の米田は、ジンを知るもう一人の存在をほのめかしていた。

（確か……『あやめ』って人だったか？）

もしかしたら、米田でさえ知らないことを、その人物なら何か知っているのではないだろうか？

会って話をしてみたい。ジンはひとまず悩むことは、そのあやめという人物に会うまでとっておくことにした。

が、ただ待つというのも少しもどかしかった。

ジンは、あやめという女性が次に帝劇に来る日を確かめるために、誰かに確認をとってもらおうと、一度自室を後にした。

屋根裏部屋の階段から二階に降りると、マリアがちょうどバルコニーに向かうのを見つけた。ちょうどいい。彼女から何か聞いてみることにし、ジンは後を追った。

マリアはバルコニーに出て、心地よいくらいに冷たくなった夜風を浴びていた。

その手には、ペンダントの鎖に繋がれた金色ロケットが乗せられており、ロケットにはある人物の顔写真が映されていた。

「……………」

彼女はただ静かに、じつとそれを見つめていた。そのロケットに映る人物の目を通して、何を見ているのだろうか。

「ッ！」

ふと、マリアは背後に誰かの気配を感じ取って咄嗟に振り返った。

「マリア…さん？」

「あなただったのね…」

振り返ると、バルコニーの入り口にてジンが立っていた。

「もしかして、脅かしてしまいましたか？」

「…いえ、私が勝手に驚いただけよ」

マリアは咄嗟にロケットをしまいこんで、再び帝都の夜景に目を向ける。

「隣、いいですか？」

「ええ」

自分も夜風を浴びてみたいと思い、ジンはマリアの横に立った。

「最近、調子はどうかしら？」

「ええ、みんなよくしてくれています。さくらも、好印象を抱ける女の子でした」

「そう…」

「…マリアさん」

ふと、ジンが横のマリアに話しかけた。

「光武を使うには、霊力という特別な力を操る必要があると聞きました。そんな力が自

分にあると聞いて、どう思いました？」

その問いは、自分の持つ赤い巨人の力を、マリアたち花組の面々が持つ靈力を互いに照らし合わせたことで浮かんだものだった。巨人の事は直接話さず、ジンは答えをマリアに求めた。

「…恐ろしい、とも言えるでしょうね。普通の人にはほとんどないものだから」

「そうですね…」

赤い巨人の力、そして靈力。普通の人が望んで手に入れられるものでもなく、自分の意思と関係なく持たされる異能力。自分でも恐ろしく思える。マリアもそういう見立てができていた。

「けど、この力で私も何かできることがある。それを米田司令たちは教えてくれた。だから私はここにいます」

「…」

「あなたはどのような？上野公園でのこと、聞いたわ」

ジンはあまり問題を起こすことなく、この帝劇での仕事をこなしてくれている。だが記憶がないゆえにまだ素性がはっきりしていない点については、用心深いマリアはまだ疑惑に近い感情をジンに抱いていた。さらに、さくらが入隊した当日に遭遇した怪蒸気『脇侍』を、己の身から発した靈力で吹き飛ばしたという。米田がそれでなおこの少年に

肩入れしている。決して米田の事を信じていないわけではないが、上野公園での一軒で、彼に対しての疑惑が少し強くなった。だが米田の判断を信じたいところもあり、彼自身は今導考えているのかを見極めてから判断することにした。

「…僕はあの時、無我夢中で力を放って、子供を助けることができました。

もしかしたら使い方次第によっては…」

人に役立つこととか、とにかくすごいことを何でもできるようになるかもしれない。そう思ったが…そんな調子のいい事をすぐに考えるほどジンはお調子者ではなかった。

「けど、自分が余計に何者なのかわからなくなつて…不安で…どうしたらいいのかわからない。本当は自分がどんな存在なのか…」

もしくは、やはり化け物なのではないか？嫌なことばかりを想像してしまう。

「マリアさん、僕はどうすればいいと思う？この力でみんなと一緒に降魔と戦うべきでしょうか？それとも…」

「……」

マリアはジンの問いにすぐ答えようとせず、バルコニーから背を向け、帝劇の屋内に戻り始めた。

「マリアさん？」

回答に応じずに、この場から去り始めるマリアに、ジンは戸惑いを示す。

「あなたが迷うのは仕方ないことでしょう。けど…」

マリアは、屋内に足を踏み入れる直前、一度足を止めてジンのほうを振り返る。

「私は迷っている人とは、一緒に戦えないわ。戦場での迷いは、仲間を死に追いやるだけ…」

厳しくシビアかもしれない。だが、的確な心理を突いた言葉にジンは何も言い返せなくなり、マリアが去っていくのを黙ってみているしかできなかった。

「……」

米田は支配人室にて、じつと新聞を見ながら構えていた。

記事には『謎の怪蒸気、街に被害』『赤い巨人、再来！』とタイトルが刻まれ、どれも最近帝都で起こった怪事件のことで埋め尽くされていた。

いずれの事件も帝都中に被害をもたらし、人々が大変恐れを抱き混乱していることが伺える。特に、『巨大降魔再臨！帝都壊滅の秒読みか』との記事はその意思を最も体現しているように見えた。文面には「降魔戦争の悪夢が蘇ることが懸念される」との一文もある。

「降魔戦争…か」

その悪夢は、米田もよく知っている。『あの時』も帝都にいたのだから。

あの時の、いつ滅ぶかも分からない地獄の日々は忘れたくても忘れられない。大切なものを失った日でもあるのだから…。

だからこそ、ジンを自分たちの戦いに巻き込みたくなかった。『これ以上』、あいつに苦しんで欲しくない、その思いを募らせながら。

だが、一方で米田は帝国華撃団の司令として、彼の持つ力の必要性も感じていた。先日の戦いで現れた、あの巨大な降魔：マリアとすれみの二人がかりでも敵わなかったあの怪物に立ち向かえる手立ては、今の華撃団にはない。『光武』の力をもつてしても勝てないのなら、それ以上の力を持つ新たな『霊子甲冑』が必要だ。だが、そのための費用は光武以上に馬鹿にならない。『賢人機関』の政治家たちも、自分たちを支援している『花小路伯爵』以外の多くが、降魔戦争の恐ろしさを知っていながら自分たちの財力がすり減らされるのを恐れて反対が多かったほどだ。いや、知っていたからこそその反対かもしれない。だが降魔に殺されてからではせつかくの財産も無意味だ。苦心の説得で、すみれの実家が経営している『神崎重工』に資金を回してもらったことで光武を作り上げたが、その光武二機の力でも…

「くそ…俺は軍人としても父親としてもダメだな」

民間人を守るだけの力がまだ足りておらず、かといって自分が息子として引き取ったジンの持つ強大な力にすぎらなければならぬ。彼の相反する立場上の考えと思い、本

音：それらが板ばさみとなって米田の心を締め付けた。

その頃…：帝都郊外の長屋。

「トラ、もう遅いからさっさと寝ちまいな」

その中の一軒に、ジンがさくらと大神らと共に助け出した少年、トラが住んでいた。もう夜遅くの時間。まだ子供のトラにとつてもう寝なければならぬ時間帯でしかない。

「わーってるよー」

トラ少年は少しぶっきらぼうに、母であるおクマに言い返しながら、玄関の戸を閉めなおそうとした時だった。

「?」

彼の家の近くには、大きな石が置いてある。祠の一つとして何かを祭っているものだ。近所の人たちは何かあると、この石にお祈りをする癖がある。トラにとつても何も変わらない日常の景色なのだが、この日はちよつと違っていた。

石の前に、小さな人影が見えたのだ。なんだろう。こんな時間に近所の子供がこの辺をうろついているのだろうか。

「トラ、早く戸を閉めな!」

「ああもう！分かつてるから！」

これ以上他の何かに注意を寄せると母がうるさい。本当は飛び出して確かめに行きたかった。だが、扉を閉める際にもう一度見てみると、やはりさっきの小さな人影がそこに立っただけだった。

「これが、あいつが言っていた例の石だね」

小柄なおかつは頭の少年だった。だがその両手から伸びるつめは獣のように鋭くて長く、顔にも不気味な化粧が施されている。そして何より、彼は…子供とは思えない残忍な笑みを浮かべていた。

「おい、例のものを持って来い」

少年が闇の中へ手招きすると、その中から二機の脇侍が姿を現した。机運びのように、何か巨大な楔を持ち運んでいる。さらにもう一機、刀を持った脇侍が現れ、石の前に立つ。

「よし、この邪魔な石ころを斬ってしまえ」

この石には神様が恐らく祭つてあるはずなのに、罰当たりなことにその少年は石を切り落とせと命令した。脇侍は彼の命令どおり、その石をためらうことなく、縦一直線にズバッ！と切り落としてしまった。

「ああ!!」

その光景を、見てしまった者がいた。

さつきも小さな人影という形で少年を見ていた、トラ少年である。やはり放っておけなかったのか、見てしまっていたのだ。

「い、石が…お前なんてことするんだ!!」

「トラ、さつきから名に騒いで…って! 怪蒸気!?!」

おクマも何時までたつても息子が家の戸を閉めないままであるのに痺れを切らして外に出たが、その途端に自分と息子の前に怪蒸気がまたしても現れたことに足をすくめた。

「ち…うるさいな」

少年は見つかつてしまったことを対して苦に思っていないなかった。寧ろ、トラ少年が自分を見て大声を出してきたことの方がわずらわしかったようだ。

「おい、あいつらを殺せ。僕の気を害した罰だ」

目撃された、ただそれだけの理由で、なんとその少年はトラを殺せと脇侍に命令を下したのだ。脇侍はためらう姿勢さえ見せず、トラ少年のほうへと歩き出していく。

「う、うわああ!!」

またしても怪蒸気が自分を襲おうとしているのに気づき、トラ親子は悲鳴を上げてす

ぐに逃げ出した。二人の悲鳴を聞きつけ、何かと他の長屋の人たちも外に出てくる。そして、怪蒸気が自分たちの長屋エリアにも現れたことに驚き、悲鳴を上げながら逃げ出した。

それからは大騒動だった。なだれ込むように、長屋周辺で暮らしてきた人たちは、怪蒸気の脅威から一刻も早く逃れようと、逃げ惑い始める。脇侍たちは、少年の命令通り長屋を壊しながら、人々を襲い始めた。

「いやああああ!!」「た、助けてくれええ!!」

人々は脇侍の刀によつて切り伏せられるもの、または踏み潰されてしまう者と悲惨な最後を迎えていく者、辛うじて逃げる人たちもいたが、被害はすぐに甚大なものとなった。

「迷えば、仲間が死ぬ……」

米田もそう思つて、記憶がないために自分の力に猛烈な戸惑いを覚えていたジンに警告したのかもしれない。

けど……なぜだろう。自分はその分だけとてつもないもどかしさを覚えた。

結局マリアから、力に関する答えを聞けなかったジンはマリアと別れて階段を降り、支配人室へ。

ふと、支配人室へ向かう途中の廊下の内側の窓。そこから見える中庭の噴水に目が移った。

中庭に入り、噴水の水が流れる様子を見つめ、流れる音に耳を澄ませた。

水は綺麗だった。何一つゴミらしいものも混ざっていない。それはまるで、記憶を持たない自分自身のようなであった。

自分の中に残っている一番古い記憶…水の中で沈んでいくだけのイメージしかない。もつと深く、冷たくて、底は少しの光も通さない…

「ジンさん？」

そんな彼の元に、さくらがやってきた。噴水の前でただ一人佇んでいるジンが奇妙に見えたのかもしれない。

「こんな夜中にお一人でどうしたんですか？風邪、ひいてしまいますよ？」

「ああ、大丈夫。ちよつと中庭の様子を眺めてみたくなつてね」

「はあ…」

なぜわざわざ夜に？と疑問に思ったが、さくらはあまり深く触れないことにした。

ジンはさくらから目を背け、ベンチに腰をかける。

「隣、いいですか？」

「うん」

さくらはジンから許可をもらい、彼の隣に座った。

「……………」

それきり無言になるジン。なんか妙に気まずい。さくらは一応男の子の友人がいたのだが、ここしばらくは会っていないから、男に対する免疫が不足しがちだった。

「な、何か…お悩みですか?」

「悩み、か。まあね…」

夜空を見上げながら、ジンはそこに光る星を眺める。不思議と心にのしかかっている重い感覚が軽くなった。

「…どうして、僕はここにいるのかなって…」

「え?…どうしてって…」

急に奇妙なことを言い出してきたジンに、さくらは少し動揺を示した。

「もしかして、ここでのお仕事に不満があるんですか?」

「いや、不満があるわけじゃないよ。ただ…」

噴水の水音に耳を澄ましながら、ジンはさくらに向けて口を開いた。

「自分がわからないんだ。何をしたいのか、何をすべきなのか…そもそも僕は何者なのか」

「え、えつと…」

「ごめん、何を言っているのかさっぱりだよね」

事情を知らないさくらにこんな言い方をしたところで、意味不明な愚痴に様なものだ。

「米田さんと、何かトラブルでもあったんですか？」

「いや、そうじゃないんだ。ただ…公園でのことだね…」

花組のみんなには、降魔や怪蒸気と戦う力がある。それが僕にもあるみたいなんだ。君も見ただろ？」

「もしかして、脇侍が一斉に機能停止した時の…ですか？」

「うん…」

さくらも当事者だから、あの時トラ少年を守ろうと奮闘し、追い詰められていたはずのジンを襲った脇侍が、1秒もあれば止めを刺すことができる状況だったにもかかわらず停止したのを目撃している。さっきまで機敏に動いていたのに、機能不全にしては不自然だった。それがジンの持つ霊力に関係していると予想した。

「でもそれって、この帝国華撃団の戦闘員なら、持っけていてもおかしくはないですよね？」

「いや、僕は正規の隊員じゃない。ただの職員だよ」

「ええ!!」

それを聞いてさくらは衝撃を受けた。脇侍を機能停止に追い込んだ靈力を持つている上に、なによりあの米田の息子として身をおいているジンが、花組でもなく、ただの職員？ありえないと思つた。

「僕は、米田さんの氣遣いでここに身を置いているだけの、身寄りのないただの居候なんだ。『米田』の姓をもらつたのも、米田さんの氣遣いなんだ。

両親の顔も…自分がどこにいて何をしていたのかもわからない。

ここに来る以前の記憶が…何もないんだ」

「ッ！」

つまりは記憶喪失。さくらはそれを聞いて驚き、そして話を聞いていく内にさつきまでのジンの話の意味が分かつてきた。

「この帝劇に住まわせてもらつたときはそんな悩みは浮かばなかつた。クセはあるけど、みんないい人たちだ。

だけど、自分があんな力を持っていると知つてから、悩みが浮かんできた。

僕には、自分の中にある得体の知れない力以外はなにもわからない。何を信じて…何をすればいいのか…何も分からない」

自分のことも、なにもかもがわからない。さくらはジンの話に耳を傾け続けた。

「なんか、気持ちが少し…分かる気がします。あたしもこの帝劇に来てから、似たような

ことを考えてましたから」

さくらは柔らかな笑みを見せ、自分の意見を述べてジンを安心させようと試みた。

「あたしのお父様は、かつて米田支配人と一緒に、降魔戦争を戦ってきたんです」

今度は、ジンが興味を惹かれてさくらの話に耳を傾けた。そういえば、彼女は米田の知り合いの娘…という紹介だった。だが、降魔戦争…街でも聞いた単語だが、その詳細についてはまだ彼も知らなかった。米田と、彼女の父がその『降魔戦争』とやらに参加していたのか。

「そんなお父様にあこがれて剣術の修行を積み、そしてようやく米田さんの下で、父に代わってがんばる機会を得たんですけど…まさか、舞台女優として働くことにもなるなんて思いもしませんでした」

「…」

「舞台で役を演じるなんて、仙台にいた頃はちっとも考えたことなかったです。剣を持つて、怪蒸気のような人々の平和を乱す存在とひたすら戦うとばかり思っていましたから。だから、この帝劇に身をおいてからはいつも戸惑ってばかりです。それに、お稽古もなれてないから、剣の修行以上に辛いです。アイリスはフォローしてくれるんですけど、マリアさんは容赦無に指摘してくるし、特にすみれさんはちよつとの失敗をしただけで嫌味の連続…正直、何度か折れそうになりました」

稽古の日々を思い出しながら、さくらは続けていく。

彼女はずっと剣の修行に身をおいていたのだ。それが突然大衆の娯楽のための仕事までする羽目になる。環境が一変して体がまだ追いつけ切れていないのかもしれない。しかも年頃の女の子同士、トラブルも起こりやすい。特に自尊心も高いすみれも混ざっているから余計かもしれない。

「でも、そんな時お父様の教えが何度も蘇るんです。『さくらならきつとできる』…『さくら』の思い次第で、その力は人を傷つけもすれば、人を守る力にもなる』…」

あたしはその言葉を、『諦めない思いさえあれば、どんなことも乗り越えられる』って考えてます。だから、帝都を守るためにもあたしは女優としてもがんばっていきましょうって思ってます」

ジンは自分を見るさくらの目をまっすぐ見ながら、彼女の話聞き続けた。なぜだろうか、彼女の声を聞くと懐かしい気持ちが湧き上がる。

「自分が何をすべきか最後に決めるのは、やっぱり自分なんです。ジンさんも、自分の心に従って答えを見つけたら、どんな答えが出て、きつと後悔はしないと思いますよ」

「…自分の心に、正直に……」

「…なんて、本当は結構くじけちゃいそうだったんです。でも、ジンさんに話してみたら、気持ちがちよっと楽になりました」

さくらも、帝劇に身をおいてから抱えてきた自分の気持ちをぶつけたことで、心が軽くなった。人は時に、例え無意味だとしても自分の事を話してみるだけで気持ちを楽にすることがあるものなのだ。

「さ、そろそろ中に入りましょう?」

「あ、うん…:そうだね。」

考えて見れば、もう夜中だ。ここでそろそろお暇しないといけない。二人はベンチから立ち上がった。

「なんか、僕も楽になったよ。ありがとう、さくら」

「いえ、あたし…:ちよつと偉そうじゃなかったですか?」

「そんなわけではないよ。でも、不思議だったよ」

「不思議、ですか?」

意外な返答を聞いて、さくらは目を丸くする。

「さっきのさくらの言葉…:不思議と懐かしさがこみ上げてきたんだ。親や兄弟から言われたような感覚だったよ」

なんとなく、さっきのさくらの言葉にあった「最期に決めるの自分」という言い回しを、昔にも言われたような気がしたのだ。それがジンの中に、奇妙な懐かしさを与えた。

「ジンさん、もしかして何か思い出せたんですか?」

自分の言葉をきっかけに、何か彼の記憶に関するヒントができたかどうかと期待したさくらだが、ジンは首を横に振った。

「いや、全然思い出せないや」

なんだかちよつと情けない気もする。思い出せたのでは？と期待を寄せておきながら結局何も変わってないという感じが自分でも残念だ。

「そ、そうですか…早く、思い出せたらいいですね」

「うん、それに越したことはないんだらうけどね」

本当に、早く思い出したかった。そうじゃないと…ジンは『自分』を取り戻せない。自分の証をその手につかめない気がしてならなかった。

と、そのときだった。帝劇の館内に突然警報が鳴り響き始めた。

「警報!? こんな時間に…!」

この帝劇の正体は秘密部隊・帝国華撃団の本部ならば、この警報がなった意味は一つしかない。

「また、あの怪蒸気とか降魔が出たってことか…」

ジンの脳裏に、問屋町を襲った降魔や、上野公園を襲った怪蒸気たちの姿と、奴らによつて荒らされた街や襲われた人々の姿が蘇る。それに伴って、彼は自然と拳を握っていた。

「あたしは帝国華撃団、花組として司令室に行つて来ます！ではジンさん、あたしはこれでー！」

さくらはその言葉を最後に、ジンの前から急ぎ足で去つて行つた。

これから、彼女の初陣が始まる。人々の幸せ、平和を守るための戦いに…。

だが、ジンは行くことができない。なぜなら彼は、正規の隊員ではない。それに、あの赤い巨人の力をどう扱えばいいのかも、自分がこんなときなにをするのが正しいのかもわからないのだ。

すると、そんなときだった。

「久しぶりね、『ジン』君。本当に目を覚ましてくれたのね…」

さくらは別の女性が、彼女が去つた中庭の入り口の方面から現れた。見ると、緑を強調とした軍服を着ていて、茶色の髪を頭の上に綺麗に巻き上げている女性がそこにいる。

「あなたは…?」

その女性と始めて会つた気がしなかった。もしかして、以前も彼女と顔を合わせたことがあるのだろうか。そう思いながらジンは彼女に尋ねた。

「…米田支配人から聞いていたけど…やっぱり辛いわね」

その返答に対して、女性も困惑した様子だった。だが他にも、寂しげな目をしていた。

だが彼女は気を取り直して、ジンに自己紹介した。

「私は藤枝あやめ。この『大帝国劇場』で働いている者よ」

自らを『藤枝あやめ』と名乗ったその女性は、敢えて初対面の相手にするよう挨拶をした。

## 2—4 前に進むために

「米田司令。帝国華撃団・花組、全員集合しました」

「うむ、ご苦労」

その頃、隊員服に着替えた花組のメンバーたちは、米田と風組三人娘たちが先に待っていた司令室に集合した。

「さきほど、帝都郊外の長屋の3番地区にて、協侍の出現を確認しました」

「前回と同じ無人機で、蒸気演算式ではない、未知のシステムで稼動しています」

椿と由里がレーダー上のマップと、巨大モニターに写る、長屋のエリア一帯を示すマップ上に表示された、協侍の位置を示す点を見ながら報告する。

「お前ら、前回の戦いの影響で光武は、稼動はするが、さくらの機体以外はまだ修理が十分な状態じゃない。よって今回の作戦は、陸軍との合同作戦とする。陸軍の援護を受けつつ、花組は現地の協侍を撃退してもらおう」

米田が、集まってきた花組の隊員：マリア、すみれ、アイリス、そしてさくらの4名に向かって命令を下した。

「了解しました」

「あのときの降魔…あの赤い巨人に倒されてなお、忌々しいことですね。光武をボロボロにしてくれて…」

隊長であるマリアは承諾する仲、すみれは前回の戦いでデビルアロンにこてんぱんにされ、自分の愛器である光武を壊されたことに憤りを覚えた。

彼女たちの武器である兵器『光武』だが、新隊員のさくらの機体はともかく、すみれとマリアの機体は、前回の戦いでデビルアロンに食らわされた酷いダメージが災いして、修理が間に合わなかったのだ。さらにアイリスの分はまだ完成しておらず、今回もアイリスは待機組みだ。戦力が理想の形から程遠かった。米田は陸軍に協力を要請して少しでも穴を埋めようと考えていた。

すると、かすみと米田たちのほうを振り返って、あまりよくない報告を入れてきた。「司令、さきほど軍に援護を申し込んだ件についてですが…陸軍から出動を拒否されてしまいました」

「何い?…」

「どうも、賢人機関からの命令によって出動停止になったそうです」

「ちっ…商売が絡みやがったってことか」

「どういうことですか、米田支配人!?!」

さくらが米田に聞いたです。その答えは、さくらにとって許しがたい内容だった。

「今回の脇侍が出現した地点は、第4次帝都開発計画の候補地になってんだ。寧ろ脇侍による被害は、開発計画を推進する連中にとって好都合って訳だ」

「そんなー！」

それじゃあ、長屋のエリアたちは見捨てられたも同然ではないか。いくら帝都の発展を目的とした開発のためだからって、それでは長屋の辺りに住んでいた人たちからすれば、故郷から無理やり引き剥がされたも同じだ。

「ですがこのまま長屋の方へ向かった方が、奴が身動きを取れなくなり、帝都の中心街に被害が及びにくくなるでしょう。このまま長屋の狭い路地の中に追い込めば……」

マリアが冷静に、敵を確実にしとめるための案を考える。しかしそれもまた、勝利を得て被害を食い止めるためのものとはいえ、長屋のことを深く考慮しなかったものだった。冷酷にも取れる判断に、さくらが反発した。

「マリアさん、本気で言ってるんですか!?!あそこにもたくさんの人々が住んでいるんですよ!その人たちを守るために、あたしたち帝国華撃団がいるんじゃないんですか!?!」

「さくら……」

「アイリスもさくらに賛成!長屋の人たちも、アイリスたちの公演を見に来てる人たちがきつというよ!怪我でもしちゃったら見に来るどころじゃなくなっちゃう!」

アイリスもさくらの意見に激しく同意を示した。

「ふふ、一本撮られたわね。マリア」

その一言に反応し、司令室内にいた全員が、入り口の方に注目する。

「副指令…」

入ってきたのはあやめと、本来ここに来るはずではないジンの二人だった。

「あ、あやめさん！どうしてここにジンさんまで連れてきたのですの!？」

すみれは納得しがたい様子であやめに抗議するが、対するあやめはやんわりとかわしてきた。

「彼も、この帝劇で一緒に働いている身よ。あなたたちの戦いを見る権限はあると思うけど、変かしら？」

「そ、それはそうかもしれませんが…」

彼は花組の隊員でもなければ整備班でもない。モギリといった雑用係を担当しているただの一般職員だ。

すると、さくらはあやめの姿を見て、目を見開く。

「あなたは…!？」

「あなたが『真宮寺さん』の娘さんね？」

「は、はい！真宮寺さくらです！父が、お世話になりました」

「いえ、世話になったのは私の方よ」

あやめはさくらに、首を横に振りながらそう言うのと、今度はマリアがあやめに話しかけた。

「副司令がここに来られたということは、花やしき支部での出向任務を終えられたのですか？」

「ええ、今から帝劇に復帰します。紅蘭も、現在開発中の兵器が完成したら後に続ける予定よ」

「きやは！紅蘭がもうすぐ帰って来るんだ！」

現在、紅蘭はまだ花やしき支部での仕事が残っていて、あやめよりも一步後に来る予定のようだ。だが、もうすぐ彼女もこの帝劇に来ることになったと聞いて、アイリスは喜んだ。

一方で、すみれもあやめに尋ねてきた。

『『カンナ』さんは…いないのですね？』

「…ええ」

「そうですか…」

「ふふ、心配かしら？」

「だ、誰がですの！あのような品性のない野蛮な女のことなんか…」

それを聞いてあやめが微笑みながら尋ね返すと、すみれは顔を赤くしてそっぽを向い

た。それが、普段の高飛車な態度とは打って変わって変わって余計にかわいらしくも見えて、あやめはさらにくすくすと笑ってしまふ。

「あの、『カンナ』さんって？」

ジンは、アイリスに近づき、すれみの口から聞いた誰かの名前について彼女の耳元で尋ねた。

「カンナはね、紅蘭とおんなじで、花組の一員なんだよ。でも、どこにいつちやつたのかな……」

最初はそのカンナという女性のことを誇らしげに語っていたアイリスだが、最後のあたりで寂しげに呟いた。察するに、もしや行方をくらましたというのか？

「大丈夫よアイリス、きつとそのカンナって人も戻ってくるわ」

そんな寂しそうなアイリスを見かねて、さくらは元気付けようと暖かなことばをむける。

「会ったことないのに、どうして分かるの？」

「分かるわよ。アイリスが心配するくらいなら、きつとみんなから慕われているってことだから」

「……うん！」

さくらの言葉で、アイリスも元氣を出してくれたところで、あやめはマリアに言った。

「さて、少し話が長くなってしまったわね…隊長。復唱は？」

「はい。帝国華撃団・花組、出勤！」

「了解！」

マリアの号令に答え、さくらとすみれの両隊員が敬礼し、花組はアイリスを除いて出撃した。

長屋…。

「くつくつく…：やっぱいいいねえ。人間共の恐怖に満ちた叫びと顔は…」

少年はその様子を、心から楽しんでるらしく、下卑た笑みを積み隠さずに浮かべていた。

「刹那」

そんな彼の元に、一人の男が現れる。問屋町にデビルアロンを放った、青い装束を着た銀髪の男だった、

「あまりことを荒立てるなど言ったはずだ。予定ではまだ我らが表舞台に立つのは早かったはずだ」

銀髪の男は、自分が刹那と呼んだその少年を見下ろしながら言った。

「だって、あいつらがうるさかったんだ。ギャーギャーわめいてさ。それを恐怖の顔と叫びで塗りつぶす…どうせ殺すんだから、その前に好きにしたっていいじゃないか」

全く詫びれもなく言い切る少年…刹那だが、銀髪の男はさらに視線を鋭くする。

「…あまりつまらん理由で勝手をするなら、『あの方』に申告させてもらうぞ」

「…つち。わかつたよ…『又丹』」

あの方、という言葉に刹那は反応を示し、刹那は渋々聞き入れた。

「む…来たか」

ふと、又丹と呼ばれた男は空を見上げて、何かを感じ取った。何かの、力の塊がいくつかここに近づいてくる。その直後だった。帝都の方角から数機の、脇侍より少し大きな影がこちらに向かってきていた。

その影は桜色の残像を残しながら、脇侍とすれ違い様に一太刀浴びせた。さくらの乗る光武だ。

「ええええええいやああああ!!」

桜色の光武に乗るさくらは、全速力で駆け抜けた。

かつて、父が降魔戦争で米田と共に命がけで守り抜いた帝都。それを荒らす非道な怪蒸気。そんな奴らを野放しにするわけにいかない。父譲りの剣術と正義感をフルに発

揮しながら、彼女は光武の腕に握り締めた刀を脇侍に叩き込む。刹那がつれてきていた脇侍の一機が、その一太刀で切り倒され、機能を停止した。

その直後。すみれ機も後に続いて現れる。

「ペーペーの新人なのに、目立ちすぎですわよ！」

そう言つて彼女の光武は、高く飛び上がつて、頭上に振り上げた長刀を、もう一機の脇侍に向けて振りかざし、頭から縦方向に真つ二つに切り伏せた。

「ふふん、修理が間に合わなかつたといいますが……この程度なら問題ありませんわね」  
「さすがすみれさんですね」

余裕をこいて、光武の中で髪を靡かせるすみれ。そんな彼女をさくらは素直に讃えるが、まだもう一機残つていた脇侍が現れ、二人に向けて……今度は銃を向けてきた。背後をうまく突く一撃をいつでも与えられる。脇侍が二人を打ち抜こうとしたときに、ようやくすみれときくらの二人は背後を振り返る。しまった！背後を取られたか！そう思ったときだった。

バン！

一発の弾丸の音が鳴り響き、二人を背後からうとうとした脇侍は腹を撃ちぬかれ機能を停止した。

「二人とも、背中ががら空きよ。背後にも注意して」

「マリアからの鋭い指摘に、さくらとすみれはう…と息を詰まらせた。

「あの太刀筋は…」

『又丹』を呼ばれた男は、さくらの光武の太刀筋を見て、奇妙な興味を惹かれた。始めてみるはずのあの剣さばきに、どこか見覚えがあった。

だが、すかさず長刀を持ったすみれの光武が続いて、もう一機の脇侍を立て一直線に切り伏せ、マリア機のその後方から脇侍を撃ち抜いた。

「あいつら？ 帝国華撃団ってのは」

刹那が又丹に尋ねると、又丹は頷いた。

「我らの、あの方の野望を阻む邪魔者共だ。早い内に排除するに越したことはない」

「じゃあ、僕に奴らの相手をさせてくれるかい？」

自分の赤く染められた長いつめを、ペロリと舐める刹那。すぐにでもさくらたちを苦しめたがつているのが伺える。だが、又丹はそれを許さなかった。

「だめだ。まだお前の手を煩わせる機会ではない。お前の『魔装機兵』の改良もまだ済ませておらぬからな」

「ちえ、つままないな。じゃあ僕、先に帰るよ。もうあの方からの仕事は終わったし」  
「俺はもうしばらく奴らの動向を探る」

「わかった。あんたもさつきと帰ってくるんだね」

刹那は適当に言うのと、街の闇の中にヒユウ…と風のように姿を消していった。

彼が立ち去ったのを見ると、又丹は再び脇侍と交戦する花組の姿を見やる。

「この雑魚共が生きているとすれば、『奴』もおそらく生きているだろう。ならば…」

又丹は、前回と同じように、両手で印を結ぶ。すると、彼の足元に奇怪な光を放つ魔法陣のような円陣が形成される。

「こいつらを餌に、奴をおびき寄せて今度こそ殺さねば」

もう少し駒を増やしてぶつけてみようか。又丹が円陣を通して、大地に邪悪な思念を送りつける。すると、地面の中からぬうう…と、何体もの脇侍たちがホラー映画のゾンビのように這い出てきた。

「今のところは問題は無さそうだな」

司令室の大型モニターから、現場の状況と花組の戦闘力を見て、米田は呟く。

さくら、すみれ、マリア。三人のそれぞれの力は脇侍などものともしなかった。

「これなら、長屋を守り抜けそうですね」

ジンが期待を寄せながら、花組の勝利を予想したが、あやめの口から否定的な言動が飛び出した。

「本当にそう思う?」

「え?」

「あの子達の動きをよく見てちょうだい」

モニターに指を指しながら、あやめはジンに言った。ジンも彼女がの言うとおりに、モニターの向こうの花組メンバーたちの動きを改めて観察した。

脇侍はわずか3機。前回のダメージでスペックダウンした光武でもまだ十分い太刀打ちできるレベルだった。

「これでは少々張り合いがありませんわね」

何事もなくすんだことが一番いいが、すみれとしてはまだ物足りなかった。

「さくら、光武の調子はどうか?」

マリアが、さくら機にのるさくらに声をかける。今回彼女は花組として初陣を果たしたが、光武は初めての人間にはなかなか難しい。実際訓練においても、彼女は光武をうまく動かしきれないときもあった。

「はい。頭の中の方がもつと動けたような気がしますけど…」

「そう、困ったことがあつたら言いなさい。今回のようないい動きがいつでもできるようにしておかないと、この先生きていられないわよ」

「はい！」

『た、大変です！』

すると、三期の光武に乗る花組メンバーたちに、本部のかすみからの通信が入り込んだ。

「どうしたの？」

『脇侍が新たに出現！その数は…10体！』

なんと、勝利したと思いきや、ここにきて新たな脇侍が出現したというのだ。彼女の驚きに呼応するように、又丹によって新たに出現した脇侍たち10体が、さくらたちを取り囲んだ。

「どうやらまだ、暴れていられそうよ。すみれ」

「暴れるだなんて野蛮な表現はお止めくださいな、マリアさん。私は華麗に美しく戦うのが信条なんですのよ」

改めて長刀を構えなおすすみれ機と、銃を構えなおすマリア機。さくら機も刀を構えなおして、目の前の脇侍たちを集めた。

「雑魚が何体かかろうと同じことですよ！」

「すみれ、待ちなさい！迂闊に出しては…」

すみれは張り切って長刀をぶん回し、マリアの声に耳を貸さず脇侍に向かって行く。

脇時たちは向かってくるすみれに対し、迎撃体制をとる。それを見て、すみれはふ、と余裕の笑みを浮かべる。たとえ防御陣形を組まれても、自分の攻撃が奴らに通る絶対の自信があつた。

「受けなさい、神崎風塵流……」

すみれ機は長刀を風車のように回し始める。すると、彼女の持つ長刀の刀身が、炎に包まれ始めた。すみれ機が三体の脇時の中心に立ち、長刀を振りかざした。

「胡蝶の舞」！

降り下ろされた長刀の刀身から、炎がさらに激しく燃え上がり、まさに秋の紅葉のように美しく戦場を彩る。脇時たちは炎をまとった太刀のもと、燃やし尽くされた。

「す……」

さくらはすみれの必殺技の威力に感動を覚えるほどだった。

「この程度の敵相手なら、私一人でも行けますわよ！」

得意気になるすみれはまだまだ行ける様子だ。

「ふむ、やるな」

叉丹もまた、すみれの必殺技を見て、感心を寄せた。だが、余裕の姿勢は全く崩れていない。これくらいは想定範囲内ということなのかもしれない。

「低性能の脇侍程度では止まらんと言うわけか。あの男もいい駒を揃えているようだな。だが！」

又丹はニヤツと笑みを浮かべ、円陣に更なる邪気を解き放つ。その力は、前回のデビルアロンのような圧倒的な邪悪な力を放出していた。

又丹の邪悪な力の放出に伴い、長屋の周囲に地響きが起こり始める。

「きゃー！じ、地震!?!」

「な、なんですかの!?!」

驚くさくらたちのもとに、本部のかすみから通信が入った。

『気を付けてください！強力な妖力反応が、皆さんのすぐ近くから発生しています！』

「さくら、すみれ！一度ここから離れて！」

マリアが危機を感じ、二人に一時退避を下す。

それと同時に。地面が掘り起こされ、地中より巨大な影が姿を現した。

「うそ……」

絶句するさくら。マリアとすみれも、突如現れた新手を見て、苦しげに顔を歪める。

地面から現れたのは、デビルアロンにも匹敵するほどの大きさを誇る、巨大な降魔だった。

「クックッ…」

又丹は自分の手によって呼び出した巨大な降魔を見て不敵に笑った。

「次はこの『デビルテレスドン』だ。さあ、貴様も早く来い。でなければ、あの小娘共がただの肉片になってしまふぞ?」

非情で残酷な笑みは、刹那以上だった。また『彼』がここへ来るのをまちのぞみながら、又丹はさくらたちの方に視線を戻した。

新たに出現した巨大な降魔『地底魔獣デビルテレスドン』。

その巨体と凶悪な外見がセツトとなり、見る者全てに対して恐怖をもたらした。

「また巨大降魔出現するなんて…」

できれば、遭遇したくなかった手合いである。光武の修理がまだ済んでいない状態での無理な出動、これ以上戦闘を続けると光武にガタが来てしまう。

「このまま戦うのは危険だわ。住民の安全を考えて動きましょう」

「はい…」

さくらマリアの命令に合意した。正面から戦うにはどう考えてもきつい。例えマリアとすみれの光武が万全でも、このままぶつかり合えば自分達もそうだし、長屋に更な

る被害が及ぶことが容易に想像できる。だが、すみれは違っていた。

「いえ、ここは先手必勝、一気に全力で当たって攻撃し手傷を追わせるべきですわ」

「あ！すみれさん！」

「ダメよすみれ、勝手な行動は！」

「勝てばよろしいんです！」

やられる前に、やる。前回のようにやられっぱなしに終わった悔しさからだろうか、すみれはマリアの指示を無視して飛び出してしまふ。一理あることは言っているが、すみれが独断専行したことに変わりない。

「デビルテレスドンが、長屋を破壊しながら暴れまわり始める。その暴れように、すみれはきつ！と表情を強張らせる。

「こんな野蛮な獣なんか、私が敗れるなんて……」

花組の隊員として、神崎風塵流免許皆伝者として、これ以上の失態は避けておきたい。すみれはテレスドンに向かって駆け出しながら、そう思った。

すると、テレスドンが近づいてきたすみれ機に向かって、口から炎を吐き出してきた。

「なに……！」

「すみれさん、避けて！」

驚愕するマリアと、すぐにすみれに回避を促すさくら。

「これくらいで…!!」

言われるまでもない。自分も霊力を用いて炎を操ることもできるのだ。炎使いが炎に焼かれては格好がつかない。

すみれは、テレスドンの炎が自分の光武に当たる寸でのところでぐいつ!と体をひねると、彼女の光武もまた機体を左方向にひねらせ、間一髪テレスドンの炎を回避した。

見切れさえすれば、どんなに強烈な技も無意味だ。

「今度はあなたにお見舞いしてあげますわ! 〈胡蝶の舞〉!!」

高く飛び上がり、四つんばいに地を張っているテレスドンの頭上に降り立つすみれ機。殺気の脇侍たちを一層した時のように、炎をまとった長刀をテレスドンの頭に突き刺した。瞬間、突き刺した箇所から火柱が立ち上った。

「ガアアアアア!!」

頭上にて熱々の火柱が立ち上ったことで、デビルテレスドンは激しくもだえた。ぶんぶんと頭を振り回して頭の上に乗っているすみれ機を振り落とそうとする。その際に、口から火球がテレスドンの意図と関係なく放たれ、さくらたちや長屋の方に飛んできてしまう。結果、長屋周辺の一部に火災が発生してしまった。

「きやあああ!!」

その一発がさくらの近くの地面で直撃、暴発したことで、さくらの光武がひっくり

返ってしまふ。

「くー！」

このままではすみれが危険と感じたマリアは、前に出て銃口をテレスドンに向ける。

「鳴り響け……白夜の鐘……」

そう眩くと、彼女の光武の周囲に、冷たい真冬のような風がふぶき始める。それが彼女の銃口に集まっていき、一つの弾丸となつて放たれた。

「С Н е г у р о ч к а ！！」

銃口から放たれた氷の礫が、女神の形を成してテレスドンの顔に直撃した。その一発が、テレスドンの顔に氷の膜を作り出して固まっていくが、その際にテレスドンの頭の上に乗っていたすみれ機の足にも及びかける。間一髪だったが、かろうじてすみれ機は回避した。

「ち、ちよつとマリアさん！私まで凍らせるおつもり!? 冷え性は女の敵ですよ!」

「す、すまない……」

焦り過ぎて、かえってすみれを巻き込みかけてしまった。すみれに諫言すべきだったはずの自分が、逆に指摘を受けてしまうとは。自分の隊長としての未熟さを痛感せざるを得なかった。

「さくら機、敵の火球でダメージ！さらにすみれ機もマリア機の攻撃の余波で、破損箇所が増えました!!」

米田の方を振り返って、由里が現状の花組の機体について報告する。

「あくあく！だからだめだつて！ばらばらに戦つちまつたら勝てる戦にも勝てなくなつちまうつて！もつと陣形を大切にして！だから…あああああくそお!!」

突然の事態に、陣形を立てることができず、圧倒的な力を持つ敵を相手に的確なチームワークをくみ上げることができない花組は、前回よりも明らかに苦戦する羽目になつてしまった。司令室モニターからそれを見ていた米田はかなり困り果てた様子だった。

「よ、米田のおじちゃん、落ち着いて〜…」

アイリスがなんとか米田をなだめようとする。

「司令、ここはやはり…」

あやめが背後から米田に、何かを言おうとすると、米田が「ああ」と頭を抱えながら返事した。

「例の話…だな。マリアに代わる新隊長の件」

「新隊長？」

ジンはそれを聞いて首を傾げる。花組の隊長はマリアだが、彼女ではいけないというのだろうか。疑問を抱くジンに、あやめが説明する。

「ええ…確かに花組のメンバーたちは優秀な素質と高い霊力を備えているわ。でも、それだけじゃだめなの。あの子達はアイリスも含めて、個性が強い女の子同士。そうなると思いのぶつかり合いやいがみ合いが起こつて、任務どころじゃなくなつてしまふことが多いの。だから、前から提案していたことがあつたの」

「それが、マリアさんに代わる新しい隊長つてこと…ですか？」

「ええ、私としては…新たに若い男の隊長を軍から抜擢するつもりよ」

「まさか女だらけの部隊に男を入れるなんて、ちと気が進まねえからまだ見送つていたところなんだ。けど、こんな状態じゃ背に腹は変えられねえな…」

今の花組のバラつきだらけの状態を見て、米田は今まであやめの、新隊長抜擢の件を流してきてしまったが、もうこうなつてはあやめの案を実践してみるしかない。だがその前に、あの巨大な降魔をなんとかしなければならなかつた。といつても、今の花組にはそれができるだけの力も統率力もなかつた。つまり…完全にお手上げ、王手を仕掛けられてしまったも同然だつた。現に、モニター上の花組はもう逆転できるような様子は欠片も見当たらなかつた。

「……ジン君、ちよつと来て」

「え？あの…ちよ!?」

すると、あやめはジンの方を見て、彼の手を引き始める。

「あやめおねえちゃん、どこに行くの？」

アイリスが振り返ってあやめに尋ねるものの、あやめはその質問に答えることなく、司令室から廊下に出てしまった。

「お、おいあやめ君！待て！」

「あ、司令！」

何かを予感したのか、米田は風組の惹きとめる声を無視してあやめを追って行ってしまう。

「ど、どうしよう……このままじゃマリアさんたちが……！」

司令官とその代行である二人まで離れてしまったことに、椿が困惑してしまう。

「司令たちまでここを離れるなんて……！」

噂好きな性格もあるが、由里も二人が現場を離れてしまったことに動揺している。だが、風組の中で一番の年長者でもあるかすみと二人に向かって言った。

「落ち着いて二人とも。とにかく今は、私たちにできることをしましょう」

「は、はい！」

「さくら、マリア、すみれ……！」

アイリスは光武が用意されていないため、戦うこともできない。ただモニターを眺めながらさくらたちの無事を祈ることしかできなかった。

廊下に出たあやめは、引つ張つてきたジンの方に振り返つた。それに続いて米田も追いついてきた。

「あやめさん、お話とは…?」

ジンがあやめに尋ねると、米田が先を読んだようにあやめに言い出した。

「あやめ君、待つてくれ!もうジンは…!」

「ええ、理解しています。今の彼が私たちの事を覚えていないことも…」

「そんなことじゃねえんだ!もうジンはあの時十分戦つた!もう休ませてやりてえんだ…」

米田は、もはや軍人としての姿勢を保つていなかった。必死にわが子を守ろうとする、一人の親として、あやめに懇願する。

「米田さん…」

ジンは米田の姿に、困惑するばかりだった。どうも彼は、自分をなにかから庇おうとして見えているように見える。

そんな上官に、あやめは辛そうな顔を浮かべつつも、首を横に振つた。

「今の花組の力ではあの巨大な降魔を相手にするのは不可能です。たとえ、光武の修繕が完全なものであつても変わらないでしょう。」

私たちは帝国華撃団の司令と、副司令でもあります。軍人として、今の状況を最も最善な結果に導くには、自分たちの持つ手段の中で最も確実な選択をしなければならぬはずで、情のために選択を誤るべきではありません」

「……」

「お気持ちには分かります、司令。あなたとも彼とも、ずっと長い付き合いですから。

ですが、私の知っている司令なら……こんなときこう仰るはずで。

『最初からしくじることを考えたなら、何も始まらない』と」

その一言が、米田の胸に突き刺さり、米田は口を開くことができなくなってしまった。

「あやめさん、米田さん……」

ジンは、あやめの方に振り返る。

「あなたたちは、僕を知っていたんですね？」

「ええ。昔からよく知っているわ。あなたはかつて、私たちと共に戦った、賭けがないのない戦友でもあった」

「ッ！」

「でも、ごめんなさい。できればここで全てを話したいけど、あなたも見た通り、あの子達は危機に陥っていて、話すどころじゃないの」

米田のように、状況に関係なく彼に、記憶をなくす前の彼のことを話しておきたいと

思った。だが、長い世間話ができるほど余裕名状況では決してないのはジンも理解していた。

「あの降魔はいずれこの帝都だけじゃない。日本から海を渡って世界中にも侵攻し、多くの人たちを苦しめることになる。」

それだけじゃないわ。私たちは降魔だけでなく、世界中のあらゆる魔の存在と向き合い、戦わなくてはならない。

でも、今の私たち人間の力だけでは、今の花組の子達のようにどうしようもない状況に陥ることにもなる。だから……」

そういつて、あやめは軍服のポケットからあるものを取り出し、ジンの手に握らせた。「お願い、ジン君。あなたにこの世界を救って欲しいの」

その手に握られたのは、赤く照り輝くゴーグルだった。

不思議だった。握っているだけで力が溢れそうなの、それでいて懐かしい感じがする。けど……。

「わからない……僕は何を信じればいいんだ？何をすれば、いいんですか……？」

米田からは覚悟ができていないのに首を突っ込むなど釘を刺された。実際、自分はまだ自分の持つ力にどのようなようにして向き合えばいいのか、不安ばかりでわからなくなっている。

すると、あやめはジンの瞳をまっすぐ覗き込むように見据え、問いかけた。

「ならジン君、あなたはどうしたいの？」

「どうって……」

「私は今、過去のあなたとか、そんなの関係ない。今のあなたはどうしたのか、それを聞いているの」

それは、ジンの望みと覚悟の両方を問いただしてきたものだった。

自分の望み？

ジンの脳裏に、帝劇で目覚めてからの日々が蘇ってくる。雑用の仕事が多かったが、その分彼女たちの舞台が成功したのを見届けると、やりきった思いが強く感じ取れた。心地よくて、嬉しいという気持ちがかみ上げていた。

自分の心に従って答えを見つけたら、どんな答えが出ても、きっと後悔はしない。さくらはそう教えてくれた。

今の自分の望みは……！

「僕は、この帝劇でみんなによくしてもらいました。身寄りがなく、記憶さえもないみんなにお世話になってもらった。素敵な舞台と、それを支える楽しさも教えてもらった。

けど、今はその人たちが困っている。危機にさらされている。だから……」

もしこのまま彼女たちが殺されるのを黙ってみていれば、彼女たちの舞台を心待ちに

している帝都の人たちの笑顔が奪われることになる。さらに、彼女たちにもきつとやりたいことがまだまだたくさんある。それを果たせないまま、若い内に死なせるなんて残酷なことが、

あつてたまるものか!!

「助けたい！彼女たちを守りたいです！」

ジンの目から、迷いが消え去った。

そうだ、迷うことなんてなかった。助けたかったら、そのためにできることを何でもいいから、まずはやってみればよかったのだ。

「ジン、お前……」

戦うことを決断したジンを、米田はただ見つめていた。

「すみません、米田さん。僕はずっと考えていました。自分でも恐怖さえ覚えるこの力とどう向き合うべきなのか……けど、やはり一つしか答えは出ませんでした」

改めてジンは、米田のほうを振り返った。

「…行かせてください。僕は、米田さんたちが大切に思う、帝劇のみんなを守りたい」

もう迷いを振り切った彼に、米田は後でどれだけ引き止めても無駄なのだろうと思つた。

「お前は、記憶をなくしても変わねえんだな……」

顔を挙げ、さっきの辛気臭いとも取れる表情から一転して、米田は笑みを浮かべてジーンと言った。

「あやめ君の言うとおりだな。なのに俺は…」

降魔戦争…あの時米田は、ある部隊を率いて降魔の群れと戦っていた。

あやめと、自分と、二人の若い男と…

今と変わらぬ姿で、ともに戦っていたジンだった。

だが、あの戦いは失ったものが多すぎた。それが彼の心に影を落とした。

それを恐れるあまり、判断を誤って花組の若い少女たちを死なせるところだった。しかもあの中に、降魔戦争で自分たちと一緒に戦っていた戦友の娘がいると言うのに…

「…勝手を承知で、帝国華撃団の司令として、お前に頼みたい。

行つてこい、ジン。花組のみんなを…俺の娘同然のあの子達を、守つてくれ」

「ジン君。詳しいことは、私の口から後で伝えるわ。そのためにも、生きて戻ってきて頂戴。そして…花組のみんなを、私を、米田さんを…信じて」

「はい！では…行つて来ます！」

あやめから託された眼鏡を握り締め、ジンは駆け出した。廊下の突き当りから姿が見えなくなったところで、あやめは米田に向けて口を開いた。

「…やはり、ジン君は変わりませんね」

「ああ。やっぱあいつは、あの頃と同じなんだ。ずっと…」

なあ、一馬、山崎…

帝劇の外、夜の帝都に出たジンは、あやめから託された赤い眼鏡を見つめる。

使い方は、おそらくこれをかけるだけ。

もう自分の力にいちいちビビったりなんかしない。ただ、自分が助けたいと願う人たちを守るためにこの力を振るう。

ジンは、赤い眼鏡『ウルトラアイ』を装着した。

すると、問屋町に現れた巨大降魔と対峙したあのときと同じように、自分の体から強大な力がみなぎるのを感じた。

次第にジンの姿は、ウルトラアイを装着しスパークする両目を中心に、頭から姿を変えていった。

自分のもうひとつの姿である、あの赤い巨人に…

## 2—5 救世主

さくら、すみれ、マリア。三人の花組メンバーたちは絶体絶命の危機に陥っていた。

「く、動きなさい！早く！」

すみれは自分の光武に怒鳴るも、ただでさえデビルアロンとの戦いのダメージが酷かったことで修理か間に合わなかったのだ。連続でそれほどの手合いを相手にすれば、早い段階でガタが来てしまうのも無理はなかった。

「く、ダメか……！」

マリアの光武も同じだった。すでに稼働限界を迎え、動くことができなくなっていた。

動けるのは、さくらのみだった。自分しか戦闘を続行できる者がいないことを認知した彼女は動けない二人の光武の前に立ち、背後の二人に向かって叫んだ。

「すみれさん、マリアさん！ここはあたしに任せて、早く逃げてください！」

自ら、二人が撤退するための囿になろうとするさくらに二人はギョツとする。

「何をおっしゃるの！新人のあなたにそのような真似、許してあげませんわ！」

「さくら、無茶はよしなさい！」

抗議する二人だが、すでにデビルテレスドンは口から炎を溜め込み、それを花組に放とうとしていた。

帝都に咲く三つの花を無慈悲に焼き払おうとする炎に対し、さくら機は刀を構える。

「あれを、やるしか……！」

この手で奴の炎をかわしきれぬかの保証は望めない。だがそれでも、この二人を見捨てることもできない。さくらは自身の体内に宿る霊力を溢れさせ、光武の刀に流し込む。

「北辰一刀流……」

だがそのとき、テレスドンが炎を放ってきた。それに対してさくらは、次に放とうとした技に必要な霊力のチャージが、テレスドンの炎より一瞬遅れてしまっていた。

だめだ！間に合わない！

と、そのときだった！

どこからか、銀色かつ鋭利な物体がさくら機の前に飛来、さくらが何かしらの技を披露する前に、風車のように高速回転しながらテレスドンの炎をかき消した。

「[「?」]」

突然のことに驚く三人。その銀色の刃はテレスドンの方に回転を続けたまま向かい、そのまま体当たりした。

「グゴオオオオ!？」

銀色の刃の体当たりによって倒れるデビルテレスドン。

「い、今のは……?」

さくらは、何が起こったのかわからずその場で固まっていると、本部司令室から樁の通信が入った。

『高エネルギー反応を探知!これは…赤い巨人です!』

「赤い巨人ですって!？」

すみれがそれを聞いて驚きを露にする。光武の機内モニターを通し、外の様子を伺う。外に現れている銀色の刃は高速回転を続けながら、さきほど飛んできた方角へ戻り、巨大な赤い手に握られ、銀色のマスクに覆われた頭の上に乗せられた。

樁の言う通りだった。

赤い巨人が、長屋の中央部の路地の上に、再びその姿を現したのだ。

「まさか、また姿を現すなんて……!」

マリアは二度も正体不明の赤い巨人が現れたことに驚きを隠しきれない。

「……」

さくからも同じだった。まさか、こんな巨人がこの世に存在するなんて夢にも思わなかった。

避難していた長屋の人々も、赤い巨人の雄々しく巨大な姿に注目していた。

「な、なんだあれは！」

赤い巨人を初めて見る人たちには、彼が降魔とはまた別の驚異に見えていたのだろう。だが、逆に赤い巨人を見て、期待と幸運に満ちた眼差しを向ける者もいた。

「赤い巨人だ！」

「お、おやつさん知ってるのか!？」

「ああ、降魔戦争でも俺たちの前に現れた、救世主だ！」

赤い巨人となったジンは、ジリツと身構える。

前回とは違う。あやめがくれた眼鏡で変身したからだろうか。今は自我がはつきり保たれている。一変した自分の姿を見て、ジンは自分の中から力があふれ出るのを感じた。

自分の破壊活動を邪魔されたことで、デビルテレイドンは怒り狂い、目の前の赤い巨人に敵意を向け、襲いかかってきた。

ジンは向かって来たテレ斯顿の体当たりを正面から両手で受け止めた。その状態から頭を両手で掴むと、テレ斯顿の顎に向けてニーキックを、今度は胸元に左拳を叩き込む。

テレ斯顿は宙に飛び上がったと思ったら、その体を横向きに高速回転したのだ。回転を加えた状態で、奴はジんに体当たりをかます。

「グウオアッ!？」

体当たりを受けて一時ダウンしたジンはすぐに立ち上がるが、背後から再びテレ斯顿が体当たりを仕掛けてジンを押し倒す。

「まずい！」

馬乗りになったデビルテレ斯顿は、口から自慢の灼熱の炎を吐き飛ばし、ジンの顔に浴びせた。

「グアアアアアア…!!」

今の炎で銀色のマスクと周辺の赤い肌に、こげみがついた。というよりも、火傷というべきか。デビルテレ斯顿には、こんがり焼きあがった肉料理のように見えていたのかもしれない。火傷だらけとなったジンの体を、よだれまみれのおぞましい口で噛み付こうと、飛びつくように顔を近づけた。

食われてたまるか！ジンは自分の体に奴の牙が食い込む直前、奴の上下の顎をガシッ

と掴んだ。

「グギギギギイ…!!」

自分が獲物を見定めた存在から抵抗されて不快に思いつつも、テレスドンは自らの顎を押し付けようと、ジンは逆にそれを押し返そうとする。

敵の力は予想以上に強く、食われずにいる現状を維持するだけでもやっとだった。機能までの、迷っていた頃の自分だったら、力が入らず押し負けていたかもしれない。だが…!

——ジンさんも、自分の心に従って答えを見つけたら、どんな答えがでて、きつと後悔はしないと思いますよ

——花組のみんなを、私を、米田さんを…信じて

——行つてこい、ジン。花組のみんなを…俺の娘同然のあの子達を、守ってくれ  
自分の迷いを振り払うきっかけをくれた人たちの言葉が蘇り、ジンの腕に力が入った。

「ヌウウウウウ…ゼアアア!!」

ジンはその勢いでテレスドンの顎を押し上げ、がら空きとなっていた奴の腹にキックを叩き込んで蹴飛ばした。

「ガアアアア!!」

体液を吐きながら舞い上がるテレスドンは、既に崩れ落ちた長屋の瓦礫の上に落下する。

ジンは跳ね起きて、立ち上がろうとするテレスドンの前に立つと、右腕を胸に当てる構えを取る。

すると、彼の額に埋め込まれた、縦長のエメラルドグリーンのビームランプから、一発の閃光が放たれた。

「デュワ!!」

その光線を受けたテレスドンは、槍を突き刺されたように胸に穴を開けられた。

「ガアツ……」

構えを解くと、なおもこちらに向かってこようと弱々しく、一歩ずつテレスドンは向かうものの、そのまま赤い巨人の前で倒れ、絶命した。

「ハアアアアア……ダアツ!!」

自身の勝利、戦いの終わりを悟った赤い巨人は、光のごとき速さで夜空に消えていった。

「ち……忌々しいが、やはりやるな」

赤い巨人が勝ったことで、又丹は憎々しげに顔を歪ませた。

「奴を殺すには、やはり……『覚醒』しなければならんな……。だが、まだそのときではない。それまで、せいぜい仮初の勝利に浸っているがいい」

又丹は赤い巨人に向けて届くことのない捨て台詞を吐き捨て、彼が消えた夜空から背を向けて夜の闇に姿を消した。

後日…

支配人室にて、米田は一枚の写真を取り出し、それを眺めていた。その傍らには、あやめも控えている。

「一馬、すまねえ。俺は危うくお前の一人娘を、その友達になるやも知れない娘たちもろとも殺すところだった。自分のエゴ…軍人にあるまじき理由でな」

自分は、花組のメンバーたちを実の娘のように思っていた。だが、降魔戦争で共に戦って、共に絆を紡ぎ合った、息子のように思っていたジンがああ戦いがきつかけで記憶を失ってしまった。仲間の死とジンの記憶喪失による、積み重ねのショックを理由に、間違った選択をとるところだった。

「どのみち俺は父親としても軍人としても褒められた奴じゃねえ。結局、記憶を失ったままの息子を、あいつの力を頼りにまた戦場に駆りだしてしまった…」

写真に写る黒い髪の若い男を……今は亡きさくらの実父『真宮寺一馬』の顔を見なが

ら憂い顔で呟き続けるが、すぐに帝国華撃団司令としての、引き締まった顔つきに戻った。

「けど、それでもまだ俺は、お前らと一緒に守ってきた帝都を、これからも守っていてえ。そのためにもあいつらを精一杯支えて見せるからよ。もうちつとだけ、待っていてくれよ？山崎もいるなら、寂しくはないだろうけどな」

「…支配人」

米田は最後にそう言うと、あやめもかつて共に戦っていた頃の景色と、そこで一緒に立った仲間たちに思いを馳せた。でも、感傷に浸ることが許された時間は少ない。自分たちは、帝都を守るために組織された：『帝国華撃団』なのだから。

「おう、分かっている。そろそろだな」

米田がそう言うと、とんとんと支配人室の扉がノックされた。米田が入っていいぞというのと、失礼します…とマリアの声が聞こえ、扉が開かれた。

扉から、さくら、すみれ、マリア、アイリスら花組の現メンバーたちが揃って入ってきた。

「支配人、お話とは？」

マリアが米田に、どんな要件で自分たちを呼び出したのかを尋ねると、閉められた扉から、再びノック音が聞こえる。

「まずは、帝国華撃団の新しいメンバーを紹介する。おおい、入っていいぞ」  
「失礼します」

米田の入室の許可を受けて、外から若い男の声が聞こえる。この声は！とさくらたちが反応を示すと、覚えのある男が入ってきた。

「紹介する。帝国華撃団に正式入隊した…米田ジンだ」

その男は、ジンだった。

「ジンさんが、新隊員!?!」

さくらが思わず声を上げ、それに乗じてアイリスが米田に尋ねてくる。

「おじちゃん、もしかしてジンも花組に入るの!?!」

「いや、ジンには花組の戦闘任務への参加、他にも様々な任務で頼むことが多くなる。よって特別隊員に任命し、お前らと一緒に戦うことになる」

花組と共に戦う以外にも、米田は組織の司令として、ジンにはあらゆる局面での任務を与え、彼女をはじめとした帝国華撃団の隊員たちの力とすることにしたのだ。だから花組の一隊員ではなく、特別隊員の役職を与えたのである。

「改めて、米田ジンです。まだ未熟なところが多々あると思いますが、よろしく願います!」

ジンは、これから共に戦うさくらたち花組のメンバーたちに向け、ピシッと敬礼した。

全てが夢ではないかと疑った。

記憶をなくしたことで自分が何者なのか、自分がどうしてこれほど強大な力を持つて  
いるのか……

けど、これは決して夢なんかじゃない。

僕は、僕を信じてくれた人たちのために、僕を受け入れてくれた人たちを、この力で  
守り抜く。

そう心に誓った。

第参話 新隊長、大神一郎 / 3-1 敵の名は黒之巢会

暗き闇に満ちた空洞の奥、蠟燭の炎のみで照らされたその最深部に、玉座のような石造りの椅子が設置されていた。

「出でよ……黒之巢死天王」

年老いた老人の掠れきった声が聞こえると、闇の中からボウツと青白い火の玉が発生し、江戸時代以前のような髪と赤い和服を着込んだ妖艶な女性となった。

『紅のミロク』、(んん)に」

ミロクと名乗った女性に続いて、今度は小さな人影が岩を飛び越えながらミロクの隣に降り立つ。

『蒼き刹那』、(んん)に」

その人影の正体は、長屋で叉丹と共にいたあの少年だった。それに続き、岩をチエーソソで切り裂きながら、銀色の肌を持つ筋肉隆々の巨漢が姿を現す。

『白銀の羅刹』(んん)に！」

そして最後に……この男が闇の中から歩きながら現れた。

『黒き叉丹』ここに」

「『我ら黒之巢死天王、『天海』様の命により…推参』」

四人揃ったところで、彼らは玉座に向けて跪く。すると、玉座に大きな火の玉が発生し、不気味な老人の姿となって姿を現した。

「我が名は……『天海』。

『黒之巢会』総帥にして、真の日之本の支配者なり…!!」

第参話 新隊長、大神一郎

「新隊長、ですか？」

支配人室にて集められた花組のメンバーとジンは、米田とあやめからそのような通達を受けた。

「マリアさんでは、司令たちは不足だと仰るのですか？」

「その通りよ、すみれ。前回の戦いなんだけど…正直三人とも、なんともいえない結果だったわ」

「…」

上官であるあやめからの指摘に、さくら・すみれ・マリアの表情が沈む。自分たちは協侍の群れならまだしも、あの巨大な降魔を相手に全く歯が立たなかった。そしてそれ以前に、長屋も被害状況が凄まじく、賢人機関の長屋の人々を軽視した開発計画を、結果的に手助けしただけになった。

自分たちの尻拭いをしたのは、未知なる存在であるあの赤い巨人。帝都を守らなければならぬ立場なのに、結果的に彼の活躍で守られてしまったこともまた、帝国華撃団としての存在意義を問われてしまう問題だった。

「でも、それでマリアさんを隊長から下ろすなんて、まるでマリアさん一人に責任を押し付けているみたいですよ…。あたしがもつとしっかりしていれば…」

自分がまだ新人で経験不足。仕方がないが、戦場ではそうも言ってられない。さくらは自分の責任が大きいことを主張するが、直後にあやめが厳しく言い放った。

「自惚れないで、さくら。あなた一人だけが頑張っても何の解決にもならないわ。」

今回あなたが結果を上げられなかった最大の原因は、チームワークの欠如よ」

「あやめさんの言うとおりよ。」

それに新隊長については、私も納得している。私は指示を出すより、下された命令に従う方がやり易い。隊長職からの降格もやむをえないわ。あなたたちをまとめることができているなかったから、前回のようなザマになった…それだけのことよ」

マリアも自分が隊長の座から降りることに異論そのものはなかった。それを聞いて、さくらはますます自分の認識の甘さを思い知る。

「ですが司令、マリアさんに代わる隊長を立てるのはいいのですが、その人物がマリアさんよりも力不足だったらどうするおつもりですか？」

すみれが、最もだと思わされる問いを米田に突きつける。確かに、新たな隊長がマリアの指揮官としての腕前と戦闘能力を超えるだけの人材でなかったら本末転倒だ。

「もちろん考えている。お前らは女同士で個性も強い。故にぶつかりやすいところもある。それがお前らのいいところだとは思ってる。だからよ…今度の隊長は…今度の隊長はお前らを一つにできる触媒となれる奴でないといけねえ。そこでだ…」

その直後に発表された米田の、新隊長選別に関する話は、女しかない花組だからこそその衝撃を、花組のメンバーたちに走らせた。

「今度の隊長は、男性…か」

光武を操縦するだけの高い霊力の持ち主を集めた結果、個性の強い女性だけの部隊となった花組。そんな彼女たちの力を一つにできる頼もしい男を隊長に任命する。

言うのは簡単だが、そう簡単に見つかるものじゃない。光武を動かせるくらいの高い霊力、それでいて花組の隊員たちをまとめることができる男、考えてみると理想が高い。「奏組や月組にはいないんですか？」

「残念だけど、彼らに光武を操縦するだけの霊力を持っている子はいないの。自分たちが光武を動かせないことに、彼らも悔しがっていたわ」

帝劇には、花組以外の部隊に男性も含めた、または、男性のみで構成された部隊…月組と奏組がいる。彼らの中に該当者がいないのかとジンが訪ねたが、運転席のあやめが否定をいれた。

「そうですか…」

望んだ形で戦うことができない。どれ程悔しいものだろうか。もし自分に赤い巨人の力がなかったら…同じ思いを抱いていたのだろうか？

「それにしても、あらかじめ華撃団の部隊長をもぐりこませて、次の隊長さんを探すなんて…ちよつとあくどい感じがしますね」

自動車の後部座席より、ジンが助手席の米田に言う。

その後、米田はあやめとジンの二人を連れて、後日海軍の演習場へ赴くことに決定された。今度の新隊長は、海軍にもぐりこませていた諜報部隊『月組』の隊長より、海軍の知り合いに適任者がいるという情報だった。

対する米田はにへつと笑っている。

「へへ、まあそういうなよ。別に悪さをするためにやっているわけじゃねえし、こういう仕事を請けている奴はカタギの中にもいるもんさ」

朗らかだが、全てをさらしているわけではない。食えない人、というべきかも知れない。

「ですが、笑っている場合ではありません。二度の戦いを、戦果を上げないままの結果終わらせてしまった：これ以上私たちを立ててくださっている花小路伯爵のためにも、何より帝都の人々のためにも、次は：」

「ああ、分かっている」

あやめその言葉を受け、米田は顔つきを、司令としての貫禄に溢れたものに変わった。

ここに来る前に、三人は帝国華撃団の支援者である花小路伯爵の屋敷を訪れていた。

その間ジンは外で待っていたが、米田とあやめは伯爵の屋敷で会談を行った。

「帝都を守る者がこれではな…」

伯爵は今、映写機から再生されている花組の戦闘中の影像を見ていたが、やはり前回までの二度の戦いの結果について、難しい顔を浮かべざるを得なかった。

「賢人機関の連中から連絡があつたよ。『我々は無能者共のために高い金を払っているのか』と」

賢人機関は花小路伯爵と同じく、帝国華撃団の支援者なのだが、軍事力ではなく霊力と言う、まゆつば臭いオカルト混じりの力で戦う米田たちの一派に難色を示していた。だが、米田たちの降魔戦争での活躍も無視できないと、花小路伯爵が説得したことでようやく資金援助を受けることができたのである。

「お恥ずかしい限りです…」

あやめが会釈しながら詫びた。

「その詫びの一言で済む問題であればどれ程良かったか…」

花小路伯爵は顔を覆い隠しながら、ふう…とため息を漏らした。

「もしや、賢人機関から何か…?」

「うむ…今回の花組の戦果を聞いて、連中の多くが言ったよ。『この程度の戦果しか出せないのなら金の無駄だ』とな。不毛な議論は避けておきたかったのだがな…」

「連中は帝都の平和よりも、商売の方が大事みたいですね」

「その通りだ。君たちも知つてのとおり、降魔戦争の際に現れた、赤い巨人が再び姿を現したことは知つていよう？ 『あの巨人さえいれば、華撃団など不要だ』とも言つていたよ」

「……」

守られていることに胡坐を搔いているだけの身でありながら、今利用している盾が不良品なら、もつと利用度と安全性の高いものを求め、役に立たないものは切り捨てる。花小路伯爵と彼の考えに賛同している数少ない賢人たちを除いて、賢人機関の多くにそんな愚かな考えがたかり始めているのだ。

あの巨人のことを…米田が息子のよう大切に思っている少年を、8年前に起きた降魔戦争の際は、降魔の一緒ではないかと疑つていたくせに、身勝手だ。それについては、米田とあやめは賢人機関への憤りを覚えていた。

「そのような考えでは、いずれ悪に利用され、切り捨てられるがオチだ。そうなつてからでは遅い。だが、次こそ戦果を挙げなくては今度こそ帝国華撃団は解散、運がよくてもただの歌劇団としての活動となるやもしれん。

米田君、次の作戦…頼んだぞ」

「無論です、伯爵。あのときみたいになるのは…もうたくさんですからね。そのために

も、次の段階として、マリアに代わる新たな隊長を立てるつもりです」

「マリア君から交代だと?」

「ええ。これは私が発案したことなのですが…」

次にあやめの口から、「次は男性の隊長を立てる」と告げたときの伯爵はかなり驚かされ、屋敷を後にした時の米田はちよつとおかしかったと、語っていた。

「帝国華撃団が…解散…ッ」

ジンはそれを聞いて絶句し、そして納得のいかない表情を浮かべた。自分にとって、帝国華撃団は記憶を失った自分にとつての唯一の居場所なのだ。取り上げられたりしては、自分はどこにいけばいいのかわからなくなってしまう。

「心配すんな、ジン。んなことはさせねえ。あそこはただの防衛組織じゃねえ。俺たちにとつて大切な『家』なんだ。敵ならまだ、軍人として譲歩できるところはあがるが、政治家共の都合なんぞに潰されて溜まるかよ」

「ええ、全く持つてその通りです。帝劇の皆はまだ、これからのだから。」

真宮寺さんと、山崎少佐の願い…それを果たすまでは決して」

米田とあやめは、賢人機関の華撃団反対派の思惑通りに動く気はなかった。自分たちが帝国華撃団を結成した意味をなくす…そしてそれは、あの降魔戦争でなくした大切な

人たちへの裏切りになってしまふのだから。

「…真宮寺…さん、山崎…さん…」

ジンは二人の名前を聞いて、不思議と懐かしい響きを覚えた。

「あら、何か思い出せた？」

「いえ、ただ…長屋で戦う直前に、僕はさくらに励ましてもらいました」

「さくらから？」

「はい。そのとき不思議な感じがしたんです。以前にも誰かから言われたような…そんな感じが」

…体が覚えているんだろうな、と米田は確信した。大方、俺たちの目の届かないところで一馬に励ましてもらっていたのだらう。あの頃のジンも、変身時の赤い姿と違って、まだ精神面において青さがあつたのだから。

「米田さん、あやめさん…一馬さんと、山崎さんって…どんな人たちだったんですか？」

ジンは前座席のバックミラーに映っている二人の顔を見ながら尋ねた。さくらの父、真宮寺一馬と、米田とあやめ、そして一馬と知り合いらしい山崎という男。記憶を失つた今、彼らの話を聞けば、それを思い出すきっかけになるかもしれない。

「…辛いことを思い出すことになるかもしれないぞ？」

米田はミラー越しに、ジンの顔を見ながら警告した。だが、それでもジンは聞く姿勢

を無言のまま崩さなかった。記憶とは、自分の存在している証でもある。それを失うと無性に取り戻したくなるのだ。

前回の戦いでも強く警告されてなお折れなかったし、今更脅して見せても折れないだろう。そう思い、米田は話し始めた。

8年前を期に起きた、呪われた怪物たちとの戦い：『降魔戦争』の一部を。

「…優秀だったさ。正直、霊力も武においても…あいつらの方が俺たちより優れていた。俺は一馬を信頼していた。山崎の力も認めていた。あいつらがいなかったら、降魔戦争で生き残ることさえも難しかっただろうな」

「……」

「だが、俺たちはあの時光武も持っていなかった。己の武と霊力を武器に、降魔を相手に生身で戦うしかなかった。当然苦戦しちまったもんさ。何度死に掛けたか数え切れねえ。それでもよく、一馬の頭を使った起点が大きく働いて、なんとか俺たちは降魔に襲われた人々を、軍の連中と連携しながら守ってきた。

だが、いくら高い霊力と有効な策を錬っても…圧倒的物量の前には無力だった。雑魚でも常人を越えた力を持つ上に数も圧倒的な降魔共に、俺たちは次第に後退させられていった」

話を聞いていく内に、ジンはなんとなく分かってきた。彼らは人々を守るために、も

はや勝てないと分かっているも、自分に最期が訪れるまで戦い続けてきたのだ。きつと想像以上に過酷だったに違いない。

「けど、そんなときだったわ……あなたと出会ったのは」

「！」

ミラー越しに、あやめが自分を見てそう告げたとき、ジンは目を見開いた。もしここが帝劇だったら、ガタツ！と音を立てながら椅子から立ち上がっていたほどもしい。

「東京湾に降魔が現れたって聞いてな。俺たちはそこに向かって調査を行っていた。そのこの海の上を航行していた船が降魔に襲われていたんだ。俺たちはその船の救援に向かった……」

「……あ、司令。そろそろ到着のようです」

しかし、このタイミングで話は一時中断となった。目的地である、海軍の演習場に到着するところだったからである。ジンはこの絶妙なタイミングでかよ……と現実を呪いたくなった。

「はは……そうむくれるなよ。俺たちは逃げねえからよ」

ふてくされた子供のようにも見えたのか、米田はおかしくなって笑い飛ばした。

湾岸部に、一隻の海軍の軍艦が浮いていた。煙突を生やし、グレーに染まった船体は

まるで、海の上に浮かぶ城のようにも見えてくる大きさだった。

(ここに新隊長が…)

今度の人は、海軍出身だというが、果たして…。

米田たちを乗せた車は軍艦を留めていた港の敷地内にて停車する。既に米田たちの出迎えるのために、海軍の将校が数名ほど集まっていた。三人は車から降りて海軍将校たちに敬礼すると、向こう側もまた米田たちに対して敬礼を返した。

「出迎え、わざわざ悪いな」

「いえ、これも任務です、米田一基中将。寧ろこうして会うことができて光栄です。

日露戦争におけるあなたの武勇は、我々海軍の中でも有名ですので」

「にちろ戦争…?」

降魔戦争、とは違うのだろうかとジンは首を傾げる。それを察して、あやめがジンに説明を入れた。

「以前、私たちがいるこの大日本帝国と、ここから北西の方角にある大国『ロシア』は一度戦争になったことがあるの。米田司令はそこで指揮を執っておられていたわ。そのときの活躍が、陸海両方の軍で有名なのよ」

「よせやい。いくら戦争で活躍したって…」

米田はあやめの説明が聞こえていたのか、強く謙遜した様子だ。…いや、というより

も、謙遜とかなしに、自分に後ろめたい何かがあるから、その言葉を心から受け入れることができないうように見えた気がした。

「米田中将、そしてお二方もこちらへ」

将校のリーダー格の男が、米田たちを軍艦の方へ案内した。

『艦内の卒業候補生に告ぐ！本日新型兵器の実験を行う。候補生は1000、船首に集合せよ！』

ちようど同じタイミングで、そのように艦の周辺に放送が流れた。

米田、あやめ、ジンの三人が訪れた海軍の港にて、大きな木製のコンテナがクレーンで下ろされた。その中身の部品は海軍の将校のほか、作業員たちによって甲板上に運ばれ、一斉に組立作業に入る。それからしばらく時間を置いた後、試作型光武の組み立てが完了し、集められた海軍の将校たちは実験に参加した。

「ここにいる海軍の方の中から、花組の新しい隊長を決めるんですね？」

ジンが組み立てられていく試作型光武を見ながら米田たちに尋ねた。

「そのために、よく海軍を動かせましたね」

今のあやめの口ぶりどおり、元々陸軍の人間である米田に、海軍を動かす権限はないが、今回は米田の思惑通りに海軍が動いてくれていた。あやめからの言葉に対し、米田

は笑みを浮かべながら首を横に振った。

「俺にそんな力はねえよ。神崎重工とは元々他の新兵器の共同実験の話があつてな、その中に試作型の不具合から光武が紛れ込んだのさ」

「不具合ですか……」

別に悪事を企んでいるわけではないが、わざと怪しさを感じるような言い回しをする米田にあやめは薄く微笑んだ。

「……」

その日はいい天気だった。まるでいいことがあるのでは？と思えるくらいに。

この日、さくらたち花組には休みが通達されている。彼女たちのせつかくのいい天気だから、街に繰り出してお出かけ日和を満喫している頃だろう。

だが、ジンはあまり晴れやかな顔を浮かべていなかった。地平線まで広がる海面を遠くまで眺めながらボーっとしていた。

「どうしたの？」

あやめがそれを見て、ジンに尋ねてくる。その声に我に帰り、ジンはあやめたちのほうを振り返る。

「いえ、その……前にもこんな感じの海が広がった日があつたような気がしたんです。はつきりとはわからないんですが……」

それを聞いて、米田は思った。ジンは確かに記憶がない状態だが、それでもデジャヴという形で、体の方が過去の事を覚えているのだと。でなければ、赤い巨人変身しても、戦い方ごと記憶が吹き飛んでいる影響で、うまく戦うことができなかつたことが考えられる。

「こんな感じの日だったな。お前が俺たちと会ったのも」

「ッ……！」

その一言にジンが反応を示した。

「あの日も今みたいに晴れた空でな、一馬と山崎、そしてあやめ君とともに船に乗って海上の降魔と戦っていた……」

ガシャン!!

そこまで米田が言いかけたところで、突然艦が大きく揺れだした。

「な?！」

前触れなしの異変に、ジンとあやめは動揺した。

「そうそう、こんな感じでききなり船が揺れて………つてなんだあ?！」

米田も一瞬気づくのが遅れたが、すぐにまたしても自分たちの周囲に異変が起きたことを察した。警報が、軍艦の船内中に響き渡る。

甲板上では、ちようど光武の稼働実験を行つていたところだった。これを十分に動か  
せただけの靈力の持ち主の中で、特に隊長にふさわしい者を、花組の隊長に配属させる。  
これが米田の考えだった。

しかし、軍艦の船体が大きな衝撃を発生させたことで混乱が起き始めていた。

「何があつたんだ!？」

試作光武に乗つていた若い将校が、試作光武の操縦席のハッチを開いて、実験を行つ  
ていたスタッフに尋ねる。

「恐らく、試作光武を稼働している動力パイプが外れたせいだ!」

「なんだって!？」

その若い将校は声を上げる。確か、この兵器（米田たち以外は、この兵器Ⅱ試作光武  
の詳細を知らない）はこの艦の機関室と動力パイプを通して繋がっているはずだ。それ  
が外れてしまったら、兵器に流し込まれているエネルギーが行き場を失つて暴発してし  
まう。

悪い予想が当たつたのか、さらに艦内で爆発が起き、煙が上がり始めた。ついに発火  
してしまつたのだ。

「まずいぞ!早く避難を!」

近くにいた他の乗組員たちは、すぐに脱出を始めた。だがそんな中、ただ一人だけ、試

作！光武に搭乗していた若い将校がそこに残っていた。

自分は、海軍士官学校にて主席の成績を得た。じきに卒業が認められている。自分もここで避難すれば、卒業前に事故死するということはなくなる。これからつて時になにも危険なことに首を突っ込みすぎると、未来がないということだ。

だが…彼はそう思わなかった。体が勝手に動いたと思えるくらいに、彼はごく自然に試作光武に再搭乗、操作レバーとスイッチを押す。すると、試作光武は再び彼を操縦席の中に閉じ込め、……プシュー!!と煙を吹きながら動き出した。

「行くぞ…この船の皆は、俺が守る！」

「急いでください司令！ジン君も早く！」

艦が沈む危険を予測していたのは、米田たちも同様だった。あやめが二人に対して避難を強く呼びかける。

「くそ、俺も光武が使えさえすれば…」

悔しがる米田。彼もまた靈力こそ持っているものの、光武を動かせるほどの強さではなかった。

「米田さん…よし…こうなったら…」

そんな米田の気持ちを見て、ジンが懐に手をかける。赤い巨人の力を使えば、変身す

ればきつと、この艦の沈没を防ぐことができるはずだ。だが、ジンが胸ポケットに手を入れようとしたのを見たあやめが、彼の手を掴んでそれを止めた。

「ジン君、だめよ！」

「どうしてです!？」

なぜ止めたのか。ジンはそれを理解できなかった。この力で人を守れ、それを促したのは彼女なのに、なぜ止められたのかわからなかった。

「変身したあなたの噂は帝都中に知れ渡っているわ。そんなあなただからこそ迂闊に変身したら、それこそ混乱を招いてしまうわ！」

「ッ……！」

そこまで聞いて、ジンは理解した。自分は凶らずも、帝都の人々からあらゆる注目を集めている。あるものは救世主、ある者はその逆を……。そんな立場の自分が変身した姿をホイホイと、これまでの戦いのように、力を振るうに値する敵がない状態で晒してしまうと、あやめの言うとおりになる。

変身が許されないのなら、じゃあどうすればいいのだ！ジンは苛立ちを募らせる。

『あの時』みたいに変身して戦うことさえできれば……。

と、そのときだった。

「ぐ……！」

ジンの頭に、激しい頭痛が起こった。手すりに手をかけ、膝を着く彼を見て、米田が叫ぶ。

「おい、ジン！どうした!？」

「頭が…痛い…!!」

まるで固く鋭いハンマーで頭を殴りつけられたかのような激痛だった。米田の呼びかけも聞こえない、あやめの姿も認識できなくなる。

目の瞳孔が開いたそのとき、ドクン！という心臓の鼓動の音と共に、彼は見た。

海に浮かぶ船。そこに乗っている4人の人物…。

米田とあやめ、さくらの父一馬と、もう一人おぼろげに見覚えのある若い男。

彼らの船に、一体の大きな降魔らしき巨大生物が取り付こうとしていた。それを、赤い巨人が背後から必死に取り押さえながら引き剥がそうとする。

その怪物は醜くおぞましい姿をしていた。降魔よりも恐ろしさを垣間見してしまうくらいに。何せ、体中がまるでムンクの叫びのようだったのだから。

奴の巨大な体が動く度に、大きな波が起こり、船にいる4人を飲み込もうとする。その前に魔物が米田たちに向けて、彼らを捕まえようと体から触手を伸ばしてきた…!

「ぐ、うう…!!」

「しっかりしろ！深呼吸だ！」

米田はジンの肩を掴んで呼びかける。怪物の伸ばした触手が米田たちに迫る。そこで奇妙なビジョンは終わっていた。それによって米田たちの声と姿も再び認識できるようになっていた。

言われたとおり、ジンは深く深呼吸し、自らを落ち着かせた。

「大丈夫？」

「はい…ツ！痛…！」

心配するあやめに、もう痛みがひいたことを告げるも、直後にまた一瞬だけが痛みが走る。さっきの激しい頭痛と共に浮かんできた奇妙なビジョンを見た影響だろうか。

「無理しないで。さ、こっちへ…」

あやめが自らの肩をジンに貸そうとした時だった。突然船首の方から煙を噴出しながら走り出す、試作光武の姿が米田たちの目に止まった。

「光武が動いている…！」

誰かが稼動に成功したということか！試作光武はそのまま、火事の現場に到着しそのまま燃える家の中に突入する消防士のごとく船内に突入した。

それから3分以内のことだった。火事が起きた艦の機関室に突っ込んだ試作光武によって、降りなかつたはずの隔壁が閉められた。これによって、船の沈没は免れたことが伝わった。

「新隊長はひとまずこいつで決まりだな」

帝劇に戻った後、米田とあやめは、新たな隊長に、あの試作光武を動かした将校を抜擢することにした。

「まずはあいつが俺たちが求めているだけの男か、確かめる段階だな」

支配人用のデスクの上に乗せられた、新隊長の書類を眺めながら、米田は呟く。

「あの、支配人、さくららですけど入ってもよろしいですか？」

そこへ、支配人室の扉がノックされた。

「おう、さくららか。入ってこい」

その声で米田はさくららだとわかると、彼女の入室を許可する。失礼します、とさくららが入ってきた。

「何かご用ですか？」

「前に言っていた新隊長の件でな、今からそいつを迎えにいつてやってくれ。」

あやめ君か、ジンの奴に頼むつもりだったんだが、二人とも手を空けられなくてよ」

「そう言えばジンさん、戻ってきてから具合が悪そうでしたね」

先日の新隊長にふさわしい人物を探るための実験の日の後、ジンは激しい頭痛の後遺

症で倒れてしまった。そんな彼をあやめが自ら介護に回っていたのである。今のジンには、正体を知った上で味方でいられるのは、あらかじめ彼を知っていた自分たちしかないのだ。

「ジンの体調は大丈夫なのですか？」

「あやめ君は救護の経験もあるから心配ねえさ」

「それならいいんですけど、なんだか心配ですね…」

さくらは体調を崩してからのジンの様子を見ていない。一度彼に対して自分なりに励ましの言葉を送ったこともあって、なんとなく気がかりだったのだ。そんなさくらに、米田はニタツと笑ってきた。

「あ、あの、支配人…その笑みは…？」

なんとなく嫌な予感を感じたさくらは後ずさったが、そんな彼女を取り逃がすまいというかのように、米田が口を開いた。

「なんだあさくら、あいつのことをそんなに気にしてくれてんのか？さては…」

その先は言わずとも理解したさくらは、顔を赤らめて必死に否定を入れた。

「な！ち、違いますよ！！そんなんじゃないやありませんよ！あたし、まだあの人と会ったばかりでよく知らないの…あ！！」

そこまで言いかけたところで、さくらはしまった！と自分の浅はかさを呪った。

「おいおい、さくら。俺は何も言っていないぜ？ましてや…『あいつに惚れたのか？』なんてなあ」

「も…もう、支配人なんて知りません！」

やっぱり引つ掛けられたか。さくらはそれを悟り、米田に足して膨れつ面をあらわにした。さくらは見た目どおり純情なのだ。こういった手口の茶化しは好ましくない。

最も米田としては、さくらはまだ未熟なところがあるものの、ジンとそのような仲間になつても文句はない。何せ一馬の娘と、自分の義理の息子という間柄なのだから。とはいえ、これはあくまで当人がちゃんと両思いになつた場合の話だから口に出さなかつた。

「はは、悪かつた悪かつた。まあそれより、新隊長は上野公園にいる。そいつを呼んだらお前も顔を見てやつてくれ。」

名前は…」

『大神一郎』だ。

黒之巢会の根城である、とある洞穴の最深部。

呼び出した部下たちに、総帥である天海はかなり機嫌が悪い様子を露にしていた。

「又丹、貴様…あれはどういうことだ？」

「どう、とは？」

跪いたまま又丹は天海に、何を尋ねてきたのかを問う。

「何をしたらばつくておるか。降魔と怪獣、異なる生命を合わせることで強力かつ無敵の駒を生み出せる…そう言っておったな？じゃが、あのザマは何じゃ！二度もあの得体の知れぬ赤い巨人の手にかけられるとは！貴様は児戯をするためにあのような技術を開発したのか！」

「…申し訳ありません。天海様。ですが、あの赤い巨人は強敵です」

どうやら天海は、又丹の手によって生み出されたデビルアロン、デビルテレスドンが赤い巨人に変身したジンに倒されたことを不服に思っているようだ。頭を下げ、主である天海に詫びを入れる又丹だが、天海は聞き入れようとしない。

「黙れ！我ら黒之巢会が常に完全無敵でなければならん。敗北など許さん！」

そんな又丹を、刹那は見下ろしながら嘲笑う。

「へ、無様だね…又丹。僕だったらもつとうまく、あの帝国華撃団も赤い巨人も苦しめた果てに殺せるよ？」

「さすが兄者だ！兄者には、奴らに勝てる算段があるってことか？」

自信たっぷり、見下し視線を積み隠さずに言い切る刹那に、羅刹は諫めるどころか煽った。兄者：この二人は見た目も性格も正反対だが兄弟なのだ。

「ほほう、刹那。そなたの奇策とはそれだけの自信を持てるほどのものかえ？」

ミロクが刹那に尋ねると、刹那はその手順の第1段階を伝えた。

「まあね。けど、情報がまだ足りない。動くのは、奴ら帝国華撃団の情報を得る必要がある。」

天海様、単に強力なだけの駒をぶつけても、これまでの又丹の二の舞になるでしょう。だけど、この作戦のためには、さらにもう一体、又丹の作った駒である魔獣をぶつける必要があります。その際に僕が奴らの誰かに近づいて、弱点を探りましょう。すこし辛抱の必要がありますが、これも我ら黒之巢会の勝利のため。どうか…この蒼き刹那にお任せを」

天海も、次の戦いはあえて奴らに花を持たせる前提で行うことに、苦虫を噛み潰したような顔を浮かべていた。

黒之巢会は絶対無敵、それを体現するために常に勝利を飾らなくてはならないのが天海のポリシーだ。だが、自分たちも敵をよく知らないのも事実だ。

「…ふん、最後に勝利するためというのなら、いいだろう。又丹、お前の失態も不問にしてやる。その代わり、次の奴らとの戦に適任の駒を用意し、我々の『魔装機兵』の調

整と急げ」

「御意……」

「ミロク、羅刹。貴様には『六破星降魔陣』に必要な楔を打ってもらおう。そして、我らが真の根拠地の復活に邪魔な封印を解く準備を整えるのだ。

すでに最初の封印の石は刹那が壊しておいてある。さあ、行くのだ！」

「「ははー！」」

死天王たちはそれぞれ命令を受け、天海の前から去り始める。

そんな中、又丹は頭の中で、作戦のためにどのように己の力を振るうかを考えていた。(俺としたことが、『奴』を殺すことに集中し過ぎたか。だが……いずれ必ず……)

赤い巨人……ジンへの殺意を胸に、又丹は動き出した。

## 3—2 大神、帝劇へ

数日後…。

あの試作光武を動かした大神のもとに一通の配属辞令が、届いた。それも、陸軍大佐である三隅直行という男から。

『大神一郎

右ノ者 大帝国劇場勤務ヲ命ズ

海軍大臣 山口一豊』

桜の舞う上野公園の西郷隆盛像の前で、彼はひとり悩んでいた。

既に卒業試験の演習にて、自分は同じく卒業候補生の加山雄一をはじめとした友らと共に、演習相手である教官の部隊を圧倒し、合格した。あの時の教官殿の悔しそうな顔を見てニヤついた加山の笑みと、風呂場にて加山が教官から拝借した（かっぱらった）シャンパンを飲み漁って騒ぎ、卒業を喜ぶ友たちの姿は記憶に新しい。きっと彼らはよい配属先を得られただろう。

だが自分は：なぜか『大帝国劇場』という場所への勤務となった。言葉通りだと、劇場：女子供がよく通う娯楽施設だ。そんなところに、海軍の出である自分が、国のため、平和のために戦う術を得た自分がわざわざ行くような場所ではない。

あの日の、軍艦で起きた事故の当日もそうだ。既に卒業が決まっていたはずの自分たち海軍士官学校の卒業生に、突然新兵器の試作品の実験が行われ、それに自分たちも急遽参加することになったことだ。噂では、あの場には猛将と謳われた陸軍中将・米田一基がいたと聞くが…。

しかし、配属先のことを通達されたとき、三隅は自分に言った。

「質問も拒否権も許さない。これは『特務』である」と。

つまりたとえ同じ軍の仲間にはもちろん、家族など親しい人間に伝えることも許されない。

ならば、黙って従うしか選択肢はない。

当然、大神は従った。下された任務に忠実に従う。それが軍人としてのあるべき姿なのだから。

これから、米田中将の使いが来ると聞いている。

特務：一体どんな任務が下されることになるのだろうか。待っている間、大神は今回の集合地点である上野公園を見渡した。以前ここへ加山と共に来たときは大変だった。

卒業が決まって花見に行つた際に、よりによつて噂の怪蒸気が出現し、公園内は荒れ果ててしまった。だが今は、既に以前ほどじゃないものの復興していて、以前通り観光客で溢れている。

ここに平和が戻つて良かった。だが、安心するわけに行かない。なぜならここしばらくの帝都は異常な事件が度重なつていた。かつての降魔戦争の悲劇が繰り返されようとしていると、海軍内でも強い噂になつている。そして、降魔戦争の救世主とも呼ばれた謎の赤い巨人が再び姿を現し、巨大な降魔を退けたとも聞く。奴が何者なのか、大神自身には計り知れない。だが彼が本当に救世主であろうとなかろうと、自分もまた帝国軍人として、国の平和のために戦わなければならない。

そう思っている大神の元に、ある人物が声をかけてきた。

「あの、大神一郎少尉…ですぬ?」

米田の使いの人が来たらしい。大神は振り替えると、そこにいたのは、赤いリボンと桜色の着物を着た少女だった。

「え、えつと…君は?」

米田中将の使いの人が来ると聞いたから、陸軍の人が迎えに来るとばかり思つてた。しかしやつて来たのはとても軍人とは思えない年頃の女の子。

…待てよ。この子、以前にもどこかで…

「またお会いできて嬉しいです、大神さん」

花のような笑顔を向けてくる少女。おぼろげに記憶をたどりながら、大神は彼女が誰だったのか、ようやく思い出した。

「もしかして、あの時の？名前は…確か…」

そうだ、この子はここに怪蒸気が現れた時、果敢に名刀を振るいながら立ち向かった、あの少女だった。

「確か、真宮寺さくら、さんですか？」

「はい！そうです、真宮寺さくらです。覚えててくれたんですね」

こうして、またこの桜舞う公園にて、運命の再会を果たした二人だった。

二つの角を持つ、謎の悪魔。

月面での戦いでそいつに腹を貫かれ、彼は青き星へと落ちていった。

大気の摩擦が、落ちていく赤い戦士の体を焼いていく。腹に一発、槍のような一撃を受けたことで穴が開いていて、傷口からは光が血のように溢れている。

熱い：体が焼けていく。灼熱のマグマの中に飛び込んで行っているような感覚だ。それでも彼は、生き延びようと必死になったが、もう意識が飛びかけていた。それでも必死に、現実に意識を押しとどめ続ける赤い戦士は、ついに海へ落下した。

落ちた直後は、すぐに起き上がった。だが、立っているのもやつとだったことに変わりなく、少しでも油断すると倒れてしまうほどだった。

そんなとき、海の上を渡航する船に、不気味な外見をした怪物が触手を伸ばして船を襲っていた。船には、何人か人が乗っている。彼は船に乗っている人たちを守るべく、傷だらけの体を押し立て向かった。

突然加勢に入った自分の姿に、船に乗っている人たちはパニックを起こしかけていたが、そんなことはどうでもいい。自分はこの人たちを助けなければならないのだ。

しかし傷が深すぎたせいで、パンチやキックに力がいつもと比べてかなり弱まっていた。当然、怪物の触手による鞭攻撃を受けてしまい、度重なる戦いのダメージで彼は絶体絶命の危機に陥っていた。

赤い戦士は、最後の力を振り絞り、自分の頭に装着されていた銀色の刃を引き抜き、怪物に向けてそれを投げつける。刃は敵に深い切り傷を刻み、怪物は激痛によつて絶叫した。今の攻撃で恐れをなしたのか。やつは海の中へ飛び込んで姿を消した。

同時に、赤い巨人も前飲めるように倒れ、消滅した。それと同時に、赤い巨人が立っていた海面に、一人の若い少年が落ち、そして海に沈み始めていった。

……さい

……いき……い

誰かの声が、ジンの頭の中に聞こえる。その声にうつすらと、彼は目を開く。

飛び込んできたのは、光。眩しすぎて思わず目を閉ざしたくなる。だがジンはそれでも目を開こうとする。

そのとき、彼は見た。

さあ、起きなさい

その一言とともに、自分に慈愛の視線を向ける、神々しく美しい姿をした、白い衣に実をまとう女性を。

「……う」

「よかった。目が覚めたのね」

しかし、その女性の姿は一瞬で消え去り、代わりに彼の視界に飛び込んできたのは、自分の顔を覗き込んでいたあやめだった。

「気分はどう？」

背中を起ここしたジンに、あやめは尋ねる。頭がボーっとしている。

「あやめさん、僕は……？」

「海軍の演習場から戻ってから、熱を出したのよ」

そうだ、あやめの言う通り、確か新隊長を決めるために海軍の軍艦に乗っていたん

だった。そのとき、いきなり船体が揺れだし、それが何かの引き金になったかのように、頭の中に覚えのないはずの記憶が流れ込んできて、頭を勝ち割られたような激痛が走った。それがさらに発熱を引き起こし、いつぞやのようにジンから意識を奪ってしまったのだ。

「気分はどう?」

「少し頭が…」

「まだ痛むの?もう少し寝ていた方がいいんじゃないかしら」

「いえ、大丈夫です。ただ、変な光景を見たみたいで…」

「変な光景?」

「ええ。海に落ちた赤い巨人が、船を守るために、傷だらけの体を引きずって戦う…そんな感じでした」

あやめはそれを聞いて、驚きを感じて目が見開かれた。その光景には、彼女もまた、覚えがあったのだ。

「思い出したの?」

「ちよつとだけです。はっきり思い出せたのは一馬さんの顔くらいです。

そうか…僕は、やはり一馬さん…さくらの父親と顔見知りだったんですね」

「ええ…あなたが見たのは、間違いなく私たちがあなたと出会った頃のものよ」

ジンは、夢という形で、過去の記憶の一部を垣間見たのだと気づいたあやめはそう説明した。当時と、今回の新隊長拔擢のための実験の際に起きた船の非常事態がダブったのがトリガーとなったのだとあやめは考えた。

だが、同時に考える。記憶を取り戻すと、彼の頭にはそれに伴って猛烈なショックを与え、負担をもたらすことが懸念された。それを考えたあやめは、ひとつの決断をジンに対して下す。

「迂闊にあなたに記憶を取り戻させるのは、控えた方がいいかもしれないわね」

それを聞いたとたん、ジンは目を見開いた。驚きのあまり思わず大きな声を上げそうになったが、何とか普段と同じ大きさの声で尋ね返す。

「どうしてです？」

「下手に記憶を掘り返して、あなたの脳に強烈な刺激を与えたら、何が起こるかわからないわ。最悪の場合……」

それ以上はいわなかった。言いたくなかったのだ。

今回のように、激しい頭痛と発熱程度で済めばいいのだが、あやめは陸軍にいた頃に医学を、負傷兵の治療のために学んでいたが、記憶を失った人間の相手は始めてのことだったから、迂闊に危険な行為に及んで、米田が養子として大事に思っているジンを傷つけたりしたくなかった。

「そんな…」

自分が何者なのか、今でも知りたがっているジンにとって、これもショックを感じることもあった。

「これも、あなたを思つてのことよ。わかってくれとは言わないけど…」

あやめはそんなジンを気遣うように言う。というより、許しを請っているようにも聞こえる。記憶を失つた戦友に、そう簡単に当時のことを話したくても話すことができなくなっているのだから。

「そんなの、いやです！僕は今すぐにでも、自分が何者で、どこから来たのか知りたい！それに、そもそも記憶を取り戻そうとしたら僕がどうなるかどうかなんて、まだわからないじゃないか！そうでしょ!？」

「…本当にいいのね?」

「はい!」

だが、ジンは記憶を放棄することを嫌がった。真つ向からあやめの提案を否定するジンを見て、あやめはその覚悟を問うと、ジンは迷わずに頷いた。…そうだ、彼はあの時もそんな感じだった。ずっと昔から…自分が傷つくことはいとわらない人だった。

「わかつたわ。私もあなたの立場だったら、本当のことを知りたくなつたでしょうし」

「あやめさん…」

「でも、あまり無理はしないでね？記憶のことも、順をおって、あわてず少しづつ思い出していきましょう。それでいいかしら？」

「それだけで十分です。あやめさん、ありがとうございます」

「お礼なんていいわ。決めたのはあなたよ」

朗らかにあやめは笑みを見せた。本当は米田と同じで、記憶を失ったジンに対して、不安ばかりが募る。けど、それでも彼は足を止めようとしなない。なら、自分たちで支えていこう。それが彼にしてやれることなのだ。

「それはそうと、ジン君、以前に言っていた花組の新隊長だけど、もう来ているわよ」「え、もう!?!」

前々から聞いていた新隊長が、もうこの日に来ていたと聞いてジンは目を丸くする。

「それと、まだこの帝国華撃団のことはまだ話さないでね？」

「なんでですか？新隊長なら、この華撃団のこと、話してあげるべきでしょう？」

これから来る新隊長に、華撃団が降魔や怪蒸気と戦う組織であることを伝えないというあやめに、ジンは疑問を覚える。

「米田支配人は、あの隊長が戦闘力より以前に、帝国華撃団の表裏の両方を愛してくれるか、様子を見ておきたいそうよ」

「はあ…」

新隊長はおそらく、花組たちがそうであるように、表の顔である帝国歌劇団の仕事もしてもらうことになる。つまり、もし有能な指揮官としての素質があつても、軍人としての気骨ばかりを優先し、歌劇団を蔑ろにするような男だったら、これは花組みの隊長として即刻失格というのが米田の見解だった。

「でも、せっかく見つけた貴重な人だから、仲良くしてあげてね。彼が困ったら、助けてあげて頂戴」

「あれ？あやめさんは来ないんですか？」

あやめは副司令という立場だから、てっきり来ると思っていた。

「私はこれから花やしき支部のほうの仕事。そっちにいる花組のメンバー候補者を迎える準備をしなくっちゃ」

「そうなんですか」

「あら？さびしい？」

「べ、別にそんなんじゃないですよ！いきなり何言い出すんですか」  
からかつてきたあやめに、ジンは向きになって怒鳴ってしまふ。

調子が狂わされたが、ジンは病室を後にして、例の花組の新隊長の顔を見に行くことにした。

## 3—3 ジンと大神

「おかしい…」

さくらの案内で大帝国劇場に到着した大神。

彼は生粋の帝国軍人としての訓練をつんできた。だから今回、配属先の通達で特務を言い渡されたときは、どんな部隊に配属されるか不安を抱え込む一方で、自分にはそれだけ重大な使命が課せられたと思うと、軍人として名譽に思えてならなかった。

だが、命令どおり上野公園の西郷隆盛像の前に来て待つていたらどうだろう。

以前その公園で起きた怪蒸気事件の際に出会った少女、さくらが配属先の責任者である米田中将の使いとしてやってきたのだ。民間人であるはずの彼女が、あの米田と知り合いで、しかも使いに現れるなんて思っても見なかった。

しかも驚くのはそれだけじゃない。

「さ、大帝国劇場へ参りましょう」

さくらが大神を連れてやってきたのは、銀座の中央にある劇場。なんとも目立つ場所に当たり前のようにつ立っている場所が、自分の配属先の拠点だという。てつきり暗号名かと思っていたが…。

疑問が積み重なる中、彼はさくらに案内されて帝劇内に。

そうしたらさらに疑問が沸いた。玄関ホールで自分を出迎えたのは、10歳前後の幼い外国人の少女だった。帝国軍人である自分の配属先にこんな小さな女の子がいるのだ。

他にも二人女性を見かけた。一人は肩と首周りが露になった大胆な和服を着た女の子、もう一人は鋭い視線を持つクールな金髪ポブカットの女性だった。

それに入り口際の売店もさくらよりも年下に見える女の子、事務所の方も綺麗な女性が二名働いていた。軍人らしい人物といえさっきの金髪の女性くらいで、それ以外の人はずっとそれっぽいやつがまるで感じられない。

一体どういうことだろう……？これは諜報活動の一環なのだろうか？

疑問に思いながら、大神は米田の待つ支配人室へと向かった。

ジンは医務室を出て、ロビーの方面へと向かった。新しくやってきたという花組の隊長が、まさかあの日……さくらを花組みに迎え入れに行った際、怪蒸気が現れた上野公園で出会った大神になるとは思わなかった。

だが、あの人は第1印象については決して悪いものじゃなかった。後は彼が、米田が求めていたとおりの男であることに期待である。

階段で1階フロアに上ると、ちょうど大神が支配人室から出たところだった。

「……」

しかし、ジンは目を凝らして大神の顔を見る。一体どうしたのだろうか。まるで魂が抜けてしまったような、というか死んでる顔だ。

「あ、あの……大神さん？」

「…」

ジンの声にも反応がない。とぼとぼと、絶望のあまり死んだ顔を浮かべたまま、彼は上の階へ上っていった。

気になって階段を上がると、さくらと鉢合わせした。

「さくらっ？」

「あ、ジンさん」

さくらも気がついて、近づいてきたジンの方を振り替える。

「今の人、見ましたか？花組の新隊長の大神さんなんですけど……」

「ああ、見たよ。なんか死んでる感じがしたけど」

心配そうに、用意された自室に入った大神の部屋の扉を見てみると、大神が再び部屋の外に姿を見せる。さつきと同じ死人顔だ。違うのは、ジンと同じモギリ服を着ていること。そのままとぼとぼと、下の階に降りていった。

「重症だね……」

大神の顔を見てジンは呟く。

「何かあったのでしょうか？」

「うーん……もしかして……」

「ジンさん、何か心当たりが？」

「あやめさんがさつき出る前に言ってたんだ。新しい隊長が、ただ優れているかどうかじゃなくて、花組を……この帝劇を愛せるかどうか試すって」

「試す……ですか？」

「多分そのために、大神さんに嘘をついて見たんだと思う。ここはただの劇場、それ以上でも以下でもないって」

ジンは、米田から大神がどのように言われたのか予想する。

その予想は、実際に当たっていた。

帝国軍人というものは国のために命をかけることを誇る。それができないとなると納得できないものだ。まして娯楽に興じるなんてもつての他。

しかし米田は、大神は士官学校の上官からその優れた才覚を妬まれ、ここへ左遷されたのだと言い放ったのだ。ならばなぜ先日、海上で行われた新兵器実験で顔を出したのか大神が尋ねてくると、実はあれを最後に軍を退いたのだと語った。

帝国軍人として名を馳せたことがある米田が、まさか本気で帝国劇場の支配人をやって、昼から酒を片手に飲んだくれているとは思わず、大神は当然反発した。だが直後に、軍人の基本「軍人は上官の言葉に従うべし」をつき出され、大神は表情からあからさまに不満を露にしていたものの、米田から言いつけられたモギリを任されたのである。

「米田支配人も意地悪ですね。もっと違うやり方もあったかもしれないのに」

「僕たちは魔の存在から人を守らないといけないから、妥協してる場合なんかじゃない。だから米田さんは……」

大神が降りていった一階の吹き抜けを覗き込みながら、ジンはさくらに言った。

「じゃあ 僕は大神さんのところに行くよ。同じモギリだし、やり方教えてあげないと」

「お願いします」

これも命令の内だ。ジンは下に降りて大神の元に向かった。

大神はさくらに続いて、ジンとも再会を果たしたことに驚いたが、そんなものは最初のうち。馴れない活動に、この日は悪戦苦闘に陥った。

「おい兄ちゃん！早く切符切ってくれよ！」

（んなこといっても、今日がはじめてなんだぞ……！）

帝劇は毎日、長蛇の列。入場券を切るのも一苦労だ。大神はハサミで切符を切るのに手間取り、来場客はイラつきを募らせる。

「大神さん、力みすぎです。力を抜かないと手を切りますよ」

横からジンが大神にアドバイスを入れるも、この長蛇の列を処理しきれぬ早さには至らない。

「つたく、いつまで待たせんだ。こうなったら先に」

ついにはしびれを切らして前の人たちを抜こうと、列を乱そうとする人もいる始末だ。

「お客さま、いけません！列を守って……！」

彼らは銀座界限を取り仕切るギャング団の三人組だった。ジンが慌てて客を引き留めに入浴としたとたん、同じくそれを見かねた大神がジンよりも先に飛び出す。

「ここ、ここら貴様！何をしている!!」

だが、言い方がまずかった。卒業したばかりで海軍時代の名残からか、彼はついそれらしい高圧的な口調でギャングたちに突っかかってしまう。当然これに、ギャングのよいうな乱暴な者が癪に障らないはずがない。

「このウスノロモギリ！俺たちは客だぞ！その客に向かってその態度はなんだ！」

「貴様らこそ、列を……！」

「大神さん!!」

互いに反発しあうギャングと大神の間に、ジンは強引に割って入った。そして客の

ギヤングのほうに向き直り、必死に頭を下げながら謝罪する。

「すみません！この人、今日入ってきたばかりの新人の方なんです。多めに見てあげてください。…ほら、大神さん、謝って！」

「も…申し訳ありません」

ジンはすぐに大神の背中を軽くたたき、謝罪を促す。大神もとりあえず頭を下げ、謝ったが、その表情は完全に納得のいっていない様子だった。

だが、さらに大神を追い詰めるような声がとどろく。

「あゝこの兄ちゃん新入りだろ！切符の切り方も知らないでやんの！」

大神の切符切りの拙さを見て、すぐ近くの子供が指を刺して笑ってきた。大神はギヤングたちからの対応に続いて子供の生意気な言葉に内心、なんて生意気なガキなんだとカチンときた。いつそ睨み付けてしまおうかとも思ったが、相手は子供で自分は大人、それも海軍少尉だ。なんとかぐつとこらえた。

「こらこら坊や。大人に向かつてそんなこと言っちゃだめだよ。切符だよ。僕が切るから貸して」

大神が内心怒っているのに気づいたジンは、やんわりと笑みを浮かべながらフォローに入る。大神がまだギヤングともめたことでのほとぼりが冷めていないので、自らが代わりに切符を切るのだった。

モギリの仕事を一段落させた後、大神は帝劇の裏で、ゴミ箱を乱暴に蹴った。

「なぜだ、なぜ俺がこんなことをしなくちやならない！」

誇り高い軍人として、彼は士官学校で厳しい訓練を潜ってきた。その甲斐あつて首席で卒業することができた。それだけ頑張つて来たのだから、それに見合うだけの場をもらい、この国の平和のために戦うことができる。そのはずだった。

それなのに……劇場のモギリだと？客として来た子供やチンピラからも馬鹿にされるわ、やつてられるか！

「俺はモギリなんかじゃない……海軍少尉……大神一郎だああああ!!!」

大神が悔しさと怒りを滲ませた叫びを放った時、雨が降り始めて彼を濡らした。

窓からそれを偶然見かけたジン。これで本当によいのだろうか。彼は帝国歌劇団の単なるモギリにされていることに相当不服なのが丸わかりだ。

「どした？」

通りがかつてきた米田がジンを見つけ、近づいてきた。彼が見ている窓の外の路地裏を見ると、大神が雨に濡れて悔しがる姿を見つける。

「……米田さん、本当にこれでいいんですか？大神さんに、僕らの本当のことを話さないま

まで」

さくらには一応ああ言っておいたのだが、これでは大神がかわいそうじゃないか。そう思えてきたジンが米田に言う。

「少なくとも彼は帝劇の仕事を放棄するような人じゃない。それがわかっただけでも、十分じゃ…」

だが米田は真剣な険しめの表情を浮かべる。

「いいや、仕事をこなす程度で勤まるものじゃないんだ、俺たちは。お前だって、記憶を失っているとはいえ、あの馬鹿でかい降魔共と戦って見てわかるだろ？」

花組の隊長に必要なのは、もちろん実力は必要さ。けどそれだけじゃねえ…」

「この帝劇に対する愛情も必要…でしたよね」

「おお。けどこの程度じゃあまだその愛情があるとは言えねえよ。ましてや、ゴミ箱にあ八つ当たりしちまう内はな」

窓の外で、自分が蹴つ飛ばしたゴミ箱を見下ろす大神を見ながら米田はそう言った。

「けどま、俺もこのまま冷たく試し続けて、せっかくの人材を手放すのも、ちと間抜けな話だっと思うからな。ジン、そこはお前がなんとかしてやってくれ」

「僕がですか？」

どこか丸投げしているようにも聞こえる言い方であるが、米田は自分から大神のため

に動くわけにいかない理由を明かす。

「俺は司令官つて立場にあるし、それにちと野暮用も多くてな。大神をここに留めるために俺がでしやばるわけにもいかねえだろ」

「それは、まあ…」

「まあ心配すんな。あいつは山崎よか聞き分けがいいはずだ」

「山崎…山崎さんのことですか？」

米田の口から聞くと、おそらく米田とあやめ、そして今は亡きさくらの父『一馬』と同じ対降魔部隊の一人だった男の名前だと気づく。

「まあな。あいつは一馬とは違った方向ではあったが、真面目で一途な奴だったからな」  
「…ゆえに、危なっかしいところもある人だった」

「…ッ」

米田は目を見開く。その視線に気づいて、ジンは少し苦笑いを浮かべる。

「なんとなく、そんな風に言ってきたきそような気がしました。顔も思い出せていないんですけどね」

「こいつは、思わせぶりなこと言いやがって…」

てつきり記憶が少しでも戻ったのではと期待したが、それでもなかつたらしい。いたずらっぽい笑みを見せてきたジんに、米田は少し恨めしさを混じらせた笑みを返した。

「とりあえずジン、明日暇になったら大神の奴を手伝ってくれ。大道具の修繕と厨房の買出し、ついでに酒屋で俺の酒もな」

「お酒くらい、帰り際に自分で買ってくださいいよ…」

ため息を混じらせながらジンは言い返した。

次の日から、大神の未だ諦めきれない希望とは裏腹に、帝劇での仕事はこの日もあつた。

この日の舞台のため、大神はジンと共にモギリの仕事に勤しんでいた。後でかすみたちから頼まれている伝票整理も、ジンに付き添われる形で手伝うことになっている。

「すみれさんは今日も素敵な演技を見せてくださるでしょうね」

「そうね。私今回で5回目よ」

耳を濟ませると、今回もまた行われるすみれとマリア主演の『椿姫の夕』を、何度も見て、今回もまた見に来たという人たちの声が聞こえてくる。

「あたしは、奏組の人たちの演奏も聞きたくて…」

「マリアさんもかっこよくて素敵だけど、あの人たちもなかなかのハンサム揃いよね」

中にはこんな意見もあつた。大神も奏組と呼ばれる団体のことは少し聞いている。どうやら演奏を担当している人たちらしく、大半が容姿端麗な男性で占められているら

しい。

「はい、ありがとうございます。そのままです。すぐあちらの扉へお進みください」

大神はちらつと、向かい側のジンを見やる。彼は常に笑顔を保ちながら、客から差し出された切符を切つて返し、通していく。初日と比べて自分も切符を切れるようになってきて、今日も今のところ自分の切符切りの腕に文句を言う人はいない。

これで本当にいいのか？俺はこんなところで、暢気にモギリをやっている場合なのか？だが自分は軍人、命令には逆らうべきじゃない。だがこうして切符を切つて雑用ばかり。そんな答えの見えない自問自答ばかりを繰り返す。

「おいおい、兄ちゃん。手が止まつてるぜ」

「え？」

ついボーつと一人思索していたところを、声をかけられて顔を上げる。そこには先日のあのギヤング三人組が並んでいた。

「あちらさんの兄さんを見てみるよ。今のアなたと違って、笑顔にあふれている。ほかの客さんたちも、あの人の笑顔に釣られて笑顔になつてる」

ボスの男が、先日の不機嫌さと違い、年上の余裕さと寛容さを備えながら大神に言った。

「いいかい、ここは劇場なんだ。日々の苦勞を忘れ楽しむためのワンダーランドなんだ。

夢の入り口で、んな陰気な顔するもんじやないぜ？」

言われてみて、大神は確かに…と彼らから強い説得力を感じた。

その後、少しの間なぜか笑顔の浮かべ方をご教授された大神だった。

笑顔…結局頑張ってもこの日は心がこもりきつていない愛想笑いしか浮かべられなかった。

ボスからは「しつかり笑顔を作れるようになれよ」と励ましの言葉を送られたのだが、今の彼には心から笑うことが難しかった。

さらにはかすみや由里の事務仕事、さらにすみれの買い物の手伝いだのなんなの…モギリに限らずただの雑用係だ。

国のため、そこに生きる人々を守るために戦うはずだった自分が、劇場のモギリ。長年望んでいた軍人としての道から一転して公共施設の一般職員に成り下がったのだ。まだシヨックから立ち直りきれていなかった。

その夜、大神はさくらから、米田からの命令で夜の見回りを伝えられ、二人で夜中の暗い帝劇を歩き回っていた。

「大神さん、まだ元気がないですね。大丈夫ですか？」

「ありがとう、さくら君。俺は…平気だから」

あまりそうには見えない。初対面で見た時の凛々しさがなかった。

少し歩いてると、テラスの前で外を眺める人物が目に入る。

「誰だ？」

消灯時間が近い時間なのに、誰かが歩き回っているのだろうか。もしかしたら、どこからか侵入者が出たのだろうか。少し警戒しつつ近づくと、そこに立っていたのは見覚えのある男だった。

「あれ…大神さんに、さくらら？」

「その声、ジンさん？」

少し暗くなっていたせいもあってすぐにわからなかったが、さくらは声で、ガラス窓の前に立っているのがジンだとわかった。

「こんな時間に、いったい何をしてるんだい？」

「外を見てたんですよ」

大神がそれを尋ねると、ジンは外のほうを指差して答えた。二人もジンの指差した方向の景色を眺める。さくらはそれを見て、わあ…と声を漏らした。

外に広がる銀座の夜景が目に入った。数多の数街頭の光が夜の銀座の街を照らしている。それはあたかも夜空の星のようにも見えた。

「綺麗…あたし、この景色大好きなんですよ。美しく見せるためじゃなく、あくまで町を照らすための光なのに、一つ一つの光が一緒になってこんなにも綺麗に輝いてるん

ですよ。あたしも、舞台の上ではこの光の灯のような、強くて暖かい光でありたいって思ってるんです」

「そっか、さくらもこの光が気に入ってるのか」

自分以外にも、この銀座の夜の灯を気に入っている人がいることに、ジンは微笑を浮かべる。

「僕の場合、この景色を見てると…懐かしい気持ちがかみ上げてくるんだ。こんな星の光に包まれたような…そんな場所を、昔どこかで通ったことがあるような気がする。」

だから、屋根裏部屋の一部を敢えて僕の私室にしてるんだ。すぐに夜空の星を見ていられるように」

「ジンさん…」

さくらは、以前にジンには過去の記憶がないことを聞いていた。過去がない、亡くなったといえるとはいえ敬愛する父である一馬を持つていた自分には考えられないことだ。もし自分に過去の記憶がなかったら、父を慕い、こうして帝都に上京して父の意思を継ぐなど考えられなかったに違いない。それだけに、ジンの過去の記憶がないことを不憫に思った。

一方で、大神はその美しい夜景を見ても、晴れやかな顔を浮かべられなかった。ジンはそれを見て、なんとなく大神が何を考えているのか察した。

「あ……ところで、二人は夜の見回りでしたよね？そろそろ行かれた方がいいと思うんですけど……」

「あ……そうでした。すみません大神さん。お時間とらせちゃって」

「いいさ、それよりジン、君も夜は遅いし、もう戻ったほうがいい。ついでに部屋まで送るよ」

「ありがとうございます。なら、お言葉に甘えて」

話を切り替えるように話してきたジンから見回りのことを思い出し、二人はジンも加えて夜の見回りを再開した。

ふと、サロンを通りがかったところで、そのテーブルの上にあるものを見つけた。

「これは……」

近づいた大神はそれを手に取る。

「新聞ですね。米田支配人がうっかり置きっぱなしにしてたんでしょうか？」

さくらもその新聞が気になったのか、横から新聞の記事を見る。

記事には、写真つきで大きくこのようにふられていた。

『降魔戦争の救世主再来』

写真には、赤い巨人に変身したジンと、前回の敵だったデビルテレスドンの殺陣の一幕が写されていた。

赤い巨人の登場で降魔の驚異から帝都の人々が救われたこと、これからの未来に帝都の平和が約束されたのだと大々的に記載されている。ジンは少し照れくささを覚えた。

巨人の正体がすぐ脇にいる少年であることを知らない二人は記事に目を通していく。

「あの時の赤い巨人ですね…すごいですね。新聞でもすぐに、こんなに大きく掲載されてるなんて」

「さくら君たちは見たことがあるのかい？」

「はい。この眼で直接見たことがあります」

米田からの頼みもあり、赤い巨人を初めて見たのが、さくらが花組としての初出動の際のことだとは言わなかった。

「それにしても、この巨人はいったい何者なのでしょう？みんな、この巨人についてはすごく気になっているみたいですよ。」

でも、まさか…降魔戦争でもこの巨人が姿を見せていたなんて、初めて知りました。赤い巨人のことについては、さくらに限った話ではなかった。帝国華撃団のメンバーたち全員が気にしていたことだ。突然現れ、巨大な降魔を倒し、帝都とそこに生きる人々を救った…『救世主』。あの時、さくらたちもまたあの赤い巨人に命を救われた。しかも記事の見出しのとおりだと、

(米田さんたちが言っていたとおり、僕もあの時…)

米田やさくらの父一馬、あやめ、そして顔もまだ思い出せないが、山崎という男とともに降魔戦争に参加していたのか。記憶こそ回復していないが、新聞でもここまで取り上げられているなら、間違いない。

「……俺は、いったい何をしているんだ……」

「大神さん？」

大神は、表情を曇らせながら口を開いてきた。どこか怒っているようにも聞こえる低い声だった。

「俺は軍人だ。国と国民のために武器を取って戦う……それが俺の誇りだ。軍人であることを無くしたら、俺には何も残らない。」

なのに、俺はここで雑用をさせられて……帝都にはすでに降魔や怪蒸気の驚異が迫っているというのに……!」

新聞が今にも破れてしまいそうなほど、強く握り締めながら大神は悔しさに顔を歪ませた。こみ上げてくる怒りが、溜まり過ぎてダムを決壊してしまいそうなほどの激流をあふれさせる水のように湧き上がっていく。

「俺は、この赤い巨人のように……人々のために戦うことさえもできないのか……本当は俺のような国の軍人が平和のために戦わねばならないはずなのに……俺はいったい、いったいなんのために海軍を卒業したんだ!!」

我を忘れた大神は、ついに新聞を床の上に叩きつけて怒りをぶちまけてしまう。こんなことをして、どうにもならない。そんなことわかっている。だが…そうとわかって、何かに当たらずに入られなかった。

ジンとさくららは、大神の怒りの怒鳴り声に思わず身を強張らせる。大神は自分の発した怒鳴り声を認識すると、自分の顔を覆って自己嫌悪に陥る。

「…すまない二人とも、つい大声を出してしまった」

「…いえ、いいんです。大神さん。あたしは気にしてませんから…」

戸惑いが露になっていたさくらだが、少し慌てた様に両手を突き出して首を横に振った。

ジンは、背を向けたままの大神から、彼が今の自分に強いもどかしさを覚えているのを感じ取っていた。

「じゃあ、俺はそろそろ部屋に戻るよ。一応一通り帝劇内を見て回ったから…」

重苦しいオーラを背中から発しながら、大神は自室へと戻っていった。

「大神さん…」

すぐにでも、この帝国歌劇団こそが、彼が求めていた戦いができる『帝国華撃団』そのもののだと言えば、きつと彼は元気を取り戻す。…しかし、米田はまだ大神に明かしてはならないと、大神を除く帝劇全員の面々に口止めしている。

軍人というものは、自国のためなら命を捨てる覚悟も求められる。しかし花組の隊長は、人の命を勝利のために犠牲にするような戦いを繰り返してはいけないのだ。

大神が花組の隊長としてふさわしい器……ただ戦い部下の指揮を執るためだけの隊長ではなく、この帝劇の日常を愛するにふさわしい男かどうかを見極めるために。

そうでない場合は、『大神にこの帝劇を好きになつてもらおう』ことが必須だった。

そこで次の日、ジンはモギリの仕事を終えた後、大神と一緒に舞台を見るように促した。

この日もすみれとマリアを主演とした椿姫の夕。

元々興味を抱いてなかった大神だったが、すみれの普段のわがままお嬢様っぽさ、マリアの冷たいオーラからは想像もつかない見事な演技力に強く惹かれていく。

クライマックスも経て幕を閉じ、この日も大盛況だった。

「どうですか、大神さん？」

ジンはこの日も成功して安心し、横にいる大神を見る。

「……すごいよ。彼女たちの舞台にこんな力があるなんて……」

大神は、涙を浮かべながら拍手していた。

内心では、男であり軍人でもある大神は、女子供の大衆娯楽だと、どこか小馬鹿にしているところがあつたと思ひ、実際に見てもいないでそのように決め付けていた。だが

彼女たちの椿姫の夕のクライマックスが近づくとつれ、最後の悲しい結末を見てついに涙腺が崩壊したのである。

すばらしい。その一言だけで片付けるのももったいないくらいだ。

こんなにすばらしい舞台を見せる力が彼女たちにあるなんて。もつと彼女たちの舞台を見たいと思った。明日も、その次の日もずっと…

…ふと、大神にあるものが脳裏によぎる。

夜の見回りのときに見つけた新聞記事の一面。そこに記載されていた、八年前の降魔戦争で争いあつていたと聞いていた赤い巨人と、再来した人類の脅威『降魔』。

(…もし、あの降魔がここに現れたら……)

その翌日だった。

「帝劇が出る?！」

突然の大神の言葉を聞いて、ジンは声を上げた。

このとき、花組たちは稽古のために一足先に起床して稽古に励んでおり、二人だけで食堂で朝食をとっていた。そんなときに突如、大神はまだここに配属されてから1週間くらいの日数しか過ぎしていないのに、ここを辞めると言い出してきたのだ。

「今すぐと言うわけではないが、近い内に支配人に辞表を出すつもりだ」

「あの見回りの日から、ここ二三日：様子がおかしいと思つていたけど：急すぎませんか？」

「そうだな：すまない。けど、俺はこれ以上、こんなところで暢気にモギリなんてやつている場合じゃないと思うんだ」

「そんなにモギリが、嫌なんですか？」

その通りだとしたら、マリアの場合愚かしいと罵つていただろう。

「いや、：そうじゃない。この帝都が平和ならむしろモギリでもなんでもやるさ。軍人が戦う必要がないということは、それだけ平和なことであり、俺たちが最も求めているものだ」

食事を終え、大神は箸を置いて申し訳なきそうに言った。

「だが、8年前の降魔戦争：その悲劇がまたこの帝都で繰り返されようとしている。俺はこの日本のためにも、国を守る軍人として立ち上がらないといけない。

この劇場で、花組のみんなが素敵な舞台ができるようにするためにも」

「大神さん…」

決してモギリや雑用を、軍人であることを言い訳にくだらないうプライドを出して嫌がつっていたわけではない。彼なりにこの帝劇と、そこにいる皆のことを考えた上で結論

を出していたのだ。昨日の椿姫の夕が、逆に大神に「彼女たちが平和な帝都で素敵な舞台を続けられるようにする」ために帝劇を出る決意を固めさせていたのだ。

「でも、当てはあるんですか？」

「正直、ないよ。だが少しでも、この国を守るためにできることを探し、力になりたいんだ。だからまず、士官学校の伝をたどってみるよ

それに…米田支配人のこともある」

「米田さんのこと？」

何か思うところがあるというのだろうか。ジンは米田に対しては、記憶を失い身寄りのない自分を拾ってくれた恩もあるし、自分が持っている赤い巨人の力についてもわかってくれた上でここにおいてくれた人だ。そんな人に、大神がどんな不満を抱いているというのか。

「あの見回りの日、新聞で降魔と赤い巨人の戦いを記載した記事があっただろう？俺はこの国を守るために士官学校の訓練をがんばってきた。

この国を守るのは、本来この国の人間でなければならぬと思っっている。だから、あの赤い巨人のような正体不明の存在に、帝都の人々が頼りにし、よりどころにしているのは好ましく思えない。それは米田支配人が百も承知していたはずだ。

だからいても経ってもいらなくなって…一昨日米田支配人にかかけあつたんだ。軍に戻

してくれ、と。だがあの人は酒を片手に……」

『俺はもう軍を辞めた身なんだぜ。もう殺し合いなんざまっぴらだ。』

そういうのはお偉いさんどもに任せとけ。俺たちにできることなんざ何もねえからよ』

おそらく、当初の方針通り大神を試すために一芝居を打ったための虚言だろう。この帝劇の正体を知るジンはすぐに、大神が気づいてないことを察した。

さらに大神は続ける。

「あの人はかつて陸軍きつての戦略家と呼ばれていた名将だったんだ。それなのに……降魔の脅威にさらされておきながら、かつての自分の行いを忘れ、人事のように昼間から飲んだくれて……正直、幻滅したよ」

「……………」

役職も階級も、士官学校を首席で卒業したこともどうでもよく、平和のために働くことができることが純粋に喜ばしかった大神にとって、米田が彼の前で取った態度が許せなかった。

……だが、それはジンも同じことだった。いくら大神が何も知らされてないとはいえ、恩人である米田のことを悪く言ってきた大神に向けて、怒気を混じらせた声を発した。

「……大神さん、あなたは米田さんのことを何も知らないからそんなことがいえるんです」

「何?」

大人しげな口調から一転して、強気な姿勢と態度で自分を見てきたジンに、大神は彼を見る。目つきが、まるで歴戦の戦士のごとく鋭くなっていた。

「降魔戦争、圧倒的力と数を誇る降魔を相手に、あの人は自ら前線に立って帝都を救おうとした、数少ない戦士の一人だったんですよ」

「なに…?!」

「しかし、降魔戦争であの人は守りたかった帝都の人たちも、仲間も、何もかも失ってきました。それでも帝都…いや、この地球の人類のために、あの人は命がけで最後まで戦ってきたんです」

記憶を失う前の自分もまた、米田たちと共に戦ってきたからなのかもしれない。今は記憶はなく、今話した情報も米田とあやめからの受け売りだが、ジンは強く確信していた。

「そんな馬鹿な!嘘だ…米田支配人は一言もそんなことを言っていなかったぞ。それに降魔戦争の文献にだって、そんな記録はなかった!米田中將が、前線で戦っていたなんて…」

信じられない様子で、大神も反論する。降魔戦争について、士官学校でも学んだことがあるし、ほんの8年前のことだから、まだ記憶に新しく、帝都はおろかこの日本では

過去に例を見せていない最大級の災厄だった。それほどまでの災厄に米田がかかわっていたというのなら、軍人でなくとも誰もが、米田の名前と勇士を知っているはずだ。

「…まあ、それを抜きにしても、僕にとつて米田さんへの心なき侮辱は許しがたいことです。あの人は、身寄りのない僕をここに置いてくれている恩人なんですから」

「身寄りが、ない？ どういう…」

どういふことだ、といいかけたところだった。放送スピーカーから鉄琴の音が鳴り、かすみの声が聞こえてきた。

『米田ジンさん、至急支配人室へお越しください』

どうやら米田本人からの呼び出しのようだ。ジンは意思から腰を上げ、再び大神を見る。

「大神さん、ここを出るといふなら、その前に米田さんへの侮辱の言葉だけは、撤回してください。では…」

素晴らしい残し、ジンは大神の前から去っていく。

取り残された大神は、ジンの言っていた言葉に惑わされていた。

降魔戦争という、帝都の過去最大の災厄で戦ってきたという身でありながら、劇場の支配人として昼間から飲んだくれてる姿ばかりの米田。そんな米田に幻滅した自分に怒りを見せてきたジン。そして彼は身寄りがなかったところを米田にこの帝都へ置

いてもらっていると…。

「どうなっているんだ…？」

わけがわからず、その場で大神は頭を抱えた。

## 3—4 出撃！花の華撃団

「米田ジン、呼び出しを受けてまいりました」

「おお、来たか」

支配人室に入って敬礼するジンを、米田は歓迎した。

「どうだ？大神の奴は」

「……」

米田からの問いかけに、ジンは無言だった。表情も険しい。米田はそれを見て尋ねてみる。

「おう、どうした？大神の奴が俺に対して文句でも言ってきたか？」

「…ええ」

「ほお、大当たりってわけか」

自分が悪く言われているのを予測しておきながら、ジンの不機嫌な顔を見て米田は笑っていた。

「米田さん、自分がどういわれているのかもわかっててあんな…」

この帝劇が、魔の存在から人々を守る組織『帝国華撃団』の本部であることを隠す。そ

の理由は大神が真にこの帝劇を愛せるかを見極めるための措置だが、軍人として堅物すぎる彼がこちらのことを誤解するのは目に見えていた。理解したうえでやっていたのか、そのつもりでたずねようとする、米田は笑ったまま答える。

「馬鹿、部下の文句や悪口の一つや二つ、いちいち気にしてたら軍人何ぞやっていけるわけねえだろ」

いわれてみればそのとおりだが…ジンは誤解したままとはいえ米田を悪く言われたことが気に食わなかった。

「ま、んなことより…あいつは他に何か言っただけか?」

「近いうちに、帝劇を辞めると」

「辞めるう?」

耳を疑ったのか、米田は呆れたような声を出す。

「当てはないと言っただけですが、海軍のつてをたどって身の振り方を考えるおつもりでしょうか?」

「まったく、敢えて何も知らせてなかったとは言え、海軍首席卒業のくせして馬鹿だねえ。他になにか言っただけか?」

「他に、ですか?」

「おう、この帝劇のことについての不満とかだ。つまらねえプライドでも口にしてたん

じゃねえか？」

米田は話を聞く限り、大神が残念ながら花組の隊長として、最も持つておかなければならないものを持つていなかったと、捉えつつあった。

ジンもそう思えてきた。あの人では……と思いかけたとき、思い出した。ひとつだけ、彼が好感を持てるような言葉を口にしていたはずだ。

「一応、この帝劇のみんなが安心して舞台に励むことができるようになるためにも、とおっしゃってました」

「ほお……」

それを聞いて米田は、さつきと打って変わってほくそ笑む。それを聞きたかった、とても言いたげな満足げなものだ。

「それより、米田さん。僕に何か用があったんじゃないんですか？」

「おっと、そうだったな」

わざとらしく気を取り直す言葉をいい、改めて米田はジンに向き直った。

「これから大神の歓迎も兼ねて花見の下見に行ってもらおうと思ってるんだ」

「迎え入れるんですか？あの人、辞めるつもりなのに」

「辞めさせるかよ。この帝劇をなんだかんだで、大事に思ってくれていることがわかったし、なにより俺たちは次の戦いで戦果を出せなかったら解散命令が下される。辞表を

出してきやがったらその場で破り捨ててやるぜ」

米田はどこか意地の悪い笑みを見せてくる。その顔を見てジンは、悪い大人の顔をしていると思つた。大神にあえてこの帝劇の秘密を隠したのも、大神をいじつてやろうとでも思つた意図があるのではと疑わされる。

しかし大神が、米田とあやめが求めていた、靈力を扱える男性にして海軍を首席で卒業するという貴重な人材なら、本人が辞職を希望しても手放したくない。帝都の危機はそこに生きる人たちの共通の脅威だというのに、いまだ自分たちの財産の心配ばかりする賢人機関のために解散命令を下されるなんて、とても許せる話じゃない。

「それはそうと、お前はこれから上野公園に行け。お前が大神とさくら、あの二人と始めて会つた場所だ」

「あそこか……」

椿と一緒に大神とさくらの二人と出会つた、あの公園か。桜の木々がとても綺麗にかつ満開に咲いていた場所だ。花見の場所としてはちようどいい場所だ。

「場所はもうわかるな?」

「大丈夫です。記憶がないからつて、物覚えが悪いわけじゃないですから。

それじゃ、行つてきます」

上野公園は、大神とさくらの二人と出会ったときと同じく、満開の桜であふれていた。まだ緑化も進んでおらず、風に吹かれて散っていく桜吹雪が美しく、見るものすべてを魅了する。あの時、脇侍が現れて大騒動になったのが嘘のようだった。

すると、足元に一個の丸い鞠が転がってきた。子供たちが転がしてきたものが来たのだらう。ジンはそつとそれを拾うと、幼い少年が彼のもとに駆けよってきた。この子のものだらう。彼は黙ってその鞠を手渡した。

「ありがとう、お兄ちゃん！」

少年はジンにお礼を言つて走り去つていき、ジンは手を振つてその子を見送つた。

少年は友達と思われる他の子供たちと合流すると、きやつきやつと騒ぎながら走り回つて友達同士で遊び始めた。それを見て自然とジンは微笑みを浮かべた。

そういうえばあの時、トラと呼ばれた子供を庇おうとした自分は赤い巨人の力の片鱗を発現させて脇侍を退けたが、大神とさくらの二人がいなかったらまずかつたかもしれない。

米田のことを悪く言われて頭に血が上つていたかもしれない。あの人は純粹に、誰かのために頑張りがつただけだ。それだけに、大神の器を見極めるためにあえて嘘をついた米田に対して怒りたくなるのも、考えてみれば何も知らされなかつた彼の立場から考えてみると当たり前のことだ。

(帰ったら謝っておこうかな…)

米田に対しては強く恩を感じているだけにあの時は大神に対してもつい苛立ちを感じたが、それはお門違いだと改めて思い、ジンは戻ったら大神へ謝罪することにした。

…と、今は下見に来ていたんだったな。気を取り直して彼は、花組の皆が花見を楽しめそうなスペースを探し回る。

「うわっ!」

「おう!?!」

ふと、それを探し回るのに集中するあまり、前を見るのを怠った彼は前にいた誰かとぶつかってしまふ。

「す、すみません!」

「いえ、こちらこそ…」

咄嗟にジンは目の前にいる人物に謝罪する。ふと、彼は違和感を覚える。目の前の人から発せられた声に聞き覚えがあった。

その顔を見て、ジンは目を見開く。相手の人物もまた、少し驚いたようにジンの顔を見返していた。

「あなたは、あの時の!」

「君は確か…!」

ジンがぶつかってしまった人物、それは以前、デビルアロンと交戦する前に出会った美青年、ルイスだった。

「大神さん、この帝劇をお辞めになられるって本当なのですか!？」

一方、帝劇では大神が帝劇を辞職するという話を聞いて、さくらたち花組が彼の元へ問い詰めに来ていた。

「…ああ、近いうちにここを出る」

大神は言いづらそうに肯定した。

「お兄ちゃん、そんなのだめー!」

アイリスが大神の辞職に対して猛反対する。

「少尉、辞職とはずいぶん急すぎませんか?」

すみれが大神を細い目でじっと睨みながら問いかけてくる。それに同調してか、マリも快くない視線を大神に向けた。

「モグリが軍人の仕事ではないとでも考えたのですか? 詰まらないプライドだとは思わないのですか?」

大神は首を横に振る。

「プライドとか、もはやそんな問題じゃない。降魔や怪蒸気の脅威がすぐそこまで迫っ

ている。それなのに、何もしないままここでモグリをやっているようでは何も守れやしない。

マリアの言うとおり俺だって軍人だ。噂の赤い巨人に頼りきりになんてできない。

だから、少しでも可能性の見える道を行きたいんだ。君たちが、安心して舞台を帝都の人々に見せられるように」

「大神さん…」

その言葉自体は嬉しい。マリアが指摘したような理由でここを出るといっわけではなく、彼なりにこの帝劇を思つての決断なのだとは理解した。だが、それでもここにてほしいという願いが、この時のさくらとアイリスの中にあつた。

「…すまない。もう決めたことなんだ。みんなと別れるのは辛いけど、このまま行かせてくれ」

だからさくらは、実はこの帝劇が大神が赴任する『帝国華撃団』の本部なのだと伝えようとした。

「でも大神さん、ここは大神さんが望んでいた…」

「さくら!!」

しかしそれを、マリアが遮つてしまう。その声に驚いてさくらはビクツと身を硬直させ言葉を途切らせる。そして鋭い視線を向けて『それ以上は言つてはいけない』と目で

伝える。

「で、でもマリアさん…米田さんにとっても…」

だが大神がここを抜けることは、この帝国華撃団としてはあまりに痛手だ。それでも、もう伝えるべきではないのか？ さくらは目で訴え返す。

「さくら君、マリア…？」

何か言いたいことでもあるのだろうか？ 二人が何を伝え合っているのかわからない大神。

米田の名前を口にしていたが…。ふと、米田の名前を聞いて大神は、さつき自分に殺気立っているような視線を向けてきたジンの顔を思い出す。

「みんな、少し…聞いていいかい？」

皆が大神のその一言につられ、彼に注目する。

「ジンから聞いた。米田支配人は、かつて降魔戦争で最前線に立っておられたと。

なのになぜ、生粋の軍人だった米田中将が、ここで支配人をやっているんだ？ あの人のほどの軍人なら、たとえ退役したとしても…ここで劇場の支配人として留まるなんて、呑気すぎると思うはずだ。いっどこから襲ってくるかわからない以上、降魔の脅威だつてこの帝劇にとつても無関係じゃない。なのになぜだ？」

「それは……」

その問いに、さくらたちは口ごもる。米田からの口止めが解かれていない以上、離すことはできない。しかし大神は、彼女たちが何かを隠していることを確信した。

「答えてくれ。君たちは何を知っている？俺に何を隠しているんだ？」

その時だった。

帝劇の館内に、激しい警報が鳴り響いた。

「ふ、この警報は…!？」

突如帝劇内を響き渡る警報に驚いた大神は周囲をきよろきよろと見渡す。火事でも発生したのだろうか。さくらとアイリスは大神に問われた途端に言いづらそうにする。実はこの警報は、帝都に魔の手が忍び寄ったこと、それに対処すべく帝国華撃団召集命令が下されたということだ。だがまだ、米田から明確に秘密解禁の命令が下されたわけじゃないから、二人は返答に困らされた。

一方で、警報を聞いた途端にすみれとマリアの二人が真つ先に二階の方へ駆け上がったいく。

「ふ、二人ともどこへ!？」

驚く大神だが、二人は見向きもせず二階へ姿を消していく。すると、さくらとアイリスも目つきを変えて大神の服をつかんできた。

「さくら、お兄ちゃんを連れて行っちゃおうよ！」

「そうね、すみません大神さん！ちよつと強引ですが、着いて来てくださいい！」  
「え!?ちよ…うわ!!」

待つてくれ!と叫ぶ間も与えられず、大神は強引に二人に引つ張られていく。マリアとすみれの二人が駆け上った二階の、花組の面々が使っている私室の廊下の奥。そこへたどり着くと、奥の壁が上り、8つのダストシユートが着いた隠し部屋が露わになる。

「こんなところに隠し部屋が!」

「ほら、大神さん!驚いてる場合じゃありません!」

「早く早く!」

「うわああああああああ!」

驚く大神をそつちのけに、さくらとアイリスは大神の目の前のダストシユートのふたを開き、そこへ大神を無理やり投げ行つた。大神が落ちたのを確認すると、さくらとアイリスもそれぞれ別のダストシユートへと飛び込んでいった。

「そうですか、ジンさんは花見の下見のためにこちらへ来られたのですね」

「はい。新しい隊長が赴任したので、その祝いを兼ねて」

「新隊長ですか…私も聞き及んでいます。確か海軍出身の方で、大神一郎という方ですか」

同じころ、ジンとルイスは上野公園の桜並木の道を共に歩きながら互いに話していた。

ルイス：本名はフランシスコ・ルイス・アストルガ。花組と風組とは別に編成された、弱い降魔が成長する前に叩く、花組の負担を少しでも多く和らげるための部隊『奏組』。彼はその現リーダーを務めているという。

「けど、こうしてあの時の方と会えるなんて思ってもみませんでしたよ。あのときは、本当にありがとうございますよ、ルイスさん」

「彼と会うのは、ジンが赤い巨人の力に目覚めたあの戦いの直前以来だ。あの時は互いのことを全く知らないままだったが、まさか互いに帝国華撃団の関係者とはお互いに驚かされたものである。」

「花見、僕は初めてだからちよつと楽しみなんです」

「花見の経験はないのですか？」

「ええ、まあ……」

自分には記憶がないから、本当に初めてなのかどうかは不明だ。けど、記憶を失ってから初めての花見。自分の新たな思い出になるかもしれない。

「ところで、ルイスさんも花見の下見に来られたんですか？」

「いや、私は…仕事で来てるんですよ」

「仕事？」

「ええ。ジンさんも、以前ここで起きた怪事件のことはご存知ですよね？」

ルイスからの問いにジンは頷く。知っているも何も当事者だ。

「以前ここで脇侍たちが暴れた理由を調べているんです。彼らは人を襲う脅威という点では降魔とは変わらない存在ですが、人工物であるという違いがあります。おそらく何者かが何かしらの目的を果たすために造り出した可能性があります」

「なるほど…」

思えば、脇侍も見るからに人工物だ。無目的で作られたものとは考えにくい。もしただ暴れさせているためだけに造られているとしたら、何ともはた迷惑な話だ。

「前回の花組の方たちと赤い巨人が交戦したエリアの、降魔出現前に脇侍に破壊された祠から、わずかに霊力が感知されたことがわかってます」

「祠、ですか？」

「この帝都には魔を鎮めるための祠などが、多数設置されています。降魔や怪蒸気にとつては邪魔なものです。だからあの長屋の地点にあった祠の石が破壊された。」

もしかしたらここにも奴らを引き寄せるだけのなにかがあったかもしれない。それを突き止めたら、事が起こる前に被害を抑えることも可能かもしれない」

「さすがルイスさん、そこまで調べていたんですね」

奏組をまとめているだけある。ジンは素直にルイスの手腕の良さを称えたが、ルイスは首を横に振ってきた。

「いや、私なんて大したことないですよ。私たちにできることなんて、花組の方々と比べると、ほんの一握り程度でしかありません」

その時、一瞬ルイスの表情が曇ったように見えた。それも、もどかしさの他に悲しみを帯びたものに見える。しかもさつきから笑みさえ浮かべているから、それがまた自嘲じみたものに見られ、何か彼に深い事情があることを思わせてしまう。

「ルイスさん……」

しかしそれを尋ねようとした途端、ルイスはまるでそれをあらかじめ悟ったかのように、話を切り替えてきた。

「あ、ジンさん。あのあたりがよいのではありませんか?」

「え、あ……ああ……」

ルイスが指をさした方向に自然と目が行く。他よりも大きめの桜の木が、花びらを多く散らしながら佇んでいる。その根元は、シートがなくても腰を掛けるのにちょうどよさそうな綺麗な芝生が生い茂っている。

「確かに、ここならちようどよさそうです。ルイスさん、すみません。これは僕が頼まれ

てたことなのに」

「いえ、これも花組の方々へのささやかな恩返しのもりです」

礼を言ってきたジンに、ルイスは謙虚に断りを入れてくる。すると、彼の顔がさつき一瞬だけ見せた、憂いを含めた笑みに変わっていた。

「私たち奏組は、花組と違って霊力が低く、量子甲冑を稼働させることができない。だからごく小さくて弱い降魔しか倒すことができません。

量子甲冑を扱えるあの方たちは、さらに強力な敵を倒すことができる一方で、その分の先も数多くの苦労を背負うことでしょう。ですから、こうして少しでも、彼女たちの戦いの負担を減らして差し上げたいんです」

「ルイスさん……」

「すみません、最後に愚痴っぽくなりましたね」

苦笑交じりにルイスはジンに謝ってきた。いや、とジンは一言だけ気に留めていないことを伝える。この人、笑みを見せてなんでもないふりをしている。光武に乗れない、操縦できない。その苦悩を彼は抱え込んでいると、ジンは読みとった。もしかしたら、新たに赴任してきた大神に対しても内心では劣等感を覚えているのではないだろうかとも予想した。

そのときだった。

「うああああああああああ!!」

その叫び声と共に、上野公園は再び混乱に陥ることとなる。

その時、ジンたちと同様、この上野公園に派遣された者がいた。

黒之巢会の死天王の一人、蒼き刹那である。

「天海様の命令通り、目的の場所に着いたな。にしても、全く…」

到着早々、刹那はいかにもイラつきを感じているのか、深いため息を漏らす。

「花なんか見ただけで、なんでこうもギャーギャー騒ぐんだろうなあ。人間の考えることなんてわからないよ」

この刹那という少年に人間の感性がまるで理解できなかった。彼にとつて興味があるのは、そんな『ありきたりでつまらないもの』ではない。彼が求めているのは常に、人の苦痛と恐怖に満ちた声と表情だけ。故に、この花見の景色とその喧噪はあまりにも耳障りかつ目障りだった。

「まあいいさ。ここで適当に脇侍を暴れさせてしまえば…それで僕の欲は満たされる。まずは…手筈通り…」

刹那はニヤツと冷酷な笑みを浮かべ、鋭くとがった爪を生やした手を地面の上に置く。すると、彼の足もとに怪しげな光を放つ魔法陣が展開される。

「オンキリキリバサラウンハツタ…オンキリキリバサラウンハツタ、オンキリキリバサラウンハツタ、オンキリキリバサラウンハツタ……」

周囲の人たちも当然気づき、あいつはいったい何をしているんだと、奇異の目で刹那を見やる。少なくとも彼が、まともではないことをしようとしていることを察した人が、恐怖を感じて離れていく。しかし子供たちは「すっげー！」と興味を抱いて近づき者さえた。

「いでよ……魔の力を授かりし怪獣…『魔獣』よ!!」

刹那が叫ぶと同時に、その場から飛び退いた瞬間だった。

魔法陣から、昼間とは思えないような真つ黒な闇があふれ出て、天へと立ち上つていく。

やがてその闇は周囲を覆い、上野公園をたちまち混乱と恐怖に陥れた。大人から子供まで、パニックに陥る人々の叫び声を、刹那は強く快感を覚えた。

「ほらほら早く来なよ、帝国華撃団に赤い巨人。でないと…ここにいる人間、僕たちが皆殺しにしちゃうよ?」

せせらわらう刹那の背後から、彼の作った方陣を通して巨大な生物の影が、地の底より這い出てきていた。

ダストシユートから飛び出してきた大神は、床に落下した際に打った尻をさすりながら立ち上がる。その際、自分の着ている服がモギリ服から完全に変わっていることに気付く。ダストシユートを通っている間に自分の知らない間に着替えさせられていたのだ。さらに目の前に飛び込んできた光景に、彼は目を見開く。

巨大モニターに作戦会議用の長テーブル。そこはまさしく作戦会議室だった。

「これはいつたい…」

「よう大神。なかなかよく似合うじゃねえか」

自分を呼ぶ声に大神は振り返る。そこには軍服を着こんだ米田と、同じく戦闘服に着替えたさくらたち花組のメンバーたちと、椿・かすみ・由里の三人全員が揃っていた。

「米田支配人。これはいつたい…!?!」

「お前を騙すような真似をしてすまなかつたな。今から説明してやる」

それから米田たちは大神に説明した。この帝劇は帝国華撃団の本部であり、歌劇団は世を忍ぶ仮の姿であること。普段の歌劇団としての活動は資金集めと、帝都の人々の心に安らぎをもたらして魔を鎮めるため。いざ降魔や怪蒸気が現れた場合は本来の任務である怪魔討伐に当たるということ。敢えて隊長に赴任することになった大神に、この事実を伏せていたのは、大神が軍人として以前に、この帝劇の生活と日常を愛し、そしてこの帝劇の仲間たちの身を強く案じることができ存在であり、決して犠牲を強いる

ような存在ではないことを確かめるためであるということ……これまで大神に秘密にできたことすべてを明かした。

「では、ここは本当に軍の……自分が配属予定だった帝国華撃団の本部だったんですね!」

正直大神にとって衝撃的なことの連続だった。劇場が配属先の本部であり、激情の花形女優が、自分の部下となる華撃団の隊員だったとは。頭が混乱しそうだったが、同時に喜びもあった。自分が求めていた勤め先が、幻なんかじゃなかったのだ。

「そうだ。帝国華撃団・花組。その隊長の任……お前に任せてもらうぞ。

風組、すぐにモニターに出してくれ」

「はいー」

椿・かすみ・由里の三人はすぐモニターに、事件が発生した現場の状況をモニターに出した。映し出された場所の景色は、非現実的な異様な光景を映し出していた。

「なんですの? 昼間のはずだというのに、夜のように暗いですわ」

すみれが訝しむように、映像に映された場所の、暗黒に満ちた景色を見て眩く。それを説明しようと、かすみが口を開いてきた。

「現在、上野公園で謎の黒い霧が発生し、近隣の人々がパニックに陥っています。被害状況、および避難状況については把握できていません」

「おそらくあの黒い闇のような霧の影響で、避難はまともにもできていないとみるべきね」

「マリアが映像内の上野公園を見て、黒い霧のせいで避難状況が芳しくないことを予想した。」

「現場には花見の下見のためにジンが、そして小型降魔の調査任務で派遣していたルイスもいる。いつものことだがあまり呑気にはしてられないな」

「ルイス…?」

「奏組のリーダーさんだよ。アイリスたちが劇をしてる間はね、笛を吹いたりバイオリンを弾いたりしてるんだよ」

「なるほど、オーケストラ担当の人なのか。華撃団って多彩なんだな」

「聞きなれない名前を耳にして大神は首を傾げると、アイリスが説明を入れてきてくれた。」

「大神、華撃団の詳しい説明については、この戦いを終えてからにしてくれ。今はジンたちも、現場に逃げ遅れた人々のためにも時間が惜しい。直ちに出撃し、上野公園内の人たちの救出、および敵の討伐を頼むぞ」

「はい!!」

初めての、帝国華撃団・花組隊長としての戦闘。高まる昂揚感を胸に、大神はさくら、すみれ、マリアの三人と共に出撃した。

その頃の上野公園は、刹那の行いによって地獄絵図寸前だった。

「うわああああ!!」

「た、助けて!!誰か!!」

彼の形成した魔法陣から発生した黒い霧は、上野公園の真上に広がっていた青空を闇で覆いつくし、人々を暗黒の中に惑わせた。さらに刹那は徹底的に公園に来訪していた人々をいたぶるつもりか、脇侍を何十体も召喚して人を襲わせる。

「いや、やめ……ぎゃああああ!!」

脇侍たちは、逃げ遅れた人に対して容赦なく刀を振り下ろし、殺戮の限りを尽くしていく。

「はははははは!そうだ、もっと怯えろ!そして恐れおののけ!黒之巢会死天王が一人、この青き刹那の力にね!!」

闇の中から現れる脇侍を操りながら、刹那は耳に轟く恐怖と絶望の叫びに、大変な興奮を覚えていた。

今回の自分の任務は弱い人間共をただいじめめるだけ、というわけではない。これから自分たち黒之巢会の敵となる『帝国華撃団』なる組織と、彼らに組している謎の赤い巨人の力量を測ることだ。

さらにもう一人、彼はちょうど目に入った、逃げ遅れた女性に向けて跳躍し、彼女の

眼前に立つ。

「ひ…」

「くくく、いいねえ、その恐怖に満ちた絶望の表情：僕はその顔が好きなんだ。ねえ、もつと見せてよ？その綺麗な顔をズタズタにしてあげるからさあ！」

邪悪さに満ちた歓喜の笑みを露にし、刹那は右手を振り上げる。その手から延びる爪は血のように紅く染められ、剣のような鋭さがあった。非情にもそれを振り下ろした刹那。女性は目を伏せて、自分に迫る死に恐怖するしかなかった。

だが、その時だった。どこから飛んできたチャクラムが、刹那の方を狙って飛んできた。刹那は反応が遅れて避けることができない。チャクラムは刹那の爪に直撃し、弾き返される。

「ぐ、誰だ!？」

せつかくの至福の時の邪魔をされ、刹那は顔を歪める。チャクラムは円を描くように、駆けつけてきたルイスの手に戻った。

「大丈夫ですか!？」

さらにもう一人、ジンが女性のもとに駆けつける。酷く怯えている様子だが、かろうじて怪我だけは負わされていなかったようだ。

「君は、ここに何をしているんだ…!？」

ジンは顔を上げて、刹那を睨み付ける。

「見ればわかるだろ？この公園をめちゃくちゃにしに来ただけさ」

まるで意味が分からない。ただ壊すためだけにこんな騒ぎを、この少年は起こしたというのか。

「どうしてそんなことを！」

「理由でも聞きたいの？それで僕に『こんなことしちゃいけません』って、年長者面でもして説教でもするわけ？」

刹那は逆にジンに対して、何を言っているんだとも言っているように言い返してき  
た。

「人をむやみやたらに傷つけて心が痛まないのか!？」

人を傷つけ人は人を憎み、争い、さらに互いに傷つけあう。その愚かさはたとえ記憶を失った今でも、はつきりとジンは認識していた。故にこの少年が、あからさまに好き好んで人を傷つけ襲っていることが理解できなかった。いや、したくもなかった。

「いるよねえ…そういう…」

さらに言ってきたジンを刹那はうつとおしく感じ、眉間にしわを寄せながら心底不快感を抱く。

「自分が正しいって遠回しにほざくウザったいだけの奴ってさあ!!」

爪を鋭くとがらせながら、今度はジンに標的を変えてそれを振り上げた。だがその瞬間、刹那の足元にチャクラムが投げつけられ、刹那は舌打ちしながらとっさに避ける。

「ジンさん、ここは私に任せて、行ってください」

ルイスが手元に戻ったチャクラムをつかみ、刹那と対峙したまま背後のジンに言った。

「ルイスさん、でもそいつは……!」

「ええ、脇侍を召喚するほどの強大な妖力、私でも勝てるかどうかはわかりません。ですが、その女性をここに置いておくことはできません。

いいから行ってください!」

ルイスは強く甘いマスクからは想像のつきづらいほど大きな声で言い放った。折れる気配がなく、そして今はいちいち説得に応じている暇がない。なら言われた通り一度引き上げるのがいいだろう。ジンもできれば女性のことをルイスに託しこの場に残って、刹那と戦うことを選びたかったが、ルイスに万が一のことが起こる前に、女性をどこかに預けた後で変身すれば……

「逃がすと思ってるのか? めでたい奴らよ」

刹那が指を鳴らすと、ジンさえも逃がすまいと、周囲に脇侍たちが結集した。

「さて、このまま大人しく切り刻まれてよ。せつかくだし、最後に一つ好きな方を選ば

せてやるよ。僕自身に切り裂かれるか、それとも脇侍に細切れにされるか……」

逃がす気さえも見せないとは。よほど自分たちをなぶり殺しにして楽しみたがつて  
いるようだ。あいつの目がそう語っている。ジンは刹那を見て確信した。

ルイスは、どうすれば被害にあつた女性とジンを逃がすことができるのか必死に模索  
した。だが自分の霊力では、脇侍を倒すことはできない。すでに認知していたこととは  
いえ、自分の無力さを常々呪わされる。

ふと、そのとき、上野公園の地面が妙に揺れ始めた。

「なんだ？」

刹那も違和感を覚えたのか、辺りを見渡し始める。

すると、上野公園近くの水路から、大きな影が飛び出してきた。

それは、大型の列車だった。レールに乗らず、水中から打ち上げられたかのごとく姿  
を現した

帝国華撃団の光武移動用車両『轟雷号』だ。

さらにその車両の横から、四つの光武が飛び出し、ジンとルイスたちの周囲の脇侍の  
前に降り立つと、瞬時にその脇侍たちを切り裂き、撃ち抜いて撃破してしまった。

「何者だ!」

刹那が顔を歪めて、邪魔をしてきた四つの機体に怒鳴る。

それにこたえるかのように、機体から四人の若い声が轟いてきた。

「帝国華撃団・花組、参上!」

「花組……!」

ついに花組が派遣されてきたのだ。ルイスがほっと一息ついた。

今度は新たに、真っ白な機体が追加されている。その光武には、大神が搭乗していた。

「ジンさん、お怪我はありませんか!?!」

「さくら、僕なら大丈夫だ。助けに来てくれてありがとう」

桜色の光武からさくらの声が聞こえてきた。彼女に続いて、白い期待から大神の声が

聞こえてきた。

「ジン、ここにいては危険だ。すぐに下がってくれ」

脇侍たちは、さっきの花組の登場と共に撃破された。今なら逃げる事ができる。

「ルイスさん、今のうちにひきましよう。この人も安全な場所に運ばないと」

「ええ」

ルイスや救出した女性と共に、ジンは安全な場所へといったん引き揚げた。

「帝都の平和を乱す者は、俺たちが許さない!行くぞ、みんな!」

「了解!」

大神の掛け声に応え、花組のメンバーたちも応じた。

「まったく、いいところづくづく邪魔が入るよね」

結局獲物から逃げられてしまい、刹那は機嫌を悪くしたが、すぐ新たに獲物を大神たちに変え、爪を舌でなめとりながら笑みを浮かべた。

「まあいいさ。あんたたちが遊んでくれるってことだよね？」

刹那としては、彼ら帝国華撃団が現れたのはむしろ都合だった。赤い巨人がまだ現れていないが、それはまだいい。引つ張り出す手ならある。

まずは奴らの戦い方を探りつつ、その動きを知る。そして…

「お前らの誰に…消したくても消えない闇があるか…見せてもらうよ」

## 3—5 共闘!ジン&amp;花組

「みんな、油断するな。互いに連携し合いながら潰していくんだ!」

刹那と、自分たちを取り囲んでいる脇侍を見て、大神は各隊員に命令を下す。しかし

「少尉はとんだジョークがお好みですね。この程度の敵に連携など必要ありませんわ。」

せつかくの機会ですから、私がお手本を見せて差し上げましょう!」

すみれは命令を無視し、自ら先行して薙刀を脇侍たちに向けて振りかざした。一刀両断。脇侍たちはすみれの一太刀によって数体ほどが一変に切り裂かれてしまった。

「脇侍を、同時に…」

大神は命令無視を受けて一瞬茫然としかかったが、すみれの腕に驚きと関心を寄せ

る。巨大降魔…魔獣との戦いでは相手が相手なだけに十分な成果を見込めなかったが、本来すみれは薙刀の腕前に関して右に出るものを出さないほどだ。脇侍が数体程度が一度に相手になっても敵ではなかった。

「すれみの言うことも正解だと思います。巨大降魔もない現在、相手は大したことのない脇侍の群れ。烏合の衆です。ここは各員で散開して対処した方が効率的と判断します」

すると、マリアまでもすみれに同調して、個人プレイに走り出した。西部劇さながらの銃捌きで、脇侍たちを撃ち抜き始めた。

まずい、一人一人がめいめいに行動しては、いざというときに足元をすくわれてしまう。

「大神さん、光武の操縦は初めてですけど、大丈夫ですか？」

最後の良心にも思える声が聞こえてくる。どうやらさくらだけは大神の言うことに耳を傾けてくれた。

「ああ、思った以上になじんでるよ。初めてなのに、しっかり動ける」

大神は、自分の身を纏う白い光武の腕を動かして見せる。大神が腕を軽く動かす、そのように認識し動かして見せるだけで、光武もまたその通りに動いてくれていた。一見ロボットのようにも見えるが、『靈子甲冑』というだけあり、まさに甲冑そのものだ。

「大神さん、私が援護します。同じ新人同士、頑張りましょう！」

「ああ、頼むよさくら君。君と初めて出会った大切な思い出の場所だ。必ず取り戻そう！」

「え、は…はい!!」

その言葉に、さくらは胸の奥がドキツと跳ね上がった。思わず裏声になりかけるあまり、大神に変な風に聞かれていなかったか、それだけが気がかりだった。

大神たちの助けもあり、ジンとルイスはあやうく刹那の手にかかりそうになった女性を連れて、黒い霧に覆われた上野公園を出た。

「ここまでくれば、ひとまず安心ですね」

「あ、ありがとうございます…」

女性はジンたちに礼を言い、深く頭を下げる。

「いいのです。それよりも、すぐにここから離れてください」

「は、はい…」

ルイスは女性受けしやすいほどの美形。女性は彼の優しい笑みと言葉に顔を赤らめ、名残惜しそうにその場を後にした。ジンは心なしか、ちよつと同じ男として悔しく思った。

(いつそ顔を変えられたら僕もモテるのかねえ…)

自分は普通の容姿、悪いというわけでもないが、特にこれと言って女性の気を引くほど端正というわけでもない。しかし同じ男として、どことなく悔しくなってしまうから

できもしないことを想像してしまう。

「ジンさん、どうかしたんですか？少し表情が険しいようですが」

「あ……いえ、なんでもありません。それより、この後ルイスさんはどうします？」

不思議がつて名前を呼んできたルイスに、ジンは我に返つて平静さを装つた。

「今回は他の奏組の仲間ともこの付近に来ていました。まずは彼らと合流し、避難状況を確認するつもりです。あなたも帝劇に戻られて……」

「いえ、僕も他に逃げ遅れた人がいないか、見てきます」

「し、しかしあなたは……」

首を横に振つてきてそのように言つてきたジンに、ルイスは気が進まない思ひだつた。彼は確かに帝劇に所属するという意味では自分と同じ立場だ。しかし、彼が戦闘員であるという話は聞いていないし、本人も自分との間に交わした自己紹介の際には言っていない。戦えない人間がまた危険な場所に飛びこむというのは許容できるものじゃなかった。

しかし、ジンはルイスに向けて言い放つ。

「僕も、帝国華撃団の一員です」

「あ、ジンさん！待ちなさい！」

その言葉を最後に踵を返し、ジンは上野公園の方へと引き返した。

手に、自分がもう一つの姿となるために使う赤い眼鏡：ウルトラアイを握って。

司令室にて、大神たちの光武に搭載されているカメラを通し、彼らが戦闘を開始したのを確認した米田たち。

「ほお、はじめてにしちややるじゃねえか大神の奴」

米田も現時点でだが、大神たちの戦いぶりに関心を寄せていた。

すみれとマリアの読み通り、脇時一体一体の戦闘力は大したことはなかった。初めて光武を操縦する大神も、さくらの援護もあつて脇侍たちにまったく後れを取ることにはなかった。

大神はすみれとマリアの独断についてはひとまず気に留めないことにし、さくらとともに彼女らの援護に回りつつ脇侍を撃破していく。

「お兄ちゃんすごい!!がんばれー!!」

アイリスも大神たちの活躍を見て、はしゃいでいる。

「霊力も安定しています。さすが司令が見込まれた通りの人です。この視界の悪い環境下でも、さくらさんとの連携を保って冷静に対処しています」

光武に搭載されている霊力測定器の結果をリーダー越しに確認していたかすみも同調するが、一方で一つ憂いを感じた椿が口を挟んできた。

「でも司令、大神さんをいきなり実践に投入するのはいささか早すぎたんじゃありませんか？」

「脇侍相手にあたふたするようじゃ、花組の隊長なんて務まらねえよ。それに俺たちはいついかなる状況だろうと、未知の敵と戦わにやららん。言ってみりやこの戦いも一種の適性試験だ」

「言われてみれば、そうかもしれませんけど…」

「そんなこと言つてえ、本当はお兄ちゃんのこといじめて面白がつてたりするんじゃないの？ お兄ちゃんをいじめたらアイリスが許さないんだからね？」

アイリスが米田に向けてめー！というように指をさしてくる。帝劇の正体のことについても隠してその反応を見ていたことについては、米田も少し悪戯心を混じらせていた。バレたか、と軽く笑つてみせた。

「で、その未知の敵と、現場およびジンたちの避難状況について、なにか情報はねえか？」  
「避難については、現地に派遣していた奏組の隊員たちが順調に進めてくれています。ジンさんのことについては…まだ情報が届いていません」

「そうか…」

怪我の情報が無いのはマシなのか、それとも…いや、あいつのことだ。ジンはああ見えて結構しぶとい男だ。それにあまりジンのことを気に留めると司令としてよろしく

ないので、米田は情報が届くまでジンのことから少し離れることにした。

「じゃあ敵の情報について、何か調べは？」

「敵の情報についても同じです。『月組』が全力で調査中なのですが…」

米田は再びそうか、と呟いたのち、モニターに視線を向ける。

この黒い霧についても、やばい気がするというだけでまだはつきりとわかっていない。モニターに映っている小柄なあ少年…あいつが発生されていることくらいだ。この黒い霧、目くらましのつもりで発生させているのだろうか。だが少なくとも大神たちは近くの脇侍を中心に撃破していつてる。今のところは特に大きな問題はないように見えるが…。

「へえ…やるじゃん。脇侍をちよつと多く差し向けた程度じゃ怯まないか」

花組が脇侍と交戦している間、刹那は黒い霧に紛れて姿を消し、上野公園内にある神社の鳥居の上から花組の戦う様を観察していた。

「結構頑張ったね。でも、次はどうかかな…？」

刹那は歪みきつた笑みを浮かべ、飼っている動物でも呼ぶかのように、指笛を鳴らした。

その音に導かれたのか、刹那と彼を乗せる鳥居の背後に、再び巨大な影がちらついて

いた。

「ほらほら、例の赤い巨人でも出してきなよ。でないと次は…死ぬよ?」

ルイスと別れ、花組の皆の身を案じたジンは、再び上野公園へと引き返した。

入ろうとするものを拒むかのように周囲には真つ黒な霧が立ち込めていた。いやな感じがする霧だ。まるで、人間の心の奥底に隠れた、どす黒い感情のようだ。

「大神さんやさくらたちは無事だろうか…」

皆、この視界の悪い状況下で戦っているはずだ。いつまでもこんな場所で居続けられるほど人間は我慢強くない。あの刹那とかいう奴を見つけ出し、この黒い霧をどうにかしなければ。

そんなジンを、闇の中から見つめる視線があった。その視線の主は、ジンに向けてロープのような何かを素早く伸ばしてきた。

「!」

ジンは何かが超速で近づいてきたのを感じ取ったが、暗闇のせいで反応が遅れてしまい、自分に向かってきた『それ』に突き飛ばされた。

「ぐはッ…!」

くの字に曲がりながら吹っ飛び、上野公園の芝生の上に転がったジン。まるで蒸気自

動車にでも撥ねられたかのような吹き飛びようだった。よろよろと起き上ったジンは、霧の中を見る。脇侍が現れ、僕に不意打ちを仕掛けたのか? いや、脇侍なら刀の一撃で僕を真つ二つにできた。なら、もつと別の…もしかしたら脇侍よりも恐ろしい存在かもしれない。

なんにせよ、この黒い霧の中に隠れた何かが、僕を狙ってきた。

ここなら変身してもバレることはない。ジンはウルトラアイを構え、それを目に装着した。

脇侍たちは次第に数を減らしていき、もはや数える程度しか残っていないかった。

「これで、最後だ!」

大神機の最後の一撃が、残り一体の脇侍を切り伏せた。

「こちらマリア機、そちらから残りの脇侍の反応は?」

マリアが通信越しに風組に、他に脇侍が残っていないか確認を求めると、由里が返事を返してくる。

『リーダーに脇侍の反応はありません。大神さんが倒した奴で最後です』

「けど、この黒い霧はまだ晴れていませんね」

周囲を見渡しながら、さくらが呟く。まだ黒い霧が園内を黒く塗りつぶしていた。少

なくとも花組の各機体は互いに見える範囲内だったので、逸れるというようなことはなかった。

「視界を潰すためかと思つたら、単なるこけおどしだったようですわね」

霧の中から脇侍たちが何か仕掛けてくるかと思つていたすみれだが、奴らが霧に紛れて不意打ちを仕掛けるのを返り討ちにしてやろうと、自分の華麗な見せ場をイメージしていただけに期待外れに感じていた。

『…いや、そうとも限らねえぞ』

だが、米田から警戒を促すような声が聞こえる。

『みんな、気を付けて。何か…嫌な感じがする』

アイリスも米田に同調して、不安を抱えた言葉を口にする。

その予感が的中したのか、大神たちの周囲に異変が起きた。

少なくとも互いが見えるくらいだった黒い霧が、さらに濃さを増して、辺りを黒く塗りつぶし始めた。

「まずい…このままでは敵の姿は愚か、互いの位置を把握しきれなくなる」

大神が危機感を募らせる。今度こそ視界を遮られ、敵がどこからか不意打ちを仕掛ける可能性が大きい。さらに濃さを増していく黒い霧。

『妖力反応が高まっています！それに…』

通信越しにかすみの声が轟く。最後のあたりで、何か気になるような言い方までして  
いる。

「どうしたのですか!？」

『こちらの計器に異常が!上野公園全域に妖力反応が!敵の位置が特定できません!』  
「園内全域に、ですって…!？」

この時、帝劇の司令室の、妖力反応を特定するリーダーに異常が起こっていた。リーダー内の上野公園に、みるみる内に妖力反応が広がり始めていた。

『まじか…すまねえ大神、こつちで敵の位置を把握できなくなった。周囲への警戒を怠るなよ!』

「了か…」

了解!と花組隊員たちが応えようとしたその時だった。強い衝撃が、さくらの光武を襲った。

「きやあ!!」

「さくら君!?!だいじよ…」

驚く大神たちだが、すかさず次にすみれ機も同じように吹っ飛ばされる。

「きやあ!!」

「すみれ、大丈夫!?!」

「え、ええ…」

マリアの光武が彼女の光武の元に向かい、彼女を抱き起こした。

「気をつけろ！敵の攻撃に違いない！」

大神機が二本の刀を引き抜き、さくら機と共にマリアたちを守るべく集まった。

すみれもさくらも、二人とも反応が追いついていなかったが、いくらこの真つ黒な霧の中とはいえ、二人とも警戒を決して怠っていたわけではない。

いったいどこから敵は攻撃を仕掛けてきた？あの怪しげな小さな子供の仕業か？しかし光武のカメラ映像にも彼の姿は見当たらなかった。だとしたら…いったい？

だがすかさず、彼らに再び邪悪な牙が向けられることとなる。霧の中に潜む敵は、今度はマリアが狙われていた。

ヒュン！と、風を切るような音と共に、マリアに向けて闇の中から『なにか』が彼女に襲いかかってきた。

「ッ、マリア!!」

それにいち早く、かろうじて大神が反応した。彼は自らマリアの前に立ち、二本の刀をクロスさせて身構えた。その直後、マリアの盾となった彼に、見えざる敵の攻撃が炸裂し、大神機は突き飛ばされた。

「ぐああ!!」

「大神さん!!」 「少尉!」

思わず叫ぶ二人だが、二人よりも強い衝撃を受けていたのは、大神から庇われたマリアの方だった。

「ツ…!!」

見てはならない者をその目で見てしまい凍りついたかのように、彼女はその場で立ちすくんでしまった。

「マリアさん、避けて!」

すみれの怒鳴り声が聞こえる。名前を呼ばれ、はつと顔を上げたマリアだが、手遅れだった。今度こそ逃すまいと、マリアに向けて…

黒い霧の中から再び、『鋭利なハサミのようなもの』が伸びて襲いかかってきた。

そうはさせるものかと、すみれの光武が立ちはだかつて彼女も突き飛ばしてしまう。

「すみれさんツ…きやあ!!」

さくらも悲鳴と共に、暗闇の中へと突き飛ばされた。

次から次へと、仲間たちが自分を庇っていく。我に返ったマリアだが、今の状況を見て再び、それもさつきよりも呆然と立ち尽くしていた。

そんな彼女の脳裏に、ある光景がよぎる。

真冬の雪景色、そこにマリアはいた。視界が閉ざされるほどの強い吹雪が渦巻く夜。

しかしそんな雪を、周囲の炎と爆発が溶かしていく。そしてそれは…  
『あの人』の命さえも溶かした。

記憶の中の『あの人』の崩れ落ちていく姿を思い出すと同時に、ガコン！と、地震でも起きたかのような大きな音と共に、自分の光武が揺れた。

「しま……！」

「くそ、敵はどこなんだ…!!」

霧が、さらに濃さを増していく。そのせいで、ついには仲間たちの姿さえも黙視できなくなっていた。

「こちら大神、本部応答願います！」

大神は一度、帝劇本部にいる米田たちに連絡を入れることにした。さつきはこの霧の影響で敵の妖力反応が探知できなくなったというが、光武の反応が追えないとは言っていない。せめて仲間の居場所を聞かなければ。

『こちらかすみです！大神さん、いかがしましたか?!』

「霧の中から攻撃を受けて仲間の位置が特定できない。そこからナビゲートを頼む！」

『はい！現在マリア機は……!!?!』

通信先のかすみ氣息をのんだような声を漏らしてきた。何かあるのか?そう聞く前に、椿が大慌ての様子で叫びだした。

『大変です!マリアさんのすぐ傍に、一瞬だけど強力な妖力反応が出たんです!!』

「なに!まさか!？」

脇侍?それともあの刹那という少年?それとも、最悪…噂に聞いた、巨大降魔か!?

『大神さん、お願いします!!早くマリアさんたちの方に行ってください!』

『もう椿したら、慌て過ぎ!冷静にならないと、大神さんたちまであたふたするだけよ!』

『す、すみません…』

憧れの存在でもあるマリアの危機に取り乱す椿を、さすがに由里も見てられなくなつて叱り付ける。

しかし彼女の気持ちもわかる、時間が経つにつれ、仲間全員の姿がついには見えなくなつてしまつたのだから。

『大神さん、すぐそばです!!』

すると、由里の声が聞こえる。まさか敵が近づいて…いや!かすかだが、黒い霧の中からわずかに小さな輝きが見えた。

そして大神は、海軍での訓練で見張りの演習も行っていたためか、見えた。黒い霧の

中で、わずかに見え簿絵のあるシルエツトが、さつきから目視できる光と共に見えた。あの形は：見間違いでなければ光武だ。しかし妙だ。光武がまるで何かに引つ張られ、それを嫌がって何か電柱のようなものに捕まり続けているような：。

：いや、その通りだった。

マリアの光武は、暗闇からはい出てきた触手のようなものの先についた、ハサミのようなものに挟まれ、引つ張られていたのだ。マリアはそうはさせるかと、近くに目についた、公園の桜の木に捕まっていたのだ。

触手を払うために、マリアは光武に装備された銃で触手を攻撃するが、触手は肉が分厚くてマリアの銃撃にもなかなかびくともしなかった。それどころか、自分が捕まっている桜の木が、光武の握力と触手の引力に耐えきれず、今にもへし折れそうにミシミシと鳴っている。

「マリア!!」

このままではマリアが今度こそ危ない。大神がすぐに彼女を助けに向かおうとした。緑色に輝く閃光が、マリアの光武をとらえている触手を貫いた。

その途端、霧の中から「ギイイイイイ!!」と、巨大な生物の悲鳴が聞こえて、ハサミ付きの触手はマリアを解放し、霧の中に消えて行った。

「マリア、無事か!？」

「…心配いりません。それより…」

大神はすぐにマリアのもとに駆けつけると、マリアの光武は、彼女の動揺でも隠すつもりのようにそのまま立ち上がった。

二人は顔を見上げる。霧の中からさらに別の光が見えてきた。

黄金の目に、その中央から少し上に位置する縦長の緑色の光。かすかに見える赤くて巨大な体。

「赤い巨人…」

帝都の危機を救ったという、赤い巨人…ジンのもう一つの姿がそこにあった。

間に合った。大神たちは無事のようにだ。赤い巨人に姿を変えたジンは、地上に見える大神たちの光武を見てホツとする。

だが安心はできない。巨人となった彼の目でも、この黒い霧に包まれた公園はあまりに視界が悪かった。

(殆ど見えない。敵は一体どこに…)

周囲をくまなく、目を凝らしながら彼は敵の位置を特定しようとする。だが、妙だ。赤い巨人のジンは、以前水路の水面に隠れたデビルアロンの位置を特定し、反撃されることなく撃退することができた。だから、こんな黒い霧も彼にとってなんでもなく、霧

を発生させている敵も難なく見つけられるはずだった。

いや、彼は見つけようにも見つけられなかったのだ。記憶はなくしたが、体は覚えていた。自分には、見えない者を見通す力があるのだ、と。現に、暗闇の中に隠れている桜の木々がどこにあるのか、そして大神たちの位置がどこなのかを、目に力を入れるのと似た感覚で見つけることができた。だが、いくら探しても、さつきマリアを狙ってきた敵の正体がかめない。刹那が何か仕掛けてそのまま姿をくりましたのか、それとも：

しかし、疑問を抱く間も与えられなかった。背後から、触手の先についたハサミが伸びてきて、ジンの背中に激突する。

「アユ!!？」

背後に傷を負わされ、背後を振り返るジン。だが、背後を振り返っても見えるのは霧だけ。馬鹿な、この霧の中でも、晴れている時と比べたら確かに見え辛いが、今の自分には全く見えないというわけではなかったはず。動揺している間にもう一撃、霧の中からハサミが飛び出してきて彼を襲う。

ジンは反撃しようと、霧の中に向けてジャブを一発放つたが、空を切っただけだった。その隙を突くように右肩に見えざる敵の一撃が叩き込まれ、ジンは肩に着けられた傷を抑える。

(ん……?)

ふと、ジンは公園の一角に、あるものを見つけ近づいてみる。それは、穴だった。それも光武が4機全部入りそうなほど深く、大きく口を開けている。しかも、霧が穴の中から吹き出ているように見える。もしや、敵はここに逃げ込んでいたのか。

しかし今度飛んできた攻撃は、全く違う方向から飛んできた。背後から二本ものハサミが飛び出してきてジン突き飛ばした。

「グアアアア!!」

地面に背中を打ち付ける形で落下したジン。彼を突き飛ばしたハサミはそのまま伸びてきてジンの首を挟み込むと、その巨体を宙に持ち上げて地面の上に引きずり回す。

ジンは自分の首を挟んでいるこのハサミを強引にほどこうとするも、かなりの力でがっしりとつかんできているせいで簡単にほどける気配がない。だったら…彼は額のビームランプから光線を、霧の中に向けて放つ。しかし敵が見当たらない以上、命中率は著しく低下する。現に今の光線が何かに直撃した音さえもなかった。だがその際、ジンの首元を挟んでいたハサミが彼の首から離れ霧の中に消えた。

(…そうか、どうやら驚いてひっこめたのか…)

さすがに今の光線が当たることがなかったと言っても、敵への威嚇射撃になったようだ。おかげで解放されたが、敵の姿が見えない状況に変わりなかった。逆に見えない敵

はこちらの位置を手取るようにわかっている。なんとか居場所を突き止めることができたらしいのだが、敵の足取りがまだつかめないことに変わりない。

こちらがまだ自分の居場所を突き止めていないことをいいことに、見えない敵は、今度は鞭のように闇の中から振り回しながら攻撃を仕掛けてくる。対するジンは、反撃が口々にできない状態だ。

(一体どうすればいい……どうすれば、こいつを……)

悩む暇さえ与えてくれない正体不明の敵は、さらにジンに対して追撃を加えていく。

大神は、今自分の目の前で起きている現象に戦慄し続けていた。こんな危険極まりない敵に、さくらたちは何度も戦ってきたというのか。あの、降魔戦争で人類の味方として戦ったという赤い巨人さえも苦戦する、そんな恐るべき敵に。

「グアアア!!」

しかし、赤い巨人からは苦痛の声が聞こえてくる。彼もこの悪天候下で戦うのは厳しいのだ。黒い霧のせいでよく見えないのだが、赤い巨人の大きな影がわずかに見える。激しくけりや拳を叩き込もうとしているのが見えているが、それらのいずれもが空を切っているようにしか見えない。それどころか、逆にどこからか殴り返されているように見えた。

『大神さん、マリアさん!聞こえますか!?!大神さん!』

ふと、耳にさくらの声が通信越しに聞こえてきた。

「さくら!」

「さくら君、無事か!?!」

『はい!』

「すみれは?」

『私ならここにすわ…』

すみれも後から続く形で大神たちの前に現れ、自分の生存を伝える。

「みんな無事だったみたいね」

皆の無事を確かめることができ、大神は安心する。

「それにしても、うっとおしい霧ですわね」

公園を今なお覆い続ける黒い霧を見て、すみれが不快感を露にする。実を言うと風組のナビゲートを借りることで大神たちと合流できた。それがなかったら、今もこの霧の中でさまよい続けていたかもしれない。

「なんとか、この霧を消す方法はないんでしょうか?」

「霧…」

大神は黒い霧に包まれた周囲を見渡す。とある日、士官学校時代に甲板から見た景色

と似ている。彼は自分が乗船していた軍艦が海外に出たこともある。その際、とんでもなく黒くて大きな雲が立ち込めたり、時には霧が立ち込めてしまうなどの悪天候が発生し、艦の周囲がまったく見えないう状態に陥ったほどだ。

「普通の霧なら、太陽が昇るにつれて晴れてくるが……ッ！」

そこまで言いかけたところで、大神は何かを思いついて顔を上げた。

そういえば、さつきまでの脇時との戦闘中、すみれが長刀を振るつたときのことだ。

（すみれ君の長刀の刃から炎が出ていた。もしかしたら…）

その思い付きがどこまで通じるかわからない。だがいずれにせよ、このまま

「すみれ君、君は確か炎を使った技を使っていたね？」

「え、ええ…私の霊力は炎を起こすものですから、当然…」

急に大神から尋ねられたすみれは少し驚いたように戸惑いを覚えたが、大神の質問の意図に気づいたのか、すぐに不適に笑う。

「なるほど、そういうことですね」

「すみれさん、どういうことですか？」

「あーら、さくらさんはまだお分かりにならないのかしら？これだから田舎娘は…」

「む…ッ」

素朴な疑問を投げかけてきたさくらに、すみれは調子に乗っていやみったらしく言う

と、見かけによらず意地っ張りなさくらはムカツとする。そんな彼女の視線を軽く無視。

「朝霧が時間が経つにつれて太陽の熱で消滅するように、すみれの持つ炎の霊力による熱を周囲に拡散させることで、この霧を消す：そういうことですね、少尉？」

マリアからの問いに対し大神は頷く。

「ああ、そのとおりだ。最も、この霧は普通とは違う。本当に消せるかどうかはわからないが……ここでじつとしていても倒されるのを待っただけだ。

すみれ君、可能性が見えない賭けだが、頼む」

すみれは光武の通信モニターに映る大神の、自分に向けるまっすぐな視線に当てられる。剣のような純粋で直線的な強いまなざし。すみれの心にそれは強く突き刺さる。

「そ、そのような目で頼まれては断れませんわね。よろしくてよ」

ちよつとわがままなすみれでも、ここまで本気の目をした人間の頼みを断る気になれなかった。彼女は自分の光武が握っている長刀を握る力を強める。

「ならば、先ほどよりも強い火力を帯びた、華麗なる奥義でこの霧を晴らして見せましょう！みなさんは少し下がっていただけける？」

「ああ、頼む」

すみれ以外の全員が一度下がる。それを確認したすみれは目を閉ざし、光武の腕で長

刀を握る力を強める。すると、彼女の周囲から炎がちらつき始め、燃え下がり始める。キャンプファイヤーの比較にもならないほどの、人の心に宿る情熱のような業火。

「行きますわよ。神崎風塵流……」

カツ！と目を見開いた彼女は、その手に握る炎に包まれた長刀を華麗に振り回し、地面に突き刺した。

「胡蝶の舞！！」

火柱が、黒い霧の中に立ち上った。熱を帯びた炎が、黒い霧をも切り裂き、熱で溶かしていく。炎の熱を浴びた影響で、黒い霧が次第に晴れ始めた。

## 3—6 勝利をこの手に

「く…!!」

その頃、赤い巨人：ジンは膝を突く。こちらの攻撃がまるで当たる気配がない。

いったいなぜだ。自分の『この姿のときの目』なら、霧にまぎれていようが水に溶け込んでいようが、敵の位置を見極めることができる。だというのに、なぜ敵の姿が見えない!?

未だ敵の姿も位置も確認できないために、どんな攻撃もすべてが空を切るだけでしかない。

(くそ、どうすればいい…)

解決策がまるで思いつかない。自分の失われた記憶の中に、こんな危機を打開できるだけの、今の自分が認識していない能力があれば、このタイミングで思い出しておきたいところ。しかしそんな都合のいいことが、記憶を失って始めての：『ウルトラアイ』なして変身したときのように、何度も起こるわけがなかった。(※しかもウルトラアイなしで本能的かつ強引に変身した結果、自分は戦っているときの記憶が残らなかった)

だが、そのとき変化が起きた。ジンは肌にわずかな熱を感じ取った。その熱波が黒い

霧とわずかに晴らしていき、周囲は真つ黒な景色から灰色に変わっていく。黒い霧が減少したことにより、上野公園の景色がさつきよりも見渡せるようになった。

すみれの炎を利用した技〈胡蝶の舞〉の効果が発動したのだ。

これだけ晴れば、今度こそ敵の姿も：

「!?!」

ジンは顔を上げて驚愕する。まだ霧が晴れきっていないが、赤い巨人形態のジンの視力ですでに上野公園全体を見渡すことは可能となっていた。なのに：

（敵の姿が…ない、だと…!?!）

そこにいるはずの、敵の姿が影も形もなかったのだ。見えたのはぼろぼろの上野公園の敷地内と、そこにいる大神たち花組が乗っている光武の姿だけだった。

その予想外な事実、大神たちにも知れ渡る。

「おかしい…なぜ敵の姿がどこにもない?!」

周囲をどれほど見渡しても、赤い巨人や自分たちに攻撃を仕掛けた犯人らしき存在を確認できない。

「赤い巨人は無事のようにすわね」

一方で、霧の中から、今度ははっきり赤い巨人の姿を確認することができた。

「…グウ…ツ」

だが、あの視界の悪い状況下で攻撃を受け続けていたせいで、体に痛々しい傷が刻み込まれていた。

「ひどい傷…これだけ傷を赤い巨人に手負わせたのに、敵はすでに逃げたんでしょか…きやあ！」

赤い巨人のひどい有様に、大神の隣に並ぼうとしたさくらが、突然足元からズボツ！と落ちた。彼女の悲鳴を聞いて、大神たちがいつせいに駆け寄る。

見ると、さくらの光武が、いつの間にか地面に空けられた穴にすっぽり入りかけていた。しかも穴の底は奥深くまで掘り返されており、まさに奈落の底へ通じる穴のようだ。

「さくら君、大丈夫かい？」

「は、はい…」

さくらはかろうじて穴のふちに手をかけたおかげで落下を免れていた。大神の手で引き上げられ、無事地上へ戻る。

「まったく、おつちよこちよいですね」

「うう…」

やれやれといった様子ですみれが呆れたように呟く。言い返してやりたかったが、さ

くらはもドジなところが目立つという自覚があるのでできなかった。

「この穴、もしや敵がこの中に逃げ込んだのか？」

大神は、さくらが落ちかけた穴を覗いて見る。しかしマリアの口から否定的な言葉が放たれる。

「いえ、どうやらそうとは限らないかもしれません」

彼女の視線は、別の方向を向いていた。その視線につられ、大神たちも周囲を見渡す。そこには、さくらが落ちたような穴が他にも見られた。それもひとつだけじゃない。

上野公園の敷地内にくつつも空けられていた。

「この穴はいったい……？」

疑問と疑惑を募らせる中、赤い巨人となっているジンもまた、このいくつも開けられた穴に首を傾げていた。

この穴は、おそらく黒い霧にまぎれて攻撃してきていた敵があけたものだ。地面に穴を開けてこちらを攻撃する……つまり、敵は……

「ツ!!」

そこでようやく気づいた。だが、気づくのが遅かった！

突然ジンの足元から、黒い霧にまぎれて攻撃を仕掛けていたあのハサミ付きの触手……いや、腕が伸びてきた。さつきと巻き付き方が全く異なっていた。体中に蛇のように巻

きついで来て、最終的にハサミが彼の首を挟み込んだ。

「グ、ウウ…!!」

ジンがさつきよりも締め付けてくるハサミ付きの腕の強烈な力に、膝を付いてしまふ。それと同時に、地面から土しぶきが巻き起こり、巨大な一体の降魔が姿を現した。

「あれは…!!」

大神たちもその巨大な降魔を見て、目を見開いた。

耳の部分に、互いに反対側を向け続けている突起を生やし、目を持っていないような、代わりに降魔と同じ飢え切ったような涎まみれの牙と口を持ち、その体表もどす黒さを混じらせた紫色に染まっている。

こいつが、上野公園に新たな悲劇をもたらした正体『岩石魔獣デビルサドラ』である。  
(くそ、そういうことか…!!)

デビルサドラの拘束に苦しめられ続けながら、ジンは気づいた。なぜ霧の中で奴がこちらに不意打ちを仕掛け続けながらも、こちらに現在地を悟られなかったのは。黒い霧は妖力を混じらせた霧のため、広範囲に充満させると、その中にまぎれた降魔や脇侍の位置を特定させない。帝劇のレーダーでも探知できないので黒い霧だけで十分だった。だが、赤い巨人のジンとなると、黒い霧だけでは姿を隠せない。敵はそれにあらかじめ気づいているかのように、『霧に隠れて攻撃していると見せかけて』、実際は地中に潜り、

そこからジンや花組を強襲しつづけていたのである。

ジンが満身創痍であると判断したサドラはもはや姿を隠すまでもないと、自ら姿を見せ、止めを刺しに来たのだ。

このままだとやられてしまう。そうなったら、今度こいつの牙は…大神たちや帝都の人々に向けられることが容易く考えられた。

(…そんなこと、させるか…!!)

「赤い巨人が…!!」

降魔戦争の頃、帝都を守っていたという赤い巨人。今その巨人に危機が訪れている。あの赤い巨人はもう限界だ。自分の最悪の状態を避けるために撤退するはずだ。そうなれば、あの怪物は帝都の方にも向かい、人々を蹂躪することだろう。そうなれば、帝都の人たちの盾は自分たちしか残らない。退くわけにいかないのだ。

大神は決意を固めて、改めて戦闘を続行しようと思った時、赤い巨人を見てはつとずる。

赤い巨人が、自分が死ぬことを避けるためにいずれ撤退するのではと勘ぐっていたところがあつた大神は少し驚いていた。赤い巨人は逃げる姿勢を全く見せていない。自分を捕まえているデビルサドラのハサミを生やしている腕を…逆に捕まえている。

(まさか、あいつ…)

自分がどれほど傷ついても、死ぬことになろうとも、決して退こうとはしていない。大神は、赤い巨人の背中を見て悟った。あの赤い巨人は…自分たちさえも命を賭して守ろうとしているのだ。

「…みんな、聞いてくれ」

彼は花組の3人に向けて口を開いた。

「あの赤い巨人を…援護するぞ」

「え？」

その一言に、三人は目を丸くした。

「確かにあの巨人の正体はわからない。でも彼を見てみてくれ。」

三人も言われてみて赤い巨人を見上げる。捕まっている身でありながら、逆にあの降魔の腕を捕まえ逃がすまいと奮闘し続けている。

「この帝都は本来、俺たちが守らなければならない。だが、彼は俺たちさえも守ろうとしている。ならば、俺たちがとるべき行動はひとつしかない！」

大神の言葉に、三人は少しの間沈黙する。すると、さくら機が大神機の隣に並んだ。

「私も行きます」

「さくら君…！」

「あの巨人はお父様が戦っていた頃から、人々を守るために戦ってきた救世主だったと聞いています！それに私たちも大神さんが来る前に、彼に助けられた借りがありません」

彼女の言葉は、若干躊躇いがちだった二人を動かした。

「…そういうええそうでしたわね。思えば、私は二度も救われら身でありながら、一度も借りを返していませんでしたわ」

「悔しいですが、私たちだけでは敵を倒せないでしょう。ならば敵が姿を見せた今こそがチャンスです。」

少尉、ここは一気に総攻撃を仕掛けましょう」

二人が、巨人の援護に関して、何かしらの反対意見を出すかもしれないと思っていたが、どうやら杞憂だった。さくらに続き、同意してくれた二人に感謝し、大神は命令を下した。

「よし…花組、攻撃を開始する！赤い巨人を援護せよ!!」

「了解!!」

ジンは必死に踏ん張り続けていた。奴が自分を絞殺しようと、首に食い込もうとしているハサミに込める力を強めているのがわかる。だが逆にそこを利用してやろうと、ジンは自分の首を押さえているデビルサドラの左腕のハサミを、首の拘束を緩めさせなが

ら捕まえた。

対するサドラはジンにまだ抵抗の意思があることを感じ、さらにハサミに込める力を強めていく。

奇妙な形の罅迫り合いの中、ジンはサドラの姿を確認する。見れば見るほど、不気味で気持ちの悪い姿だ。悪意しかふりまいてくることしか脳がないことが見るからにわかる。悪意を振り撒く…そんなことが許されていいわけがない。こんな診にくい化物なんかに…！

(皆を殺させてたまるか！)

ジンはサドラのハサミ掴む力をさらに高める。さつきと比べ、首にかかる力が緩み始めた。今のうちに！ジンは自分の首を引っ込めさせ、サドラのハサミからの拘束からようやく脱出した。

「つうぐ…ゲホッ…！」

しかし、喉が苦しく、体に蓄積したダメージのせいで膝を着いてしまう。

そのとき、彼の額の縦長のエメラルドグリーンに輝くビームランプが、点滅を開始し始めていた。彼の活動限界を知らせているのだろうか。

そんなジンを見てサドラが近づいてきた。今度こそ止めを刺すつもりか。かなり消耗しているが迎撃するしかない。ふらつきつつも立ち上がるうとしたときだった。

「マリア、奴の足を頼む！」

大神の大きな声が、ジンの耳にも届いた。視線を傾けると、近づいてきたマリアの黒い光武の銃から、一発の弾丸が撃ち込まれた。

「スネグーラチカ!!」

彼女の靈力により、その弾丸は氷の礫となり、サドラの足にすべて着弾した。瞬間、サドラの足は見る見るうちに氷に覆われ、その足を地面に縫い付けてられてしまう。サドラは氷に覆われた足を動かすと、氷にひびが入り始める。やはりマリアが靈力という特別な力を持つ人間とはいえ、人間一人で食い止められる程度ではないようだ。だがマリアはすかさず、さつきと同じように靈力を込めた弾丸を続けて連射し続けた。被弾するたびに、さらに氷がサドラの足をひび割れごと覆い始めた。

だが、靈力とは消費が過ぎれば本人にも悪い影響を与えることは、靈力について詳しくないジンにもわかることだった。

(無茶だ！あんなに力を込めた攻撃を続けたら…)

そう思っていた時だった。

マリア機の前にさくら機が降り立ち、鞘にしまっていた刀に手を添えた。光武のボディ全体から桜色のオーラをほとぼしらせた彼女は、足の氷を砕こうとしていたサドラに向けてカッと目を見開き、

「破邪劍征……」

鞘の中にしまっていた刀を頭上から振り下ろした。

「〈桜花放神〉!!!」

瞬間、さくらの刀から桜色の光線が飛び、サドラの動体に直撃した。

「!!」

さくらの必殺技を目の当たりにして、ジンは息をのんだ。17歳の少女が解き放ったものとは思えない威力であったことも驚きの理由だが、それ以上に彼には驚かされた理由があった。

（あの技は……!）

瞬時に、さくらの放った技の名前が浮かび、それは合致した。

…そうだ。自分はさくらが立った今使った技を見たことがあるのだ。おそらく、自分がまだ思い出しきれていない、『降魔戦争』の記憶。その時、さくらの父である真宮寺一馬が使っていたに違いない。だから通りで、驚くほどの懐かしさを覚えたのだ。

しかし、さくらの技がクリーンヒットしても、デビルサドラはいまだに倒れる気配がなかった。寧ろ邪魔立てされたことに怒り狂い、今度は標的をさくらに変えた。右腕のハサミを伸ばして彼女に攻撃を仕掛ける。

いけない! ジンはすぐ彼女を助けに向かおうとしたが、サドラの腕の速度の方が勝つ

ていたために、間に合えなかった。そんな彼女の前に、さらに大神の光武が降り立ち、二本の刀を盾代わりにサドラのハサミを防御した。だが、光武と比べてもサドラのハサミの方が巨大。防ぐことはできても、大神が無傷というわけにいかなかった。

「ぐわ!!」

「大神さん!」

大神の光武はサドラのハサミの衝撃によつてさくらの後ろに突き飛ばされる。彼の身を案じたさくらが声を上げたが、彼と入れ替わるようにすみれの光武が飛出し、サドラのハサミと繋がっている腕を突き刺し、地面に縫い付けた。

地面に腕を縫い付けられたサドラは醜い悲鳴を轟かせる。

このとき、すでに大神は立ち上がっていた。

「大神さん、大丈夫ですか!」

「俺なら大丈夫だ! すみれ君と一緒に奴の腕を抑えてくれ!」

動揺している暇などない、遠まわしにその意思を伝え、さくらも頷いた後にようやくすみれにならつて動き出す。すみれが長刀でサドラの腕を地面に縫いつけ動きを封じている。さくらも自分の刀を突き刺して地面により深く頑丈に縫い付けた。サドラがさらに痛みを覚えて悲鳴を漏らす。

「今だ……!」

大神は今こそ好機と見て駆け出す。ただ走っただけじゃない。彼はさくらとすみれが地面に縫い付けたデビルサドラの右腕の上を駆け出していた。

敵が近づいている。しかも右腕を引っ込めることができず、ただ接近を許してしまっている状況に、サドラは危機感を覚え回避に移ろうとする。しかし足はマリアの靈力弾によつて凍らされ、右腕はさくらとすみれの二人に地面に貼り付けられた。だったら残った左腕で迎撃しようとするが、それもできなかつた。赤い巨人：ジンがサドラの左腕を捕まえたまま接近し、左腕ごとサドラの胴体をも取り押さえた。

近づいてくる大神の光武のモノアイがこちらを見た時、ジンは感じた。ちょうどその時、光武の中に乗っている大神と視線が重なり、その大神が自分に頷く姿勢を見せていた。

俺たちがいるんだ、そう告げているように。

そのときの彼の脳裏に、ひとつの光景が浮び上がった。

軍服姿の米田、あやめ、さくらの父である一馬、山崎、そして：彼らと同じ装いを身にまとつた、今と変わらない姿をした自分。目の前に自分たちよりも巨大な姿をした降魔を相手に、臆することなく対峙していた。

(そうだ…：僕は、一人じゃなかつた)

大神機が隣に立つたと同時に、ジンは悟つた。

（あの時も、あの人たちと共に戦っていたんだ！この世界の平和のために！）

ジンはさらに、逃げようとするサドラを強い力で押さえつけた。

駆け出し続けた果てに、大神の光武は高く跳躍した。

「狼虎滅却…」

その二本の刀に、稲妻がほとばしる。すみれが炎、マリアが氷、そして大神は…自らの靈力で雷を発することができたのだ。

大神は高らかに叫びながら、自らの正義に込めた覚悟を、その一振りの斬撃に込めて解き放った。

「快刀乱麻」あああああああああ！！！！

ザシュ！！

サドラの顔をすれ違うさまのことだった。大神が地上へと落下し、上野公園の地面の上を転がる。

「大神さん！」「少尉！」

さくらたちが、彼の身を案じて駆け寄る。

「お、俺なら平気だ…それより」

大神は落下の衝撃で痛みを感じていたようだが、光武のおかげもあって大きな怪我に至っていないかったようだ。

しかし彼が気になるのは、サドラの状況だ。それに同調してさくらたちも頭上を見上げてデビルサドラを見やる。

「や、やったんですの……?」

次に、やはりまだ奴が平然としている、そんな嫌な予感が現実になってしまいそうなことを口にするすみれ。しかしそれを抜きにしても、本当にそうなる可能性もある。さくらとマリア、そして大神も……そしてジンも一度デビルサドラから距離を置いてじつと構えた。

しかし、それは杞憂に終わった。

大神によって首に刻まれた箇所から、デビルサドラの首が落ち、それに伴ってデビルサドラの体も崩れ落ちた。

「や、やった……!!」

大神の顔に、勝利の喜びが現れた。ついに成し遂げたのだ。ずっと長く、この国のため、平和のために戦うことを夢見ていた大神。かつて降魔戦争で人類を苦しめていたという驚異を、この手で討ち倒したのだ。

帝劇の司令室でも、大神のフィニッシュによって戦いが終わったことが映像越しに伝わっていた。

「やったあ!!」「イエイ!!」

「すつごおい！さすがお兄ちゃんかつこいいい!!」

かすみ、由里、椿の三人が、降魔が倒れたのを見て思わず席を立ち、お互いにハイタッチを交し合った。アイリスも大神の活躍ぶりに黄色い声を出さずにいられなかった。

「へへ、大神の奴、やりやがったな」

米田もまた、満足げに笑っていた。海軍の卒業候補生の中から自分が見込んで抜擢した青年が、精神面も戦いにおいても自分が見込んだとおりの男だった。この男になら託せるかもしれない。帝都の未来と、ジンや花組の皆の事も：そんな期待が米田の中に確信めいた形で抱かれていた。

「やりましたね、大神さん!!」

「すばらしい一撃でしたわ、少尉!!」

さくらとすみれの二人も、大神のフィニッシュに強く感動を覚え、彼をほめたたえた。「敵の気配もありません。今の奴が最後でしょう。少尉、お見事でした」

マリアも淡淡とした感じではあったが、素直に大神の活躍を称えてくれた。そんな大神は、謙虚に首を横に振る。

「いや、俺だけの力じゃない。君たちと、そして…」

彼は後ろを振り返ると、そこにはポロポロになりながらも共に戦ってくれた、赤い巨

人の姿があつた。自分たちを見下ろす形で、彼は自分たち花組の姿をじつと見つめていた。

「赤い巨人、聞いてくれ！」

赤い巨人：ジンに、光武のハッチから顔を出した大神からの声が轟いた。

「なぜ君が降魔戦争の頃から、この帝都を守ってくれているのかはわからない。

だが、俺もこの国の軍人だ！俺にも：俺たちにも守らせてくれ！花組の舞台を見に来てくれる人たちをはじめとした、多くの帝都の人たちが、また彼女たちの舞台を見て笑顔になれる日を迎えられるように！！」

この国で生まれ育つた男だから、皆の幸せな日常こそが大神の強く願う望み。だから、こうして帝国華撃団・花組隊長という立場は天職以上だった。しかし赤い巨人が復活を果たし、当初はモギリをやらされたときの絶望感。それは国を守りたいと願う自分が必要とされていないと思わせるに十分だった。でも、自分たちは共に戦い、勝利した。逆に赤い巨人の危機を自分たちが救い、敵を打倒した。自分たちもまだ捨てた者じゃない。強く自信を抱ける結果を出せた。

だが赤い巨人自身はどう思っているのだろうか。所詮小さな人間だからと邪魔に思っているのでは？そんな不安がよぎっていた。

すると、赤い巨人は大神を見て、静かに頷いた。

ジンは感じ取っていた、自分がそうであるように、純粹に誰かを守りたいという大神の心を。

「ジユワ!!」

感謝の言葉の代わりに頷いて見せ、ジンは頭上を見上げ、花組の前から飛び去って行った。

「行ってしまったか…」

どうやら、同じ対等の存在として認めてくれたのだろうか。負けてられないな、同じ平和を守る者として、精進せねば。大神は固く誓った。

「ともあれ、これで一件落着ですわね」

すみれが一息つきながら言うと、さくらも後に続いて口を開いた。

「そうだ! 皆さん、せっかくですから、ちよつとやってみたいことがあるんです!」

「やってみたいこと?」

マリアは眼を丸くする。

「勝利の決めポーズですよ! あたしたち勝ったんだ! つて、みんなで掴んだ勝利を一緒に喜べるように!」

「き、決めポーズだつて?」

思わぬさくらの発言に、大神たちは困惑するが、すみれが真っ先にさくらに同調して

きた。

「そうですね…さくらさんにしてはなかなか悪くないですわ。舞台は常に締めまで華麗にこなすもの。ならばこのような戦場という名の舞台でも最後の締めをしなければ、帝劇トップスターの名が泣きますわ。」

「マリアさんもそう思いませんか?」

「え、ええ…」

いきなり話を吹っ掛けられたマリアも困惑し、返事が適當になる。

「で、でもポーズだなんて、いきなり…」

「大神さん、そんなの即興でも十分ですよ。ほら、同時に行きますよ」

まだ躊躇いがちの大神をさくらが、すみれがマリアを隣に立たせ、花組は一列に並ぶ。

そして、さくらが「せーの…」と言ってすぐ、同時に彼らは決めた。

「勝利のポーズ、決め!」

「き、決めえ!!」

あまりの急な振りについていくことができなかつたため、大神だけ出遅れてしまった。

「…ん?」

しかし彼らはあることに気づく。

ここには4人、現時点で光武に乗れる花組メンバーしかいないはず。だが…もう一人分声が多かった気がする。4人が、ちらつと周囲を見渡してみると…。

「や、やあ」

いつの間にか、ジンが大神の後ろに立ってちやつかり決めポーズに加わっていた。

「じ、ジンさん！いつからいらしてたんですか!？」

「なんかみんなで面白そうなことやってたの見たから、ちよつと驚かすつもりもあつて…ダメだった？」

思わず驚きの声を上げてきたさくらに、ジンはもしかして邪魔になったのだろうかと思わず抱く。

「別にダメではないですけど…」

「せっかく勝利の余韻に浸ってたのに、ジンさんのおかげで微妙な空気になりましたわ。少尉も少尉で乗り遅れましたし」

「ええ…」

微妙な反応を返されたジンと大神の二人は肩を落とした。

「…ふふ…」

少し気が緩んでいるようにも見えて、どこか安心もする。そんな彼らにマリアは、人知れず笑みをこぼしていた。

戦闘中、大神が自分を庇い、仲間たちと助け合う姿を見るあまり、つい一瞬だけ昔のことを思い出したが、今の彼女はその時のことを覚えていなかった。

これが、帝都の救世主である赤い巨人と帝国華撃団花組。互いを深く知りえたとは言えない関係だが、ともに帝都を守る者同士が初めて協力し手にした初勝利であった。

しかし、これはまだ序章に過ぎない。彼らと黒之巢会の本格的な戦いはこの時から激化していくのだった。

「ふふふふふ…天海様、お喜びになってください」

その頃、デビルサドラをジンや花組にけしかけた刹那だが、黒之巢会のアジトに戻る最中、ずっと面白そうに笑っていた。

「心の弱い人間に付け入る…それが僕の力。おかげで一人、利用価値のある女を見つけましたよ」

自分の手駒が倒されたというのに、全く動揺していなかった。それどころか喜んでいゝる。まるで新しいおもちゃを見つけた子供の用に。だが、こいつの場合はそんなかわい程度で済むことではない。なぜならこの刹那という少年は…何物にも勝りそうなほ

どの狡猾で残忍な心を持ち合わせているのだから。

「君のことが気に入ったよ。どんな感じでしたぶってあげようかなあ。ねえ……」

『火喰い鳥』のお姉さん？

## 第肆話 火食鳥—クワツサリー— / 4—1 桐島カンナ

星の輝く真冬の夜の雪原。

マリアは、今よりやや若い姿でそこにいた。目の前に、丸いサングラスをかけた男性がいる。彼は手元に小さな小箱があり、それを開く。

開かれた箱の中で、名前を彫り込まれた綺麗な銀の指輪が光っていた。

「マリア……結婚しよう」

「隊長……」

隊長と呼んだその男性のプロポーズを受け入れ、マリアは彼と互いに抱きしめあつた。真冬の冷たい風など感じないほどに、温かで幸せなぬくもりを感じながら。

しかし、それも長く続かなかつた。

「マリ……ア……」

雪が溶け尽くすような灼熱の炎が、戦場となった雪の町で燃え盛る。

マリアを庇って銃撃を受け、隊長は愛するマリアの下へ向かおうとする。だが彼女に伸ばされた手は既に力がなく、届くことはなかった。

マリアがその手を急いで掴もうとするも、二人の間落ちた爆撃が、二人を容赦なく引き裂いた。

「！」

見開かれたマリアの目の前で、隊長は炎の中へ消えていく。彼のいた場所から、マリアの足元に向けて落ちたものがあつた。それに目をやり、マリアは雪の中に埋もれたそれを拾い上げる。

自分でもらつたものとはお揃いの、婚約指輪だつた。

それに刻まれた、マリアの名前を確認したとき、マリアが愛した男を飲み込んでいた炎は、何も残すことなく鎮火した。

そう、何一つ：

隊長おおおおおおお!!!

「は!？」

マリアは寢室のベッドから起き上がった。

額からは、まるで夏場の外にいたようなくらいに、酷い汗だくなっていた。

「また、あの夢を……」

彼女は顔を覆った。

もうずっと、見ていなかった。

帝国華撃団に入ってから以来、ずっと見ていなかった、過去のトラウマ。

なぜ今になって、またこんな夢を……

ああ、そうか。この前の戦いで庇われてたから……

愛した男を失い、死んだようにさまよってきた。それをあの人……あやめが見つつけて、自分に新しい道導をくれた。

もう見ないはずだと思っていた。しかし、先日の……

上野公園での戦闘で大神が自分を庇った時からまた見てしまうようになった。

あの時の……愛する男の最期を。

その日の舞台の演目は、シンデレラだった。

マリアが王子役。すみれが主演のシンデレラだ。

意地悪な継母と姉たちに日々いじめを受けながらも家事に勤しむ薄幸の少女が、ある日その美しい心と容姿に興味を惹かれた魔法使いに、魔法のドレスとかぼちゃの馬車を与えられ、参加した城の舞踏会にて王子に見初められダンスの相手をするに。だが魔法は夜12時の鐘と共に消えてしまう制約。12時に迫ったことに気づいたシンデレラは元の水簿らしい姿を見せまいと、王子の制止を振り切り、城を飛び出して帰宅する。王子は、その時にシンデレラが落としたガラスの靴を頼りにシンデレラを探し、彼女の家でついにシンデレラを見つけ出し、二人は結ばれてハッピーエンド…皆も知っていると思うが、大筋の内容はこれだ。

今は物語の見せ所でもある、シンデレラと王子が舞踏会にてともにダンスを踊るシーンだ。

「私、夢でも見ているようです。こんなにも幸せな一時を過ごせるなんて…」

家族から虐げられているシンデレラ（すみれ）にとつて、華やかなダンスホールで素敵な異性と共に語らいながら過ごす時間は、これまでの人生の中でも絶頂と言えるものだろう。それは、シンデレラという容姿と、それ以上に美しい心を持ち合わせた女性と

出会えた王子もまた同じだ。

観客たちは、二人の魅せるシーンに心惹かれ、静かにその名場面を楽しむ。

…が、長らく、そして良く花組の舞台を見ている客敵意をつまりコアなファンの中で、あることに気づいた者もいた。

「…なあ、今日のマリアさん、顔が暗くないか？」

その言葉を隣にいる知人に、ある男性が呟いた。

彼の予想は、的を射抜いていた。

「…」

次は王子役であるマリアのセリフだった。だが、シンデレラの幸せに満ちた思いに対して、同じ気持ち返さなければならぬ一場面なのに、マリアは何か思い詰めたような顔を浮かべたまま無言だった。

マリアの脳裏には、かつての幸せに満ちた記憶が甦っていた。

雪の降る夜の街の、誰もいない広場。街頭に照らされた彼女と、特徴的な丸いサングラスを着けた男性が、視線を合わせ、思いを交わし会わせながら、二人きりのダンスを踊る…

——マリア

愛しい人が自分の名を、愛おしい思いを胸に呼ぶ。マリアは名を一度呼ばれる度に、更に幸せになっていく。

「…さん、マリアさん」

遠い場所から別の誰かが呼んでいるような、すみれの呼び掛けに、マリアは我に帰った。

「次はあなたのセリフでしてよ」

今はまだ舞台の真つ最中、集中を途切らせてしまうとは。

すぐにマリアは王子役として返しの変人をするのだが…

「ああ、私も幸せだよ、すみれ」

シンデレラ、と呼ばなければならぬのに、ここですみれの実名を言ってしまふミス  
を犯してしまった。

「す…すみれの花のような美しい君と踊れて幸せだ」

明らかにのどを詰まらせたような、動揺を表した口調。咄嗟に思い付いたアドリブの  
セリフで切り抜けたものの、マリアがらしくないミスを犯した事実は残ってしまった。

「マリアが…台詞をミスした？ かすみ君、それは本当なのかい？」

「ええ、由里から聞きました。日ごろから徹底したお稽古をなさっていたマリアさんにしては珍しいです。私がここで働いてから、初めてのことです。なんとかアドリブを利かせたことで、劇としては結果的に成功したと言えますけど…」

舞台終了後、客を見送った後、かすみから話を聞いたジンと大神は目を丸くした。

「信じられないな…まだ舞台に慣れていないさくらならまだしも」

「ジンさん、それどういう意味ですか？」

隣でも話を聞いていたさくらがじとつとジンを睨む。自分だつて頑張ってるんだぞと言いたげな目線に突き刺され、ジンは慌ててすぐに話を戻させる。

「そ、そういうえば確かに、マリアさん最近ため息が多かつたな。どこか上の空つて言うか。さつきも妙なこと言つてましたよね？」

ジンから視線を向けられ、大神は頷く。

「ああ、確かに…」

劇が始まる前に、大神も隊長として楽屋を訪れ、花組の一回のその日の顔を見ている。

「何か仰つてたんですか？」

「『昔の夢をよく見ることがありますか』……って聞かれたよ」

「昔の夢……」

『夢』という言葉に、ジンの頭の中に、水の中で眠っている自分が沈んでいくビジョンが再び浮かび上がる。

「それで、大神さんはなんて答えたんですか？」

「士官学校の頃の夢とかを見る時があるとか、家族や幼い頃の夢……そういうったものを見るって答えたとよ」

さくらの質問に、大神はそう答えた。

「でもマリアも一人の人間だ。人間である以上、誰にだって失敗はあるよ。失敗したことを責めるんじゃないよ、なぜそうなったのか考えて次に備えないと」

「そうですね」

大神さん、ごく頼りがいがありますね」

大神の、失敗に対する見解を聞いて、かすみは頼もしさを大神から感じ取った。

「でも、マリアさんって、人に悩みを打ち明けたりしない人ですから……こういう時にカナさんがいてくれたら……」

「カナナ？」

聞き覚えのない名前に、三人は誰のことかと首をかしげる。そういえば、とかすみは

気が付いた。

「三人はまだお会いしてませんでしたね。」

桐島カンナさんは、マリアさんと同じく花組の初期メンバーの一人です。花組の中でもマリアさんと一番お付き合いが長いですから、きつと力になってくれると思うのですけど……」

かすみはその先に関して説明できなかった。直後に次の公演のチケットを買い求めてきた客の対応に追われたからだ。

桐島カンナ。米田やあやめなら間違ひなく知っているはずだ。そう思って、ジンはまず、支配人室にいる米田のもとへ向かう。

あやめはこの日、帝劇にはいなかった。話によると、花やしき支部にて、そちらに身を置いている別の花組隊員を呼び寄せるための手続きのために外出中とのことだ。今、マリアの憂いやカンナという人物について話を聞けるのは米田だけだ。

「おや、ジンさん。支配人に何か御用ですか？」

だが支配人室に来たところで、ジンは向かい側の廊下からやってきた奏組のルイスに呼び止められた。

「あ、ルイスさん？どうしたんです」

「ちようどよかったです。舞台の修理に人手が欲しいからあなたを呼んでほしいと、先

ほどすみれさんから頼まりました。

私も手伝いたいところなんですけど、別件が多くてお手伝いができないので…」

「なるほど、それならすぐに行きます」

「助かります。こういったところでも花組のみなさんのお力添えになりたかったのですが…」

「ルイスさんたち奏組には、奏組の役割があります。奏組の任務は、花組のみんなの苦勞を軽減してくれてますから」

奏組の役目は、花組が出るまでもない、弱い力の降魔を討伐すること。もし奏組がいなかったら、その分だけさくらたち花組の負担が大きくなる。小さい個体から、先日も現れた魔獣クラスのビッグサイズの個体も相手にしなければならぬことを考えると、奏組はなくてはならない存在だ。

「ありがとう、ございませう…」

ルイスは気を使われてしまったか、と気まぎれな笑みを浮かべた。

「そういうえば、マリアさんが台詞を間違えたってかすみさんから聞いたんですが…」

「ああ、それは私も知っています。ちょうどその時、私たち奏組も演奏中でしたから、途中で誰かが台詞のミスを起こした、ということはすぐにわかります。私たちの間でも、マリアさんの完璧主義姿勢は知れ渡っていますから、正直驚いています。何かあったん

でしようか…」

奏組でもマリアがどんな人物なのか伝わっており、それだけにマリアの演劇中のミスは衝撃だったらしい。

この日も、街のとある場所に小型降魔が出たため、ルイスとはこの後すぐに別れた。さて、舞台の修理の手伝いだったな。ジンは舞台の方へと向かうが、そこでガタン！と大きな物音を耳にした。

「…」

舞台の方から聞こえた。何かあったのだろうか。急いで駆け出していくと、舞台の太い柱が倒れかけ、それを大神が必死こいて倒れぬよう支えている姿が真っ先に見えた。他の花組の面々も集まっている。

「お兄ちゃんファイト！」

「少尉、決して放してはなりませんわよ!!」

「うぐぐぐぐ…お、重い…!!」

アイリスとすみれの応援も受けつつ気張る大神だが、既に限界が近そうだ。

「大神さん、もう少しだけ耐えてください！上からロープで釣り上げますから！」

「た、頼むぞ…さくらくん」

さくらが高台からロープを持って大神を助けようとするが、さくらが引つ掛けようと

したところで、ついに大神に限界が来てしまった。

「ぬうう……もう……だめ、だ……」

大神から力が抜けてしまい、柱が倒れだした。

「いけない!」

ジンはとっさに走り出した。せめて大神を柱の下から突き出さなければ。だが、あまりに重い柱の方が倒れる速度が速すぎた。

ジンが追いつく前に、重い柱が彼を押し潰して……

……と思っていた時期が皆にもありました。

ただ一人を除いて。

「おいおい、大丈夫かよ? 隊長さんよ」

「へ?」

いつまでも衝撃が襲ってこず、聞きなれない声を耳にして大神は目を恐る恐る開け、ジンは足を止め、花組の面々はその声の主を目で追った。

長身の大神やマリアよりも高く、赤い髪に鉢巻を巻いて、日焼けした小麦色の肌、そして力強くも女らしさを失わない魅力を放つ女性が、大神を押しつぶそうとした柱を軽々と片手で支えていた。

「そこにあんた、早くロープで上げてやんな」

「え？あ、はい！」

赤髪の女性に言われ、さくらはすぐさまロープを巻いて引つ張り上げる。とはいえ、大神でも支えきれないほどの重さ。すぐにジンも駆けつけ、彼女と一緒に柱をロープで引つ張り上げた。

「ふう…助かった」

「大丈夫ですか大神さん！」

さくらが、腰を下ろして一安心する大神のもとに駆け付ける。

「あれくらい片手で十分だろ。だらしねえなあ」

赤髪の女性はニカツと笑いながら大神を見下ろす。

「あ、あの…君は？」

降りてきたジンが、見覚えのない女性に何者かを問うと、彼女のもとにアイリスが人懐っこく駆け寄ってきた。

「カンナ!!」

「か、カンナさん…」

どこか引き気味ですみれも彼女の名を呼ぶ。

「カンナって…もしかして！」

かすみと言っていた。マリアには、同じ花組の最古参メンバーがいると。もしやこの

女性が：すみれに目を向けると、やや気まずげにすみれは頷いた。

「え、ええ。彼女は桐島カンナ。一応：花組のメンバーですわ」

「一応ってなんだよ一応って。：まあいいか。よう、ただいま！」

「おかえりカンナ!!」

「アイリス！はは、前よりも背が伸びたんじやないか？」

親戚と久しぶりの会合に喜ぶように、カンナはアイリスを抱き上げて高い高いした。高く持ち上げてもらってアイリスも喜んでいる。

「見ない間に、顔ぶれも増えていったな。あんたは確か：」

「俺は大神一郎。花組の隊長をやっているよ」

「へえ、やつぱりあんたが隊長さんか。米田支配人から聞いてるぜ」

自己紹介をした大神に、カンナは手を伸ばして握手し、自分もまた自己紹介をする。

「聞いてると思うが、あたいは桐島カンナ、花組の隊員沖縄桐島流空手の二十八代目継承者よろしくな！んで：そつちのあんたらは：」

彼女は次に、さくらとジンの二人にも目を向ける。

「春に、花組に入隊しました真宮寺さくらです！よろしくお願いします、カンナさん！」

「おう、よろしくなさくら」

さくらとも握手を交わし合うと、カンナはすみれにニヤケ顔を向けてきた。

「ライバル登場つてわけだな。こいつはうかうかしてられねえな、すみれ」

「ちよいと…：どういう意味ですのカンナさん？私がかんなド新人に遅れるとでも？」

「へっへっへ…：帝劇のトップすたあなんて言えるのも今のうちかもしんないぜ？」

まだ入隊したての身であるさくらと比べられたのが不本意らしく、目を吊り上げるすみれに対し、カンナは挑発的な笑みを崩さない。

「ああもう、二人とも喧嘩しちやダメだよ！」

「へへ、悪い悪い。すみれと話すのも久しぶりだからつい、な」

「ふん…」

二人の間に漂い出した、な空気を不快に感じてか、アイリスが二人を咎める。ケタケタ笑うカンナに反して、すみれは面白くなさそうにそっぽを向いた。

「で、最後にあんたが…」

カンナは次に、ジンの方へと目を向ける。

「米田…：ジンといます」

「米田…：！そつか、あんたが米田支配人の…」

同じ苗字ということもあり、彼女は目を丸くしながらジンを凝視する。

「意外だったぜ、まさか米田支配人に子供がいたなんてよ」

「養子ですけどね」

カンナにとつても、米田が実は子持ちだったという事実は驚きだったらしい。ジンは謙遜するように一言付け加えた。

「相変わらずね、カンナ。ずいぶん遅かったけど、無事に帰ってきてくれてよかったわ」  
他の花組の会話を聞きつけてか、マリアが彼らのいる舞台へ来訪した。

「おお・マリアも久しぶりだな！いやあ、実は沖繩から乗ってきた船が妙な事故を起こして沈没しちまつてさ。帝都まで泳いできたんだ」

「沖繩から泳いで!!?」

船の沈没に巻き込まれる。そんなことがあつては近くに別の船でも通りがからないかぎり、まず助からないはずだ。だというのに、彼女は沖繩から帝都までの長距離…日本帝国の本州の半分近くの距離を泳いで渡ってきた。事実なら、もはや人間離れしていると思えない。

「方角も途中で分かんなくなつてさ、たどり着くまで大変だったもんさ」

なのに後頭部を撫でながら大声で笑い飛ばすカンナ。

「そのまま海に永住して海賊王でもやつてらっしゃればよかったのではなくて?」

「にやんだとお?なんだつてあたいが海賊王なんかにならなきゃいけないんだよ」

(海賊王…ねえ…)

嫌味をふっかけるすみれと、それを受けて憤慨するカンナのやり取りを聞いて、なぜ

かジンの頭の中に麦わら帽子に赤いノースリーブを着たカンナの姿が浮かび上がる。

…なぜだろう。あまり違和感がない。いつそそれを題材にした新たな舞台でも見せられるのではないかとさえ思った。

「あ、そうそう、帰ってきた記念に飯、あたいの方で作つといたぜ。」

「わーい！カンナの料理久しぶり〜！アイリス、ちょうどおなか減つてきた！」

カンナの手料理と聞いてアイリスがはしやぎだす。彼女の反応から察するに、結構な腕前とみられる。

「沖縄料理と上海料理を組み合わせたスペシャルな奴だ。うまいぞー！」

楽しそうにいうカンナだが、すみれは話を聞いてぎよつとした。元々実家が神崎重工という財閥でもあるすみれ。料理に関しても口うるさいが、見識の幅もまた広い。それだけに、へビーな組み合わせを耳にしてげんなりとしている。

「へえ、それは楽しみですね。僕は初めてだ」

「俺も上海料理とかは口にしたことがないな」

「あたしもちよつと興味ありますね。どんな料理かしら」

記憶がないせいか、ジンは逆にアイリスと同じ反応だった。そんな彼に同調した大神もまた興味を表している。

「ほ、本気ですのあなたたち…？」

普段なら知識不足（といってもさほど大したレベルではないが）な大神たちや、記憶のないジンを「まだまだ見識の幅が狭いですね」と一言嫌味を言うところだが、少しだけそんな彼らを、すみれはこの時ばかりは羨ましく感じた。

「本当に、相変わらねえ」

カンナの性格をわかってか、ふう：とため息交じりにマリアは微笑していた。

米田は、屋根裏部屋に上がっていた。

帝劇の一番上にあるこの場所は華撃団専用の書庫としても機能しており、いくつもの古書を含めた本が棚に並べられている。

「ジンの奴、もつといい部屋を用意してやれるつてのに：物好きなんもんだぜ」

米田は、屋根裏部屋の一角にある、一か所の窓の前に取り囲むように張られた天幕を見る。その場所はジンが個室として利用している場所だが、個室とするにはどこか貧乏くさい印象だ。金持ち出身のすみれから見たらとても住みたいと思えるものでもないし、彼女でなくてももつといい部屋で過ごしたいと思うはずだ。それでもジンがここを選んだのは、『夜の星が一番よく見えるから』という意見からだ。彼は、夜の星を見るたびに不思議と懐かしい気持ちになる。

まああいつの部屋のことはいつでも考えられる。まずは調べものだ。そのために来たのだから。

米田は、目星のある古書を何十冊も棚から引つ張りだし、読み漁っていった。

太正6年、満鉄地獄。三つ葉重工による大量の軍需物資横流しが発覚した事件

旧幕府の重役の血筋でもある鈴木太平、倉場富三郎逮捕

翌年の太正7年。魔装機兵出現

魔装機兵は、怪蒸機の中でも恐るべき能力を持った機体である。

徳川幕府の残党が魔装機兵の製造に携わっていたのは間違いなかった。だが、まだわからない。それらを裏で糸を引いていたのが誰なのか。

米田は偶然にも一冊の本に目を止める。江戸時代の、かなり古い古書だ。

その見開かれたページに、覚えのあるものがあつた。

「ハ、ハ、ハ、ハ、ハ……」

その古書のページにて描かれていたのは……

「ハ、ハ、ハ、ハ……協侍!?!」

帝都にて幾度も事件を引き起こした怪蒸機。花見を行った上野公園でも暴れていた『協侍』だった。

## 4—2 マリアのロケット

夕方、大神とジンの二人は、カンナに連れられ、帝劇の中庭に誘われた。カンナが、二人の力量に興味を示し、ぜひ組手をしてみたいと申し出たからだ。いきなり空手に誘われたこともあって二人は当惑するものの、大神はこれから部下にもなるカンナとの距離を縮めるため、ジンも変身の必要がある戦いに備えて己を鍛えるためにも彼女の誘いを受け入れた。

「はあ!!」「ぬう!」

今は、胴着姿の大神がカンナとの組手の最中だった。待っている間、ジンは二人の組み手の様子を、見逃さないように観察していた。カンナは沖繩桐島流空手二十八代目継承者の称号を持つだけあり、繰り出す技の全てが切れのあるものだ。だが大神も海軍士官学校を首席で卒業した身だ。簡単に攻撃を通すまいと、カンナの繰り出す上、下段：そして正拳突きの大乱打に、一瞬の気の緩みも見せずに防いでいく。

しかし最後、上段回し蹴りが繰り出されると、さすがにそこまでは防ぎきれなかったのか、大神はまともに食らってダウンしてしまう。

「やっばーやりすぎたか！悪い隊長さん!」

「大神さん、大丈夫ですか!？」

カンナとジンがすぐに駆け寄る。大神の顔には、見事にカンナの靴の裏の模様がかつきりと浮かび上がっていた。

それがおかしくて、つい二人は噴き出してしまふ。

「二人とも、なんでそんなに笑うんだい?」

いくらなんでもひどくないか?と思うが、たまたま傍にあつた噴水で軽く、顔についた砂を取ろうとすると、顔についた靴の裏の跡を見てその意味を理解して、軽く凹んだ。

その後、一息つくために三人はその場で休憩に入った。

「まったく、あんなに笑うなんてひどいじゃないか二人とも」

「はは、悪い悪い。あんまりにもおかしかったからつい、な」

「さっきの顔、さくらたちにも見せたかったね」

「やめてくれよ……」

大神は、さくらたちにも笑われてるもしもの未来を予想し、いつそうテンションが下がる。

「でも、カンナさんは本当に強いですね。けど、どうして帝劇に?」

ジンは彼女に対する疑問を口にした。継承者と名乗るほどの空手の達人が、なぜ舞台

女優になったのか。考えるとあまりにも接点が見当たらないし、イメージがわいてこない。

「やっぱ気になるよな？あたいみたいな女が舞台に立つてるなんてさ」

「あ、いや…」

失礼な言い方になってしまっただろうか。不快を促してしまっただろうかと不安を抱くと、察したカンナが何一つ不快に思ってるそぶりなど見せることなく、軽く笑って見せてきた。

「まあ、あたいも我ながら似合わないとか、何度か思ったことはあるからな」

カンナは空を見上げ、遠い昔を懐かしむように語り始めた。

「あたいの親父は琉球空手の師範でさ、物心ついたときからあたいも空手一筋で、修行に明け暮れてたんだ」

「なるほど…」

いくら海軍で訓練を受けてきたとはいえ、一日の全てを空手に注ぐような相手では、通りで敵わないわけだと大神は納得した。

「けど、そんな時なんだ。あやめさんがあたいをスカウトしたんだ」

「あやめさんに？」

「あやめ？」

大神がきよとんとしている。そういえば、今あやめは次の花組メンバーの確保のために花やしき支部の方へ出張していた。だから大神とはまだ面識がない。てつきりすで顔合わせくらいは済ませているのかと思っていた。

「藤枝あやめさん。帝国華撃団の副指令さんですよ」

「へえ、名前からすると、副指令も女性なのか」

戦場での戦いは男がするもの。軍人というものは本来そういう考えが染み付いている。米田は知つてのとおり男性だが、それでも軍属に女性がいるというのは大神からすると意外に捉えられることだ。そして降魔や怪蒸気との戦い以外では、その役目を担う女性たちが普段は女優だなんて、今思い返しても意外過ぎることだろう。

それはカンナもまた同様だった。

「考えもしなかつたよ。空手一筋のあたいが、舞台女優に名手大勢の人たちを笑顔にして幸せにする……あやめさんがいなくなったら、この喜びを知ることもなくなつたんだろうな。はは、人生つてわかんないもんだぜ」

カンナは空を見上げながらそう言った。空手以外の道も進んだことについては何も不満はない。むしろこの道もいったことで、彼女のしている世界がさらに広がったことに、カンナは満足していることが伺える。

「久しぶりの帝劇はどうだい？」

今度は大神が質問してくる。

「あんたらを含め新人が一気に増えたからな。ちよつと景色が変わつて見えたよ。」

「そうそう、あたいだけじゃないんだ。マリアやアイリスも、あやめさんが世界中から探し回つて探し出してきたんだ」

「世界中を回つてまで!?そこまでやつてたんだ…」

「すげえもんだよな。言つてみりや、あやめさんは花組の生みの親、お袋みたいなもんでわけだ」

あやめは世界を股に駆ける旅をしてまで、現在の花組メンバーをそろえてきたのか。ジンはあやめの世界さえもものともしない行動力に感服した。すると、カンナは汗をぬぐつて立ち上がった。

「つと、そろそろ休憩終わりにしないと。隊長は休んでなよ。今度はジンとやつてみたいからさ」

「待ちくたびれました。そろそろ僕も体を動かしたかったよ」

ジンもカンナに誘われ、重くなつた腰を上げて背伸びをする。

「へへ、やる気にあふれてるじゃねえか。気に入つたぜ、ジン」

組み手に乗り気なジンを心地よく感じ、カンナもやる気のある笑みを浮かべ、軽めの体操をした後、大神から少し離れた場所まで距離を置き、ジンも彼女の正面に立つて対

峙した。

「いっとくけど、あたいが女だからって手加減はナシだからな？」

「手を抜いて勝てる相手じゃないのは、さっきの大神さんとの組み手を見てましたから」  
「わかってるじゃねえか」

笑みが不敵なものになり、じつと構えながらジンを見据えるカンナ。ジンもカンナに合わせて構えを取る。空手の経験はあるかどうかともわからないが、とりあえず巨人に変身しているときと同じ、自分なりの構えの姿勢をとった。

「んじゃ…いくぜ!!」

カンナの掛け声をゴングに、ジンと彼女の組み手が始まった。

「ふう…疲れた」

ジンは二階サロンのソファに寝転がって深呼吸をした。カンナとも組手だが、自分でも予想以上に熱が入りすぎた。カンナを一体の降魔…魔獣のように捉えながら臨戦態勢で挑んだが、さすがは空手の達人。大神との組手を傍らで見ているとはいえ、やはり実際に拳を交えることでどれほどの相手なのかを本当の意味で知ることができた。

疲れた後のソファは心地よい。このまままどろんでしまおうだ。

「ジンさん、シャワーを浴びてから休んでくださらない？あなたの汗がソファに染み付

きますわ」

ちようどやってきたすみれが、ジンを見下ろしながら言う。

「ああ、すみれさんにアイリスか……大丈夫、この後風呂に入るから」

ジンはゆつくりと体を起こす。その時アイリスもすみれにくっついて来ていたことに気づく。

「その様子だと、カンナさんと組手をなきつていたのかしら？」

「まあね。いやはや、我ながら熱が入りすぎたよ」

「すごかったね、お兄ちゃんとジンって！カンナ、すごく強いのに！」

笑いながら言うジンに、アイリスは目をキラキラさせている。遠目で、中庭でのジンたちの組手を見ていたようだ。カンナの空手の腕前については自分よりも知っているからこそ、強く関心を寄せている。

すみれは呆れたようにため息を漏らした。

「全く、久しぶりに戻ってきたと持ったら本当に相変わらずでしたね。新人とはいえ、あなたと少尉の二人を連続で組手に誘うなんて。脳みそが筋肉なのか……」

すみれは呆れたようにため息を漏らした。すげえ言いようだな、とジンは苦笑いを浮かべた。全く棘を隠していない。しばらく会っていなかった者同士だが、そこまで言えるほどに気を許しあっているのだろう。

「そういや、なんでカンナさんは帝劇を離れてたんだ？」

ふと疑問に思ったことを口にすると、少し沈んだ顔でアイリスがその理由を話した。

「…実はね、カンナのパパがね、悪い人に殺されたって…」

「なんだって!？」

「ええ、空手の師範代だったお父様の仇を討つために一時的に花組を抜けたのですわ」

思わぬシリアスなカミングアウトにジンは驚いた。

「お父さんの仇、か…」

初めて顔を合わせたとき、カンナはまるで太陽のように常に明るくいるような人だと思っただが、存外影が差すこともあったようだ。いや、そういう人間だからか…一度大事なものを奪われ、怒りと絶望を強く持つのだろう。

「でも無事に戻ってきてよかった。やっぱりカンナは強い人だよ！」

「…まあ、私は最初から心配などしてませんわ。あの人は殺しても死なない人ですから」腕を組んでどうも思わないぞアピールをするすみれだったが、ふふーん、とアイリスがすみれの顔をニヤニヤしながら見上げた。

「そんなこと言つて、すみれが一番心配してたもんね？」

「ぶ!? な、なにを言うのかしらこのガキヤ…」

口が悪くなつて…いいところのお嬢さんらしさが一瞬だけだが台無しになった。

「だって、カンナが帝劇を出る時、最後にお見送りしてたのすみれだよ〜？」  
「へえ…」

さらに生意気に追い詰めてくるアイリスの話を聞いて、ジンも彼女の態度に影響されるように、ニヤニヤと笑みを浮かべながらちらつと、すみれを見る。

「ち、違いますのよジンさん!!私はいくまで、カンナさんが暴れまわって周りの方に迷惑が掛からないのか様子を見に行こうとしていただけで…それだけですからね!他意はないのですのよ!」

慌てて全否定するすみれだが、赤くなった顔のせいで全く動揺を隠しきれていない。なんだかんだで、仲間思いなすみれだったようだ。

「…あら?」

すると、すみれの目にある人影が飛び込む。

すらつとした長身と金髪に、赤い春物のシャツを着た女性。マリアだ。

「……確か、ここに」

マリアは、さつきからサロン近くの2階廊下を歩き回っていた。何かを探し回っていたようで、床をキョロキョロと見渡している。

「マリアさん、何かお探し物かしら?」

声を掛けられ、マリアはすみれ、ジン、アイリスの方を振り返る。

「あなたたち……」

「良ければ手伝おうか？」

困っているなら手を差し伸べないと。そう思つてジンは気づかいの言葉をかけるが、マリアは首を横に振つた。

「ああ、いえ。大丈夫よ。なんでもないから」

「…マリア、嘘ついてる」

だがアイリスから、それが嘘だと見抜かれた。マリアは彼女が心を読めることを思い出し、薄い作り笑いを浮かべてきた。

「…ごめんなさい。アイリス。あまり話したくないことなの。許してね」

マリアはそう言つてサロンを後にした。

「なんだつたのでしょうか？」

「さあ……」

「マリア……」

すみれとジンは顔を見合わせて首をかしげている間、アイリスはマリアが立ち去つた方のサロンの入り口を心配そうに見つめていた。

なんでもない、とは口にしたが、やはりアイリスの読み通り、マリアはその後も床を

キヨロキヨロと見渡していた。何かを落として探し回っているのは想像にたやすい。すると、階段の方から大神が上がってきた。

「ん？マリアか。どうしたんだい？そんなにウロウロして」

「し、少尉…いえ、なんでもありません」

名前を呼ばれて振り返り、探し物を探すのに集中するあまり大神の顔を見て少し驚いたような反応を見せたが、すぐにいつものクールな表情を保った。

ポーカーフェイスが得意そうに見える彼女だが、大神はアイリスがそうだったように、さすがにこれには何か抱え込んでいると読んだ。

「なあ、マリア。何か気になることがあるなら、なんでも相談してほしい。これでも俺は君たち花組の隊長なんだ…」

そう言いかけたところで、大神は何かを蹴った感覚を覚え、足元を見下ろした。

（これは？）

金色の丸い何かが、ひものようなもので繋がれている。ロケットペンダントだった。

「それは！」

大神がそれを拾い上げたのを見て、思わずマリアの口から強めの声が漏れ出る。

「もしかしてこれを探していたのかい？」

「え、ええ…」

「済まないな。蹴ってしまつて。はい」

マリアは、大神が拾い上げたそのロケットペンダントを受け取る。

「いえ…ありがとうございます」

「それは、お守り？」

大神にそう問いかけられたマリアは、少しの間をおいてから頷いた。

「お守り…そうかもかもしれません」

「そうか…」

「では、私はこれで」

マリアは結局この時も笑みの一つも見せず、暗い顔のままだった。あのロケットペンダントが、何か関係しているのだろうか。気になった大神だが、その時は場の雰囲気もあつて何も聞き出せなかった。

なんとか見つけることができた。ほっとしたマリアは、部屋の前にてタオルで頭を拭いているカンナを見かける。

「おう、マリアじゃねえか」

「カンナ、もしかして風呂上り？」

カンナの体から湯気が出ているのが見えた。さつき大神たちと組手をしていたと

言っていたから、それが終わって汗を流していたのだろう。

「まあな。なかなかいい汗かかせてもらったからな。隊長とジンには感謝だな」

カンナは大神たちとの組手に満足しているのが見て取れた。しばらく会っていなかったが、変わらず体を動かすのが大好きな彼女のままで、やはり安心させられる。

「そうだ、久しぶりに会ったんだしよ、お前の部屋で話そうぜ」

マリアはその誘いを受け入れ、自室にカンナを迎え入れた。

「相変わらず殺風景だねー…」

「ふふ、そういうあなたは昔通り口が悪いわね」

彼女の部屋は、数冊ほどの本が乗っている木製の机一式と寝具…：必要なものしか用意されていなかった。ぬいぐるみがたくさんアイリスや、実家が大企業故にゴージャスな飾りつけであふれているすみれと異なり、彼女のストイックさを物語っている。

「でもよ、驚いたもんだぜ。花組に男の隊長だもんな。…：マリア、あの隊長のこと、どう考えてるんだい？今は副隊長って立場なんだろ？」

「…：私は元々人に命令を下すタイプじゃなかった。だから隊長交代について不満はない。ただ、まだ彼を隊長として認めるべきか、まだ判断しかねるわ」

「マリアは理想が高いもんな」

「そうね…：そうかもしれない」

窓の外を見つめながら、マリアはおもむろに、大神から返してもらった金のロケットペンダントを、カンナに見られないように開く。開かれたそのペンダントには、サングラスをかけた男性の顔が映されていた。

理想が高い：否定はできなかった。マリアの中では、『隊長』という呼び方は『特別』な意味も含まれていたのだ。

「…あなたはどう思うの？」

ペンダントをしまうと、マリアはカンナに質問を返してみる。

「あたいは気に入ったぜ。一生懸命って感じでき。あのジンってやつのもな」

「ジン？」

「聞くところ、米田支配人の養子だろ？女が好きそうな割に、嫁さんとかの話とか全くなかった支配人にだぜ？一番驚いたよ」

「ええ、私もよ。それは驚いてる」

ジンの存在については同感だ。驚かないわけがない。出会い方もかなり特殊だ。帝劇の地下の立ち入り禁止エリアの医療ポットの中に眠っていたところをアイリスとすみれが見つけた。まるで、恐れ我古代遺跡に封じられた、人の姿をした謎の存在との邂逅だ。

「あのジンってやつ。不思議な奴だよ。組手してわかった」

「不思議？」

目を丸くするマリア。

「あいつ格闘技の心得があるみたいなんだよ。隊長さんよりも慣れてるみたいだったなあ。隊長さんに続いてあいつとも組手をしたんだけどさ……実を言うと、一瞬ビビったんだ」

「あなたが？」

「ああ、対峙して構えを取ったあいつを見た途端にブルっちまった。あたいは熊とかが相手でものしていけるって自信はあるけどよ、あいつは違う」

熊を相手に素手で立ち向かうというカンナも、沖繩から帝都まで海を泳いで渡ったことも含めたいがい常識外れだとは思うが……とは突っ込まない。マリアはそのままカンナの話に耳を傾けた。

「そんなのが生易しく思えるような、とんでもねえ怪物を相手にしたような……」

組手の時に、ジンと向かい合ったときのことを思い出したのか、既に風呂上がりの髪は乾ききっていたのに、カンナのこめかみからタラリと一筋の汗が流れ落ちた。

「あいつ養子ってことは、米田支配人の本当の子供じゃないんだろ？ 支配人に引き取られる前は、どんな奴だったんだろうな」

「……今も昔も、わからないわね。彼には、過去の記憶がないそうだから」

「記憶がない？ 記憶喪失ってやつか!? マジでそんなのがあるんだな……」

カンナにとつても、記憶喪失というものはさすがに予想外だったようだ。

「けど、記憶がないつてのに、あそこまであたいと渡り合えるなんて、何者だろうな」  
カンナの話の聞いて、マリアもジンに対する謎をより一層感じ取るようになった。カンナさえも唸らせる格闘術。幼い頃から空手の修行を続けていた、空手の達人であるカンナにそこまで言わしめる。マリアは、カンナがジンに対してそこまでの評価を下したことに、表情に強く出さなかったが驚いていた。

「……」

だがそれ以上に、それ以外についてジンに対して気にしていることがあった。

記憶喪失。

家族と健やかで平和な日々を過ごし、幸せに満ちている人間からすれば、それは今まで生きてきた証が消え去ってしまうという残酷なこと。自分が何者なのか、どこで何をしていたのかが分からなくなる。

でも……同時にこうも思っていた。

身を裂くような、悲劇の記憶も覚えていない。それは、ある意味幸せなのではないだろうか。

その頃……

「刹那よ、お前がわしに言っていた作戦とやらの準備は万全か？」

黒之巢会のアジトにて、黒之巢会のリーダーである天海が刹那に状況の説明を求めた。

「いえ……次にもう一段階踏む必要があります。再び帝都付近で騒ぎを起こし、そこに帝國華撃団をおびき寄せます」

鋭く長い爪を鳴らし、刹那はニヤツと気味の悪い笑みを浮かべながら天海に報告を続けた。

「前回の戦いで奴らの心を読み取ったところ、帝國華撃団とやらは創設されてまだ日の浅い集団、しかも隊員たちの個性がそれぞれ強すぎるがゆえに、意見がまとまりにくい烏合の衆。かろうじて隊長と副隊長という鎖で繋がりがっているだけの関係です。

隊長の大神一郎と、副隊長のマリア・タチバナの間の不和を促せば、一瞬で瓦解できるでしょう」

「さすがは兄者。敵の心を読み、その弱点を的確に突く。兄者の右に出る策士はいない！」

花組の弱点を把握しきつてみせたことに、その場に居合わせていた羅刹が兄への尊敬

を改めて感じた。

「よし、首尾は整っているというわけだな。

刹那よ、その作戦を持って帝国華撃団を一掃するのだ。我々の大願を阻む愚か者は、たとえ女子供であろうと容赦はするな。全員殺せ。あの赤い巨人も現れ次第、その首を取るのだ」

「ありがたき幸せ」

お任せくださいではなく、ありがたき幸せ。その言葉の言い回しは、まさに次の作戦が刹那にとつて実に好みの内容の任務であるという意味を含んでいた。敵の身も心もいたぶり蹂躪する…残虐な刹那らしい喜びだった。

「羅刹、お前はミロクとは別に『天封石』の地点を特定し、見つけ次第破壊するのだ」  
「はー！」

「天海様、私はいかがいたしましたしょう」

すると、闇の奥より、葵叉丹が天海たちのもとへ歩み寄ってきた。

「叉丹、おぬしには刹那の魔装機兵の最終調整を行え。だが貴様は先日の失態もある。ミロクか羅刹のどちらかが『天封石』の地点を特定するまでの間に完了するのだ」

「お任せください。それだけの時間さえあれば問題ありません」

叉丹は天海の前で跪き、主の命令を迷わず受託、すぐに作業にかかるために天海の部

屋を後にした。

(さて、刹那程度に後れは取るまいよな……『ジン』)  
去り際に、赤い巨人のことを頭に浮かべながら。

## 4—3 非道なる刹那

帝都中央区、築地。

その河口付近の廃屋街は混乱に満たされていた。

絶望と恐怖の悲鳴が轟き、それを脇侍たちが暴れまわってさらに煽り立てていく。

「付近の住民の避難を急げ！誰一人逃げ遅れがない様にしろ!!」

現場には、マスクで素顔を覆い、黒いボディスーツで身を纏った男性の部隊が、現地の避難誘導を行っていた。

この部隊は、帝国華撃団・月組。普段は黒子として花組の舞台を裏で支える裏方役の一つなのだが、各地に派遣され敵地への偵察と情報採取を行うのが本来の任務だ。

今は、花組が到着するまでの間の現地の住民の避難誘導をしている。

当然ながら、奏組がそうであるように、月組も十分な霊力を持っていないので光武を操縦できないので、戦闘面においては花組が現れるまでの時間稼ぎを行い、可能な限り被害を最小限にとどめていた。

「オンキリキリバサウンバツタオンキリキリバサウンバツタオンキリキリバサウンバツ

タオンキリキリバサウンバツタオンキリキリバサウンバツタオンキリキリバサウンバツタオンキリキリバサウンバツタオンキリキリバサウンバツタオンキリキリバサウンバツタ……」

築地本願寺。

そこに、黒之巢会の死天王の一人『蒼き刹那』が怪しげな呪文を詠唱していた。目の前には彼の巨体よりもさらに大きな楔が地面に突き刺さっている。

脇侍たちには、帝国華撃団に儀式の邪魔をされぬよう適当に暴れさせている。その間に楔を打ち込んでいた。

楔は、刹那が怪しげな呪文を唱えている間に、地中深くへと沈められていった。手早く楔を打ち込んだ刹那は、ある廃屋の屋根の上から、脇侍たちが現地の住民を追い回すのを、月組が住民の避難をしつつ脇侍たちと対峙している様を観察し始めた。

「……あーあ、なんかつまらないや」

月組では、一体倒すだけでも数人がかりなうえに苦戦を強いられていた。すでに何人もの負傷兵が出つつある。刹那はそれを見て退屈そうにあくびした。

「あの程度の弱い連中じゃ、腕の比べっこは期待できないね。だつて弱すぎるもん。僕一人で真正面から出向いても勝てそうだけど、あんな雑魚なお兄さんたちと馬鹿みたいにな戦つても面白くないしなあ……」

刹那は脇侍たちの戦闘に目もくれなくなり、帝都の方面を眺め始める。

「早くおいでよ、帝国華撃団のお姉さんたち……」

たつぷり、いたぶってあげるからさ……

赤く染め上げている鋭利な爪を舐めながら、待ち遠しそうに刹那は待ち続けた。

大帝国劇場地下。帝国華撃団本部・作戦指令室。

「全員揃ったか？今から作戦会議に入る」

米田が、大神たち花組が揃っているのを確認すると、風組隊員服姿のかすみたちから現地の現状が伝えられる。

「現在、築地廃屋町の築地本願寺を中心に協侍による破壊活動が確認されました！」

「先行している月組が協侍のけん制と住民の避難誘導が行われております！」

「ですが、予想を超えた協侍に苦戦を強いられ、二部隊の負傷者が始まっています！」

「聞いたな大神？すぐに花組を率いて現場に向かってくれ」

「了解！帝国華撃団！待ってください大神さん、米田指令！」な、どうしたんだいジン？」

大神がすぐに花組の面々に向き直り、出撃命令を下そうとしたが、それをジンが遮った。大神たちと同じ模様の、色がグレーの隊員服を着こんでいる。

「確か築地は轟雷号のルートから外れてしまっていたはずですよ！」

「あ、そうか！そうだったな……しまった……！」

ジンの言葉で大神も気づいた。轟雷号は特殊とはいえ列車であることに変わりない。レールから大きく離れた地点へ到着するには時間がかかりすぎる。光武の速度を考えたも、到着までの間に被害が拡大してしまう。

「案ずるな二人とも、今回は翔鯨丸を使う」

「しよげいまる？」

「あたしも初めて聞きますね」

聞き覚えのない単語に、大神、さくら、ジンの三人が目丸くする。

「轟雷号のルートから大きく外れたエリアへの出撃を必要とする際に、光武を現地まで送る飛行船です。後日合流予定の紅蘭も設計に携わっているんですよ！」

「そんなものまであるのか！」

由里の説明をも聞いて三人は驚く。光武輸送のための飛行船となると、資金も技術力の高さも相当なはずだ。自分たちの所属する組織が思った以上に強大なものと痛感させられる。

「アイリス、まだお留守番……詰まんないの」

「紅蘭が戻ってきたら、その時に光武も輸送する予定だ。今は我慢してくれよ、アイリス」

「留守番は僕だって同じだ。一緒にここで大神さんたちを見ていよう」

「はぁーい」

アイリスもこの部隊に所属する以上、一緒に大神たちと並んでいたいと思っ  
ている。光武がない以上、アイリスは出撃ができない。ジンも帝国華撃団の一員だが花組の隊員  
ではないので光武の予定はないので同じだ。仕方なく米田の言う通り我慢するしか  
なかった。

「さあて、久しぶりの喧嘩だな。派手に暴れてやるぜ」

「ちよいとカンナさん、空手の試合じゃないんですのよ？」

拳をばきばきと鳴らして張り切るカンナに、すみれは呆れたように言う。

「そうか、カンナは今回が久しぶりの出撃だったな。存分に力を振るってくれ！」

「おうよ！あたいも隊長の戦いぶり、とくと拝ませてもらうぜ!!」

「では少尉、出撃命令を！」

マリアが号令を促し、頷いた大神は隊員たちに命令を下した。

「帝国華撃団・花組、出撃せよ！」

格納庫に向かった花組は、一斉に各光武へ搭乗。

彼らが光武に乗ったことを確認した風組の三人もすぐに出撃支援にかかる。

「蒸気機関、転換！」

「各部への動力伝達、開始！」

「花組全光武の収納、確認！」

作戦指令室から移動したかすみ、由里、椿の3人は、これから操縦する機体の操縦室に到着。今回は米田も話した通り、轟雷号ではなかった。

操作盤を操作、花組の乗る光武が轟雷号に登場する時と同じく、レールを通して今自分たちが乗っている機体へ収納した。

そしてその頃、浅草・雷門前。

『緊急警報、緊急警報！付近の住民の方は直ちに避難してください！』

大賑わいだった浅草だが、かすみの声で発せられたその警報で一気に住民たちの警戒が高まった。また脇侍などの怪蒸気や、例の巨大降魔が出現したのではと騒ぎ出し、雷門の周辺から逃げていく。

次々と人々が避難していくと、雷門通りに衝撃的な事態が起きた。

「み、見ろ！地面が……！」

男性の一人が、離れた地から雷門通りを指さして大声を上げる。

信じられないことだった。雷門通りの地面が、通りの建物ごと、箱のふたを開くように次々とひっくり返っていったのだ。

帝劇本部からモニター越しにそれを確認しつつ、風組は次なる作業に入る。彼女らが操作を続けていると、ひっくり返った雷門通りの地下にむき出しとなった、広大な鉄板が二つに分かれて開かれる。

開かれた地面の下から現れたのは、雷門通りよりもさらに巨大な飛行船だった。街の人たちは、地面から突然バカでかい鯨が現れたと仰天し、騒ぎ出した。

これが、轟雷号では届かないルートへの出撃対策として帝国華撃団が保持している武装飛行船『翔鯨丸』である。

「空路確保！」

椿がかすみ、由里に目を合わせ、二人も頷く。

「『翔鯨丸、発進!!』」

雷門通りの空から飛び立った翔鯨丸は、築地方面へと向かって進行を開始した。

「なんだよ、意気込んでた割にお兄さんたち弱いねえ」

「く…」

「でも意外。君たちの服、特別製みたいだね。僕の爪なら手足を簡単に撥ね飛ばせるのに」

築地の戦場では、すでに月組が刹那と接触、交戦していた。だが、刹那の方が彼らよりも遙かに強大だったため、手も足も出せなかった。刹那の後ろにも脇侍はいるが、一体も月組に攻撃を仕掛けてこない。刹那に遊ばれているのだ。脇侍は刹那の護衛の役目を担っているのだが、脇侍がなくとも月組の霊力では刹那の敵ではなかったのだ。

「ねえ、せつかくこつちが手加減してあげてるんだから、もつとあがいて僕を楽しませてよ?！」

刹那は、目の前で跪く月組隊長を見下ろしながら、その顔を爪でなぞってほくそ笑む。軽く爪で撫でただけなのに、マスクの上から月組隊長の頬に切り傷が出来上がっていた。

「隊長!!」

そんな月組隊長の危機を救おうと、一発の銃が刹那と月組隊長の間を突き抜ける。邪魔をされて期限を損ねてたからか、不満げに少し顔を歪めた刹那が右を向くと、一人の月組隊員が刹那に銃を向けている。

「つち、雑魚のくせにいつちよ前に……」

刹那は前髪に隠れたその目をクワツツと見開く。すると、銃を向けてきた隊員が突然、突風に襲われたかのように後ろへ吹っ飛ばされ、彼の背後に建っている倉庫に追いやられる。

「舟木!!」

月組隊長が、隊員の名を叫ぶ。

今の衝撃で吹っ飛ばされた舟木隊員は、外からの日のささない暗い倉庫の下敷きになっていた。なんとか辛うじて這い上がり、今の自分の場所、そして敵である刹那の姿を確認しようと周囲に目を向ける。外からの光は、入口と、隣にある、自分が吹っ飛ばされたことで出来上がった壁の穴から差し込まれている。だが穴と入り口の方に、刹那の姿はない。月組隊長の目の前からいつの間にか移動をしていたのだ。

舟木は銃を構え、周囲の暗闇の中もくまなく見渡して刹那の姿を追うが、やはり見当たらない。一体どこへ隠れたのか。

ふと、舟木はあるものを目にした。

倉庫の中に、ひとりで何か物音がするのが聞こえた。刹那がそこから狙っているのかと警戒し、舟木は銃を向ける。だがそこにいたのは刹那ではない。

大人しそうな、まだ10歳にも満たない幼い男の子だった。

「君、大丈夫かい?」

「あ、う…」

さつきまでこの築地に脇侍があふれ、人を襲っているのを目にしたせいだろう。男の子はひどく怯え切っていた。舟木はすぐに男の子を守るべく、彼の傍らに駆け寄る。

「いいかい、おじさんの傍から絶対に離れるんじゃないぞ？必ずお父さんとお母さんのもとに帰してあげるからね」

「うん…ありがとう」

男の子は舟木の服を掴んできた。少しでも頼れる誰かにすがって恐怖心を和らげようと思っているのだろう。

…そう思っていた。

グサツ!!

「がは…?」

舟木は、背後から突き刺さる激痛に襲われた。振り返った舟木が最期に見たのは、ニヤツと不気味な笑顔を浮かべて、自分の背中に手を突き刺してた子供…否、刹那の無邪気ながらも邪悪な笑顔だった。

「舟木?どうした舟木!!」

月組隊長は、今だ舟木が外へ出てこないことに違和感を覚え、舟木へ呼びかけを凶つた。だが返事は帰ってこない。

「舟木、返事をしろ!!」

再び月組隊長が舟木に向けて呼びかけると、ようやく舟木が外へと姿を現した。部下の無事を確認し、ほっと一息つくが、その安心は僅か一瞬のことだった。

現れた舟木の体は、胸元に風穴を開けられ、血塗れになっていた。加山に手を伸ばしながら、舟木はどさっと倒れてこと切れた。

「ふ、舟木い!!!」

「あくあ。子供だからつて油断したのが命とりだったね。ちよつと変装しただけで僕だつて気づかないなんて。」

ま、おかげで楽しく殺してやれたからいいんだけど」

続いて倉庫の奥から姿を見せたのは、探していた刹那だった。血が滴り落ちる爪の鮮血を舐めとりながら、舟木の死体を見下ろし、足蹴にする。

「次はどうやって遊ぼうかな?この舟木つて叔父さんの体に糸を繋げて、操り人形にして遊ぶのも面白いかも。無限に首が180度回転したりとか…ふふふふ、大道芸として見せたら面白そうだね」

「貴様…!!!」

人間、それも仲間の死体をおもちやとしか思わない言動に、月組隊長は怒りが込み上げてきた。自分は手負いとはいえ、今すぐにでも刹那を絞め殺したいとさえ思えてきた。

「そんなに怒らないでよ。今度は君で楽しませてあげるからさ……加山君？」  
「!!？」

こいつ……なぜ俺の名前を!?!月組隊長は絶句する。月組隊長の正体、それは以前、上野公園でジンやさくらが会った、大神の海軍士官学校時代における友人の『加山雄一』だったのだ。

動揺する彼に向け、刹那は説明を加えてきた。

「ああいいよ。別に喋らなくても。心を読めばすぐにわかることだからさ。」

帝国華撃団・隠密部隊『月組』の隊長……加山雄一。花組隊長の大神一郎の同期にして親友。なるほどね……霊力もそれなりにあつて、それも大神一郎とは親しい……だから選ばれたってわけなんだ」

そこまで言い当てて見せた刹那に、加山は戦慄する。

相手の心を読む。隠密部隊を率いる自分にとつて、こうして対峙すること自体がまずい。刹那にも圧倒されている以上、すぐに撤退して身を隠さなければならぬ。

「逃げるくらいなら鬼ごっこで遊ぼうよ？スリル満点で楽しいよ？」

撤退を考慮したことさえ読み取った刹那が近づいてくる。

こいつ相手にうまく逃げられるだろうか？加山は銃を構え、確実に逃げる算段を考える。まだ花組は来ないのだろうか？もう住民の避難は完了している。後は、親友が隊長

となつたあの部隊が一刻も早く来てくれることを願うばかりだが。

「そうだねえ、僕も弱い人とはかり遊ぶのもつまらないと思つてたんだ。でもいいさ。今度は…例の赤い巨人さんとか、帝国華撃団・花組が…マリアお姉ちゃんが来るまで、加山君で楽しませてもらうさ」

(マリアさんだと…!?)

またしても心を読んできた刹那の言動に、加山は困惑した。花組全体ならまだしも、なぜ…マリア個人を名指しした？意味がわからなかつたが、少なくとも理由ではないことだけははつきりした。

マリアが狙われていることも含め、なんとしても撤退しなければ。

すると、刹那は頭上を見上げて気の抜けたような声を漏らしてきた。

「…あらら、もう来るんだ」

「…」

加山も頭上を見上げると、待ち望んでいたものが空から飛来してきたのを見た。

浅草の地下に隠れていた、武装飛行船『翔鯨丸』。頭上にそれが飛来したと同時に、翔鯨丸のハッチが開かれ、5つの影が加山の前に落下した。

「帝国華撃団・花組！参上!!」

(助かつたぜ大神！持つべきは親友だな！)

大神たち花組の搭乗する光武が目の前に並んだのを見て、加山はこれから始まる戦闘に巻き込まれぬよう、すぐにその場から離れだした。

刹那は獲物の来場に笑みを浮かべた。

「やつときたんだ…待ちくたびれたよ」

「帝都の平和を乱す不届き者め…俺たちが相手だ!」

「いいよ、まずは脇侍たちを適当に相手にしてみてよ。僕、弱い奴をいたぶるのちよつと飽きてきたんだ。まずは脇侍たちをやつつけて力を見せてみなよ」

刹那はそう言うのと、人間の者とは思えない跳躍力で遠くの場所まで飛び去る。同時に、刹那を守ろうと脇侍たちが大神たちの前に立ちはだかった。

「隊長、ここはまず、あたいにやらせてくれ」

すると、カンナの光武が真っ先に脇侍の前に立った。これはちよつどよいと大神は思った。カンナの空手の腕前がどれほど敵に通じるのか、そして実戦における彼女の戦いぶりを見ていた方が、後々の戦いにおいて作戦を立てやすくなる。恐らくカンナも同じことを考えているはずだ。

「かすみ君、この付近の避難状況は?」

だがその前にと、大神は通信でかすみに避難状況の確認を取る。

『住民の避難は、月組の誘導で完了しています。後はその月組隊長おひとりだけです』

「わかった」

どうやら住民を巻き込むことはなさそうだ。大神は心置きなく戦うことができる。確信し、カンナにGOサインを出した。

「よし、カンナ！ 思い切りやってくれ！」

「そうこなくつちやな！ いくぜ！」

「みんなはカンナに続いて脇侍を各個撃破せよ！ マリアは後方からの銃撃で援護してくれ！ カンナとすみれ君は前衛、」

「了解！」

大神からの許可も得て、カンナは強く意気込んでさっそく脇侍に向かって突進した。脇侍もカンナの接近に対し、隊列を組み、銃撃で迎え撃つ。

単騎であるカンナからすれば多勢に無勢。が、カンナは全く恐れを見せなかった。

「当たるかよ、そんなへなちよこ弾！」

カンナは脇侍の弾丸を避けていき、目の前に現れると同時に光武の拳を脇侍の顔面に叩き込んだ。

メリツと深々と顔を潰されたその脇侍は吹っ飛ばされ、その後ろにいた他の脇侍もまた次々と巻き込まれて粉碎された。

「す、す……」

本気を出すとこれほどまでか。大神やさくらはカンナの馬鹿力に呆気にとられていた。だがこれ程までならば非常に頼もしいものだ。

「全く、相変わらず野蛮な人だから……戦いは優雅に、華麗にこなしてこそですわよ」  
すみれも、カンナに呆れつつも、自分も負けまいと薙刀振るって脇侍を一機切り裂いた。

「大神さん、私たちも参りましょう！」

「ああ！」

さくらの呼びかけに大神も頷き、光武の刀に雷を纏わせた。

「10分……以前よりも、さらに早く脇侍の殲滅に成功しました！」

「すごいです！花組のみなさん、前よりも強くなってます！」

「これもまた大神さんのおかげですね」

その頃の翔鯨丸。そこは帝劇地下と同じく、作戦司令室と同じ装いに加え、翔鯨丸の操縦室にもなっていた。そのモニターから地上の戦闘の様子を見ていた風組は花組の活躍に盛り上がっていた。

「頑張れ、お兄ちゃん！」

アイリスもまた黄色い声援を大神に送っていた。

…が、ジンと米田は無言だった。訝しむようにモニターの向こうに見える花組と脇侍たちの戦闘を見つめている。

「妙だ」

「え？」

ふと口を開いたジンの一言に、風組やアイリスは目を丸くする。

「お前も気づいたか？」

米田がジンに視線を向けると、ジンは頷く。

「脇侍が、前と比べてあっさりとやられ過ぎてる…」

「え？でも、カンナさんも加わりましたし、大神さんたちだって強くなったはずじゃ…」

椿が考えすぎではと言うが、米田は見解を崩さない。

「確かに大神たちは強くなった。カンナも戻ってきて戦力も高まったのは確か。だが…」

改めて、彼はモニターから見える脇侍たちの動きを、やはりか、と呟きながら観察する。

「脇侍たちがどれも前に出過ぎてる。まるで、脇侍たちは倒される前提で戦ってるみたいだ」

そんなまさか、と思うものの、経験の深さが華撃団一の米田の言葉は深く根付いた。

一方で、米田はもう一つ気にしていることがあった。

屋根裏部屋の資料の山をあさっていたことで知った、脇侍のルーツ。

江戸時代以前を描いた資料でも存在が確認されていた脇侍。そしてそれを操る謎に満ちた存在。

(築地の脇侍を操っている奴も、あの資料で描かれた奴と何か関係があるだろうな…)

月組に調べさせる必要があるな。今回の戦いが終わった後で、米田は心の中で次にとるべき行動を定めた。

「追い詰めたぞ！」

ついに自らの一刀のもと最後の脇侍を倒し、大神たちは刹那と対峙した。

「ちよつと、時間かかりすぎじゃない？」

ふああ、と緊張感のないあくびを漏らす刹那。そのなめた態度に、カンナやすみれが噛みつくような目を向ける。

「あくびとはずいぶん余裕ですね」

「バカにしゃがって…隊長、とつとどこいつも片付けてやろうぜ！」

血気を逸らせるカンナが、大神に攻撃命令を出すように促す。

「ああ、だがみんな落ち着いてくれ。冷静さを保って攻撃しよう」

敵の態度に神経を逆撫でされて冷静さを書けばそれこそ敵の思う壺だ。大神はみんなに冷静でいるよう重々呼び掛ける。

だがこのあと、刹那は指を鳴らし、大神からもそれを奪うものを見せつけた。

「これを見ても冷静でいられるのお？」

「な……」

大神たちは目を見開いた。刹那の元に、脇侍たちよりもさらに大きな機体が、地面から溢れ出た闇の中から姿を現した。

魔装機兵・蒼角。蒼き刹那の機体だ。

しかし大神たちが注目していたのは、蒼角がその手に捕まえている人間だった。黒い戦闘服を着たマスクの男：月組の加山だ。

『大神さん、あの人は月組の隊長さんよ!!』

「何!？」

通信越しに由里から聞いた大神は驚愕する。

「さあて……君たちの前でこの人を細切れにしたらどうなるか……なあ!？」

刹那は瞬時に蒼角に乗り込み、加山を宙に放り投げた。そして、加山の体をバラバラにしてしまおうと、爪を研ぎ澄ませた蒼角の右腕を振り下ろした。

「やめろお！」

ほぼ無意識だった。大神は飛び出し、光武の右の刀で蒼角の爪を防ぎ、左腕で加山を受け止める。

だが、下腹に大きすぎる隙ができてしまう。

「隙を見せたね！」

刹那が見逃すはずもなかった。残った左腕のモーニングスターを、大神の光武の腹部へ叩き込んだ。高台から鉄の塊が落ちたような凄まじい金属音と共に、蒼角の腕がめり込んでいった。

「ぐはっ……！」

大神の乗る光武は、その一撃によって近くの電柱に激突してしまう。

「大神さん!!」

「少尉!!」

「隊長!!」

「…!!」

翔鯨丸の中でも、大神が倒されたことで動揺が走っていた。

「大神さん!!」

「大神!!」

「お兄ちゃん!!」

なんということか。人質を取ってきて、こちらの好きを強引に作り出すとは。敵が人質をとってこくることは想定されていたことなのだが、まさか月組隊長を人質に取つてくるとは予想外だった。

「お、大神機、今の一撃で起動停止しました！敵機が接近しています！早く救援を!!」  
いち早く的確に対策を打診したかすみだが、通信越しに花組へ伝達した。

絶叫する花組をよそに、刹那は蒼角を、意識を失った大神の光武の前へ向かい、彼へ止めを刺そうとする。

「バカだねえ、たかが人間一人のために殺されに来るなんてさ」

刹那は、大神に近づくさ中、ちらつとマリアの方を見た。

感じる…彼女の心の乱れを。本来このタイミングでなら、マリアは刹那の妨害のための狙撃を仕掛けるはず。だが、刹那は読み取っていた。彼女が今、頭の中に過らせたヴィジョンを。

(くつく…予想通りだね。忘れられないんだ…)

光武の中で、大神が撃破されて硬直したままのマリアを覗き見て刹那は口角を釣り上げた。いいぞ、そうやって心の乱れをさらに加速させるんだ。楽しそうに笑う刹那の耳

に、直後に叫び声が聞こえてきた。

「てめえ！」

「よくも大神さんを！許しません！」

人質を取つて隙を無理やり作る。正義感の強い大神の心を利用した、刹那の卑劣なやり口に……何より大神を傷つけられて真つ先に怒りをあらわにしたのはさくらと、そしてカンナだった。

二人が大神の仇を討とうと蒼角に向かっていくのを見て、マリアはようやく我に返つた。

「二人とも、待ちなさい！」

まずい。大神が倒れたことで、ただでさえまだ整つてない陣形がさらに乱れてしまつている。

マリアが引き留めるが二人の耳に届かない。さくらが刀を振りかざしたが、刹那には既に読まれていた。すう、と一步後ろに下がっただけでさくらの一撃を避け、反撃にかぎ爪を振りかざそうと腕を振り上げる。

「さっせつかよー！」

カンナがさくらを守ろうと飛び出し、後ろから蹴りを放ってきたが、それさえも刹那は見切っていた。後ろから飛び蹴りを放ってきたカンナの方へ振り返り、姿勢を低めて

スライディング回避。空振りに終わったカンナの蹴りは、逆に助けるはずだったさくらの光武を蹴飛ばす羽目になった。

「きゃ!!」

「わ、悪りいさくら!大丈夫か!」

「そうやってすぐに飛び出すから、もう!」

すみれが見てられないとばかりに、今度は自らも薙刀を持って刹那に攻撃を仕掛けた。蒼角は、繰り出されるすみれの薙刀の連撃をひよいひよいとかわしていく。刹那の小柄さを生かしたすばしっこさを再現しきっており、一撃もかすることさえなかった。

「この、大人しく……!」

すみれがいい加減当てなければと速度を上げていくが、刹那にはまだ余裕があった。すみれが自身の限界まで薙刀を素早く振るっても、さらにもっと早く動いて彼女の斬撃を紙一重で避けていく。

「はっはっは!!どうしたの?一撃も当たってないよ?」

「この……!」

すみれの中でさらに焦りが高ぶっていく。次第に薙刀を振るう速度も弱まり、すみれの体力にも限界が近づいたことで動きにも乱れが生じていく。

「そおら!!」

「きゃあー！」

それも見逃さなかつた刹那が、目をクワツと見開く。すると、目に見えない衝撃がすみれの光武を襲い、彼女を遠くへと吹っ飛ばす。さらに追撃を仕掛けようと刹那がすみれの光武に急接近しようとすると、マリアの銃撃が蒼角の足元に次々と突き刺さる。

しかし刹那は全く焦らなかつた。それどころか、今のマリアの心に踏み込むようないやらしい声で指摘を入れてきた。

「やっぱり心が乱れてるね…マリアお姉ちゃん？照準が定まつてなかつたよ？」

「冷静さを保つていたら、蒼角の操縦室内の僕を狙つて撃つこともできたんじゃないの？」

やっぱり…忘れられないのかな？

大好きだったのに、ずっと昔に死なせてしまった…」

「…まれ…」

「愛しい愛しいユーリー隊長さんのことがねえ?!」

「黙れええええええええ!!」

完全に冷静さを失つたマリアが、蒼角に向けて銃撃を連発していった。だが、刹那が指摘した通り乱れすぎた銃撃。周囲への被害を顧みない攻撃のせいで、築地の廃屋街の

倉庫がいくつもボロボロになっていった。刹那はマリアの銃撃を避けていくと驚くべき行動をとる。

「ま、マリアさん落ち着いて…ひゃあ!!」

なんと、蒼角がさくらの光武をつかみ上げると、それを自らの盾としたのだ。

「な!!」「さくら!」

今度はさくらを人質に取るつもりか!? さらにこちらの焦りを促してくる刹那の卑劣な手口に対する怒りを募らせていく。

「は、放せ…!!」

「じゃあこのお姉さんもらってくよ。よく言うでしょ? ゲームで負けた奴は大切なものを勝者に差し出さなければいけないって」

抵抗するさくらだが、蒼角はびくともせずさくらの光武をがっしり掴んだまま放さない。そのまま後ろに下がり、河川の方へと歩き出す。

「でもここまで楽しませたご褒美に教えてあげるよ。」

僕は…黒之巢会死天王…蒼き刹那。また遊ぼうね♪」

刹那は最後に花組に自己紹介を済ませ、彼を乗せた蒼角はさくらの光武を捕まえたまま川に飛び込んで逃走した。

「この変態チビ助! 待ちやがれ! あたいと勝負しろ!」

「カンナさん、光武に防水機能はありませんのよ!」

カンナも川に飛び込んで追跡しようとするも、すみれに引き留められた。光武に乗ったまま川に入れば確実に沈んでしまい、すみれの言う通り追撃など不可能だった。

「……く……」

マリアは立ち尽くしていた。刹那は、自分の過去を読み取っていた。アイリスと同じく、他者の心を読むことができる能力を持つているのだ。だが彼女と違い、奴は明らかに相手の心を踏みにじって楽しむ下衆だ。さくらを拐ったのもそれに起因しているに違いない。

なんにせよ……そんな負けたくない相手に自分達は負けた。隊長である大神が倒れ、さくらは誘拐されてしまった。自分を含めた隊員たちも奴の能力や卑劣な手口に齒が立たなかった。

あの時の戦争だって、そうだった。

『さすがに戦闘能力が優れているな、お前のパートナーは、「火喰い鳥クワツサリ」と呼ばれるだけはある』

『それだけじゃないさ、状況判断にも優れている。彼女がいれば俺は百人力だ!』

『ユーリー、惚気話をするならもっと色気のある話をしろよ』

かつて、そのように称賛をくれた戦友たちがいた。

何より自分を高く評価し、信頼してくれていた『あの人』がいた。

だが結局あの時もその後、仲間が傷ついて、あげくの果てに負けて、大事なものを失うばかりで…

(…結局、運良く生き残ってきただけじゃない…！)

その後、翔鯨丸から米田によって、大神を連れての帰還命令が下される。

帝国華撃団・花組はこの日……黒之巢会に敗北を喫した。

## 4—4 隊長失格

負傷した大神は、帝劇へ帰還してすぐ精密検査を受け、手術の末医務室の医療カプセルへ収容され傷をいやすことになった。かなり重い一撃こそもらいはしたものの、命に別状はなかったという結果だ。カプセルから彼の部屋のベッドへと移され、後は目を覚ますのを待つだけなのだが、中々大神は目を覚まさなかった。

「お兄ちゃん…」

アイリスが大神の手を握って、早く目覚めてくれと催促する。時々握り返す感触を感じて、目を覚ましたのかと思いはしたが、わずかにうなされただけでまだ目を覚まさない。

「隊長、早く目を覚ましてくれよ。あたいはまだあんたと知り合ったばかりじゃんか」

「少尉、この私が一目置いている殿方なのですよ…」

誰もが大神の一刻も早い目覚めを願った。

「…」

ジンは、悔しい思いを露に苦い表情を浮かべていた。あのと看、赤い巨人に変身して現場に向かっていればこんなことには！

だがあのとき、変身に使うあの赤いメガネをつけようとしたところ、米田に手を捕まれ無言で変身をするなど警告されていた。変身を決断したのは大神が倒されたタイミング、自分は翔鯨丸の操縦室内だ。風組やアイリスもいる。あの場で赤い巨人に変身したらパニックになってしまう。

…が、よくよく考えれば本当に正しかったのだろうか？

パニックといっても一過性のものだ。それに自分が赤い巨人だと知ったところで彼女たちがどう思うのか？寧ろ数度に渡って彼女たちを救ったのだから拒絶されると言うことはないのでは？

だから、大神の見舞いを済ませた後、支配人室の米田になぜ変身を許可しなかったのかを聞いたのだ。

「米田さん、なぜ僕に変身をさせなかったんです！あの時僕も早く出ていけば…」

「お前の気持ちも理解する。だがジン、それはダメだ」

「どうしてですか！」

反対されたことに納得いかず、ジンは米田に詰め寄る。

「お前の出番は、あいつらでも手に負えない敵が現れたときだけだ。そうほいほいとお前の手を煩わせてみる。どうなると思う？」

「それは…花組のみんなも帝都の人たちも傷つくことがなくなって…」

誰一人傷つかず、平和な日常を満喫できる。花組のみんなだって、戦うことよりも舞台で客を喜ばせる方がいいはずだ。だがジンの答えを聞いて、米田は呆れた様子でため息を漏らしてきた。

「そうかもしれねえが……つたく、昔のお前ならちゃんとした正解を出せたぞ」  
「え？」

「忘れたのか？ お前ばかりが目立ってたら、また花組が役立たず扱いされて解散。帝都のみんなも、赤い巨人さえいればいいってマヌケな考えを抱く」

そういわれ、ジンはうぐ、と息を詰まらせた。つい最近まで解散の危機でもあったことを思い出し、言葉に迷うものの、今回の戦闘の件で最悪の事態が起きかねなかったことについても指摘を入れようとする。

「で……でも万が一あの時大神さんが本当に殺されてしまっていたら!!」  
「ジン！」

反論を繰り返すジンに向けて、米田の怒鳴り声が響く。その一声でジンは思わず身が一瞬震え、黙らされた。

「俺だつてなあ、誰も死なずに、それも怪我一つない状態が一番だつてのはよく思い知ってるさ。本来なら、あの子たちを戦場に立たせるつもりはなかった。今だつて俺自身の前に出て戦いてえさ。」

それが、光武を動かせるだけの靈力を持つてるのがさくらたちだけとはいえ、戦場に女を出してこっちは指揮を執る側……本来俺たち軍人は寧ろ前線に立つてあの子たちを守らなくちゃならない立場だつてのにな。あの子たちだつて、戦場に立つことよりも、もつとやりたいことだつてあつたはずだ。

でもよ、花組のメンバーはいずれも、戦うことを承知の上でここにいることを選んだ。それはなぜか？」

ジンの心を見据えるように、頬杖で自分の頭を支えて彼を見つめながら、米田はさらに話を続けていく。

「たとえそれが命を懸ける戦いだとしても、守りたいものがそこにあるからだ。

一歩も引かず、己の正義のために、大切なものを守るために戦う。

降魔戦争の時のお前もそうだった。お前はどんなにやばい敵が現れても、一歩も引かなかった。大切なものを守るためなら、自分が傷つくこともいとわない。

そんなお前だから、俺やあやめ君も守りたいと思つたんだ。お前の記憶が消えた今でもな。あの子たちだつて同じだ。傷つき倒れることも覚悟の上、

それが帝国華撃団としての誇りだ。

それを捨てた華撃団に意味なんざねえ」

「……」

華撃団の誇り。それがジンの心に重くのしかかった。

誰かを守るために、我が身の痛みを厭わずに戦う。絶対に汚してはならない、戦士の矜持。

守るためと言ってみれば聞こえはいいが、同時にそれは花組から華撃団としての誇りを奪うことだった。命を懸けることを承知の上で、大神やさくらたちは荒ぶる脅威に向き合い、戦うことを決めた。でしゃばって変身して自分一人だけで立ち向かえば、花組は納得するだろうか。

いや…しないだろう。

「お前だつて覚悟を決めて、赤い巨人に変身することを選んだんだろ？ だったら、あの子達の覚悟も受け止めてやれ」

「…はい」

すると、支配人室の扉をノックする音が聞こえた。

米田が入れ、と許可を下ろすと、一人の男性が支配人室へと入ってきた。

「あなたは…！」

ジンはその顔に見覚えがあった。上野公園へ、花見の下見に行ったときに出会った、大神の知り合いの男だ。

月組隊長にして、大神の知人でもある加山雄一である。

「米田司令、彼は……」

「人払いなら必要ねえ。次のお前の任務には、こいつも関係あるからな」  
「そうですか……では」

ジンのことは気にしなくても大丈夫だと解釈し、加山は米田の前に立つや否や、謝罪の言葉を響かせる。

「申し訳ありませんでした、米田司令！」

今回の大神の負傷、そして真宮寺隊員の誘拐……全て自分がみすみす人質にされてしまったことが原因です！米田司令、俺に処分を下してください！」

デスクの前で頭を必死に下げ続ける加山。大神は、まだ自分が月組の隊長であることは知らないままだ。月組は本来隠密活動が主な担当であり、味方にもその正体を探られないようにしないとイケない。当然ながら敵につかまってしまふなどあつてはならないことだ。まして、士官学校時代の友に大怪我をさせることになったのだからなおさらだ。

「……加山、顔を上げろ。お前はよくやっている。今回はお前だけの責任じゃない。敵の動きを予測しきれなかったことも大きいからな」

米田は加山に罰を下そうとしなかった。実際隊長として月組の面々をうまくまとめてくれているという意味では加山もまた大神とはまた違った逸材でもあり、加山たちの

隠密能力は大したものなのだ。さすがに首にさせる、なんて真似はできないし、これからもしつかり部下として働いてもらわなければならない。

「それより加山、今回の敵について気になることはなかったか？」

「は……今回、花組が交戦した敵の名は刹那……黒之巢会という組織の幹部に当たる者のようです。奴の能力は、アイリス隊員と同様に他者の心を読み取ること」

「黒之巢会……か」

「心を読む……!？」

米田は目を細める。ジンも話を聞いて、即座にアイリスと初めて会った頃のことを思い出した。彼女は当初から、何も言っていないのに、こちらのことを見透かしているような不思議な言い回しをすることがある。後に彼女には心を読む力があると聞いていた。うまく利用できれば、戦闘においてかなり役立てることは明白。

だが、敵側……黒之巢会にも同様の能力者もいたということになると、そうも言ってもらえない。

「厄介だな……それで花組の動きも奴には手に取るようにわかっていたわけか」

先日の戦闘で、刹那が花組の攻撃もいとまたやすくかわしていた光景が蘇る。初めて戦う相手でありながら、あたかも前日までに舞台で展開される殺陣を極みともいえるほどに完成させたかのような、鮮やかな動きで刹那は全てよけきって見せていた。

「…だが、厄介なのはその刹那ってやつがこちらの心の隙を突いてくるとこだな」

「ええ、実際花組の面の中で、マリア・タチバナ隊員の動揺が激しかったと見受けられます」

「マリアさんのが!？」

「やはりな…」

目覚めて以来、帝劇におけるマリアの性格がどんなものか。冷静沈着で自他共に厳しく、そのように認識しているジンは驚くが、米田は妙に納得を示していた。

「やはり? どういうことですか? マリアさんはかなり冷静さを保てる人のはずじゃ」

「…誰にでも心に抱えてるものがあるってことさ、ジン」

…あいつがそうだったようにな。つい米田はそうのように言いそうになったが、喉の奥でひっこめた。

「とにかく刹那への対策は、大神が目を見開く覚ましてからじゃないとな。」

「じゃあ次に…さくららの居場所についての調査はどうなっている?」

マリアについてはそれ以上の追及はせず、刹那のことも大神の復帰後に回すことにし、次にさらわれたさくららについて加山に聞いた。

「現在、活動可能な人数で搜索していますが…まだ…」

「そうか…」

まださらわれて日が浅い。とはいえ、米田にとつて戦友の忘れ形見でもあるさくらは一刻も早く取り戻したい。米田は支配人兼司令として構えてはいるが、実際は気が気でなかった。

「ここ最近、多数の脇侍を中心とした怪蒸機事件の件数を考えると、黒之巢会は脇侍の制作のため、帝都及びその周辺地域で脇侍を組み立てるための秘密施設を抱えていると考えられます。刹那はおそらくそれらのいずれかに身を隠し、次の我々との戦闘に備えていると」

「脇侍の工場が、この帝都に…」

これまで脇侍は突如として、どこからか姿を現してきた。帝劇で暮らし始めて以来、自分達の膝元と言えるくらいの近場に敵の隠れ支部のような場所が潜んでいたと聞いて驚きはしたものの、よくよく考えれば納得のいく推察だった。

「そのどこかにさくらもいるかも知れねえな。」

ジン。加山」

米田に名前を呼ばれたジンと加山の両名は、どこか威圧しているようにも見える米田の司令としての顔を見て、反射的に背筋を伸ばす。

「さくらを拐った刹那を放置するわけにはいかねえ。なんとかさくらの捕まっている敵の潜伏域を探ってくれ。だがしらみ潰しに探し回っている時間も余裕もこつちにはな

い。一発で当てるつもりで調査に向かつてくれ」

支配人室を出てから廊下にて、改めてジンは加山と言葉を交わし始めた。

「…そういえば今思うと、意外でしたよ。さくらや大神さんに続いて、加山さんまで帝国華撃団に配属されてたなんて」

さくらと大神と加山、とある一日で初めて会った3人全員が、今では同じ組織の仲間であることを思い出したジンは、改めてそれを思い返して驚きを口にした。

「俺もだ。米田司令のことは、軍の方でも名を轟かせていたからな。まさかご家族がいたとは思わなかったよ。しかも、一度顔を会わせた間柄だったとはな」

加山もまたそれに至っては同感だった。世界は案外狭いものだったと思わされる。

「改めて…月組隊長の加山雄一だ。よろしく頼む」

「はい、こちらこそ。気軽にジンって呼んでください」

帝劇の仲間としては、今回が初顔合わせになる。二人はお互いに握手を交わし合った。

「そうだ加山さん、任務に向かう前に大神さんの見舞いに行きませんか？」

「ああ…」

大神の名前を聞いて、さつきは何とか笑顔を保っていた加山の表情に、若干の陰りが

一瞬だけ現れた。

二人は外に出る前に、帝劇二階にある大神の部屋へ向かいだした。大神は、あれからまだ目を覚まさない。命に別状はなく、そのうち目を覚ますらしいが、まだその気配は見られなかった。

「思つてみれば、米田さんも結構無茶ぶりかましてきましたよね…」

「さくらさんの命もかかつてるからな。そりや無茶ぶりでもかましてくなるものさ。それに、俺にとつては今回の任務は嫌でも降りるわけにいかない」

加山もなかなか今回の米田からの任務は、骨を折るものになるだろうとは予想している。彼の降りられない理由については、ジンも察しが付いていた。刹那による大神の負傷とさくらの誘拐だ。

「俺が刹那に捕まつてさえないなければ、あんな結果にならなかつた。その罪滅ぼしと言つては何だが、なんとかさくらさんを無事に帝劇へ連れ帰りたい」

「ええ…」

ジンにとつても、無視はできないことだ。さくらは、記憶がないとはいえジンにとつてはかつて戦つた戦友の一人の忘れ形見と言える存在であり、今のジンにとつても帝国華撃団の一員である彼女はかけがえのない人間の一人だ。加山を身を挺してでも守つた大神のためにも何としても取り戻したい。

「おっと、一つ忘れるところだった」

「なんですか？」

「俺が月組隊長であることを知っているのは、米田支配人とあやめさん：月組を除けば他僅か数名。隠密部隊だから、花組をはじめとしたほかの部隊のメンバーには顔は知られていないんだ。当然大神も、俺が月組に配属されていることは知らないし、必要となる時が来るまでは知られるのは避けておきたい。だから、俺が帝劇にいることは内密に頼む」

「わかりました。あ…だとしたらお見舞いはまずかったですか？」

まだ大神に、月組隊長であることを知られたくないのなら、逆に見舞いはしない方がいいことを察したジン。だが加山は首を横に振った。

「いやなに、まだ今のタイミングなら、大神がけがをしたと聞いて駆け付けた、と君が言ってくれば誤魔化しは通じるさ。少なくとも月組であることをうっかり喋ったりしなければそれでいい」

話をしていると、すぐに大神の部屋の前に来ていた。さっきの会話のこともあって、ジンの方が先に出て、ドアをノックしようとする。

だがその前に、大神の部屋の扉が開いた。もう大神が目を覚ましたのだろうか？ そう思ったが違った。

大神の部屋から姿を現したのは、マリアだった。

「あれ、マリアさん？」

「……」

マリアは、ジンと加山という来訪者も来ていたことに、やや驚いたように目を見開いたが、すぐにいつもの冷たそうな無表情に戻り、すぐに二人の前から立ち去っていった。(マリアさんも、見舞いに来ていたのかな?)

不思議に思いながらも扉を開き、大神の部屋に入る二人。まだ眠っている大神以外誰もいなかった。

寝ている大神のベッドに歩み寄ると、加山は苦悶の表情となり、大神への懺悔を口にした。

「大神、済まなかった。同じ組織に配属され、お前の力になろうと張り切っていた矢先に先日の戦闘でのヘマ……」

「さくらさんの誘拐とお前の怪我は俺の責任だ。今はゆっくり体を休めて傷を癒してくれ」

加山はそう言って一歩下がり、ジンに前を譲った。ジンも大神の側に寄ると、彼に向けて決意を示した。

「大神さん、さくらのことは僕たちに任せて」

その後、二人はすぐに帝劇を出て、黒之巢会の協同工場を探りに向かった。

刹那にさらわれたさくらは、目を覚ました。

目を開けると、暗くジメジメとした場所で、清潔感が見られない。長らく放置された場所のようだ。

両腕に痛みを感じ身動きがとれない。顔を上げると、頑丈な鎖で両腕が縛り付けられていた。

さくらは鎖を振りほどこうともがくが、やはり拘束が解ける気配はなかった。

「無駄無駄。その鎖は黒之巢会の特注品でね、お姉さんの華奢でよわつちい力じゃ外れないよ」

不意に声が聞こえ、さくらの中で強く警戒心が高まる。

闇の中から一瞬だけ現れては消え、そしてまた一瞬現れて消えてを繰り返し、さくらの前に鋭利な赤い爪を刃物のように伸ばした小柄な少年が姿を現した。

黒之巢会の死天王、蒼き刹那だ。

「お前は……！」

さくらは目一杯の気迫で刹那を睨み付ける。

「いい目で睨むねえ。マリア・タチバナの方を狙ってたつもりだったけど、まあいいさ。感情豊かな子の方が、いたぶりがいありそうだし…その怒った顔が、恐怖と苦痛に歪むのが楽しみだよ」

刹那はさくらの怒りなど、寧ろ楽しんでいた。

軽く浮遊し自分の顔を指先でねちっこく撫でられたさくらは怒りに加え、刹那への生理的とも言える嫌悪感を覚えた。こいつは子供のように見えるが、中身はどす黒い悪党、自分がこの世でもっとも嫌いなタイプだ。

しかし気になることをこいつは口にしていた。

「どうしてマリアさんを狙うの？」

「あのお姉さんの心の醜さを証明するためさ」

面白おかしげに刹那は笑った。

「知ってるかい？あのお姉さん、君たちに隠していることがあるんだ」

「隠していることですか？」

マリアに隠し事、その存在事態はあまり違和感がなかった。マリアはあまり自分のことを話さないタイプで、弱い一面も全く見せてこなかった。ただ、なぜ刹那が…敵であるこいつがあたかも知ってるような口ぶりなのか。

「君たち帝国華撃団とやらは、帝都の平和と正義のために戦っている…何て言ってるけ

ど、マリアお姉さんにはそんなものない。信念も誇りもない、ただ目の前の敵を無目的に殺す：勝つためなら味方も切り捨てられる非道な女だつてこと」

さくらは不快感をさらに強く感じた。何を言い出すかと思つたら、マリアがあたかも本性を隠している悪党のように言つてくるとは。

「ふざけないで！お前にマリアさんの何がわかるの！」

「わかるさ、僕は人の心を見ることができるんだから：ね、真宮寺さくらお姉さん」

「！」

名乗つてもないのに、自分のフルネームを言い当ててきた刹那に、さくらは絶句する。まさか本当に他者の心を読めるのか。アイリスがそれを可能としているように。

「へえ、これは驚いた。僕以外にも人の心が読める子がいるんだ」

さくらはしまった、と己の軽率さを呪つた。こいつはほんのわずかに浮かんだ思考さえも読み取れるのだ。これ以上心を読まれないように心を閉ざしておかなければ。下手をしたら、マリア以外にもこの刹那という男は薄汚い手を伸ばしてくる。

「でもまずはマリアお姉さんの心をズタズタにしてやろつかな。君を：じっくり可愛がつた姿を見せたらどんな反応するかなあ？例えば：こんな感じに！」

刹那が目を見開いた瞬間だった。刹那自身が触れたわけでも拳を繰り出したわけでもないのに、さくらの体に殴られたような激痛が走つた。

「がは…!？」

「それとこんな感じかなあ!!」

「つぐう…!!!」

二発目もまた目に見えない一撃。さくらの華奢な体を、まるで木の枝を踏み砕くように刹那は痛めつけていく。

「いいねえ、その悲鳴。もつと僕を楽しませてよ!!」

「あああああああああああ!!!」

「……………!？」

その轟く叫びが聞こえたのか、自室にいた大神が目を覚ました。

「ここは俺の…」

目覚めたばかりの意識が覚醒していった、ちょうどそのときだった。マリアが再び一人で、大神の部屋を訪ねてきた。

「少尉…気が付いたのですか!？」

「マリア…!？つぐ!？」

大神はマリアに先日の戦闘のことを尋ねようと体を起こすが、強い痛みが走る。起き

あがつて苦痛に悶えた彼を見て、マリアはすぐに駆け寄った。

(「そうだ、俺は確か……!」)

その痛みで、意識を失う直前までの記憶がよみがえった。月組の隊長を庇ったことで今のダメージを負ったものだ。

「まだ体が痛みますか?」

「あ、ああ……」

「あれほどの重症だったんです。今はあまり体を動かさなくてください」

「そ、そうだ……あの隊員は……!」

ベッドに背中を預けさせられた大神は、マリアから、先日の戦闘で刹那に人質にされてしまった月組の隊長のことを改めて尋ねた。

「彼なら無事に救助できました。怪我もほとんどなく、今は任務に復帰、黒之巢会の動向を探っています」

「そうか……よかった」

彼が無事だと聞いて、ほっと一安心する大神。しかし、マリアは目を吊り上げ、一息ついた大神に対する怒りを募らせ……冷静な彼女のものとは思えないほどに声を上げた。

「何がよかったというんですか!!!」

「ま、マリア?」

マリアから怒鳴られるとは思わなかった大神は驚いて目を見開いた。

「大神少尉……なぜ、あの時いきなり飛び出したのですか」

「え？それは、月組の隊長が……」

人質にされた月組隊長が危うく刹那に殺されかけたから、それを防ぐべく我が身を犠牲に飛び出した。それが正しいとかじゃなく、そうしなければと本能的に体が動いたからだが、マリアは大神のその判断を糺弾した。

「今回の戦闘の負傷は少尉の責任です。あなたの我が身を省みない行動で負傷したために敵を取り逃がし、多くの市民の命を危険に晒したのです！たった一人のために命を懸けるなどナンセンスです！」

その言い分は、大神の逆鱗に触れた。月組隊長の命を軽く見ているような言い方が許せなかった。

「マリア、口が過ぎるぞ！だったら君は、同じ帝劇の仲間を見捨ててしまえばよかったというのか!？」

「その帝劇の仲間が……さくらが敵の手に捕まったと言ってもですか!！」

「え……」

さくらがさらわれたと聞いて、大神は一瞬自分の耳を疑った。構わずマリアは彼に対して

「少尉があの時冷静に、私に遠距離からの攻撃命令を下せば、もっとうまく対処が可能でした。さくらだつて敵の手に堕ちずに済んだはずです。月組隊長も自分のために帝都が危機に陥るくらいなら自らの死を望むはずだ。」

それなのにあなたは後先考えずに飛び出して負傷し、結果さくらの誘拐を許してしまつた！これで隊長としての責任を果たしたと言えますか!？」

「そ、それは…」

言い返せなくなつた。さくらは大切な花組の仲間だ。狡猾な黒之巢会のことだ。また人質にとつてこちらの動きを鈍らせてくるのは目に見えてくる。

「…マリア、確かに俺は判断を誤つたかもしれない。」

君その意見は確かに軍人としては正しい。

だが…」

大神は月組隊長を助けるために飛び出したことを、間違いだとは思いたくなかつた。言い訳とかではない。

「俺は仲間や守るべき人々の命を踏み台にしてまで勝利をつかみたくない！必ずみんなで生き延びて勝つ、それが俺の理想であり、信念だ！これは誰であろうとも譲るわけにいかない！」

譲れない己の信念をハッキリと断言した大神。さくらや他の隊員たちが聞いていた

ら、その理想高き精神を称えていたかもしれない。だが、マリアにはあまりにも愚かに受け止められていた。

「死にかけて身でありながら……そんな甘い理想を掲げ、非情になる覚悟もないのですね」  
が、それだけではなつたのか、一瞬だめマリアの表情が悲しげなものに変わる。

「……その理想のために、少尉が死んでしまつたら、あの時と同じなんです」

「あの時？」

なんのことかと、一瞬見えた表情の変化のことも含めて尋ねようとしたが、すぐにマリアの冷たい視線が突き刺さつた。

そして、抉るような言葉の形の弾丸を、彼の胸に叩き込んだ。

「よくわかりました、あなたのような短絡的な思考の夢想家が隊長では、我々隊員の命がいくつあつても足りません。」

大神少尉……あなたは、

隊長失格です!!」

## 4—5 真冬の夜の悲劇

「……」

マリアが去つた後、大神は立ち尽くしていた。

隊長失格。強烈な拒絶を受け、自分の行動に疑問を抱いた。

あの時、月組隊長を守ろうとしたことは、やはり間違いだつたのか？

…マリアの言うことも間違つていない。自分は花組の隊長。魔のものと戦う部隊の指揮官だ。その指揮官が倒れることは許されない。頭を失つた部隊が瓦解し、さらに隊員が危険に晒されるからだ。そして自分達が下手に傷ついて倒れたらその分だけ、守るべき底との市民が奴等に蹂躪されるのを許すことにも繋がる。

マリアが言つてた通り、刹那が月組隊長を殺そうとしたとき、彼女の援護を加えなければならなかつた。

（マリアの言葉は正しい。俺も隊長として軽率だつたかもしれない。だが…）

だがあの時の大神には、月組隊長が殺されるのを黙つて見過ごすなどできるはずもなかつた。

もし、あのまま刹那の凶行を見過ぐしていたら、きっと自分は一生後悔していただろ

う。『隊長として、指揮官は倒れてはならない』という矜持を守ることはできても、『仲間を見殺しにした事実』ができるのだから。

大神にはそんなことは耐えきれなかった。だがそれをマリアに言っても、さくらの誘拐の事実を再び突きつけられることになる。

「くそ、俺は……」

俺はどうすればよかったんだ：何が正しかったんだ。苦悩を続けるうちに、大神の体に異変が起きた。

(な、なんだ……体が急に重く……)

それは当然の現象だった。大神はただでさえ大けがを負っていたため安静にしていなければならなかった。だが急に起き上がったことと、マリアにキツイ烙印を押されたことが重なり、精神的に不調をきたしたことが彼の体に負担をかけてしまったのである。

急激に襲ってきたまどろみに逆らえず、大神は再び意識を失った。

加山は活動可能な残存の月組をまとめ、帝都各地に派遣、彼自身もジンを同伴させ帝都内の黒之巢会の隠れ施設を探った。

だが、二日の間だけではさすがに尻尾をつかむことさえ至難だった。

「今日も見つからなかったですね…」

「ああ、さすがに時間も搜索に回す頭数も足りなさすぎる。いつそ奏組とかからも支援を要請した方がいいかもしれないな。できれば避けたいところだが…」

「奏組も帝劇周辺の警備が主な仕事ですしね…小さい奴でも降魔のことも無視できないですもんね」

彼らの手を借りるのも悪くはないが、奏組が帝都の中心地から離れば、その分だけ帝劇の周辺も手薄となる。黒之巢会がそこを突いてきたりなどしたら、ただでさえ手負いなのに花組だけで対処しなければならぬ。大神が負傷し、さくらが誘拐された状態ではさすがの花組も戦力が大幅に下がっている。極力自分たちだけの手で解決するのが望ましい。

帝劇へ戻ってきたジンと加山は、明日からの搜索の手の回し方を互いに考え合っていた。だが、どうしても後手に回りがちだ。これで本当に、黒之巢会のアジトを突き止められるだろうか。

「しかし、降魔と言えば…妙なものだな」

ジンの口から降魔と聞いて、腕を組んだ加山の中に、ある疑問が浮かんだ。

「妙？」

「10年前の降魔戦争、あの時を境に降魔は封じられ、ぼったり姿を見せなくなってい

た。だがここしばらくの間になって、小型の個体をはじめとして、少しずつ降魔が現れた。本来なら、あの赤い巨人が戦った巨大降魔が現れるなんて、あり得ないはずなんだ」降魔戦争のことはジンも聞いている。かつて自分も、記憶はないが当時その場に立って米田たちと共に戦っていたらしい。事実ならその際も巨大な降魔と戦っていたことは間違いない。だが加山は、降魔はその時に封印されたと口にしてている。封じられたはずなのに、また降魔が現れる。確かに普通とは思えない。

「月組の調査で、何か掴んでいることとかないんですか？」

「まだ今の段階ではわからん。だが、黒之巢会…奴らの手で復活したとも予想できるが、まだ確証がない。それらを突き止めることになる以上、これから一層忙しくなりそうだな…」

互いにそのように会話を交わしながら、二人は大神の部屋へ向かっていった。そのうち大神への見舞が週間づいてきそうさだ。そう思いながら二階へ向かうと、踊り場に来たところでバタバタと物音が聞こえ、カンナがマリアの部屋へ向かっていくのが見えた。

「カンナさん?」

どうしたのだろうか。妙に慌てている……いや、一瞬だけ怒っているような顔に見えた。案の定か、彼女は急にマリアの部屋へとカチコミに向かうかの如く怒鳴り込んでいった。

「おうマリア!!お前一体どういうつもりなんだよ!!」

「な、なんだ…?」

ジンもそうだが、加山も目を丸くするばかりだった。すると、大神の部屋の方からアイリスがジンのもとへ走ってきた。

「ジン、大変!!お兄ちゃんが…!」

彼女の言うお兄ちゃんと言えば、大神しかない。

「どうしたんだアイリス!?何かあったの?」

もしや容態が悪化したのか!?アイリスと共に部屋へ向かい、扉を開いたジンの目に飛び込んだのは、ベッドから離れた場所で倒れている大神だった。

「大神さん!!」

「大神!」

すぐさま大神のもとに駆け寄る二人。アイリスが読んできたのは、恐らくまだ幼い彼女の力では大神をベッドへ運べなかったからだろう。加山がすぐに抱き起して容態を確認する。

「目が覚めたばかりで傷がふさがり切れてなかったか。無理をしやがって…」

「とにかくベッドまで運びましょう!」

ジンは加山と協力し、大神をベッドに寝かせた。まだ傷が塞がっている中で動いたの

だ。安静にしなければならぬ時間が伸びたかもしれない。

「これでひとまず安心だが……まずいな。傷の治りを速める薬とかあれば……」

「今すみれが、紅蘭がもしものために残していったお薬を取りに行つての」

紅蘭と言えば、まだ帝劇に姿を見せていない、花組のメンバーだ。確かお笑いもできる発明家だと聞いていたが……。

(薬師でもあるのか?)

そう考えていると、すみれが大神の部屋へ小包と水の入ったグラスを持って来訪した。

「全くもう、紅蘭は……少しは片付けてから花やしきにお行きなさいな！まるでごみ屋敷じゃありませんの！そもそもどうしてこのトップスタアである私が……」

「もう！お薬取りに行くつて言つたのすみれでしょ！早くお薬をお兄ちゃんに！」

「わかつてますわ！」

今ごみ屋敷という単語が聞こえたような……ジンはわずかに青くなった。綺麗好きのお嬢様であるすみれにここまで言わせるほどの紅蘭の部屋……あまり良いイメージがないものかもしれない。

ブツブツ文句を言いながらもアイリスに言われた通り、小包から粉末の薬の入った薬袋を破り、それを大神の口にグラスの水ごと注ぎこんだ。

「さあ、少尉。これをお飲みになつて」

薬が口に全部入つたのを確認し、こぼれないようにすみれは大神の口を閉ざす。

ゴクツと彼の喉から飲み込む音が聞こえた。うまく飲んでくれたらしい。

…が。

「ふくお!」

「!!」

突然、目を見開きながらガバツ!と起き上がった大神が薬をただ飲んだとは思えないような悲鳴を漏らしてきた。

ジンたちも思わずその様を見て言葉を失い、驚きながら大神を見て、時間が止まったかのようにフリーズした。

それから数秒後…

大神は白目を向いて倒れた。

「大神さああああああん!」

大神があまりにも尋常じゃない形でまどろんでしまったが、結局のところ薬の味が酷すぎただけらしく、その後は大人しく眠りについていた。

それから大神が意識を失う前に起きたことを、ジンはすみれたちから話を聞いた。加山はというと、職務上あまり花組の前に姿を見せすぎるのを避けるため、大神のことをジンたちに託して姿を消している。

「そっか、そんなことが…」

どうやら大神の見舞いに向かっている時、すみれ、アイリス、カンナの三人はマリアと大神の口論を廊下で聞いていたそう。立ち聞きしてたのかよ…とは突っ込みたくなつたが、そんなことは問題ではないので流した。

そしてマリアが大神に向けて、隊長失格の烙印を押ししたことも。それにカンナが激昂してマリアの部屋に突撃をかましたことも聞いた。

「マリアさんは批判しましたが、少尉の行動、私は寧ろ誇るべきと思いますわ。自分の身を挺して他者を守る…言葉で飾ることはできても、実践できるほどの勇気を持てる方は滅多にいませんもの」

「アイリスもだよ。お兄ちゃん、すごく偉かったのに…」

すみれとアイリスは、マリアと違い大神の先日の行動を肯定していた。

「僕だつてそうだ。さくらがさらわれたのは残念だけど…あの時大神さんの立場だったら、さくらもきつと同じことをしていたはずだ」

ジンも同調を示すと、その言い方にすみれは怪訝な目を向ける。

「あら、さくらさんのことをよく知っているような口ぶりですね」

「あの人の子供だからね」

「え？」

すみれとアイリスはなんのことかと首をかしげる。ジンはあ…と声を漏らし、話がやや複雑な方へと傾いていたことを自覚した。

「あ、その…どうも彼女の親御さんには僕も少しばかりお世話になったみたいなんだ、支配人の話によると。まだ思い出せないけどね」

そのように誤魔化した。記憶がないのについあんな言い方になってしまった。記憶がなくても、まるで癖の様に口に出してしまうものなのだろうか。

「そういうことですか。あっさり記憶が戻ったのかと思いましたがよ」

拍子抜けしたかのようにすみれはため息を漏らした。女優という表の職業柄、ドラマティックなものに憧れてしまうもので、こんな形で戻っても、正直劇的なものを感じなくてがっかりさせられるだけだ…というのがすみれの個人的な見解だ。

「でも僕のことより、大神さんとマリアさんの二人だ」

ジンは自分のことは置いて、あの二人のことに話を変えた。

花組の隊長と副隊長の意見が合わない。さくらがさらわれてしまった今こそ、この二人が知恵と力を合わせて花組をまとめることが望ましい。…が、肝心のマリアがそれを

拒んだも同然のことを言った。これでは次の戦いに間違いなく悪影響が出てしまう。これではさくらを救うことは愚か、さらにもっと事態が悪化しかねないのでと懸念が生じる。

「おう、みんな。揃ってここにいたんだな…」

話している間に、カンナも大神の部屋へと来訪してきた。

「カンナさん、マリアさんの様子はどうでしたの？」

「ダメだ。あいつ全然隊長のことを認めようとしねえ。どう考えても、あの時の隊長のやったことは当然のことだろうってのに…」

カンナも大神の捨て身の行動をたたえ、逆にマリアの大神に対する拒絶に対して不満を募らせていた。

「あたいたちは帝都のみんなを守るのが使命だろ。なら仲間を守ることだって立派な役目じゃねえか。それをあいつは…だあああ!! ったく、思い出すだけで腹が立つてくるぜ! なんてあんなこと言いやがったんだって聞いても、『あなたには関係ない』…なんてぬかしやがって! あたいはあんなマリア、嫌いだぜ」

「カンナさん、ここは大神さんが寝てるから」

「おおっと…悪い悪い」

マリアへの不満を高めるあまり、安静にしている大神のことを忘れていたことに気づ

き、カンナはすぐに落ち着きを保たせた。

「これだから粗野で野蛮な人は」

「おいこらすみれ。何か言いやがったか?」

「二人とも、喧嘩してる場合じゃないよ」

すみれの小さな愚痴にカンナがピクツと反応をしたが、アイリスがすぐに仲裁に入つて目を摘んだ。

「…今度は僕が話を聞いてみる」

自分もマリアから話を聞いてみよう。カンナの方を介しても口を閉ざした以上、今度は直接接触した方が何かわかるかもしれない。

それに、マリアと大神。帝劇で共に暮らす者同士でいがみ合う等、この帝劇を居場所とする自分としてはあまりにも心がざわざわして落ち着かないし、嫌だ。

ジンはマリアのもとを訪ねて見ることにした。

「ジン」

ドアノブに手をかけたところで、アイリスがジンを呼び止めた。

「マリア、時々一人で寂しそうな顔してるから…なるべく優しくしてあげて」

アイリスは人の心が読める。マリアの心情も、実際は察しているのかもしれない。でも肝心のマリアが対話を拒んでいることも無視できないから、口に出すことはしなかつ

た。

「善処するよ」

さくらは、刹那の拷問：という名目さえもない蹂躪にひたすら耐え続けた。kどれほど切りつけられても、どれほど目に見えない一撃を受けても、彼女はその華奢な体からは予想もつかないほどの強靱な精神力で耐え続けた。

「ぐ……ぐ……」

血は口からも体の節々からも流れ落ち、綺麗な桜色の隊員服もボロボロ、鮮血で真っ赤に染まりつつある。敗れた個所から見える艶のある肌も傷だらけだ。

「ふふふ、すごいねさくらお姉さん。ここまで長く僕の遊び相手になってくれたのはお姉さんが初めてだよ。これ自慢してもいいくらいだ」

これほど残酷なことをしても、いやしているからこそ刹那は心底楽しみながら笑っていた。

「でもちよつとワンパターンになってきちゃってるかな。そろそろ……」

単にいたぶって大けがを負わせるだけでは物足りなくなりつつあった。次にする遊びの内容を考え始める。

「刹那」

（新手!?!）

別の男の声が聞こえ、さくらは体中にほとばしる激痛に耐えながらも顔を上げた。銀色の長髪を着た和服を着た、端正な顔つきの男だ。整った容姿に釣られる者なら簡単に気を惹かれるだろう。だがさくらは、その男から尋常ではない悪の気を感じ取っていた。

もう一人は、銀色の肌を持つモヒカンの男だ。

「なんだ、又丹に羅刹か。今からいいところなんだよ。邪魔しないでよね」

振り返った刹那がどこかうんざりしたように二人に言う。

「貴様の蒼角の調整と様子見に来てやったというのに、随分な物言いだな。中途報告くらしいは天海様のためにも怠るな。敵の一人を折角と捕らえたのなら尚更だ」

「案外説教臭いね、又丹は」

興が削がれたと言わんばかりに肩をすくめ、刹那はさくらの前から離れ二人の前に近づくと、羅刹が又丹に向けて口を開いた。

「又丹どの。寧ろここは我が兄を称えるべきであろう。敵の主力の一人をこうして捕らえられた。奴らの情報も吐かせ、我ら黒之巢会をさらに優位に立たせる好機ではないか」

「……羅刹の癖に考えたね。でも、そんな必要全くないよ」

刹那は余裕を露骨に露にして羅刹の提案を一蹴した。

「もうすでに僕の勝利は確定しているんだ。奴らの心を読んだ結果、あいつらは仲間を見捨てられない甘ちゃんが集まりだ。こうしてこのお姉さんを人質にとつてさえいれば、手を出そうにも出せない」

どうやら花組との戦闘で彼女たちの心を読んだ際に、彼らのことを知り尽くした気になつていた。ただ、実際のところおおむね彼の『甘ちゃん』という予測は当たつていると言える。現に加山を人質にとつた際、隊長である大神は真つ先に飛び出して隙を見せたほどだ。

「兄者、さすがにそれは不用心ではないか？ここは俺と手を組んで、万が一に備えた方が確実であろう」

羅刹は兄を案じて、自分との結託を申し出る。しかし刹那は面白くなさそうに鼻息を飛ばした。

「ふん、羅刹…木偶の坊のくせに、いつから僕に意見するほど偉くなつた？僕があんな奴らに負けるとでも思っているのか？」

「あ、いや…」

兄の気迫に押され、羅刹は口ごもる。兄よりも凶体が何倍もでかいのに、羅刹は刹那

に全く逆らうことができない。

「いいか羅刹、余計な気をまわして僕の機嫌を損ねるようなことはするなよ。あんな連中僕一人で十分さ」

「そ、そんな言い草はないであろう！天海様の大願を成就するためにも、帝国華撃団は倒すべき敵。兄者だけの問題では……又丹殿からも兄者に何とか言ってくれ！」

刹那も自分と同じ死天王。黒之巢会の幹部だ。個人的な意見をいつまでも通しては主である天海にどのようなように思われるか分かったものではない。弟としてそんな兄を慮って講義を入れた羅刹は又丹にも説得を申し出る。

「構わん。やらせてやればよい。それだけの自信があるということは、常々言っていたように刹那には勝利への算段があるということだ。」

「だ、だが敵は華撃団だけではない！あの赤い巨人のこともある！又丹殿も忘れたわけではないだろう！あなたの作り出した魔獣も、奴の前に兄者が従えた分も含め、3度も退けられたのだぞ！」

「なに、安心しろ。蒼角にはある特殊な加工も施した。以前に俺が与えた他の魔獣も加えてある。後は刹那の手腕次第だ」

「だ、だが……」

又丹からも次の戦いに向けて万全の支援も受けていたのだろう。そう聞けば確かに

憂いはないと思われるのだが、羅刹としてはやはり兄が心配なのだ。

しかし、直後に鋭い感触が彼の喉元に触れた。刹那の鋭く赤い爪が、羅刹ののど元に突き付けられていた。

「口答えするな。お前は黙って僕があいつらを八つ裂きにするところを見ていればいい。もし邪魔をしたら……わかつているな？」

「う、うむ……」

羅刹はそれ以上何も言えなかった。兄からこれ以上嫌われることを恐れてか、ただしよぼくれて刹那の言葉に素直に従うことしかできなかった。

(なんて子なの……)

さくらは信じられないと思った。当然だがこの兄弟の見た目のギャップのことではない。この刹那という少年……弟である羅刹に対して家族としての愛情が全くの皆無だということが一目見ただけで理解できた。実の弟に対して、あまりにも冷淡にして冷酷。どうして自分の家族に対してここまでひどく接することができるのだ。見ているこつちが、羅刹に対する哀れみと、刹那に対する怒りさえ覚える。

「刹那。遊びすぎるなよ」

「はいはい、蒼角の最終調整……任せたよ。」

ほら羅刹、さっさと天海様のお仕事にかかってこいよ」

「……」

羅刹はあからさまに落ち込み、兄に言われた通り黒之巢会のアジトへと帰還していった。

又丹も刹那の魔装機兵の最終調整のためにこの場を離れようとする、最後にさくらの方を振り返る。

「……?」

さくらも視線が又丹と合う。妙にこちらをじろつと見ている。何を考えているのかさっぱり読めてこない。妙にじつと見られ、敵だというのに気まずさを覚える。

「なんだよ又丹。もしかしてこういう女の子が好きなの?」

そんな又丹を見て、刹那がわざとらしく、侮蔑しているようにも撮れる口調でからかってくる。又丹は対して冷めた目で刹那を見返した。

「あいにく俺の好みとは程遠い。青臭い上に幼さが出ている」

「つ…お前たちのような悪党なんて、こっちから願い下げよ……!」

さくらは、頭ごなしに否定されてかちんと来た。背中を向けて立ち去っていく又丹に、さくらは少しだけ舌を出してあかんべえをして見せた。拘束されている今の自分ができる、ささやかで子供じみた抵抗である。

「さーて、ポロポロになったこの子を見せたら、どんな顔するかな? 楽しみだよマリア・

タチバナ：」

刹那はくく、とさくらを見て面白おかし気に笑い、さくらのあごを爪で撫で上げる。早く次の仕上げの時間が楽しみでしようがない。

さくらは絶対に屈しまいと、ひたすら刹那にもそのまま鋭い視線を向け続けていた。

「何の用？」

マリアの部屋を訪れたジンは、彼女のから早速話を聞いてみた。

「どうして、大神さんに隊長失格なんて言ったんです」

「…カンナから聞いているはずよ。私は、あんな短絡的な思考の持ち主を隊長と認めるわけにいかない。」

少尉があの時飛び出さず、攻撃命令を下していれば、こんなことにならなかったはずだ」

「あの時、かや…つと、月組の隊長さんを助けるのは当たり前じゃないか！」

思わず加山の名前を口に出しかけたが、すぐに訂正してマリアに抗議を入れた。それはほぼカンナがマリアに対してぶつけたものと同じ内容だった。

「…あなたには関係ないわ。そもそもあなたは、花組の隊員ですらない。米田司令の養

子：「ただそれだけの立場じゃない」

ジンは突き放すようなマリアの一言に眉をひそめた。でもアイリスからもお願いされた以上は、いたずらに不満をぶつけるような真似は避けておきたい。

「…確かに僕は花組には所属していない。でもマリアさん、僕はこの帝劇は僕にとって大切な居場所なんだ。ここで暮らすみんなは、僕にとっては家族みたいなものなんだ。だから、いがみ合いとか：そういうことはあつてほしくない」

「カンナみたいなことを言うのね。でも、私はもうあの隊長には従えない」  
「捨て身で月組隊長を助けた結果、さくらが誘拐されたから？」

頷いて、頑なに大神を拒む意思を見せるマリア。彼女の言うことは間違いではない。そうではないのだが：ジンにはどうしても全部納得しきれなかった。

「それ、責任を大神さん一人に擦り付けてるようにも思えるんだけど？」

「…なんですって」

ジンの指摘に、聞き捨てならないとマリアの目が鋭くなった。

「さくらだつて花組の隊員だし、正義感の強い子だ。大神さんの行動を寧ろ尊重していたし、逆に大神さんが突っ立っていたりとかで同じ立場に立っていたら、あの子が飛び出していたはずだ。そして君は、何もしなかった大神さんを責めるんじゃない？」

それにあの時、大神さんが君に救出の援護を命じていればとか言っていたみたいだけ

ど…それは裏を返せば、君が独断で大神さんを援護して、あの人をケガさせることなく月組の隊長さんを助け、刹那を倒すことができたかもしれないってことだよね」

「つ……」

ジンは、この会話において自分の方が優位に立ち始めたことを感じた。さらに彼は、マリアに対して畳みかけるように話を続けた。

「最善の結果を求めるなら、たとえ隊長命令を待たなくても負傷者を出さないことに越したことはない。マリアさん、あれほど厳正に任務に当たる君なら理解できるはずだ…まあ、僕個人の予想だけど。今回のことは、華撃団全体の責任だよ。大神さん一人のせいじゃない」

もしあの時無理にでも変身して刹那の攻撃から加山や大神を守っていたら…適切な判断ではないにせよ、そう考えれば自分にも責任がある。

ジンからの指摘は、さらに続いていく。マリアは聞き逃すことなく耳を傾けていたが、その顔つきはさらに険しいものへと変わっていく。

「マリアさん、あんなことを言った理由があるなら…話してほしいよ。僕たちにとつても、聞いたうえで納得したいんだ。みんなそう思ってる」

そこまで彼が言った時のマリアの目元は、暗く見えなくなっていた。怒りを堪えているのだろうか。肩が震え、ぎぎ…と音を立てながら右拳を握っていた。

命令がなくても、最善の結果のために……？

その瞬間脳裏に、過った。

『マリア、俺に構わずそいつを連れて逃げろ！これは命令だ！』

仲間を救うために、捨て身で敵軍に特攻し、散ったユーリー隊長の姿が。

「あなたはいいわね……辛い過去も、忘れているのだから」

顔を上げ、キツ！とその青い目から放たれた眼光でジンを突き刺しながら、彼女は喚いた。

「記憶がないから、仕事や任務のミスも楽観的に見られるんでしょう！一瞬のミスでも取り返しがつかない事態を起こすことだつてあるのよ！それなのにあなたはその後のことなんてどうでもいいとばかりに！」

マリアにとつて、ジンの言い分は気に入らなかつた。こつちのことなんてわかりもしないのに、憶測ばかりで私のことも測つて、ただ気に入らないと思つたことに対して反発したがつてるだけの子供ではないか！そんな奴に、なぜ当然のことを言つた自分が批判されなければならないのだ。

そして自分達が、決定的な言葉を、弾丸を撃つように言い放つてしまった。

「しよせん記憶を持たないあなたに……私の何が分かるというの!!」

ジンは、記憶がないことを指摘され、息を詰まらせ、返すこと言葉を見失つた。

…記憶がない。幸福な過去の記憶がないと同時に、不幸に見舞われた記憶もない。降伏と不幸、その両方を知って初めて人は、人の痛みの重さを知る。

記憶がない自分が何を言ったところで、マリアに伝わるはずがなかったのだ。

「……………」

ジンの辛い表情を目にして、ハッとしたマリアは自分の失言を自覚した。

記憶がなくて辛いのは、他ならぬ彼自身なのに……それなのに、記憶がないことが幸福で嬉しいことのように言ってしまった。

「……めんなさい。今日は、出て行ってちょうだい」

目を背けながら、マリアはジンに退出するように言い、言われた通りジンは無言で部屋を後にした。

その夜……すでに就寝時間が迫ろうとしている中、ジンはマリアに言われた言葉を引きずっていた。

記憶がないから、人の痛みが理解できない。

そうだ、自分には過去の記憶が一切ない。親兄弟の顔も全く分からない。自分がどこで生まれ、どんな人生を歩んできたのか。辛いことも嬉しいことも、ほとんどわからない。

だから…マリアが何を抱えて、それがどれほど辛いのかも、故に何を思つて大神を批判したのかもわからないのだ。そんな自分が、軽々しい気持ちでマリアに、大神との和解を促すことなどできなかつたのだ。

(僕は、バカだな…)

一人、夜のサロンでソファに腰かけていると、そんな彼のもとに歩み寄る人影が近づく。

「ジン、もう消灯時間だ。早く休んだ方がいい」

「米田さん…」

人影の正体は米田だった。今のジンの顔を見て、何かあつたことを瞬時に察した。

「どうした、そんなシけた面しやがって。マリアに何か言われたのか？」

「ええ、まあ…」

「ちよつと話してみろよ。聞いてやつから」

ジンは、日が暮れる前のマリアとの会話のことについて、米田にすべてを話した。

「なるほどなあ、マリアにんなこと言われちまつたのか」

「はい、記憶がない僕に、何がわかるんだって…僕じゃ、マリアさんをわかつてやれないんでしようか？」

「確かにお前は馬鹿だねえ」

「フオローなし!」

予想以上に棘のある米田の返しに、ジンはぎよつとする。しかし米田はゲラゲラと笑いながら理由を話した。

「だってそうだろう? お前はマリアじゃなくて、ジン。他の誰でもねえ。相手の人間の痛みなんて、その人間自身じゃなきゃ理解できねえよ。それを察して全部知った気になって語るなんざ、それだけ相手のことを知らないといけねえ。でもお前は記憶がない以前に、そもそもマリアとは昔馴染みでさえもねえだろ」

「それは…:そうですが」

米田の言うことは尤もだ。どう考えたつてその通りだ。なんとか言葉でわからせようとしても、理解しようとするのも無理がある。

「マリアとお前が違うように、俺もお前と違う。記憶がないことに対する辛さや重さはお前だけが知っている。だからマリアの言ったことにいちいちショックを感じることは何もねえよ」

「…でも、僕がマリアさんにできることって…」

なにもしてあげられないのか? それがジンに焦りに似た感情を沸き立たせるが、察した米田は彼の肩に手を置いてくる。

「マリアのことは、大神に任せておけ。時期に紅蘭の葉が効いたおかげですぐ動けるよ

うになるさ。そのために、あいつを隊長にしたんだからな。

大神の奴なら、マリアの心を溶かすことができるはずだ」

マリアの心をどうするのか、その役目を担うのは自分ではない。どうしてやればいいのかわからない以上、自分では役者不足。組織的な側面から考えれば、直属の上官でもある大神の方が確かに適任だ。だがそれが、ジンにはもどかしく感じた。

「…なんか、悔しいです。見ていることしか、僕にはできないってことですか？」

「見ていることしかできねえなら、見ていてやれ。最後までな。あの時も、俺やあやめ君たちはそうしてお前の戦いを見守っていた」

米田のその言葉に、ジンは米田を見た。自分の顔ではなく、遠い目で別のものと見ている。昔の、記憶をなくす前の自分が赤い巨人となつて戦っていた時の光景を思い出していたのだらう。当時、それを見て何を感じていたのかも。自分だけじゃなかった。やりたくても、できることがなくて悔しい思いをしているのは。そう思うと、心が少し軽くなった気がした。

「今日はもう寝ろ。マリアも頭冷やせば、お前に言ったことも撤回してくれるだろ」

「はい…」

今日は精神的にも少し疲れてしまった。ジンは米田に言われた通り、屋根裏部屋の自分の寝床へ戻ることにした。

その夜、大神は目を覚ました。

まだ真夜中で、外の明かりも消えている。

(そうか、俺はあの後…)

マリアからの隊長失格の宣言がよほど堪えたからだろうか。傷にも響いてまた倒れてしまったらしい。ベッドで寝かされているのは、誰かがここへ運んでくれたからだろう。それにしても…妙に口に苦味を感じる。強烈に苦い薬でも飲まされたのか？ だから、あのような嫌な夢を見たのだろうか。

目覚める直前、大神は悪夢を見ていた。

米田からの突然の解雇命令、別の隊長が就任し、花組の隊員たちからは失望のまなざしで見られ、見捨てられるというものだった。

今の大神にとって、まるで後ろ指をさしてくるかのような嫌な夢だ。

本当に自分は間違っていたのか？ 大神は意識を失う前と同様に自問する。

マリアが言っていた通り、花組の隊長である自分が倒れることは許されない。自分が倒れたら、仲間や帝都の市民がさらに危険な目に遭い、いずれ殺されるといふ最悪の結末が目に見える。そう思うと、自分の行動が適切ではなかったことを自認させられる。

その結果がさくらの誘拐を許してしまうという状況だ。

(やはり間違っていたのか?…いや)

…だが、何度考えても、大神は自分の意思を曲げることを選べなかった。

(だめだ。目の前で仲間が殺されかけていた状態で、どうやってじつとできる…!?)

すぐに、自分の中に芽生えかけた迷いを振り払った。目の前にいる誰かを、身を呈しても守る。それが、軍人を目指した時からずっと抱き続けてきた正義だ。

思えば、入隊当初からマリアとはあまり話ができていた状態ではなかった。

足りていなかったのだ。そもそも花組の隊員たち、その中でもマリアとのかかわりが。花組の隊長と副隊長。舞台の要でもある以上、自分たちの結束は決して無視してはならないものだ。

そのためにも、マリアのことを理解しなければ。自分に隊長失格と告げただけのなにかが、彼女にあるはずだ。

(やはりもう一度マリアと話をしなければ…)

大神はベッドから起き上がり、すぐに着替えようと思ったと同じタイミングのことだった。

「隊長! 隊長起きてるか!?!」

彼の部屋をノックする音と声があった。大神は扉を開ける。

「カンナ、こんな夜中にどうしたんだ？」

「起きてたのか隊長！良かった、怪我治ってないまま寝ていたらどうしようかと思っただけ……」

ノックしていたのはカンナだった。妙に焦っているようにも見える。一体どうしたのだろうか。

「それよか大変だ！マリアが光武で出ていきやがった！」

「なに!？」

## 4-6 ゲーム

真夜中の、雨降る築地。

光武を駆るマリアは、刹那の姿を追った。

今から数十分前。夜中に眠っていたマリアに、突如刹那からのテレパシーが伝わった。『夜のデートなんてどうだい?』という、何様のつもりだと言わんばかりの誘い方だった。これは罠だ。マリアは間違いなくそれを確信した。したのだが：彼女はその誘いに乗った。刹那がこうも言ったからだ。『さくらお姉さんも会いたがってるよ』と。

それが決定打だった。マリアは迷いを捨てて、光武を駆って帝劇を飛び出した。

雨音以外の音は聞こえず、刹那の姿も見られない。だがマリアは感じていた。目で見たりしなくとも、奴の邪悪な気配を感じていた。

「出てきなさい、刹那!」

マリアは闇夜に向けて叫んだ。その呼び掛けに、刹那はすんなりと闇の中から姿を

現した。

「来てくれたんだ。待つてたよ、マリアお姉さん」

「刹那…：貴様だけは…」

マリアの声は、強い怒りと殺意で満たされていた。そこからは一瞬だった。

「殺す!!」

その言葉と共に、マリアの光武から弾丸が刹那に向けて放たれる。刹那は当然それを受けるところなく避けて宙に浮いた。

「どうしたのお？そんなにいきり立つちやつて」

「ぬけぬけと…」

「さくらお姉さんをさらったことかな？そんなに心配？もしかしてそつちの気があつたのかな？そう言えばマリアお姉さん、舞台じゃ男役が多かつたもんね？」

「ふざけるな！」

二度目の発砲も空を切り、刹那は今度は光武の左側に降り立つ。

「あーあー、でも本当だったらかわいそうだもんね。死んじやつたユーリー隊長さん。折角君にプロポーズしたのに、愛した女の人が違う人…：それも同性の人に心変わりしちゃうもんね」

「貴様！」

三度目の発砲もまた避けられてしまう。今度は、背後に姿を表す刹那は、さらにねちっこく話を続けた。

「あ、ごめーん。そつちの気がどうこうじゃなかったね。僕がユーリー隊長の姿で君の夢に現れたのがそんなに気に入らなかつたんだ」

マリアの怒りは、刹那が言葉を綴っていくことに限界を超えようとしていた。実はマリアがこれだけの怒りを見せたのは、今刹那の言った通りだった。

眠っている間、マリアは夢を見た。死んだはずのユーリーと再開する夢を。雪の積もった夜の野原に、特徴でもあるサングラスをかけてマリアを待っていた。彼女は、あたかも彼が生きていたと思ひ、その胸に飛び込もうとする。しかし、サングラスを取った瞬間、ユーリーの顔が変貌した：刹那の顔に。

マリアはその悪夢を見せつけられて驚きのあまり目を覚ました。直後に刹那テレパシーで自分の仕業だと告げる。

彼女は激怒した。自分の中に残る美しく幸福で満たされたユーリーとの思い出を、人の心を弄び嘲笑う外道に汚されたことに。

「よくも、よくもあんなものを私に：許さない：お前だけは！」

マリアは光武の銃口からさらに弾丸を乱射した。誰も寄せ付けられそうもないほどの激しい銃撃、しかし刹那は余裕でそれらすべてを避けきった。激しいだけで粗さが目

立つ。ひたすら自分の中に溜め込まれた負の感情を吐き出し続けている。心を読める刹那には避けることなど容易かった。

「ひやははははははははははは！やっぱり僕の読み通りだよマリア・タチバナ！」

高笑いを上げる刹那は、今度は近くの倉庫の屋根の上に降り立ち、マリアの乗る光武を見下ろす。

「この蒼き刹那、貴様の正体を見破ったり！平和を守る使者など仮初の姿。その本性は、仲間の思いも踏みつけ命さえ奪う、醜い冷酷無比の鬼畜よ！つまりこの僕と似た者同士って訳だ！」

「黙れええええええええ!!」

マリア我を忘れ、暴走し続けた。彼女を知る者なら、いつものマリアではなくなっていることに驚きと恐怖さえ覚えるだろう。

「あーあー、だめじゃないか。凶星を突かれたからってさ僕が言ったことを認めたようなものじゃん」

「貴様と一緒にするな！」

余裕でマリアの射撃を避けながら、刹那はしつこく汚い言葉を彼女にかけ続けた。銃声とどなり声でそれをかき消さんとばかりに、マリアは一度も当たることのない攻撃をひたすら繰り返す。

そして、刹那から放たれた言葉が、彼女を貫いた。

「だって、僕が捕まえたさくらお姉さんのことを全く案じてないもん」

「……」

マリアの光武が、時が止まったように停止した。しめた、と下卑た笑みを浮かべた刹那はさらに言葉をもつて顔所の心を揺さぶってきた。

「今、彼女は僕の使役する脇侍の手で拷問を受けてるよ？もしこのまま撃ちまくって、僕が万が一けがをしたり、最悪死んじゃったりしたら、あのお姉さんはどうなるのかなあ？」

「……………」

熱くなっていたマリアの顔が、青ざめていった。

そうだ、さっきまで自分は何をしていた。さくらが人質にされていたのに、その事を失念してただ刹那を殺すことだけを考えていた。もし奴を殺せたとしても、そうしてしまつたらさくららの命が……！

「ほうらやつぱり、僕の言う通りの人じゃないって言うなら、さくらお姉さんのことも案じてたはずじゃないの？それなのちよつと挑発するだけで簡単に我を忘れ、仲間のことなんて無視して敵を殺しに来る。」

前回の戦いだってそうだ。君は加山君……おっと、月組隊長って言った方がいいかな？

彼のことよりも、目の前の勝利を優先した。大神さんが飛び出したときに君も冷静に援護していたら、加山君を助け、僕のことでも倒すこともできたかもしれないのにねえ？ 飛び出した彼も良くないけど……機転が利かなかつた君だつて悪いじゃん？ それなのに大神さんだけにミスがあるようにふるまつてさ。

そして今回、僕の挑発にまんまと乗つて僕を殺しに来た。どう考えてもリスキーなのに、よく隊長失格だなんて言えたよねえ？」

さらにはさくらことに続き、加山のことまでも、あたかもマリアが彼を見捨てることを良しとしたかのように言いながら、マリアの心を追い詰めていく。

「わ、私は……」

「ユーリー隊長さんが死んだ後とか顕著だよね。君は彼を失つたことで出来た心の穴を埋めるように、敵を殺し続け、戦いに明け暮れた。敵の血で染まった君はそれ以外の生き方を得られず、あの戦争が終わつたあとはマフィアの用心棒になつて、屍の山を築いた……革命の闘士だつた火喰鳥は血濡れた殺戮者として覚醒したわけだ。

帝都の市民の命？ 違うね。君はそんな上つ面の正義で戦つていたんじゃない。ユーリー隊長を失つて心の穴を、敵を殺すことで埋めてきた仲間殺しの火喰鳥……でもどれだけ屍の山で心の穴を埋めても、その底は見えないほどに深く、決して埋まることがない。埋まらないから、君はひたすら血みどろの戦いの中に身を投じるんだ。敵味方関係な

く、屍の山で埋まることのない穴を埋め続ける冷酷無比の火喰鳥……」

狼狽えるマリア。さっきまでなら反論できたのだが、今のマリアは言葉が出ない。違う、と言いたいのにも、そのたった一言さえも喉元に引っかかって出てこなくなった。

もし刹那がその気になれば、さくらの命はない。人質にとつて脅しをかけてくる。普段のマリアなら簡単に予想がつくはずのことだったのに、刹那への敵意・殺意で我を忘れてしまった。詭弁も混じっているかもしれない……この言葉にもいちいち反応するまでもないはずだ。

だが今の自らの行動で、既に証明して見せてしまっていたことを、マリアは自覚してしまった。

『奴の言っていたことに間違いはない』と。

刹那は指をパチンと鳴らす。すると、光武の周囲の地面に闇の渦が複数発生、その中心から脇侍が多数出現する。同時に回りの脇侍たちがマリアの光武を取り押さえた。

「……し、しまつ……し……」

逃げる時間さえもなかった。その後、マリアは刹那に捕縛された。

作戦指令室。マリア無断出撃の知らせによって花組は集合した。

「まさか、あのマリアさんがこんな単独行動に走るなんて…」

今回のマリアの行動については、すみれは信じられないとばかりに驚いていた。これには他のメンバーたちもまた同様の心境だ。普通に考えれば罨を張っているとしか思えない。自分たちの知る限り冷静かつ的確な判断力を持つマリアが気づかないはずがないのに。

「アイリス、さつきマリアの居場所について心当たりがあるみたいなこと言っただけだか？」

ジンがアイリスに向けて聞いたのだ。

「うん、夢を通して見えたの…今のマリアは築地の丸三倉庫。悪い奴につかまってる」

頷きながらアイリスは答えた。幼いながらも強大な霊力を持つが故か、アイリスは心を読むだけでなく、遠い地で起きた光景を夢という形で見る事ができるのだ。

「捕まった!?ちつくしやう…あたいが早く気付いていれば…」

花組の中で最も付き合いが長いマリアが苦悩していることは気づいていたのに、結局何もしてやれず、今回の事態を未然に防げなかったことでカンナは悔しがついていた。

「うう、マリアさん…きつと無事ですよね？」

椿はかなり不安を露にしている。彼女は帝劇の中でもマリアの大ファンだから、今回のことについては衝撃を受け、動揺を隠せそうになかった。そんな椿に対し、かすみは

彼女の肩を叩いてきた。

「椿、今は落ち着いて任務に集中して」

「彼女たちの言う通りだ。とにかく現場に向かい、マリアを救出しなければ！」

すぐにも彼女を助けたいという思いで逸る大神に、ジンは口をはさんだ。

「けど大神さん、刹那の手中にはマリアさんだけじゃない。さくらも人質にされている状態だ。このまま突っ込んでいつては、あの二人が危険だよ。しかも、さくらがマリアさんと同じ場所で捕まっているとも限らないし……」

「く……そうだな」

助けに向かう。向かうだけなら簡単だ。でも、向こうにはこちらの仲間……マリアとさくら、二人も捕らわれの身となってしまうている。マリアだけの場所はアイリスのおかげで特定できてはいるものの、さくらに至っては足取りさえつかめていない。

「大神、とにかく一刻も早く現場へ迎え。指示はこっちからも出して対応する。ここでじっとしていてもマリアとさくらを救えないからな」

「はい！帝国華撃団・花組、出撃せよ！」

「了解！」

まだ打開策を見いだせているわけではないが、ここでじっとしていても仕方ない。

大神の号令と共に、花組はすぐに光武に搭乗、風組のサポートの元、翔鯨丸に格納さ

れ築地へと出撃した。

築地に到着し、モニター越しで見送ったジン、米田、アイリス、風組3人娘たち。

「大神さんたち、大丈夫でしょうか？ さくらさんとマリアさんの二人が敵の手中にある状態です…」

「それでも、俺たちは帝都の平和のために戦うことは避けられねえ」

「でも、このまま戦えば確実にあの二人の身に危険が及びます。刹那があればほど周到な罠を張っていたなら、なおさらです」

「アイリス…刹那大嫌いだよ。さくらにもマリアにも酷いことしてる…」

「ああ、許せないな……！」

刹那のことだ。マリアとさくらの二人の命を盾に、こちらに卑劣な要求を突きつけてくるに違いない。これではまた、先日の戦闘とマリアの誘拐、二の舞どころか三度もの舞を踏むことになる。

「米田さん、僕にも現場に向かわせてください」

「ああ、もちろんわかつてる。ジン、地上には月組を待機させている。まずは大神たちに脇侍どもが注意を惹かれている間に合流しろ」

「はいー！」

「米田司令!? まさか、ジンさんを直接向かわせるつもりですか!? 彼は光武に乗れないん

ですよー！」

「無茶ですよジンさん！」

「ジン、だめだよ！危ないよ！」

米田のジンに下した命令がよほど予想外だったのだろう。かすみ思わず声を上げた。由里と椿の二人もまた信じられないという視線を彼らに向けた。米田のG○サイロもそうだが、ジンが出撃に対して抵抗が全くなさすぎるというのもおかしいと思うばかりだっただろう。

「…ううん。僕は行くよ。」

しかしそれでジンは止まる気は全くなかった。

「光武があるかどうかなんて関係ない。寧ろ、刹那の注意はそっちに向かっているなら、それを利用して隙を突くことができるはずだ。それに…」

「それに？」

言葉でマリアを救うことは自分にはできない。大神でも間違はなくそれは難しいこと。でも、彼女が身の危険に晒されているところを助けることなら、自分にだってできる。後は、大神に任せればいい。

しよせん…記憶のない自分にできることと言えばそれくらいだ。

「…いや、なんでもない。米田ジン、今から地上へ向かいます」

ジンは地上へと向かうため、翔鯨丸内の指令室を出た。

(…)

それを見ていたアイリスは、複雑さを胸中に抱いた。アイリスはまだ光武を持つてない。現在も紅蘭たち花やしき支部所属の技師の手で調整中だ。つまり戦うことができない。光武なしでもさくらたちは戦うことができるが、アイリスはそうもいかない。ここでじっと待つしかないのだ。

光武がないのに、それでも現場に迎えるジンが、どこか羨ましかった。まだ子供である自分が、疎ましいとも思えた。

「くー！」

刹那によって捕まったマリアは、丸三倉庫へと連行された。手足を縛られ、乱暴にも床に放り投げられた彼女は顔を上げる。そこで彼女は目を見開く。

「やーくー！」

目に飛び込んだのはさくらの姿だ。身体中から血がにじみ出ており、酷い怪我を負っていることを瞬時に悟った。

「マリア、さん…!?!」

意識が戻ったのか、さくらはマリアの方に視線を向け、驚きを示す。まさか彼女まで捕まってしまうとは思わなかったに違いない。酷い怪我を負わされてしまっているが、こちらに受け答えできているくらいに体力は残っていたようで安心した一方で、先ほど刹那から受けた指摘が頭の中で蘇ったマリアは気まずそうに眼を逸らした。

(マリアさんまで捕まってしまうなんて…あたしのせいだ…！)

目を背けたマリアを見て、改めてさくらは自分の現状の不甲斐無さを呪った。

「やあ、二人とも。気分はどうだい？」

そんな二人の前に刹那が瞬時に現れる。さくらはきつ！と鋭く睨みつけるが、対してマリアの刹那を見る目は、捕まる前までの鋭い気迫が全く感じることはなかった。

「あたしの存在を利用して、マリアさんまで捕まえたのね…！卑怯者！」

「酷いなあ。寧ろ君はマリアお姉さんを責めるべきじゃないの？」

刹那は自分が恨まれるのは心外だと主張する。

「だって彼女、君を助けるつもりなんか全くなかったんだよ？それどころか君のことなんて全く考えないで僕を殺しに来て…正義の味方が聞いて呆れるよね？」

「ふざけないで！そんな言葉、信じられるわけが…！」

「なら彼女に聞いてみれば？」

噛みつくように刹那の言葉を信じようとしないうさくらに、刹那はマリアを指さすよう

に首を軽く、彼女の方にひねって見せる。さくらはマリアを見ると、マリアはさつきからさくらの方に目を合わせようとしなかった。

「マリアさん？」

自分の知る凛々しくカッコいい華撃団の先輩としての姿はそこになかったことに、さくらは違和感を覚える。

「…さくら、ごめんなさい」

マリアは突然謝ってきた。逆にその誠意にさくらは絶句し、たちまち無言になる。

(くくく…これで真宮寺さくらのマリア・タチバナへの信頼は崩れたも同然だな)

面白そうに刹那は笑うと、傍らに二機の脇侍を従えて口を開いた。

「さて、懺悔の時間は置いて、今から僕らの指示通りに動いてもらおうか…おい、こいつらを別々の場所に運べ」

刹那の命令を受けた脇侍たちは、それぞれさくらとマリアを拘束したまま連行した。

「それじゃ、僕はお迎えに行くとしよう」

刹那は笑うと、瞬時に影だけを残して姿を消した。

築地に着陸した大神たち花組は途中、脇侍との戦闘もあったものの、さくらとマリア

の二人が不在でありながらも彼らの足を止めるほどのものではなく、三人の手で殲滅された。

だが、肝心のマリアとさくららの姿が見当たらない。戦闘が終わり、以前刹那に敗北した地点にてマリアの空っぽの光武が見つかっただけだった。

「やっぱりマリアは刹那に…」

アイリスが感知していた通りの事態だったようだ。姿を消しただけでもこつちがハラハラするのに、本当につかまったとなれば、

「くそが…出てこい小松菜！さくらとマリアに手を出してみやがれ！あたいが徹底的にぼこぼこにしてやる！」

「カンナさん、シリアスなこの状況で小さいポケをかまさないでくださいまし…」

刹那への怒りから血気盛んになるカンナに、拍子抜けしたように冷静になってしまったすみれが突っ込みを入れる。

大神は二人の小さな雑談にやれやれと思いつつも、マリアの光武に目をやる。さっきも見た通り誰も乗っていない。ふと、またいつぞやのように足元にきらりと光るものが入る。近づいて拾い上げると、それはマリアが持っていた金のロケットだった。さらわれた際に落としたのだろう。

（確か、アイリスは丸三倉庫にいたと言っていたが…）

アイリスの言っていた丸三倉庫の方角に目をやる大神。確か対岸の向こう側に建っているはずだ。

「やあ、帝国華撃団。また来てくれたんだね」

大神たちの耳に、あの声が耳に入る。反射的に三人は河川側に向けて身構える。瞬間、あの憎たらしい小柄な少年が花組の前に姿を現した。

「刹那！今すぐマリアとさくら君を返せ！」

刀を抜いて刹那に向け、義憤を露にする大神に、刹那はどこ吹く風のごとく笑うだけだった。

「そう熱くならないでよ。でないと……マリアお姉ちゃんみたいにみつともなく捕まる羽目になるよ？」

「てめえ！ふざけんじゃねえ！今すぐぶつとばされてえか！」

カナナが一步前に出て、今にも殴りかかろうとする気迫を放つ。

「だから熱くならないでよ。今から大事な話を……大神さん、あなたにしようと思つてたんだ」

「俺の話、だど？」

警戒を解かないまま、大神は刹那の話を耳を傾ける。

「一つチャンスを上げるよ。あなたのお願いをかなえてあげてもいい」

「何?」

非道さをあれだけ露にしたのに、こちらの願いを叶える?三人は当惑する。

「つまり、さくらさんとマリアさんを解放すると?ずいぶんあっさりと返していただけるのですかね?」

「慌てないでよ。まだ話は終わってないんだから」

パチンと、刹那は指を鳴らす。すると、彼の後ろの河川に一隻の、光武が一機だけ乗れそうなサイズのモーターボートが流れ着いてきた。

「今から僕とゲームをしようよ」

「ゲームだと…!?!」

「そう、この先の倉庫にマリア・タチバナと真宮寺さくらの二人がいる。ただし二人はそれぞれ別の場所にいる。二人を見つけ出し、脱出できれば君たちの勝利だ。ただし……ここから先へ行けるのは一人だけ。当然だけど……君たちが乗っているその鉄くずは置いて行ってもらうよ」

「あなた……この光武を……我が誇りある家、神崎重工の努力の結晶たる光武を侮辱しますか!!」

光武は、すみれの実家が興している企業『神崎重工』の力でくみ上げられた自慢の霊子甲冑だ。すみれにとっても誇りあるもの。それを鉄くず呼ばわりされてすみれは怒

りを覚える。

「すみれ君、落ち着くんだ。奴の挑発に乗ってはいけない」

「そう、乗るのはこのボートなんだから」

刹那が短気なんだからあ、とすみれを笑う。妙にうまいことを言ってみせるところも、それも含めてかなりこちらの神経を逆なでしてくる。

「さあどうするの？乗るのかい？それとも乗らないのかい？」

「少尉、これは明らかに罠ですわ！この男の言う通り、本当にあの二人がこの先で捕まっているとは思えません！」

「そうだぜ、あのクソ野郎のことだ。絶対何か企んでるぜ！」

「別に乗らなくてもいいんだよ？そうだったら、あの二人は……せいぜいたっぷり僕のおもちやになってもらうだけだから。はっはっはっは!!」

下卑た高笑いを上げる刹那。いっその場でぶちのめしてやろうとも思えたカンナとすみれだが、大神の光武が一步前に出た。

「…すみれ君、カンナ。君たちはここで待っていてくれ。俺は行くよ」

「少尉！」「隊長!!」

無謀だ！と言わんばかりに二人は大神を引き留めようとするが、大神は強く決心したまなざしを二人に向けた。

「俺は、マリアのことをまだ理解できていない。その苦しみも、痛みも……何もかも」

目を閉じ、大神は先日、自分に隊長失格を宣告したときの、そして悪夢の中で自分をどこか悲しげに見るマリアの顔を思い出した。自分は隊長にふさわしくないといいながらも、今回の彼女らしからぬミスが重なる。

自分の勘が囁いた。彼女はなにかを抱えている。他者に明かしたがない何かを。

それがなんなのかわからない。だが……

「でも俺は花組の隊長だ。自分の部下のためにも……そして俺自身の正義を示し、帝都を守るためにも、マリアとさくら君を連れて……必ず生きて戻って見せる」

大神は迷わなかった。光武を置いて、刹那が用意したボートに乗って対岸を渡っていった。

二人はすぐに、この事態を翔鯨丸へと連絡した。

## 4—7 逆転劇

丸三倉庫のある対岸の向こう側へと辿り着いた大神は、走った。ここはどこかにさくらとマリアの二人がいる。一刻も早く見つけ助け出さなければ。

しかし、妙だ。脇侍が蔓延っているのかと思っていたが、意外にも脇侍はしばらく歩いてる間にも遭遇することはなかった。それについて引つかかりを感じた大神だったが、今は二人を助け出すのが先だと思い、そのままアイリスから教えられた丸三倉庫を探した。

名前は倉庫の外壁に記載されているはずだ。しかし今は夜中。この付近はろくに街灯もないので見つけるのは難しい。

何か、蠟燭でもなんでもいい。照らすものさえあればよいのだが…

そう思っていた大神は、暗闇の中に一人一人分くらいの何かが転がっているを見つけ。用心しつつ近づいて確認する。

「これは……」

それは少し古びている自動二輪車…蒸気バイクだった。

この世界では路面列車や車も蒸気機関を利用して動いており、バイクも例外ではな

い。

恐らく先日の戦鬪にて、築地の住民の誰かが避難の際に乗り捨ててしまったものだろう。だがこれは利用できるかもしれない。幸い鍵もかけられたまま。試しに鍵を回してみると、幸運なことにバイクは起動してくれた。そしてボディの前面に設置されているライトも点灯した。

(よし、これなら！)

大神はさつそくバイクを向け、近くの倉庫の外壁を照らした。残念ながら目の前の倉庫は丸三倉庫ではなかったが、ライトが付くだけでも十分だ。大神はすぐにバイクを走らせ、周囲を回った。

時間はかからなかった。『丸三倉庫』と外壁に書かれた倉庫を発見した。大神は躊躇せず、バイクに乗ったままその扉に突っ込んだ。

ドリフトを決めつつ、バイクを停車させた大神は、倉庫の奥をライトで照らすと、馴染み深い姿をそこで発見した。

「さくら君!」

「お、大神さん…」

発見したのはさくらだった。しかし大怪我を負わされていることもあり、酷くぐったりしている。大神はすぐに携えていた刀の刃先でさくらの手錠の鎖を砕くように切つ

た。

「なんて怪我だ……大丈夫か、さくら君!？」

「だ、大丈夫で……痛!」

立ち上がろうとしたさくらだが、やはり刹那から受けた拷問の激痛ですぐに姿勢が崩れてしまう。

「無理をしたらダメだ!俺の肩に掴まってくれ」

「すみません……」

言葉に甘えて、さくらは大神の肩に掴まった。

「済まない、さくら君」

「え?」

唐突に出た大神の謝罪にさくらは目を丸くした。

「あの時、俺が無作為に飛び出したりしなければ、君まで捕まるような事態にならなかった。隊長でありながら戦闘中に倒れてしまうなんて……」

自分が、月組隊長が刹那に殺されかけたときに、もつと励精に対処出来ていれば、自分が倒れたことで花組の連携が崩れることはなく、さくらも捕まることはなかった。こんなにも大怪我を負わされることもなかった。そう思うとさくらへの申し訳ない気持ち

ちが沸き立ってくる。

「謝らないでください、大神さん。あたしは、大神さんの行いを否定しません」

少しはにかんだ笑みを大神に向けながら、さくらは首を横に振った。

「あたしだって同じ立場だったら同じことをしてました。大神さんが飛び出さなかつたりしても、きつと…」

少し言葉を途切れさせると、彼女は頬を少し赤らめながらそう告げた。

「それに、大神さんは危険を承知であたしを助けに来てくれました。それだけでも…十分です」

「…ありがとう」

大神は、さくらのその言葉で救われたような気持ちになった。誰かが自分の選択を受け入れてくれている。マリアにキツく批判を受けた後の彼に強い癒しを与えた。

後は…マリア助けるだけだ。彼女は自分の今の選択さえも否定するかもしれないが、もう迷わない。なんと言われようとも彼女も救って見せたい。

「ところで、マリアがどこに捕まっているかわかるか？」

「それが…わからないんです。この一帯の倉庫のどこかとしか…刹那が何かを企んで、わざとあたしとマリアさんを別々の場所に…」

「別々の場所に？」

「一体どういうことだ。なぜこんな回りくどいことをする。大神は刹那の意図が読め

なくなつてきた。

とにかく彼女だけでもまずは運ばないと……今のさくらを負傷していて戦うには無理がある。まずは安全な場所へ、刹那の目の届かない地点へ向かわないと。蒸気バイクのもとは、さくらを支えながら向かう。

しかし、黒之巢会が彼らをただで逃がすはずがなかった。

倉庫の周りを、多数の脇侍たちが取り囲み始めていた。

こんな時に出てきてほしくない相手に出くわしてしまった。負傷しているさくらを抱えている今、これではマリアを助けることも不可能に近い。冷静に考えても逃げることもやつとだ。

「さくら君、乗れ！」

「は、はい！」

すぐに大神はさくらを後部座席に乗せ、襲い来る脇侍たちをかいくぐりながらバイクを走らせた。

丸三倉庫から北西の位置の空き地。

刹那は、十字架にかけてあるマリアも傍らに置いた状態で、丸三倉庫方面の光景を眺めていた。

「はっはっは！馬鹿が、まんまと罠にかかりに来るなんて…飛んで火にいる夏の虫とはまさにこのことだね！虫けらにふさわしいよ！」

露骨に大神たちをけなしながら、手足が動かないままのマリアに言い放ちながら、大笑いした。

「仲間を助け出し、後は脱出するのみとしたところで、絶対に敵わぬ暴威を突き付け、絶望させる…素敵な悲劇の舞台になるとは思わないかい？」

「…」

「絶望のあまり声もでないのかな？」

「…貴様の行いに、呆れただけだ」

マリアは刹那から目を背けながら言った。

「まだそんな口を利くんだ。鬼畜の火食鳥あれを見てごらんよ。隊長さん、君たちを助けに来たんだよ？もつと喜んだらどうだい？」

刹那が彼方を指差す。その方角には、さくらと共にバイクに乗って魔獣の追撃から逃走を図る大神の姿があった。

（少尉、どうしてまた来たのですか…！罠だって、あなたもわかっているはずだ…）

マリアは理解できずにいた。大神が、前回の戦いとまた同じ…己の身を投げ出す選択を取ったことに、怒りさえも湧かず、ひたすら内心での動揺を感じていた。

「ま、君の思っている通りバカな人だよ。僕たちが魔獣を従えているのを忘れたのかな？しかも馬鹿正直に、僕の要求通りにあの鉄屑も乗り捨てて：よつぽど命が惜しくないと見たよ」

このまま大神とさくらが、魔獣に潰されるのを待ち望んでいるのだろう。刹那はうなぎのぼりになる興奮と高揚感を抑えきれずに肩を震えさせて笑っていた。

「じゃあここで一緒に眺めていようよ。また君のせいで：君を助けに来た人が、つぶれたトマトみたいになって死んじやう姿：あははは、やばい、興奮してきた!!」

傍らで笑い転げる刹那に、強い不快感を覚えるマリアだが、何も言い返さなかった。言ったところで、返ってくるのは、自分の苦い過去と、そこから形成された：冷酷で醜い自分の一端への指摘。耳を塞ぎたくなる呪いの言葉だけだ。

が、ここで刹那の興奮に水を差す者が現れた。

「マリアさん！」

隊員服姿のジンだった。思わぬ来訪者にマリアは目を見開いた。

「ジン、あなた…なぜここに!?!」

「なんだ、誰かと思ったら、前に上野公園で会った人じゃないか。あんたみたいな馬の骨は邪魔なんだよ。さっさと出ていってくれない？今なら見逃してあげるよ」

刹那にとっては招かれざる客という認識のようだ。近くを飛び回る虫でも追い払う

かのように、しっしとジンに向けて手を払いながら刹那は立ち去るように言ったが、当然のようにジンは従おうとしなかった。

「そうだな。お前が何もせず、マリアさんを返してくれるなら立ち去るよ」

「面白い冗談だね。僕が大人しく彼女を返すと思つた？君こそこのままマリア・タチバナを見捨てて行けば？立ち去れって言つてるだけ、僕は優しくしてあげてるのに？」

「ジン、早く逃げなさい！あなた光武にも乗れないのにどうして来たの!？」

マリアがそう叫んだ瞬間、彼女の隊員服の前が、刹那の手によつてビリつと切り裂かれた。雪の様に美しく綺麗な彼女の前の裸体が露にされてしまう。服を破かれたマリアは、羞恥と怒りで刹那を睨みつけた。

「く……」

「今から僕が彼女に行く拷問ショーでも見たいのかな？もしかして今みたいに服を破つて綺麗な裸をさらけ出させるのがお好みだったりするのかな？お兄さんも好きだねえ」  
ふちつと、シユウの頭の中で何かが切れた音がした。もう限界だった。刹那への怒りのあまり、次の放たれた彼の口調はいつもの穏やかさを失っていた。

「…お前こそ冗談は口だけにしろよ。クソチビ」

「あ？」

クソチビ呼ばわりされた瞬間、笑っていた刹那の表情が一気に不快感を露にしたもの

へと変わる。

「あんたこそ、調子乗るのもいい加減にしろよな。前みたいにくだらないう正義を掲げて僕に説教するの？ 忘れたのなら思い出させてあげるよ」

よほどジンの悪口が不愉快だったのだろうか。もはや気まぐれで特別に逃がそうという気は完全に消え失せ、その長く赤い爪を研ぎ澄ませた。

「そういうのがうざったくて反吐が出るってね!!」

瞬間、利那はジンに向けて飛び掛かった。

「ジン!!」

マリアが叫ぶと同時に、ジンもまた利那に対して応戦の構えを取り、振り下ろされた利那の爪を避けた。ジンが立っていた場所の床が、深々と言葉通りの爪痕を刻み込まれた。まともに受けたら真つ二つにされてしまう。お陰で冷静さを幾分か取り戻せたが。

利那はさらにジンに向けて爪を振りかざし、彼を切り裂こうとする。次々と繰り出される斬撃に、ジンは体を捻り、飛び上がり、そして後ろに飛び退く等を繰り返しながら避けていった。

「つち、大人しく切られるよ!」

イラついた利那がわめき散らして、より激しく、素早く爪を振り回す。

(そのまま集中しろ…そうすれば避けられる!)

刹那は予想を超える速度だ。頭の中で集中するように心がけていても、どうしても反応に追いつかない時がある。現に、避けきれなくて斬り傷が次第に増え始めていた。

「少しは抗って見せなよ！」

「言われなくても…!!」

ジンは防戦一方から反撃に転じようと、迫り来た刹那の右腕に向けて拳を繰り出した。振り下ろされ、そのまま彼を真つ二つにするはずの刹那の爪は、腕を彼の拳で受け止められたことでふさがれ、逆にはじかれるように後ろに飛ばされる。

「つちー！」

刹那は右手首を抑え、苦痛に顔を歪めていた。小柄で細身な分、物理的な攻撃には弱いようだ。だから己のすばしっこさに頼っているとも思えた。今が好機と見たジンは、奴が魔装機兵を出す前に潰してマリアを救うためにも、今度は自分が攻勢に出た。

「せいーはー！」

拳や足を連続で繰り出し、刹那を追い詰めていく。さつきまで奴のすばしっこさに翻弄されたのだ、今度はこっちの番だ。ジンは刹那にターンを回さないよう、彼は攻撃の手を緩めないように肉弾戦で刹那を追い込んでいった。

「うぎいんだよおおお!!」

しかし刹那がそれを許すはずもない。ジンと比べても奴が速いことに違いなく、彼の

攻撃のわずかなタイムラグを狙って爪を突き出した。まずいと感じたジンは、とつきに後ろに飛びのいた。

「……………つとつと、危ない危ない。まんまと君の作戦にはまるどころだったよ」

少し間をおいてから、刹那は今の自分の位置に気が付く。マリアを張り付けている十字架から、数十メートルほど離れていた。刹那のその言動に、ジンは動きを止めた。

「裏で加山くんと結託してるんでしょ？マリアお姉ちゃんを助けるために。大方。僕の気を引いてる隙に加山君に彼女の拘束を解かせる…そんなところかな」

「つち…」

ジンは舌打ちした。心を読んできたようだ。刹那の言う通り、実を言うとジンは地上に降りた際に地上で待機していた加山と合流していた。前回人質になってしまい、大神の負傷とさくらの誘拐、結果的にマリアの独断専行までも許してしまったことへの罪悪感もあつて加山は今回の救出作戦に志願、ジンと手を組んで作戦に当たろうとしていたのである。

ジンが刹那の注意を引き付けマリアから引き離れたところで、加山が即座に現れマリアを救助する。

だが、刹那の読心能力を考慮していないと言えた。注意を引いているジンが心を読まれてしまえばなんの意味もない。

「やっぱりバカだね。心を読む僕を相手に、そんな浅知恵が通じると思うなんて。でもこれで万策が尽きたね。せっかくの囀作戦も無駄に終わった」

刹那は指を鳴らすと、新たにもう一体脇侍をその場へ呼び寄せる。その脇侍は刀を彼女の喉元に突き付ける様を見せつけた。

「やめろ！」

「なら僕を侮辱した罰を受けろ。マリア・タチバナの目の前で、バラバラになったお前の屍を晒せ」

ジンの目の前に立ち、刹那は残酷な要求を再度突きつける。

こうなったら、いつそ赤い戦士の姿へと変身するしかない。マリアの目の前だが、わずかな隙を見て…

その時、夜闇から刹那に向けて飛びかかる者が現れた。

加山が来たか！だがジンの心を読んでいたため、わかりきったこと。こうしてジンを命の危機にさらせば、加山が間違いないと現れると刹那は踏んでいた。飛び出してきた人影に反撃しようとした、が…

「うおおおおおおお！」

現れたのは、加山ではなかった。

それは多数の脇侍からさくらを連れて逃亡中だったはずの、大神だったのだ。

「何!？」

加山じゃない…大神だど!？」

なぜ、魔獣に追跡されているはずの大神がここにいるのだ。刹那は意味がわからず混乱し、動揺のあまり構えが厳かになつてしまふ。結果、刹那は反撃に転じることができず、振り下ろされた大神の斬撃を防ぐしかなかつた。

「大神さん!?!なんで!?!」

この状況を把握できていなかったのか、ジンも驚くばかりだつた。

その頃、脇侍たちは倉庫街を走り回る蒸気バイクを追跡していた。刹那の命令通り、ノコノコと倉庫街にマリアを助けに現れた大神を、敢えて彼の手に取り戻させたさくらを餌に、もろとも抹殺するために。

蒸気バイクは脇侍よりも速い。だが、脇侍はこんな時のために多数刹那によつて配備されていた。いちいち慌てて追いかける必要はない。バイクの逃亡先に別の脇侍が待機していると分かっているからだ。

現にこうして、目の前の遠い場所からライトをともした何か、別の脇侍に追いかけられた状態で近づいていることに気づいた二機の脇侍が、それを迎え撃とうとする。

だが、脇侍たちは動揺してか、硬直した。

蒸気バイクに乗っていたのは大神とさくらではなかったからだ。

顔を隠しているマスクと黒い戦闘服。何よりマスクに隠れているその顔は大神とは違っていた。もう一人運転している男とは別に、さくらが乗っているはずの後部座席に、同じ戦闘服を着た若い黒髪の端正な青年が乗っている。

「穴戸、飛べー！」

バイクを運転していた男、加山に名前を呼ばれ、穴戸と呼ばれた青年は加山と同じタイミングで蒸気バイクから飛び上がった。運転手を失った蒸気バイクはそのままの前にいた脇侍に突進。脇侍と激突し、引き起こされた爆発の中にぶつかつた脇侍と共に爆炎に包まれた。加山と穴戸を追いかけていた脇侍はそれを見て立ち止まり、二人の姿を追おうと周囲を見渡す。だがそうしている間に、脇侍たちの足元に白い球が転がり落ちる。それは暴発し、周囲に真っ白な煙を瞬時に立ち込めさせた。忍者が敵の追跡を逃れるために使う……いわゆる煙玉だ。脇侍たちはそれに包まれてしまう。

それを、傍らの建物の屋根の上で加山と穴戸が見届けていた。

「……隊長、我々の戦力では脇侍の相手さえも難しいのに……全く人使いの荒い」

穴戸はため息交じりに愚痴っていた。

穴戸光星。加山の部下であり、月組の副隊長でもある。当然ながら帝国華撃団の一員

として諜報活動に勤しんでいる。…が、上司である加山に対して常に愚痴が絶えない日々を送っている。またしても加山のおかげで苦勞することになり、愚痴らずにいられなかった。

「済まないな。俺の尻ぬぐいに突き合わせてしまつて」

「…」の貸しは高くつきますよ」

とはいえ、花組隊員のさくらとマリアが刹那の手に落ちたとあれば手伝わないわけにもいかない。渋谷などところもあるが、二人を助きたい気持ちは穴戸にもあつたので協力したのである。せめて高めのお返しを求める穴戸だった。

「なら、帝劇に戻ったら、俺の新曲を一曲弾いてやろう。実は最近ギターを買つて練習していてな…」

「いらぬです」

わざとエアギターの構えを取つた加山に向けられた次の穴戸の視線と言葉が辛辣だった。

「釣れない奴だな」

肩をすくめる加山に、どこかかちんときた穴戸はいつその場で脇侍の方へ突き落そうかと思つていたそうだ。そんな穴戸の視線を尻目に、大神たちがいるであろう方角に目をやる加山。

(無事に彼女たちを助け出してくれよ、大神……)

宍戸と共に現場から離脱しながら、加山は親友たちの無事と成功を祈った。

「ジン！早くマリアを！」

「は、はい！」

刹那を抑え込む大神の呼びかけに反応し、ジンはすぐにマリアの方へと駆け出す。

「おい、マリアを殺せ！」

「ぬ!？」

人質を取り返されてしまう。せっかくこいつらに強い楽しいゲームが崩れてしまうことを恐れた刹那は、マリアのすぐそばで刀を彼女に向けている脇侍に命令を下した。命令を受け、脇侍はマリアに向けて刀を振り上げる。

だが振り下ろされる前に、ジンは飛び上がり、全力の飛び蹴りを脇侍の顔部分に叩き込んだ。よほど効いたのか、今ので脇侍は顔にヒビが刻まれ、ノックアウトする。マリアは目を見開いた。蹴り一発で脇侍をダウンさせるなんて。霊力がないはずの彼の力に息を呑んだ。

「く、役立たずが！こうなったら！」

大神の目の前から瞬時に姿を消すと、刹那はさつきまでとは比較にならない速度でジ

ンのすぐ後ろに現れた。言葉通りの瞬間移動だ。残像さえ残すほどの速度でマリアを十字架に縛る縄に手を伸ばすジンに接近し、背後から切り裂こうとした、その時だった。「破邪顕正……桜花放神！」

近くの廃屋を突き破って、桜色の光線が、ジンに迫ろうとした刹那に直撃する。

「ぎゃあああああー！」

汚い悲鳴を上げながら、光線をモロに受けた刹那は吹っ飛ばされ、近くの建物の外壁を突き破る。二度も続く予想を超えた事態にジンは固まってしまふ。

光線が放たれた方角の廃屋を見ると、そこには傷だらけのさくらが刀を持ってよろよろと歩きながらこちらに姿を見せてきた。

「さくらまでー！」

「さくら君ー！」

そんな彼女を見かね、大神が直ちに彼女の元に来て彼女の体を支えた。

「痛たた……大神さん、あたしお役に立てましたか？」

「ああ、もちろんだ。しかし無理をさせてしまったな……」

傷を負い、刹那の拷問を受けたことで体力も残り少ない状態で桜花放神を放つたためだろう。さくらは笑顔を作って強がって見せているが、今でもすぐに倒れこみそうなほど消耗しているのが分かる。

「それより、ジンさん…：マリアさんを」

言われてハツとしたジンは、すぐにマリアのもとに向かい、彼女を縛り付けていた十字架の縄をほどこき、マリアが落ちないように彼女を抱えながらゆっくりと下した。

「マリアさん、大丈夫？」

「え、ええ…：ありがとう」

マリアはジンに礼を言った後、大神とさくらの二人にも目を向ける。助かったものの、どこか気まずそうにしていた。大神に前回の戦いについて厳しい指摘を入れたくせに、過去の耐え難いトラウマを利用されたとはいえ刹那の挑発に乗って身の危険に晒されたことへの後ろめたい気持ちが大きかいのだろう。

「でも大神さん、どうしてここに？ 僕とかや…：つと、月組隊長の二人でマリアさんを助ける算段だったのに」

ジンが、さつき加山ではなく大神が飛び出し、それに続いてボロボロのさくらも現れたことが気になって質問する。隠密部隊の隊長ゆえに素性を明かされないようにしなければならぬのに、思わず加山の名前を出しかけたが、間一髪口を一度閉ざしてから改めて質問を続けた。

「実は、その月組隊長がさつき急に『俺が代わりに脇侍どもの注意を引くから助けに行ってくれ』ってバイクを強引に取られてしまったよ」

「刹那は相手の心を読むことが可能…ジン、あなたとの間に考えていた作戦も、今回のためのブラフだったのね」

マリアの分析を聞いてジンは納得した。刹那は他人の心を読んで弄び、自らが手出しされないように相手を徹底的に翻弄する。加山は以前にも刹那に心を読まれ、月組の仲間を失った上に自分も人質にされてしまったため、なんとか奴の読みの上をいく作戦を考えていたのだろう。だが刹那と相對した時点で、こちらの作戦はほぼ確実に漏れてしまう。だから奴の不意を突く作戦が必要となった。

「そういうことかよ…」

あらかじめジンに、二人だけでマリアを救出するための作戦が加山の口から聞かされていたものの、相手の心を読む刹那に果たして効果があるのか？ジンも疑問を抱いていたが半ば強引に加山に押し切られてしまった。

そして加山は月組隊長として、負傷しているさくらと共にバイクに乗って脇侍から逃れていた大神に接触、マリアの軟禁場所と真の作戦である『ジンが刹那と交戦している間に、刹那へ奇襲をかける』ように指示を出した。それを受託した大神は、代わりの囚役を自ら買って出た加山にバイクを託し、その後はすぐにジンと刹那の交戦している地点へ急行した。その際、より確実にいくためにもさくらもまた自ら作戦に志願、もしジンも大神も二人とも抜けられたり、刹那がマリアに直接手を下そうとした場合に備え、

必殺技の準備を密かに狙っていたとのことだ。

結果は成功、奇襲は成功しマリアを救出できた……というわけだ。

いくら他者の心を読む刹那でも、読めるのは目の前に対象がいる場合、それも十分な余裕と集中力が必要となる。視認できない相手の心まではさすがに読みようがなかったのだ。

「無理しすぎだよさくら。今だって立つのもやつとなのに……」

「ジンさんだって似たようなものじゃないですか。光武に乗れないのにこんなところまで来て……」

見るからに痛々しいほどに傷だらけなのに、必殺技で刹那をぶつ飛ばして見せたさくらに心配そうな目を向けるも、そんなジンに対してもさくらはちよつと文句を言いたげに言い返した。

「俺も反対したけどね、さくら君がどうしても折れてくれないから、やむなく俺も承諾したんだ」

「だって……あたし、みすみす捕まってしまったじゃないですか。しかもそのせいで、マリアさんも続いて捕まっちゃったようなものですし……」

自分が捕まったりしなければマリアも同じ目に遭ったりはしなかったかもしれない。その罪悪感と責任がさくらに今回のような無理をさせたのだろう。

そのマリアは、少しの沈黙ののちに口を開いた。

「…さくら、私が捕まったのはあなたのせいじゃないわ。私が冷静さを失って隙を作ったのが原因よ」

「マリアさん…」

「少尉、さくら、ジン…私なんかのために手を煩わせてしまい…ごめんなさい」

マリアは三人に向けて頭を下げた。

大神はそれを聞いて「顔を上げてくれ」と笑みをこぼした。

「マリア、君は花組のみんなにとつてなくてはならない存在だ。仲間を助けるのは当然だろう？」

それに、俺はまだ君の苦しみ、抱えているものがわからない。隊長でありながらその重さのわかってやれなかった。それを知らないまま、君を見捨てていくなんてどうしてもできなかつた」

（私なんかのために…）

目尻に、涙がじわつと溢れかけた。ここまでされておいて、冷徹にふるまおうとするマリアとて嬉しくないわけがなかつた。

でも、副隊長として咎めるべきことは咎めようと、彼女は出そうになる涙を引つ込めて大神に言った。

「…でも、私が言うのもなんですが、少尉はやはり軽率です。私やさくらをダシに、刹那が卑劣な罠を仕掛けているのは分かっていたはずなのに、光武まで乗り捨ててきて…」  
「そうだな。それはもちろんわかっていたんだが…すまない。さくら君とマリヤのことが心配で、体を止められなかった。俺の悪い癖だな…」

頭を掻いて、さくらとマリヤを助けるためとはいえ、結局同じ行為に走ったことを反省する大神。そんな大神をさくらがフォローを入れてきた。

「大神さんだけじゃないですよ。あたしだってお二人と似たようなものですから。ね、マリヤさん、ジンさん？」

同意を求めてきたさくらに、思わずジンとマリヤは苦笑し合った。

ああ、思い出した。ずっと忘れていた。帝国華撃団とは、ただ高い霊力を持つだけの部隊ではない。カンナとアイリスの二人と共に、花組の一員として配属されたあの頃からずっとそうだった。

仲間との繋がり、絆…それを強く重んじ、仲間の危機が起これば己の身の危険さえも顧みない…極限のお人よしたちで占められていたことを。

「…ありがとう、みんな」

久しぶりかもしれない。心の中に太陽のような強い光が差し込んできたような気持ちになり、マリヤは笑顔を浮かべた。

…が、その時だった。

さくらの必殺技で吹っ飛ばされていたはずの刹那が、草陰から獲物を狙う猛獣のような勢いでジンたちに向かつて飛び掛かってきた。

「危ない！」

ジンとマリアはすぐに伏せ、大神はさくらを庇いながら避ける。その際に、隊員服の腕部に切り傷ができた。さくらの攻撃を受けてダメージは確かにあった。現に珍しく息が途切れ気味、体もなんとか立っているといった感じで震えている。

「貴様ら……この僕にずいぶんと舐めた真似をしゃがって……！」

ついさっきまで何度も見せていた、余裕をこいたあのいやらしい笑みはなく、ジンたちに向けてひたすら憎悪を混じらせたような怒りの目を向けていた。

「もう少しいたぶってやろうかと思っていたが……もはや手加減はしてやらないぞ！」

刹那は、完全に遠慮を捨て去る。指を鳴らし、足元にあふれ出した闇の渦から愛機である魔装機兵『蒼角』を召喚し搭乗する。

「みんな、散れ！」

大神がさくらを抱きかかえ、すぐさまマリアとジンにも呼びかける。刹那が勢いのままに蒼角の腕に着いた鉄球でジンたちを押し潰しに来たと同時に、彼らはその一撃から飛びのく。

間一髪避けたジンたちだが、刹那は執拗にも彼らを追い回す。もはや狡猾な手段は用いず、力づくというべき暴れようだった。

これでは逃げることもままならない。負傷しているさくらを抱えながら、ジンとマリアと共にこの場を離脱できるのか？ 大神の中に焦りが沸き上がり始める。

その時、上空を飛び回っていた翔鯨丸が、動き出した。船体の下に設置されているキャノン砲より、大型の弾丸が刹那の蒼角に向けて放たれた。強烈な弾丸と爆発によって勢いよく後ろへ後退された蒼角は踏みとどまる。

「翔鯨丸……！」

『大神、ぼさつとすんな！ すぐにそこから離脱して他の花組と合流しろ！』

スピーカーから米田の怒鳴り声が響いた。大神は「はい！」と言うと、すぐにマリアとジンの二人と顔を見合わせ頷き合う。

「ええい逃がすか!! ならば……又丹から渡されたこいつを食らえ！」

刹那は蒼角の爪で地面を突き刺す。何かの攻撃のつもりか？ 気になった大神たちだが、今はそれどころじゃないことを思い出し、一秒でも早くこの場から脱出するべく駆け出した。

走っていると、余震のような小刻みな揺れが、足元に伝わってきた。これは地震？ 逃げながらも足から感じる振動が気になっていると、次第にその地面からの揺れに対する

違和感を覚えた。あつという間に地震は大きくなった。

そして、その地震は最後に、一つの大きな揺れとなり、築地の大地に亀裂を走らせ、裂け目より巨大な獣となって姿を現した。

「ガアアアアアアアアアアア!!!」

両手にするどく細い鞭を振るい、小型の降魔と同じで眼らしいものは見当たらない、黒くおぞましい肌を持つ巨大な魔獣だった。

『邪爪魔獣デビルノスフェル』。

「巨大降魔……」

こんな時に出くわしたくない敵を、ついに刹那は披露してきた。

「赤い巨人を警戒して、敢えて出さないでとつておいていたが……もはや関係ない！お前から全員、ズタズタの肉片にして殺してやる！やれ、ノスフェル!!」

刹那の命令を受理してか、デビルノスフェルは爪を振りかざす。必死に走って逃げる大神たちは、後ろを振り返る。蒼角以上の深い爪痕が地面に刻まれ、周囲の建物も巻き込まれて破壊され、その瓦礫もジンたちの頭上から雨の様に降り注ぐ。

なんとか逃げる大神たちは、川岸にたどり着く。川を泳ぐか、ボートを使えば確かに光武を置いている向こう岸へと行ける、だが歩く時と比べて遅くなる。ノスフェルか蒼角に追いつかれてしまう可能性も否定できないが、この時のジンたちを選択する余裕な

どなかった。

彼らはすぐに川へ飛び込み、必死に向こう岸を目指して泳ぎ始めた。

だが、やはりというべきか：ノスフェルは巨体である分、歩幅も大きく、当然ながら十分な攻撃範囲が取れるくらいの距離まで追いついてしまう。

「く……く……ここまで来て！」

さくらは、負傷しているために大神に抱えられている。だがそれが彼の負担となつてしまい、逃げる速度が遅くなつてしまつている要因となつていることも自覚していた。

「大神さん、あたしをおいて先に行つて……！あたしを抱えたままじゃ追いつかれてしまいます……！」

「何を言うんだ！全員で帰らなければ意味がない！君も、マリアもジンも……みんなでない。全員で生きて帰ると決断したのだ。ここに来てさくらを置いて先に逃げるなどできない。それを見て、マリアが大神とは反対側まで泳いできて、大神と一緒にさくらを支えた。」

「少尉！私がかもう片方からさくらを支えます！急ぎましょう！」

「マリアさん……！」

さくらを支えながら、二人はそのまま泳ぎ続ける。だがジンはそれを見て、これではいずれどのみち追いつかれてしまうことを悟る。

…今しかない。

三人が先に向かつてるのを見て、ジンは川の底へと自ら沈んでいく。そして、懐から『ウルトラアイ』を取り出し、目に装着した。

瞬間、赤い光となったジンは水面から飛び出し、赤い巨人の姿となってデビルノスフェルの前に現れ、そのままノスフェルを取り押さえた。

「赤い巨人、来てくれたのか…！」

大神たちは振り返り、赤い巨人の姿を見て安堵する。彼が取り押さえてくれるなら、もう安心だ。刹那の乗る蒼角も、翔鯨丸が上空から狙ってきているため、おいそれとこちらを追跡できない。

「少尉、今のうちに！」

「ああ！しっかり掴まってくれ、さくら君」

三人は赤い巨人への感謝を抱きながら、対岸へと向かった。

## 4—8 春に吹雪く雪風

川を渡っていく大神たちを見届けた、赤い巨人の姿のジンは、デビルノスフェルと蒼角の方を見やる。

「ついに来たか、赤い巨人！」

蒼角から刹那の声が響いた。

刹那としては、大神たちに強い残酷なゲームの一環としてデビルノスフェルを利用するつもりだった。

大神に光武を下りさせ、わざとさくらを助けさせたところで、多数の脇侍に追いかけさせる。大神を始末したら今度は次の隊員にも光武から降りさせて同じことをさせる。それで一人一人始末していき、花組の戦力をじわじわと削ぎながら帝国華撃団を壊滅させるつもりだった。もちろん赤い巨人の出現も視野に入れての作戦だ。この魔獣デビルノスフェルは、又丹によると通常の降魔以上の力もあるが、何よりも相当の凶暴性、強すぎる捕食欲求を持ち合わせており、野生の生き物とは思えない獰猛で邪悪な……まさに言葉通りの魔獣だ。赤い巨人の相手をさせて花組への救援を阻ませる。これで帝国華撃団は壊滅させられるはずだった。だがもはやこの策は、人質を奪還されては叶わな

い。ならば、スマートではないが力づくで殺すしかない。ノスフェルと蒼角の力を持って奴ら全員始末する。

「その魔獣は貴様の乱入を想定して用意した凶暴な魔物だ！本来なら花組共をとことん追い詰めるために使うつもりだったが、僕が操縦する蒼角と組み合わせて挑めば、いかに貴様と手勝ち目はないぞ！」

確かに見るからに狂暴そうな怪獣だとジンは思った。

でも、だからつてみすみすやられるなんて毛頭ない。大神たちと共に死に物狂いできくらとマリアを奪還したのだ。この流れに乗りながら刹那と、この醜い化け物を倒す。

「デューア!!」

赤い巨人は駆け出した。デビルノスフェルも巨人がこちらに向かってくると、迎え撃とうと自らも突撃していった。

大神たちはカンナとすみれの二人と合流を果たした。負傷したさくらは、倉庫街の方から戻ってきた月組の二人に預けて安全な場所へ運ばれた。大神とマリアも、互いに光武へ再び乗り込み、追ってきた刹那とついに対峙した。

「刹那、もはやお前の狡猾で非道な作戦は失敗した！お前の負けだ！」

マリアとさくららの二人は取り戻した。これで心置きなく戦える。前回のような失敗を二度も起こすつもりもない。

光武で刀を向け、自分たちはもはや敗北の未来はないと宣言する。

「てめえにはマリアを散々いじめてくれた借りがあるからな。やられた分をまとめて返してやるぜー！」

「こちらを見下しておきながら、卑怯な手口でしか勝負を仕掛けられない三下ごときに、私たち帝国華撃団は負けませんわー！」

「自分の弱い心から決別するためにも…刹那、お前を倒す！」

腕を鳴らしながら気合いを見せるカンナ、炎のように闘志を燃やすすみれ、そして冷静さを取り戻したマリアもまた大神に続いて陣形を整え刹那に備えた。

「調子に乗るなよ…ただの人間ごときが鉄くずに乗ったところで、この蒼き刹那に勝てると思うな!!」

刹那は、やはり見下している者に敗けを認められないのか、諦めようとしなかった。多数の脇侍も蒼角の周りに召喚し、花組を迎え撃った。

巨人と魔獣が激突し、土飛沫を上げながら互いに組み合った。ジンはその状態のまま、ノスフェルを大神たちの離脱先の反対側へと押し出していく。

十分に離れ切ったところで、ノスフェルが煩わし気にジンの両腕を振り払う。両腕を振り払ったことで正面が空になったジンに向け、ノスフェルの頭突きが直撃する。押しのけられるジンに、さらにノスフェルの追撃が入る。するどい爪の生えたその腕を、敢えて爪では切り裂きに来ず、手の裏で払うようにジンをはたいてくる。

ジンは怯むもすぐに体制を戻し、正拳突きと前蹴りを連続で叩き込んでノスフェルを攻撃し、ノスフェルが怯んだところでその巨体にガシツと掴みかかると、腕にありつたけの力を込めて払い腰でノスフェルを地面の上に投げ倒す。

倒れこんだところで上からマウントを取って動きを封じ、両腕の拳でノスフェルの顔を殴りまくった。

殴られ続けて頭に來たノスフェルが、殴られながらも手を振るってジンの顔を叩く。顔を押しさえるジンにさらにもう片方の手でジンを体の上から叩き落とした。地面を転がり、立ち上がるうとしたジンだが、その時ぶよぶよとした縄のようなものが首に巻き付かれた。

デビルノスフェルの口から延びた触手だった。ジンの首を絞めようと、締め付けの力を強める。

(窒息を狙って…いや！)

この力はそんな生易しいものじゃない。首の骨をへし折りに來ている！触手をほど

こうにも、触手に加わっている力はすさまじく、すぐに振りほどこうにもそれができない。確実に絞殺するつもりか、それともそのうえでなぶり殺しにするつもりか、ノスフェルは身動きが取れないジンに向けて数度にわたってかぎ爪を振りかざした。

「ガアアアアアアア!!」

「ウグツ!!ガハ!!」

爪で切り裂かれるたびに火花も散る。切り傷を負わされ、触手をほどこうとする腕の力も弱まってしまう。

このままでは…!!

何とかしようとするジンだが、そう思っている間に次第に視界がぼやけ始めていた。

まずは触手を切り落とさなければ。彼は頭についていたブーメランを、念力のみで操作し、触手を切り落とすとした。

振り落とされるようにジンは尻もちをついて倒れた。喉をきつく締められていたせいで息苦しい。しばらく呼吸困難が続きそうだが、首を絞められていた頃と比べたらまだ良い。

なんとか態勢を整えようとするも、すかさず襲ってきたノスフェルの爪によつて斬りつけられてしまう。

「っ…!!」

膝をついてよろめくジン。ノスフェルは再度、爪で彼の体を斬りつけようとした。

だが住んでのところで、ジンの額のビームランプから閃光が放たれ、ノスフェルの顔に直撃した。

「ギャアアアア!!!」

顔が光線の熱で深々と焼けただけ、ノスフェルが悲鳴を上げたところで、ジンはいったん後ろへすぐに下がった。

ダメージが予想以上にたまっていたようで、すぐに膝をついてしまう。

体力が切れかけたのを知らせるように、彼の額のビームランプが点滅を始めていた。

脇侍を出して、頭数に関しては確かにそろえて見せた刹那だが、単純に召喚されただけの脇侍が勝てるはずもなかった。

だがそんなことは承知の上だ。一人ずつ自らが相手をして始末し、その他は脇侍に手をさせる。一人始末したらまたその次を始末する。ちまちまとした作戦だが、確実に花組を潰すことができる。何より、じっくり敵をいたぶって楽しむのが大好きな刹那は時間をかけることは苦ではない。一人一人死体に変え、その様を見せつけて恐怖と絶望を与えながら殺してやる!

「ようやくとつちめてやれるな小松菜! あたいから行かせてもらうぜ!」

一番早く刹那のもとにたどり着いたカンナの光武が蒼角に向かって駆け出し、得意の肉弾戦で立ち向かう。

刹那はカンナの繰り出すパンチやキックに、前回と同様に心を読むことでそれらをかわしていく。カンナだけでなく、すみれも長刀を振るって刹那に仕掛けていく。

変わらずこの程度の単調な攻撃しか繰り出せないか。なら自分が負けることなどありえない。カンナの真正面からの攻撃を難なく避けていく刹那だが、バン！と後ろから強い衝撃を受けた。

「ぐう……なに!？」

自分が攻撃を食らったことに驚く刹那。気がつけば既にマリアと大神そしてすみれの光武がこちらに構えていた。彼らがさつきまで戦っていた場所には協侍の残骸が転がっている。

協侍が倒されるのが早すぎる。

(馬鹿な……ほんの3分ほどの時間も経っていないのに……!)

脇侍たちは、マリアとさくらを助け出さんと気合を入れるに入れまくった花組たちによってことごとく倒されており、一機も残らなかつた。

「あーら、歯応えがありませんね。この程度の雑兵しか揃えていらつしやらないのに、よく光武を鉄屑呼ばわりできたものですね」

刹那に向けてすみれが呆れながら言った。

「よし、皆！一斉攻撃だ！マリアは後方から援護を！カンナとすみれ君は前方、俺が後ろから攻める！」

「了解！」

カンナとすみれが先に出て、蒼角へ攻撃を仕掛けた。

繰り出される蹴りや薙刀の一太刀、次々と襲い来るそれらを避けていく蒼角。だが、今度は初っぱなから苦戦を強いられることになる。

正面のすみれとカンナの攻撃を避け、反撃しようとしたところで、振り上げた蒼角の右腕に弾丸が撃ち込まれた。それによって動きを一時封じられ、その隙をカンナとすみれが攻撃する。最初は傷をつけることもできなかつた蒼角に、ついにダメージが入った。

「しま……！」

「今だ！」

カンナは好機と見て、蒼角の眼前に立って必殺技を放った。

「当たると痛えぞ！〈スパーリングパイ 二百林稗〉！」

地面に光武の腕を突き刺すと、蒼角の足元から霊力を込めた強烈な衝撃波が蒼角を飲み込んだ。

「ぐおおー！」

「次は私ですてよー！」

カンナだけではない。すみれも光武の薙刀を発火させ、必殺技を繰り出す。

「〈神崎風塵流・胡蝶の舞〉！」

炎を纏う薙刀で、蒼角の身が切り刻まれていく。強烈な技を幾度も受けたことで蒼角の起動が鈍り始め、刹那はこれまでにない焦りを抑えきれなかった。

「お前ら！ よつてたかつて僕一人に一方的に仕掛けてきやがって！ それでも正義の味方か、卑怯者が！」

「卑怯者だと？ ふざけるな刹那!!」

刹那の勝手すぎる言い分に大神が怒った。

「さくら君とマリアを…俺たちの大切な仲間を、貴様のくだらない卑劣な策のために傷つけた貴様を、俺は絶対に許さない!!」

怒りも込めて一太刀、蒼角に浴びせる大神。反撃しようとする刹那だが、大神の光武を攻撃しようとした蒼角の腕が再び被弾し、攻撃を邪魔されてしまう。

「やはりな。刹那、お前の弱点を見極めた」

刹那の攻撃を妨害したマリアは、あることに気がつく。

「確かにお前は相手の心を読むことでこちらの動きを先読みし、それに応じて的確な対

処をとる。だがその能力には穴があるわね」

「穴だと……この僕の能力に!？」

「ええ。心を読む際に、少なからず相手に対して意識を集中させなければならぬ。お前の場合、正面に見える少人数の相手なら心を読み、正確な対処が行える。でも……さすがに目に見えない箇所からの攻撃には応対できない。同時に、焦りが高ければ昂るほど心を読む力が脆弱なものとなり、対処することができなくなるというわけね」

刹那は凶星をピンポイントで突かれ、息を詰まらせる。

マリアはあの激しい戦闘に最中に、刹那の読心能力についての分析を完了していたのである。一度その能力に苦しめられたことの他、花組に刹那と同じく他者の心を読むアイリスがいるからこそかもしれない。

能力の弱点を把握されてしまったては、読心による対処さえも難しくなる。優位から完全に不利に逆転してしまった。

「よし……みんな、一斉に攻撃をするんだ! 敵魔装機兵を機能停止させるまで、一瞬の間もなく攻撃の手を緩めるな!」

マリアの分析を理解した大神は、全員に再度一斉攻撃を命じる。それに応じた三人は大神と共に刹那へ、周囲からの攻撃を仕掛けた。

……が、その一斉攻撃は届かなかった。

「何!？」

蒼角を、球体状の光の泡のようなものが包み込んでいる。刹那が、蒼角に花組の一斉攻撃が直撃する前に、魔力によるバリアを展開して防御したのである。こんな手で攻撃を防いでくるとは。

「調子に乗るなよ……!!」

一瞬でも自分が不利に立たされた。その屈辱が彼の中に怒りを生み力に変えて、刹那は頭上に蒼角の腕を掲げた。すると、大地から禍々しいオーラに包まれた細長い槍や棘のような突起が、1, 5, 10…20以上現れ上空に舞い上がった。

「この技で沈め! 〈魁・空刃冥殺〉!」

それらの突起は花組全隊員の光武に向かって上空から勢いよく、雨の様に降り注いだ。

「ぐあー!」

「きゃああああ!!」

全ての光武に刹那の生やした突起が直撃した。攻撃を受けた花組の光武たちは、今の攻撃がよほど効いたらしく、全部煙や火花を拭いて膝をついた。

「ち、ちくしょう! 光武が動かねえ!!」

カンナが必死に自分の光武を動かそうとするが、指一本動かない。

「今の出駆動系が狂ったのですね…厄介なこと！」

すみれも自分の光武と同様の症状が出たことに対して悪態をつく。これでは動くことができない。丸裸にされたようなものだ。

逆転できたと思いきや、またしても刹那に優位が立ってしまった。大神は眼前の刹那の乗る蒼角を睨みつけた。奴は結界で身を守っていることをいいことにこちらを再び嘲笑いに来ている。

「この結界は貴様ら程度力では決して破れまい！」

赤い巨人の力でもノスフェルは倒せない…つまりお前らはここで皆死ぬってことさ  
！」

勝ち誇る刹那は結界の中で、取り戻した余裕の高笑いを上げた。

赤い巨人と口にしたとき、大神はふと視線を赤い巨人に向けた。巨大降魔、デビルノスフェルに触手で首を絞められて、向こうもまた苦戦を強いられているのが分かった。

なんということか。これまで自分たち帝国華撃団を助けてくれた赤い巨人が、ピッチに陥ってしまっている。彼からの救援は望めなかった。刹那もそれを悟り、ますます自分たち黒之巢会が勝利に手が届くところまで近づいたことで笑みを完全に隠せなくなった。

「はははは!!まずは貴様からだ、大神!貴様さえ最初から始末するべきだった…後悔し

ているよ。でも、もうその心配はない。お前をなぶり殺しにして、バラバラにした死体を晒しものにしてやる!!」

結界で身を守り続けたまま大神の光武の前に立ち、蒼角の爪を向けて切り裂こうとする。

「僕の楽しみを邪魔した罰だ。死ね、大神!!」

「待ちなさい」

マリアの声が聞こえ、蒼角の腕が止まる。大神から一步下がると、マリアの光武の方を刹那は見やった。

「わざわざ殺されてきたのかい? 火喰鳥」

「……いいえ、お前を討ちに來たのよ」

「バカめ! 僕の読唇術を看破したところで、僕の蒼角には勝てない! わからないのか? この蒼角の結界、貴様ら程度の靈力では決して打ち破れない。大人しく僕に殺される!!」

バリアを張ったまま蒼角がマリアの方へと走り出したが、マリアはただ静かに銃口を向ける。

彼女の中に渦巻くのは、刹那への強い怒り。こんな外道に心を乱され、仲間を命の危険に晒した自分への怒り。だが、それ以上に抱くものがあつた。こんな自分を救いに來

てくれた人たちと、彼らと共に生きる帝都を守りたいと言う強い思いが、光武の霊子水晶に呼応し霊力高めていく。

マリアの強い霊力を感じる。

無意識に、ジンは両肘を左右に突き立てる姿勢を取る。

すると、不思議な現象が彼と、マリアの間に起きた。

ジンの体から淡い光が溢れ、マリアの溢れる霊力もまた漏れ出ていくと、それが互いに混じりあっていき、お互いの体の中へと収束する。

マリアの霊力を胸元のプロテクターから受け、ジンにも変化が起きた。

身に纏う冷気が、まるで暑い夏場には天国な涼しい風のように心地よい。

ふと、頭の中にイメージが浮かんだ。今の赤い巨人の姿の自分が、どこかに向かつて指先から光線を放っている

デビルノスフェルと向き合ったジンは、今頭に浮かんだ新たな技を放つことをきめた。

彼はまず、右手で銃を再現：いわゆる指鉄砲の構えをノスフェルに向けた。こんな時に兇戯でもするつもりかと一目見た人は思うかもしれない。だが次に彼が放つたものは、そうだとは思わせないものだった。

マリアから吸収した冷気の靈力を自らのエネルギーを、指先からデビルノスフェルに剥けて発射した。

〈ビィエスБлещк·буря<sup>ク・ブ</sup>пан<sup>ラ</sup>ン〉！

ほとぼしる吹雪が、デビルノスフェルの体を飲み込んでいく。雪国のそれにも匹敵：いや、それ以上かもしれない。ジンの放つ吹雪を浴びせられていくうちに、ノスフェルの体は凍てついていく。

地獄のような寒さにノスフェルはやめさせようとジンの方へと走り出そうと…：した。だができなかつた。わずかな時間で体が凍り付きすぎており、歩くことさえもままならなくなっていた。それでもジンの命を奪い取ろうと迫るも、時間も経たないうちに完全に氷漬けとなり、完全に身動きが取れなくなつた。

(…!!)

自分でも驚いていた。マリアの靈力と自身のエネルギーを交換し合うことで、こんな技を出せるようになるとは。

だがこれで、形勢逆転だ。氷漬けにしてしまった今、ノスフェルはただ砕かれるのを待つだけの彫像だ。

どうせなら、もう一つ思いついた技の一つでも披露してやろう。ちよこつと調子に乗つたジンは頭のブーメランを外すと、眼前に立てたところで手を放し、念力で浮かせ

た。その状態でブーメランを、全力で殴りつけた。

〈ウルトラノックストライク〉！

ジンのパンチによって、ブーメランは剛速球さえも敵わないほどの勢いでノスフェルに衝突する。

その次に起きた光景は、ある種の美しさを持つていた。

氷漬けとなったノスフェルは、ブーメランと激突した瞬間砕け散った。砕けた氷の破片は、夜風と共に空へと舞い上がり消えていった。

無事、降魔を撃破したジンは、刹那と戦っている花組の方へと目を向けた。

（っ！霊力がさらに強く……！）

予想していなかった現象にマリアは驚く。赤い巨人の能力だろうか？一瞬疑惑を抱くも、今はこの強く感じる力がありがたい。それに、自分の霊力と混ざりあうこのエネルギーは悪いものに思えない。

幼い頃に失った両親に、自分を愛してくれた愛しい人に抱き締められた時のような強い安心感があつた。

（見ていてください……ユーリー隊長）

「鳴り響け、白夜の鐘……」

脳裏に過つたユーリーに言葉をかけ、マリアは光武の銃口の引き金を引いた。  
 「Снегурочка!」

発射された氷の弾丸がバリアに包まれる蒼角に向かつていく。それはいつものそれと違い、美しい女神を象つた形となつていた。

刹那はそれでも余裕の笑みを浮かべたまま。馬鹿正直に正面から撃つてくるとは、この結界が破れないと思つて自棄を起こしたとしか思わなかつた。

しかし、氷の女神が蒼角のバリアに特効した瞬間にその余裕は崩れ去つた。

蒼角の中を、真冬のような強い冷気が包み込み、操縦席内の彼も足元から凍り付き始めた。

「な、何?」

バリアでも防ぎきれないだ!? そんな馬鹿な! 確かに今この結界で防いだ。だから蒼角に傷ひとつつかなかつたのだ。

(まさか……!)

刹那の頭の中に、核心的な予想がついた。

マリアの放つた氷の弾丸の威力ではなく、それが爆発して放出された冷気が強すぎたのだ。いくら攻撃を遮断できても、冷え込んだ空気までは防げなかつた。

強力な冷気が蒼角の内部を侵食し、凍りつかせる。結果、蒼角は機能停止し、バリア

も強制的に解除されてしまう。

「少尉！」

「おう！」

マリアが大神に向けて叫ぶ。大神は呼びかけに応じて光武の刀に雷を纏い、蒼角へとまっすぐ向かっていった。

かつてない危機感を抱いた刹那は、蒼角を必死に動かそうとするが、やはり動かない。「くそ！ポンコツが!!おい！こっちに戻ってこい！僕を守ることを優先しろよ!!」

最後の望みを、ノスフェルに無理やり押し付ける刹那だが、ノスフェルの方を見やったら彼は絶望した。

既に赤い巨人によって、ノスフェルはちようど氷漬けにされたところを砕かれたところだった。

「や、やめろ、やめてくれ!!マリアたちをいたぶったりしたことは謝る！だから……！」  
「うおおおおおおお!!狼虎滅却……！」

逃げることも防ぐこともできず、つい命乞いのセリフを口にした刹那だが、当然届くはずもない。大神の雷の刃が、ついに刹那の乗る蒼角のボディに食い込んでいく。

〔快刀乱麻〕 ああああああ!!!!

大神は構わず、蒼角の体を……内部にいる刹那ごと切り裂いた。

「…が…!?」

上半身と下半身が切り裂かれ、シヨートした蒼角は木端微塵に砕け散った。

二日後…

「さくら君、入るよ」

大神とジン、そしてマリアはさくらの部屋を訪れた。

「あ、みなさん…今日も来てくれたんですね」

来訪者の顔を見てさくらの顔に笑みが浮かぶ。

あの戦いの最中、月組によつて急遽さくらは帝劇へ運ばれ治療を受けた。刹那の拷問によつて酷い怪我を負つたため、当然ながら刹那との決戦には参加できず、今日もまだ怪我が治り切れていないので女優活動も休業中。部屋で療養することになっていた。

「怪我の具合はどう?」

ジンが今の容態をさくらに尋ねる。

「あと数日もすれば、怪我の痕も残らないそうです。その後は以前通り舞台に建てるようになると思います」

「そっか…」

それを聞いて大神がほっと安心するが、一方で罪悪感も感じる。刹那との一度目の戦い、月組の隊長が捕まった時にもっと冷静に対処できていれば、さくらが人質に取られ、その間に彼女が拷問を受けるということはなかった。しかもさくらが人質とされたことでマリアも連鎖的に敵の手に落ちてしまうという事態まで引き起こしてしまった。隊長としてまだ未熟さを思い知らされた戦いだった。

「さくら君。すまなかつたな、この前の戦いは…」

「大神さんだったら、そんなに何度も謝らないでください。あたしは、あの時の大神さんを寧ろ尊敬できる人だって思ったんですし、刹那に掴まったのはあたしも油断していたせいでもあるんですから。」

だから、もうあの時のことで謝らなくていいんですよ」

頭を下げてきた大神に、さくらは気にしていないと首を横に振ると、マリアの方へと目を向ける。

「それにあたし、マリアさんにも迷惑かけちゃったし…」

「さくら…いいえ、私も今回の戦いについては悪いことをしたわ」

自分の方がさくらに謝らなければならない。マリアは刹那の手に掴まった時のことを思い出した。

かつて愛した男との思い出を汚され、挑発に乗って冷静さを欠いた挙句、人質にされ

たさくらの身を顧みずに刹那を殺そうとした。手を出せば、奴の手にあつたさくらの命がなかったことなどたやすく想像ついていたはずだ。

「それに…ジン。私はあなたにも謝らないといけない。ごめんなさい」

「え？」

マリアから謝罪を受け、ジンはきよとんとする。

「あなたの過去についてよ。私は、あなたが記憶を持つていないことを悪く言つてしまった。一番辛いのはあなたのはずなのに…」

「ああ…」

ジンはそう言われて納得する。刹那やデビルノスフェルに勝つてさくらやマリアを救うことにしか頭になかったからすっかり忘れていた。確かに刹那との二度目の戦いの前、マリアから『記憶がないあなたに私の気持ちなんかわからない』などと言われてしまった。

「僕も気安い言葉をかけて怒らせちゃったし、御相子だよ。マリアさんの過去に、あんな悲しいことがあつたなんて知らないで…」

そこまでジンが言つたところで、大神とさくらの顔が悲し気なものに変わる。

あの戦いの後、ジンたちはマリアの口から彼女の過去のことを明かされた。なぜ話す気になつたかという、仲間たちへの詫び…特に大神にミスを指摘しておきながら自分

も同じように勝手な行動に走ってしまった自分への戒めも兼ねてのことだという。

かつてロシアで起きた欧州大戦にて、兄のように慕い、そして異性として愛したユリーとの悲劇的な別れを遂げたこと、その死の悲しみを埋めるように、あやめにスカウトされるまではマフィアの用心棒として：おぞましい『火喰鳥』として生き続けてきたことをマリアは全部話したのである。

なぜ隊長失格の烙印を押し付けるまでに大神を否定したのか、ジンたちはそれを理解した。

「それに、僕たちは同じ帝劇の仲間同士だ。助け合ってなんぼだよ」

「…ありがとう」

ジンからそう言われ、マリアはほほ笑んだ。さつきからお互いに謝りあってばかりだ。やや空気が重く成り気味だったことを察知したジンは、パンと両手を叩く。

「さ、もう謝罪合戦はこれでおしまい。それよりも明日以降の営業について考えていかない」と

「そうだな。俺たちは黒之巢会との戦いがすべてじゃない。さくら君、俺たちは待つてるから、ゆつくり養生してくれ」

「はい」

「隊長。さくらに渡すものがあつたのでは？」

自分の過去を話してから、マリアは大神のことを少尉ではなく、隊長と呼ぶようになった。ジンはそれを聞いて、なんとなく察しを付けていた。

マリアが大神をずっと隊長と呼ばなく、そして認めようとしなかった理由。それはユーリーのことがあったからだ。ユーリーが爆弾を持って敵の戦車に特攻して自爆、大けがを負ったところで駆け付けたときには、そもそも死ぬ前提で特攻したこともあって手遅れだった。あの時、撤退命令を下した隊長の命令を無視し、共に戦いに臨めば、あるいは隊長を強引に連れて撤退していれば、彼を失うことはなかったかもしれないという後悔を、ずっと引きずり続けていた。そのトラウマから発生した心の弱さを刹那に付け込まれてしまった。

隊長という言葉は、マリアにとつては自分の愛する男への呼び名だった。

ユーリーのことを忘れたわけではないしこの先も忘れることもないだろう。でも、いつまでも囚われていては、ユーリーも安心して眠れない。今回の戦いで悟ったマリアは、大神への呼び方を改めることから始めていた。

マリアから言われると、大神は一步前に出て、手に持っていた花束を渡した。

「あ……ああ、そうだった。さくら君、これを受け取ってくれ」

さくらに差し出されたのは、バラの花束だった。

「わあ……ありがとうございます、大神さん！」

バラの花を渡され、さくらはこれまでになく満面の笑みを浮かべた。それを見て釣られるように大神も笑った。

「喜んでくれたみたいでよかったですよ」

「あの…大神さん…赤いバラの花言葉をご存知ですか？」

さくらは、やや顔を赤らめながら、嬉しそうだけどどこか恥ずかしそうに花束で顔をちよつと隠しながら大神を見ながら尋ねた。

「花言葉？えつと…なんだろう」

「あ、いえ…ご存じないならいいです！」

どうやら知らずに見舞いの花を選んできたようだ。さくらは慌てて何でもないふりをする。ジンはさくらの反応に首を傾げる。

「花言葉？マリアさん、知ってる？」

「ふふ、そういうことは聞かない方がいいわ。ましてさくらの前なんだから」

マリアに尋ねてみるも、なぜか微笑ましげに笑ってごまかされてしまった。さくらは危機感を覚え、マリアに向けて大声を上げる。

「ま、マリアさん!!だめですよ、お願いだから言わないでください!!」

「なんでそんな必死なんだ？」

「知りません！大神さんのバカ！」

さくらは必死にならざるを得ない。ここでバラの花言葉が愛だと知られたら、大神が自分へ愛の告白をしようとしているとイメージさせられる。そんなことを想像してしまったと気づかれたら、自分が大神に対して…

(だ、だめよさくら！こんな早すぎるタイミングで知られるなんてあつてはだめ！すみれさんとかにも知られたら絶対からかわれる！)

実は、さくらは前回の戦いで大神に救出されて以来、どうも大神の顔が頭から離れられなくなっていた。元々士官学校の首席で、容姿も十分に整っている大神。女子としては気にならないわけではないが、大神に必死に助けってもらったせい、大神のことを思うと心臓がバクバクしてしまうようになったのである。

なんとか隠そうとするのだが…少なくとも一名には気づかれていた。同性だからだろうか。一番それに気づいていたのはマリアだった。

きっとさくらは素敵な恋を見つけたのだ。あの時、ユウリーと出会い、共に過ごしてきた頃の自分の様に。そして彼女の未来には輝かしい幸がある。でもそれを邪魔する、刹那たち黒之巢会のように邪悪な輩もまた存在している。

(ユウリー隊長、私はあなたの分も強く生きます)

マリアは強く誓った。

(……)にいる…帝国華撃団の仲間たちと共に)

このささやかな日常にある幸せを、絶対に守り抜き、みなと共に生きること。を。